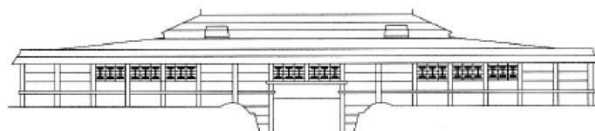


令和5年度 紀伊風土記の丘年報 第51号

紀伊風土記の丘研究紀要 第13号



和歌山県立紀伊風土記の丘

令和5年度

紀伊風土記の丘年報

第51号

目 次

I	施設の概要	1
II	博物館活動	2
1	展示	2
2	普及活動	17
3	研修・実習等	19
4	広報活動	23
5	ボランティア活動	24
6	管理運営・環境整備	26
7	特別史跡岩橋千塚古墳群保存修理事業	27
	（1）保存修理事業	
	（2）調査報告	
8	紀伊風土記の丘再編整備	
III	入館者の動向	40
IV	紀伊風土記の丘協議会	41
V	調査・研究	42

I 施設の概要

当館は、特別史跡「岩橋千塚古墳群」の保全と公開活用をはかるため、1971年（昭和46）8月1日に設置された、県立の考古・民俗系博物館施設である（登録博物館1972年（昭和47）6月20日）。総面積672,988㎡（特別史跡629,944㎡）の園内には、約500基の古墳や移築民家、万葉植物園、資料館などを整備している。

①古墳群

園内には約500基の古墳が分布している。石棚と石梁のある特徴的な構造を持った横穴式石室や、竪穴式石室、箱式石棺など14基の古墳の内部施設を見学できるように公開している。園内は、幹線園路と散策路をとまなっており、自然に触れながら文化財に親しめるよう整備している。特別史跡の面積は629,944㎡、管理団体は和歌山県である。

②移築民家

園内には県内各地より移築された重要文化財「旧柳川家住宅 主屋・同前蔵」及び「旧谷山家住宅」、県指定有形文化財「旧谷村まつ氏住宅」及び「旧小早川梅吉氏住宅」を保存・公開展示している。重要文化財2件は日時を定めて床上の公開やイベント等を実施、県指定2件は体験学習の場として活用し、茅葺屋根の保全のため日常的にカマドやイロリを使った燻蒸を実施している。

③和船収蔵施設

館蔵の県指定有形民俗文化財「日高地域の地曳網漁用具及び和船」の一部は、屋外の和船収蔵施設で保存展示し、その他の有形民俗資料や文献史料は資料館内収蔵庫にて保管（非公開）している。

④万葉植物園

万葉植物を中心とした植物園で、紀伊国と関連ある四季折々の万葉植物が鑑賞できる。万葉集に歌われた約170種の植物のうち約80種を植栽し公開している。敷地面積は1,650㎡、万葉歌碑5基を設置している。

⑤復元竪穴住居

和歌山市鳴神の音浦遺跡で検出された古墳時代の竪穴住居跡をモデルに平成8年に復元し、古代体験学習の場として活用している。木造茅葺で、面積は23.40㎡である。

⑥資料館

弥生時代の高床倉庫をイメージして建てられた資料館では、岩橋千塚古墳群や県内で出土した遺物を中心に考古資料及び民俗資料を常設展示し、季節ごとに開催する企画展・特別展で考古学・民俗学に関するテーマ展示を実施している。また、古代モノ作り体験などの体験学習の場としても供している。鉄筋コンクリート平屋一部地階で、延面積1,592.50㎡（展示室面積517.6㎡）である。

紀伊風土記の丘に関連する指定文化財 一覧

特別史跡	岩橋千塚古墳群	面積 629,944㎡		
重要文化財	旧柳川家住宅 主屋	木造瓦葺2階建	131.7㎡	海南市内より移築
	前蔵	木造瓦葺2階建	62.5㎡	
	旧谷山家住宅 主屋	木造瓦葺2階建	89.25㎡	海南市内より移築
	倉部分	木造瓦葺平屋建	19.2㎡	
	和歌山県大日山35号墳出土品			園内より出土
県指定有形文化財	旧谷村まつ氏住宅	木造瓦葺平屋建	62.2㎡	有田川町内より移築
	旧小早川梅吉氏住宅	木造瓦葺平屋建	38.4㎡	日高川町内より移築
	有本銅鐸	1点		和歌山市内より出土
	小松原銅鐸	1点		御坊市内より出土
	立野遺跡出土品	532点		すさみ町内より出土
県指定有形民俗文化財	日高地域の地曳網漁用具及び和船	用具87点 文献資料3点 和船1艘		日高町内より寄贈
	保田紙の製作用具	用具54点		有田川町内より寄贈

Ⅱ 博物館活動

1 展示

(1) 企画展および特別展

①春期企画展「岩橋千塚古墳群のはじまり―花山地区の古墳―」

期 間：令和5年3月18日（土）～6月18日（日）

会 期：68日（当該年度分）【前年度12日間】

内 容： 岩橋千塚古墳群は、総数900基にも及ぶ国内最大規模の群集墳である。古墳群は10地区に区分され、このうち花山地区は、岩橋千塚古墳群の造営開始時期にあたる4世紀末から5世紀初頭に古墳がつくられ始める、いわば「岩橋千塚古墳群のはじまり」を象徴する地区といえる。

一方で、岩橋千塚古墳群が継続する期間も連綿と古墳が造り続けられ、7世紀まで古墳が築造されていたことも明らかとなっている。しかし、花山地区の古墳は早くから開墾や開発による消滅の危機、盗掘に晒されたため、事前に調査が行われないまま破壊などにより消滅した古墳が多数存在し、この地区の古墳の実態は不明瞭な部分も多くあった。

近年、地域の研究者による踏査記録の公開やこれまでに出土した埴輪・副葬品の研究の進展により、花山地区の古墳の実態や時期的な位置づけが、徐々に明らかになり始めている。本展では、記録類やこれまでの出土資料の展示を通じ、古墳群造営の端緒となった花山地区の古墳に焦点をあて、その特徴や時期的な変遷について紹介した。

入館者数：4,345人

資料名	遺跡名	点数	所有者	所在地	時代
第1章 花山地区の古墳の足跡					
陶質土器 壺	伝花山地区	1	当館	和歌山市	古墳時代前期
石釧（複製）	伝花山地区	1	当館	和歌山市	古墳時代前期
筒形銅器（複製）	伝花山地区	1	当館	和歌山市	古墳時代前期
石製模造品 斧（複製）	伝花山地区	1	当館	和歌山市	古墳時代前期
三角縁神獣鏡（複製）	—	1	当館	—	古墳時代前期
陶質土器 有蓋高坏	伝花山地区	3	当館	和歌山市	古墳時代後期
土師器 埴	伝花山地区	1	個人	和歌山市	古墳時代後期
ミニチュア土器	伝花山地区	2	個人	和歌山市	古墳時代
須恵器 台付壺	伝花山地区	1	当館	和歌山市	古墳時代後期
須恵器 蓋坏	伝花山地区	4	当館	和歌山市	古墳時代後期
石見型埴輪	伝花山地区	1	個人	和歌山市	古墳時代後期
馬形埴輪 脚部	伝花山地区	1	当館	和歌山市	古墳時代後期
馬形埴輪 頭部	伝花山地区	1	当館	和歌山市	古墳時代後期
家形埴輪	伝花山地区	1	当館	和歌山市	古墳時代後期
石見型埴輪	伝花山地区	1	当館	和歌山市	古墳時代後期
円筒埴輪	伝花山地区	2	和歌山大学	和歌山市	古墳時代後期
朝顔形埴輪	伝花山地区	1	当館	和歌山市	古墳時代後期
宮田啓二著『昭和二七年秋冬 岩橋千塚古墳群調』	岩橋千塚古墳群 ほか	1	当館	和歌山市ほか	昭和時代
昭和37年度(1962)作成 花山 地区分布図	岩橋千塚古墳群	1	和歌山市	和歌山市	昭和時代
第2章 花山地区で古墳づくりがはじまる					
鉄剣	花山8号墳	2	和歌山市	和歌山市	古墳時代前期
滑石製勾玉・管玉・白玉	花山8号墳	6	和歌山市	和歌山市	古墳時代前期
ガラス製小玉	花山8号墳	7	和歌山市	和歌山市	古墳時代前期
土師器 高坏	花山8号墳	1	和歌山市	和歌山市	古墳時代前期
朝顔形埴輪	花山8号墳	3	和歌山市	和歌山市	古墳時代前期
円筒埴輪	花山8号墳	4	和歌山市	和歌山市	古墳時代前期

資料名	遺跡名	点数	所有者	所在地	時代
滑石製管玉	花山10号墳	4	和歌山市	和歌山市	古墳時代中期
ガラス製小玉	花山10号墳	2	和歌山市	和歌山市	古墳時代中期
円筒埴輪	花山10号墳	1	和歌山市	和歌山市	古墳時代
不明埴輪	花山10号墳	1	和歌山市	和歌山市	古墳時代
須恵器 甕	花山10号墳	2	和歌山市	和歌山市	古墳時代
須恵器 高坏	花山10号墳	1	和歌山市	和歌山市	古墳時代
鉄剣	花山44号墳	1	和歌山市	和歌山市	古墳時代中期
鑿状工具柄	花山44号墳	2	和歌山市	和歌山市	古墳時代中期
鉄鉾	花山42号墳	1	和歌山市	和歌山市	古墳時代中期
鉄剣	花山42号墳	1	和歌山市	和歌山市	古墳時代中期
有肩鉄斧	花山42号墳	1	和歌山市	和歌山市	古墳時代中期
鉄刀	花山46号墳	1	和歌山市	和歌山市	古墳時代中期
巫女形埴輪 島田髷	花山45号墳	2	和歌山市	和歌山市	古墳時代中期
動物形埴輪 脚部	花山45号墳	1	和歌山市	和歌山市	古墳時代中期
馬形埴輪 障泥	花山45号墳	1	和歌山市	和歌山市	古墳時代中期
巫女形埴輪 腕部・坏	花山45号墳	3	和歌山市	和歌山市	古墳時代中期
不明形象埴輪	花山45号墳	1	和歌山市	和歌山市	古墳時代中期
円筒埴輪	花山45号墳	2	和歌山市	和歌山市	古墳時代中期
須恵器 有蓋高坏・蓋坏	花山45号墳	9	和歌山市	和歌山市	古墳時代中期

第3章 継続してつくられる花山地区の古墳

円筒埴輪	花山 6 号墳	4	和歌山市	和歌山市	古墳時代後期
鶏形埴輪	花山 6 号墳	1	和歌山市	和歌山市	古墳時代後期
馬形埴輪 脚部	花山 6 号墳	4	和歌山市	和歌山市	古墳時代後期
家形埴輪	花山 6 号墳	1	和歌山市	和歌山市	古墳時代後期
須恵器 甕	花山 6 号墳	2	和歌山市	和歌山市	古墳時代後期
須恵器 壺	花山 6 号墳	1	和歌山市	和歌山市	古墳時代後期
装飾付き須恵器 小像（鹿）	花山 6 号墳	1	和歌山市	和歌山市	古墳時代後期
帯金具	花山 6 号墳	14	和歌山市	和歌山市	古墳時代後期
縁金具	花山 6 号墳	1	和歌山市	和歌山市	古墳時代後期
鉄鏃	花山 6 号墳	1	和歌山市	和歌山市	古墳時代後期
垂飾	花山 6 号墳	1	和歌山市	和歌山市	古墳時代後期
金製空玉	花山 6 号墳	1	和歌山市	和歌山市	古墳時代後期
銀製空玉	花山 6 号墳	3	和歌山市	和歌山市	古墳時代後期
銀製梔子玉	花山 6 号墳	2	和歌山市	和歌山市	古墳時代後期
ガラス製小玉	花山 6 号墳	30	和歌山市	和歌山市	古墳時代後期
滑石製管玉	花山 6 号墳	1	和歌山市	和歌山市	古墳時代後期
須恵器 無蓋高坏	花山33号墳	2	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
土師器 高坏	花山33号墳	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
須恵器 甕	花山33号墳	2	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
須恵器 蓋坏	花山33号墳	7	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
碧玉製管玉	花山33号墳	8	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
ガラス製管玉	花山33号墳	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
鉄鉾	花山33号墳	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
馬具 引手	花山33号墳	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
馬具 鉸具か	花山33号墳	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
鉄鏃か	花山33号墳	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
円筒埴輪	花山58・59号墳	5	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
動物形埴輪 脚部か	花山58・59号墳	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
盾形埴輪	花山58・59号墳	2	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
馬形埴輪 障泥か	花山 2 号墳	1	個人	和歌山市	古墳時代後期
石見型埴輪	花山 2 号墳	1	個人・当館	和歌山市	古墳時代後期
円筒埴輪	花山 2 号墳	1	個人・当館	和歌山市	古墳時代後期

資料名	遺跡名	点数	所有者	所在地	時代
双脚輪状文形埴輪	花山2号墳	1	個人	和歌山市	古墳時代後期
第4章 花山地区と岩橋千塚古墳群の終焉					
須恵器 坏蓋	花山9号墳	1	和歌山市	和歌山市	古墳時代終末期
須恵器 蔵骨器	花山50号墳	6	和歌山県教育委員会	和歌山市	古代
人骨	花山50号墳	—	和歌山県教育委員会	和歌山市	古代
緑釉皿	伝花山地区	2	個人	和歌山市	平安時代
緑釉埴	伝花山地区	1	個人	和歌山市	平安時代
緑釉耳皿	伝花山地区	1	個人	和歌山市	平安時代

②夏期企画展「紀伊の地を馬が駆ける」

期 間：令和5年7月15日（土）～9月3日（日）

会 期：44日

内 容：今から約1,500年前、古墳時代の日本列島ではウマの導入によって交通革命が起こった。ウマは各地で移動、運搬に用いられ、東日本では広大な牧で飼育も行われた。

紀伊では、5世紀初め頃にすでにウマ・ウシが飼われていたことが発掘された骨や歯からわかる。特に製塩、漁労を行った海辺の遺跡（西庄遺跡）では多くの骨や歯が出土しており、ウマ・ウシが塩や海産物の運搬に用いられたとみられる。このようにウシもウマと同様に、この時期の交通革命の一翼を担ったとみられる。

本展では、古墳時代と古代・中世までのウマと関わりのある考古資料、発掘された当時のウマの骨や歯などの遺存体、そして、近世以降の歴史資料や民俗資料などを通じて、ウマと人がどのようにかかわってきたのかを紹介した。

入館者数：2,042人

資料名	遺跡名	点数	所有者	所在地	時代
第1章 日本列島にウマがやってきたー古墳時代のウマー					
1) 古墳時代のウマー1501年前の馬の全身骨格ー					
古墳時代のウマ(全身骨格)	日下遺跡	1	大阪府教育委員会	大阪府東大阪市	古墳時代中期
現代のウマの骨格標本	—	1	東海大学		
ウマの頭部〔レプリカ〕	—	1	当館		
県内最古のウマ（歯）	鳴神IV遺跡、鳴神V遺跡	5	当館	和歌山市	古墳時代中期
韓式系土器(甗)、初期須恵器(甕)	鳴神IV遺跡、鳴神V遺跡	2	当館		古墳時代中期
墓に供えられた馬（歯列）	鳴神V遺跡	1	和歌山市	和歌山市	古墳時代中期
県内最古のウシ、土師器（小型丸底壺）、木製品	井辺遺跡	8	当館	和歌山市	古墳時代中期
2) ウマが起こした交通革命					
版本日本書紀 卷十八 欽明天皇	—	1	和歌山県立図書館		江戸時代
製塩土器、漁労具(釣針・疑似餌・土錘)、装身具(サメ椎骨)	西庄遺跡	19	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代中期
ウマ（中足骨・大腿骨・肩甲骨・距骨・蹄骨）、ウシ（寛骨・大腿骨・椎骨）	西庄遺跡	13	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代中期
製塩土器、ウマ（椎骨・脛骨）・棒状石製品	西庄遺跡	11	和歌山県教育委員会		古墳時代中期
製塩土器、ウマ（歯・中手骨）	鳴神IV遺跡	7	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代中期
製塩土器、イノシシ（歯）	秋月遺跡	6	和歌山市	和歌山市	古墳時代中期
製塩土器	西田井遺跡	7	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代中期
製塩土器	田屋遺跡	83	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代中期
製塩土器、棒状石製品、ウマ（大腿骨・歯列）	新堂遺跡	9	橿原市	奈良県橿原市	古墳時代中期

資料名	遺跡名	点数	所有者	所在地	時代
製塩土器	十六面・薬王寺遺跡	138	田原本町教育委員会	奈良県田原本町	古墳時代中期
箱におさめられたウマ	唐古・鍵遺跡	1	田原本町教育委員会	奈良県田原本町	古墳時代中期
3) どの馬の骨？歯の分析からわかるウマのふるさと					
ウマ（歯）	西庄遺跡	14	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代中期
4) ウマは権力者の証					
馬冑・馬具（壺鑑・雲珠） 〔レプリカ〕	大谷古墳	3	和歌山市立博物館	和歌山市	古墳時代中期
馬具（鏡板付轡）	前山A58号墳	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
馬具（鏡板付轡）	鳴滝6号墳	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
馬具（剣菱形杏葉）	大谷山22号墳	1	和歌山市	和歌山市	古墳時代後期
馬具（鏡板・雲珠・吊金具・引手・縮具・兵庫鎖）	井辺前山6号墳	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
馬具（杏葉・雲珠・辻金具・縮具・差金）	伝岩橋千塚古墳群（大岩谷）出土	8	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
馬具（辻金具・絞具・鞍磯金具・鞍）	伝岩橋千塚古墳群（土手形塚）出土	12	和歌山大学紀州経済史文化史研究所	和歌山市	古墳時代後期
馬具（鏡板・辻金具・引手・鞍）	船戸山3号墳	8	和歌山県教育委員会	岩出市	古墳時代後期
馬具（雲珠・鏡板付轡）	伝岩橋千塚古墳群（花山）出土	3	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
馬具（雲珠・鏡板・杏葉・引手・辻金具）	鳴滝1号墳	6	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
馬形埴輪	前山A58号墳	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
馬形埴輪【重要文化財】	大日山35号墳	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
馬形埴輪（頭部・耳・障泥・尻・鞍）	井辺前山26号墳	7	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
馬形埴輪（脚・鈴・鈴杏葉・障泥・辻金具・手綱）	大谷山22号墳	8	和歌山市	和歌山市	古墳時代後期
馬形埴輪（頭部）	大谷山6号墳	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
馬形埴輪（頭部）・猪形埴輪（頭部）	伝和歌山市鳴神（鳴神埴輪窯）出土	2	個人	和歌山市	古墳時代後期
馬形埴輪（頭部）	伝花山出土	1	個人	和歌山市	古墳時代後期
第2章 ウマと人のかかわり ―古代以降のウマと人の歴史―					
1) ウマと古代					
土馬	根来寺遺跡	1	和歌山県教育委員会	岩出市	飛鳥・白鳳時代
土馬	川辺遺跡	2	和歌山県教育委員会・和歌山市	和歌山市	奈良時代
土馬	太田・黒田遺跡	1	和歌山市	和歌山市	奈良時代
馬形（木簡）、斎串、須恵器壺・土師器甕	秋月遺跡	5	和歌山県教育委員会	和歌山市	奈良時代
2) 武士の象徴―中近世のウマ―					
ウマ・ウシ（歯・椎骨・その他骨）	神前遺跡	7	和歌山県教育委員会	和歌山市	平安時代・鎌倉時代
瓦器塀・須恵器こね鉢・青磁碗	神前遺跡	5	和歌山県教育委員会	和歌山市	
ウマ（歯）	平井遺跡	2	和歌山市	和歌山市	室町時代
ウシ（歯）	川辺遺跡	1	和歌山市	和歌山市	鎌倉時代
馬具（鐙）・喉輪（甲冑付属品）	根来寺遺跡	2	和歌山県教育委員会	岩出市	戦国時代
鞍（前輪・後輪・居木・腹帯・馬せん・肌付）・鐙	—	4	当館（谷井コレクション）		室町時代・戦国時代
「野馬之図」徳川吉宗筆、「騎馬図」	—	1	和歌山市立博物館	和歌山市	江戸時代
鞍（前輪・後輪・居木・日よけ）	—	1	かつらぎ町教育委員会	かつらぎ町	江戸時代

3) ウマに込めた願い ―近現代のウマと人―					
日本の郷土玩具馬	—	1	当館（秋山コレクション）	和歌山市	現代
藁駒	—	8	当館（秋山コレクション）	全国各地	近現代
腰神の竹馬、竹馬	—	2	当館（秋山コレクション）	日高川町・他	近現代
土馬（嵯土馬）	—	11	当館（秋山コレクション）	和歌山市	江戸時代・近現代
紀州郷土玩具番付	—	1	当館（秋山コレクション）		近現代
日本郷土玩具馬の番附	—	1	当館（秋山コレクション）		現代
池植の夬	—	1	当館（秋山コレクション）	和歌山市	近現代
絵馬	—	14	当館（秋山コレクション）	全国各地	江戸時代・近現代
藁駒（桐原牧神社）	—	1	個人	長野県長野市	現代

③秋期特別展「律令国家成立前夜」

期 間：令和5年9月30日（土）～12月3日（日）

会 期：56日

内 容：6世紀から7世紀は、古墳時代の大王中心の首長連合から、天皇中心の中央集権的な律令国家へと移行する時期と言われ、この時期には前方後円墳の築造が終わり、古代寺院の建立が始まるなど、社会の体制が大きく変化した。

紀伊では、大規模な古墳群や遺跡について、当地の古代氏族・紀氏（きし／きうじ）との関連が指摘される。一方で、南海道沿いの古代寺院の建立など、中央政権の影響の存在を示す資料や遺跡も多く見つかっている。

本展示では、6世紀から7世紀（一部8世紀含む）の畿内の中央政権の動向を示す考古資料と、この時期の紀伊の古墳群及び古代寺院の出土品を展示し、古墳時代の首長連合から古代の律令国家へ向かう社会の変化と、その変化が紀伊の古代社会の成立に与えた影響について紹介した。

入館者数：3,280人

資料名	遺跡名	点数	所蔵	所在地	時代
第1章 6世紀における王権と紀伊の変化					
石棺片（阿蘇溶結凝灰岩、竜山石、二上山白色凝灰岩）	今城塚古墳	5	高槻市立今城塚古代歴史館	大阪府高槻市	古墳時代後期
メノウ製勾玉 ガラス玉	今城塚古墳	13	高槻市立今城塚古代歴史館	大阪府高槻市	古墳時代後期
掛矢	今城塚古墳	1	高槻市立今城塚古代歴史館	大阪府高槻市	古墳時代後期
人物画像鏡（複製品）		1	当館（現品：隅田八幡神社蔵、東京国立博物館保管）	橋本市	古墳時代後期（癸未年）
須恵器（蓋坏、高坏、甕、壺）、土師器 壺	物集女車塚古墳	14	向日市教育委員会	京都府向日市	古墳時代後期
円筒埴輪	物集女車塚古墳	2	向日市教育委員会	京都府向日市	古墳時代後期
円筒埴輪	断夫山古墳	1	名古屋市博物館	愛知県名古屋市	古墳時代後期
画文帯仏獣鏡	大須二子山古墳	1	名古屋市博物館	愛知県名古屋市	古墳時代後期
須恵器（有蓋台付壺、有蓋高坏）	大谷山22号墳	2	和歌山市	和歌山市	古墳時代後期
円筒埴輪	大谷山22号墳	2	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
形象埴輪（翼を広げた鳥形埴輪、両面人物埴輪、巫女形埴輪、双脚輪状文冠帽をかぶった人物、武人形埴輪）	大日山35号墳	6	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
須恵器（高坏、器台、配像、坏）	大日山35号墳	4	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
馬具 雲珠	大日山35号墳	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
ガラス製丸玉 滑石製白玉 土製丸玉 銀製梔子玉・空玉 碧玉製平玉・管玉	大日山35号墳	一式	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期

資料名	遺跡名	点数	所蔵	所在地	時代
人物埴輪（男性）	前山A58号墳	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
須恵器（坏、壺）	前山A58号墳	3	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
土師器 壺	前山A58号墳	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
馬具 轡	前山A58号墳	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
砥石、鉄鏃	前山A58号墳	11	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
滑石製白玉、ガラス製小玉、土製丸玉	前山A58号墳	一式	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
須恵器（坏、壺）	井辺前山6号墳	2	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
馬具（雲珠、杏葉） 鉄鉾 鉾 鉄刀 ガラス製勾玉 碧玉製管玉 ガラス小玉 トンボ玉	井辺前山6号墳	一式	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
須恵器 坏	高屋築山古墳 （安閑天皇古市高屋陵）	3	宮内庁書陵部	大阪府羽曳野市	古墳時代中期
円筒埴輪	高屋築山古墳 （安閑天皇古市高屋陵）	2	宮内庁書陵部	大阪府羽曳野市	古墳時代中期
須恵器（坏、高坏）	五条野（見瀬） 丸山古墳（畝傍陵墓参考地）	4	宮内庁書陵部	奈良県橿原市	古墳時代後期
土師器 高坏	平田梅山古墳 （欽明天皇櫓前坂合陵）	3	宮内庁書陵部	奈良県橿原市	古墳時代後期
円筒埴輪	平田梅山古墳 （欽明天皇櫓前坂合陵）	2	宮内庁書陵部	奈良県橿原市	古墳時代後期
版本日本書紀 自十六至二十一		1	和歌山県立文書館	和歌山市	江戸時代
ガラス製小玉・粟玉・白玉 トンボ玉 銀製空玉 メノウ製切子玉	天王塚古墳	一式	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
三角飾金具 歩揺金具 銀製 四葉形金具 胡ろく金具	天王塚古墳	10	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
須恵器（有蓋台付壺、配像）、土師器 壺	天王塚古墳	5	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
須恵器 蓋坏	将軍塚古墳（前山B53号墳）	5	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
須恵器（坏、高坏、壺）、土師器 坏	山東22号墳	5	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
トンボ玉 水晶製切子玉 碧玉製管玉 ガラス製小玉	山東22号墳	一式	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
鉄鏃	山東22号墳	16	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
金製飾金具	山東22号墳	3	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
振り環頭大刀柄頭、単鳳環頭大刀柄頭	鳴滝1号墳	2	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
耳環 子持勾玉 鏝座金具	鳴滝1号墳	4	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
馬具 杏葉 辻金具 雲珠 鏡板 引手	鳴滝1号墳	6	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
須恵器（蓋坏、高坏）	鳴滝1号墳	2	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
須恵器（蓋坏、壺）	室山1号墳	2	海南市教育委員会	海南市	古墳時代後期
鉄鏃	室山2号墳	5	当館	海南市	古墳時代後期
須恵器（蓋坏、高坏、壺） ミニチュア炊飯具形土器	船戸山3号墳2号石室	9	和歌山県教育委員会	岩出市	古墳時代後期
銅釧	船戸山3号墳2号石室	2	和歌山県教育委員会	岩出市	古墳時代後期
耳環	船戸山3号墳2号石室	2	和歌山県教育委員会	岩出市	古墳時代後期
ガラス製丸玉 土製丸玉	船戸山3号墳2号石室	20	和歌山県教育委員会	岩出市	古墳時代後期
須恵器（装飾付壺、子持器台）、土師器 壺	船戸箱山古墳	5	和歌山県教育委員会	岩出市	古墳時代後期
耳環 メノウ製・碧玉製勾玉 水晶製切子玉 魚形歩揺	船戸箱山古墳	9	和歌山県教育委員会	岩出市	古墳時代後期

資料名	遺跡名	点数	所蔵	所在地	時代
素環頭把金銅装黒漆大刀柄頭 単鳳環頭大刀柄頭	岡峯古墳	1	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	奈良県下市町	古墳時代後期
単鳳環頭大刀柄頭	岡峯古墳	1	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館（下市観光文化センター保管）	奈良県下市町	古墳時代後期
須恵器（坏、高坏、台付壺） 土師器 壺	岡峯古墳	6	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館（下市観光文化センター保管）	奈良県下市町	古墳時代後期
耳環 トンボ玉	岡峯古墳	2	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館（下市観光文化センター保管）	奈良県下市町	古墳時代後期
須恵器 坏 須恵器 高坏	明楽 4 号墳	2	和歌山市	和歌山市	古墳時代後期
土師器 高坏、馬具 兵庫鎖	明楽 5 号墳	2	和歌山市	和歌山市	古墳時代後期
耳環	寺山 1 号墳	2	和歌山大学紀州経済史文化史研究所	和歌山市	古墳時代後期
須恵器 坏	寺山 2 号墳	13	和歌山大学紀州経済史文化史研究所	和歌山市	古墳時代後期～飛鳥時代
須恵器（壺、提瓶）	寺山13号墳	2	和歌山大学紀州経済史文化史研究所	和歌山市	古墳時代後期～飛鳥時代
須恵器（坏、高坏）	寺山15号墳	2	和歌山大学紀州経済史文化史研究所	和歌山市	古墳時代後期～飛鳥時代
須恵器 坏	小倉 1 号墳	2	和歌山市	和歌山市	古墳時代後期～飛鳥時代
土製丸玉 ガラス製小玉 水晶製算盤玉 滑石製臼玉	小倉 1 号墳	4	和歌山市	和歌山市	古墳時代後期～飛鳥時代
棒状鉄製品	小倉 1 号墳	1	和歌山市	和歌山市	古墳時代後期～飛鳥時代
須恵器（蓋、壺、子持器台）	園部円山古墳	3	和歌山市	和歌山市	古墳時代後期
圭頭大刀 柄頭 鐔 脛巾 鞘尻金具 貴金具	園部円山古墳	7	和歌山市	和歌山市	古墳時代後期
耳環	園部円山古墳	7	和歌山市	和歌山市	古墳時代後期
馬具 心葉形鏡板 心葉形杏葉 轡 辻金具	園部円山古墳	7	和歌山市	和歌山市	古墳時代後期
須恵器（坏、高坏）	川辺遺跡	6	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期～飛鳥時代
須恵器（坏、甕） 土師器（坏、皿）	且来VI遺跡	11	海南市教育委員会	海南市	古墳時代後期～飛鳥時代
「乃部」刻書土器	且来VI遺跡	1	海南市教育委員会	海南市	古墳時代後期～飛鳥時代
蛸壺、製塩土器	且来VI遺跡	3	海南市教育委員会	海南市	古墳時代後期～飛鳥時代

第2章 7世紀における古墳の変化と古代寺院の成立

円筒埴輪	太子西山古墳 （敏達天皇磯長中尾陵）	1	宮内庁書陵部	大阪府太子町	古墳時代後期
須恵器（坏、壺）	植山古墳	2	橿原市	奈良県橿原市	古墳時代後期～飛鳥時代
水晶製三輪玉	植山古墳	3	橿原市	奈良県橿原市	古墳時代後期～飛鳥時代
竜山石片 阿蘇溶結凝灰岩片	植山古墳	11	橿原市	奈良県橿原市	古墳時代後期～飛鳥時代
土師器 高坏	塚穴山古墳	1	天理大学附属天理参考館	奈良県天理市	古墳時代後期～飛鳥時代
石棺片（二上山白色凝灰岩）	塚穴山古墳	3	天理大学附属天理参考館	奈良県天理市	古墳時代後期～飛鳥時代
須恵器（坏、蓋、提瓶）	ウテビ山 2 号墳	3	天理大学附属天理参考館	奈良県天理市	古墳時代後期～飛鳥時代
石棺片（二上山白色凝灰岩）	ウテビ山 1 号墳 または 3 号墳	1	天理大学附属天理参考館	奈良県天理市	古墳時代後期～飛鳥時代
土師器 坏	叡福寺北古墳	1	太子町教育委員会	大阪府太子町	飛鳥時代
埴	仏陀寺古墳	2	太子町教育委員会	大阪府太子町	飛鳥時代
須恵器（壺、甕） 土師器（台付壺、甕）	井辺 1 号墳（岩橋千塚古墳群）	4	和歌山市	和歌山市	古墳時代後期～飛鳥時代
須恵器 器台	寺内57号墳	1	和歌山市	和歌山市	古墳時代後期
須恵器 坏	寺内35号墳	9	和歌山県教育委員会	和歌山市	飛鳥時代
須恵器（坏、高坏、壺） 土師	鳴滝 2 号墳	16	和歌山県教育委員会	和歌山市	飛鳥時代

資料名	遺跡名	点数	所蔵	所在地	時代
須恵器（坏、壺） 土師器 坏	鳴滝10号墳	7	和歌山県教育委員会	和歌山市	飛鳥時代
第1次床面 須恵器（坏、高坏、平瓶、壺、甕）	泣沢女のお墳（天満1号墳）	7	有田川町教育委員会	有田川町	飛鳥時代～奈良時代
第1次床面 耳環 ガラス小玉	泣沢女のお墳（天満1号墳）	6	有田川町教育委員会	有田川町	飛鳥時代～奈良時代
第1次床面 鉄釘	泣沢女のお墳（天満1号墳）	5	有田川町教育委員会	有田川町	飛鳥時代～奈良時代
第2次床面 銅製銚帯（丸柄、巡方）	泣沢女のお墳（天満1号墳）	2	有田川町教育委員会	有田川町	飛鳥時代～奈良時代
第2次床面 須恵器 坏、土師器 坏	泣沢女のお墳（天満1号墳）	5	有田川町教育委員会	有田川町	飛鳥時代～奈良時代
歯	泣沢女のお墳（天満1号墳）	一式	有田川町教育委員会	有田川町	飛鳥時代～奈良時代
銀装大刀	岩内1号墳	1	御坊市教育委員会	御坊市	飛鳥時代
六花形棺飾金具	岩内1号墳	3	御坊市教育委員会	御坊市	飛鳥時代
鉄釘	岩内1号墳	3	御坊市教育委員会	御坊市	飛鳥時代
漆塗木棺片	岩内1号墳	一式	御坊市教育委員会	御坊市	飛鳥時代
須恵器 坏	岩内1号墳	1	御坊市教育委員会	御坊市	飛鳥時代
土師器 坏	岩内1号墳	1	御坊市教育委員会	御坊市	飛鳥時代
素弁十葉蓮華文軒丸瓦	檜前寺跡	1	奈良文化財研究所都城発掘部飛鳥・藤原地区	奈良県明日香村	飛鳥時代
「呉」刻書丸瓦	檜前寺跡	1	奈良文化財研究所飛鳥資料館	奈良県明日香村	飛鳥時代
素弁七葉蓮華文軒丸瓦、唐草文軒平瓦	坂田寺跡	2	奈良文化財研究所都城発掘部飛鳥・藤原地区	奈良県明日香村	飛鳥時代
塔心礎埋納品 硬玉製勾玉 耳環 ガラス玉	飛鳥寺	2	奈良文化財研究所飛鳥資料館	奈良県明日香村	飛鳥時代
塔心礎埋納品 ガラス玉	飛鳥寺	429点	奈良文化財研究所飛鳥資料館	奈良県明日香村	飛鳥時代
方形三尊埴仏	川原寺裏山遺跡	1	明日香村教育委員会（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館保管）	奈良県明日香村	飛鳥時代
緑釉水波文埴	川原寺裏山遺跡	1	明日香村教育委員会（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館保管）	奈良県明日香村	飛鳥時代
単弁八葉蓮華文軒丸瓦（坂田寺系）	最上廃寺	1	和歌山県教育委員会	紀の川市	飛鳥時代～奈良時代
重弁八葉蓮華文軒丸瓦	最上廃寺	1	和歌山県教育委員会	紀の川市	飛鳥時代～奈良時代
鷗尾	最上廃寺	2	和歌山県教育委員会	紀の川市	飛鳥時代～奈良時代
六尊連立埴仏	最上廃寺	1	和歌山県教育委員会	紀の川市	飛鳥時代～奈良時代
単弁八葉蓮華文軒丸瓦（坂田寺系）	北山廃寺	1	和歌山県教育委員会	紀の川市	飛鳥時代～奈良時代
丸瓦	北山廃寺	1	和歌山県教育委員会	紀の川市	飛鳥時代～奈良時代
鷗尾	北山廃寺	2	和歌山県教育委員会	紀の川市	飛鳥時代～奈良時代
須恵器 坏、土師器 坏	北山廃寺	5	和歌山県教育委員会	紀の川市	飛鳥時代～奈良時代
単弁八葉蓮華文軒丸瓦（坂田寺系）	西国分廃寺	1	和歌山県教育委員会	紀の川市	飛鳥時代～奈良時代
複弁八葉蓮華文軒丸瓦（上野廃寺系）	西国分廃寺	1	和歌山県教育委員会	紀の川市	飛鳥時代～奈良時代
重弁六葉蓮華文軒丸瓦	西国分廃寺	1	和歌山県教育委員会	紀の川市	飛鳥時代～奈良時代
平瓦	西国分廃寺	1	和歌山県教育委員会	紀の川市	飛鳥時代～奈良時代
唐草文軒平瓦	西国分廃寺	1	和歌山県教育委員会	紀の川市	飛鳥時代～奈良時代
鷗尾	上野廃寺	3	和歌山県教育委員会	和歌山市	奈良時代
円面硯	西国分廃寺	1	和歌山県教育委員会	紀の川市	飛鳥時代～奈良時代
須恵器（坏、皿、鍋、壺） 土師器 皿	西国分廃寺	5	和歌山県教育委員会	紀の川市	飛鳥時代～奈良時代
複弁八葉蓮華文軒丸瓦（上野廃寺系） 唐草文軒平瓦	上野廃寺	2	和歌山県教育委員会	和歌山市	奈良時代

資料名	遺跡名	点数	所蔵	所在地	時代
唐草文軒平瓦	上野廃寺	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	奈良時代
複弁八葉蓮華文軒丸瓦（統一新羅系）	上野廃寺	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	奈良時代
鷗尾	上野廃寺	3	和歌山県教育委員会	和歌山市	奈良時代
忍冬文隅木蓋瓦	上野廃寺	2	和歌山県教育委員会	和歌山市	奈良時代
複弁八葉蓮華文軒丸瓦（川原寺系）	佐野廃寺	1	かつらぎ町教育委員会	かつらぎ町	飛鳥時代～奈良時代
三重弧文軒平瓦	佐野廃寺	1	かつらぎ町教育委員会	かつらぎ町	飛鳥時代～奈良時代
九葉幾何学文軒丸瓦	佐野廃寺	1	かつらぎ町教育委員会	かつらぎ町	飛鳥時代～奈良時代
方形三尊塼仏 六尊連立塼仏	佐野廃寺	8	かつらぎ町教育委員会	かつらぎ町	飛鳥時代～奈良時代
佐波理塼 風招	佐野廃寺	1	かつらぎ町教育委員会	かつらぎ町	飛鳥時代～奈良時代
須恵器 坏	佐野廃寺	1	かつらぎ町教育委員会	かつらぎ町	飛鳥時代～奈良時代
重弧文軒丸瓦	佐野廃寺	1	和歌山県教育委員会	かつらぎ町	飛鳥時代～奈良時代
九葉幾何学文軒丸瓦	佐野廃寺	1	和歌山県教育委員会	かつらぎ町	飛鳥時代～奈良時代
複弁十葉蓮華文軒丸瓦（巨勢寺系）	佐野廃寺	1	和歌山県教育委員会	かつらぎ町	飛鳥時代～奈良時代
唐草文軒平瓦	佐野廃寺	1	和歌山県教育委員会	かつらぎ町	飛鳥時代～奈良時代
鷗尾	佐野廃寺	1	当館	かつらぎ町	飛鳥時代～奈良時代
単弁八葉蓮華文軒丸瓦 複弁八葉蓮華文軒丸瓦 三重弧文軒平瓦	名古曾廃寺	3	和歌山県教育委員会	橋本市	飛鳥時代～奈良時代
複弁八葉蓮華文軒丸瓦	山口廃寺	1	個人蔵	和歌山市	奈良時代
平瓦	薬勝寺跡	1	個人蔵	和歌山市	奈良時代
複弁八葉蓮華文軒丸瓦	田殿廃寺	1	当館	有田川町	奈良時代
複弁八葉軒丸瓦	道成寺	1	個人蔵	日高川町	奈良時代
複弁八葉蓮華文軒丸瓦、唐草文軒平瓦	道成寺	2	御坊市教育委員会	日高川町	奈良時代
複弁八葉蓮華文軒丸瓦	道成寺	2	御坊市教育委員会	日高川町	奈良時代
唐草文軒平瓦	道成寺	1	御坊市教育委員会	日高川町	奈良時代
須恵器（小壺、坏）	道成寺	2	御坊市教育委員会	日高川町	奈良時代
鷗尾（複製品）	堂の谷瓦窯跡	1	当館	田辺市	奈良時代

第3章 律令国家の成立と紀伊

須恵器 坏 土師器 皿	府中遺跡	13	和歌山市	和歌山市	奈良時代
製塩土器、土錘	府中遺跡	5	和歌山市	和歌山市	奈良時代
鷗尾	府中遺跡	1	和歌山市	和歌山市	奈良時代
軒丸瓦	府中遺跡	1	個人蔵	和歌山市	奈良時代
須恵器 坏 円面硯	鳴神V遺跡	3	和歌山県教育委員会	和歌山市	奈良時代
緑釉陶器、灰釉陶器	鳴神V遺跡	7	和歌山県教育委員会	和歌山市	奈良時代
「大」墨書土器	鳴神V遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	奈良時代
須恵器 坏 円面硯	堅田遺跡（日高郡衙跡）	5	御坊市教育委員会	御坊市	奈良時代
土師器 坏	堅田遺跡（日高郡衙跡）	1	御坊市教育委員会	御坊市	奈良時代
複弁八葉蓮華文軒丸瓦（興福寺系）	紀伊国分寺跡	1	和歌山県教育委員会	紀の川市	奈良時代
唐草文軒平瓦	紀伊国分寺跡	3	和歌山県教育委員会	紀の川市	奈良時代
複弁蓮華文軒丸瓦	紀伊国分寺跡	2	和歌山県教育委員会	紀の川市	平安時代
鬼瓦	紀伊国分寺跡	1	岩出中学校	紀の川市	奈良時代
奈良三彩薬壺形蔵骨器・石櫃（複製品）	名古曾火葬墓	3	橋本市教育委員会（原品：京都国立博物館）	橋本市	奈良時代
銅製蔵骨器	大同寺墳墓	1	個人蔵	和歌山市	奈良時代
蔵骨器	鳴滝2号墳	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	奈良時代
人骨	花山50号墳（岩橋千塚古墳群）	一式	和歌山県教育委員会	和歌山市	奈良時代～平安時代
須恵器 坏	青木古墓	1	和歌山県教育委員会	湯浅町	奈良時代
和同開珎 銅製鈎帶	青木古墓	6	和歌山県教育委員会	湯浅町	奈良時代

資料名	遺跡名	点数	所蔵	所在地	時代
木炭	青木古墓	一式	和歌山県教育委員会	湯浅町	奈良時代
版本 日本書紀 自十一至十三		1	和歌山県立文書館	和歌山市	江戸時代
馬具 心葉形鏡板 鐘形杏葉雲珠 辻金具	三里古墳	5	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	奈良県平群町	古墳時代後期
須恵器（蓋坏、高坏、甗、壺、） 土師器（高坏、壺）	三里古墳	14	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	奈良県平群町	古墳時代後期
複弁八葉蓮華文軒丸瓦 重弧文軒平瓦	小山廃寺（紀寺跡）	2	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	奈良県明日香村	奈良時代
大型独尊埴仏	小山廃寺（紀寺跡）	1	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	奈良県明日香村	奈良時代
紀吉継墓誌（複製品）		1	太子町教育委員会（原品：妙見寺蔵、大阪市立美術館保管）	大阪府太子町	平安時代
須恵器（坏、壺） 土師器（甗、坏） 製塩土器	秋月遺跡	9	和歌山県教育委員会	和歌山市	奈良時代
「大田」木簡転用馬形 斎串	秋月遺跡	2	和歌山県教育委員会	和歌山市	奈良時代

特別展関連事業

・特別展シンポジウム

「古墳時代から律令国家への変化と紀伊」

令和5年11月5日（日）13:00～16:30

参加者：70人

・関連講座①

令和5年10月15日（日）13:30～15:30

参加者：29人

・関連講座②

令和5年10月22日（日）13:30～16:30

参加者：31人

・関連講座③

令和5年11月19日（日）13:30～16:30

参加者：44人



写真1 令和5年度特別展チラシ（表面）



写真2 第1章展示風景「今城塚古墳出土 石棺片」



写真3 第2章展示風景「西国分廃寺出土瓦」

④冬期企画展「紀伊半島の東と西 ―縄文・弥生時代の地域性―」

期 間：令和6年1月20日（土）～2月25日（日）

会 期：37日間

内 容：熊野灘や紀伊水道に臨む紀伊半島の沿岸部では、縄文時代以来、様々な生業が営まれてきた。

瀬戸内海と太平洋を結ぶこの地域では、陸上交通網が発達した現代からみても驚くほど広域にわたり日本列島各地と海を介した交流が行われてきたことがわかっている。

紀伊半島の沿岸に所在する縄文・弥生時代の遺跡から出土する縄文土器や弥生土器等は、その形や文様から東岸では東海地方と、西岸では近畿地方や瀬戸内地方と盛んに交流していたことを示す。文化や社会の在り方が大きく変化した縄文時代と弥生時代で日常的な交流範囲が大きく変化しなかったことは、当時の人びとの生活と自然環境との深いかかわりが背景にあったとみられる。

本展示では、縄文時代から弥生時代の長期間変わることのなかった紀伊半島の地域性を、県内や三重県南部出土の考古資料を通じて紹介した。

入館者数：900人

資料名	遺跡名	点数	所有者	所在地	時代
第1章 縄文時代の地域性と交流					
押出型石匙	天田橋南出土	1	個人蔵（御坊市教育委員会保管）	御坊市	縄文時代前期
縄文土器 深鉢（高山寺式）	高山寺貝塚（第1号貝塚）	3	高山寺（和歌山県立博物館保管）	田辺市	縄文時代早期
イモガイ類製品	高山寺貝塚（第2号貝塚）	1	高山寺（和歌山県立博物館保管）	田辺市	縄文時代早期
貝類（ハイガイ・ヒメアカガイ・サルボウ）	高山寺貝塚（第3号貝塚）	6	高山寺（和歌山県立博物館保管）	田辺市	縄文時代早期
貝類（サザエ・ウミギク・ヤマトシジミ・ケマンガイ）	高山寺貝塚（第4号貝塚）	6	高山寺（和歌山県立博物館保管）	田辺市	縄文時代早期
縄文土器 深鉢[複製品]	高山寺貝塚（第5号貝塚）	1	和歌山県教育委員会	田辺市	縄文時代早期
縄文土器 深鉢（石山式）	曾根遺跡	2	尾鷲市曾根区	三重県尾鷲市	縄文時代早期
縄文土器 深鉢（瀬戸内・近畿地方系 縁帯文土器）	曾根遺跡	1	尾鷲市曾根区	三重県尾鷲市	縄文時代後期
磨製石斧	曾根遺跡	2	尾鷲市曾根区	三重県尾鷲市	縄文時代
石鏃・石錐（サヌカイト製）	曾根遺跡	6	尾鷲市曾根区	三重県尾鷲市	縄文時代
石匙（サヌカイト製）	曾根遺跡	2	尾鷲市曾根区	三重県尾鷲市	縄文時代
石錘	曾根遺跡	2	尾鷲市曾根区	三重県尾鷲市	縄文時代
石棒	曾根遺跡	1	尾鷲市曾根区	三重県尾鷲市	縄文時代
石錘	釜ノ平遺跡	1	高山寺（和歌山県立博物館保管）	三重県熊野市	縄文時代
剥片（サヌカイト製）	釜ノ平遺跡	2	高山寺（和歌山県立博物館保管）	三重県熊野市	縄文時代
縄文土器 深鉢（瀬戸内・近畿地方系 船元式）	釜ノ平・新鹿出土	1	高山寺（和歌山県立博物館保管）	三重県熊野市	縄文時代中期
縄文土器 深鉢（東日本系）	釜ノ平・新鹿出土	1	高山寺（和歌山県立博物館保管）	三重県熊野市	縄文時代後期
縄文土器 深鉢（瀬戸内・近畿地方系 縁帯文土器）	釜ノ平・新鹿出土	1	高山寺（和歌山県立博物館保管）	三重県熊野市	縄文時代後期
縄文土器 深鉢（瀬戸内・近畿地方系 縁帯文土器）	徳蔵地区遺跡	4	みなべ町教育委員会	みなべ町	縄文時代後期
石匙・石鏃（サヌカイト製）	徳蔵地区遺跡	2	みなべ町教育委員会	みなべ町	縄文時代中・後期
打製石斧・磨製石斧	徳蔵地区遺跡	4	みなべ町教育委員会	みなべ町	縄文時代中・後期
縄文土器 深鉢（突帯文土器 船橋式）	川辺遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	縄文時代晩期
縄文土器 深鉢（東北地方系 大洞BC～C式）	川辺遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	縄文時代晩期
石刀	川辺遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	縄文時代晩期
大珠（翡翠製）	船岡山遺跡	1	和歌山県教育委員会	かつらぎ町	縄文時代後期

資料名	遺跡名	点数	所有者	所在地	時代
皿形容器	立野遺跡	1	和歌山県教育委員会	すさみ町	弥生時代前期
横杓子	立野遺跡	1	和歌山県教育委員会	すさみ町	弥生時代前期
匙	立野遺跡	1	和歌山県教育委員会	すさみ町	弥生時代前期
広鋤	立野遺跡	1	和歌山県教育委員会	すさみ町	弥生時代前期
平鋤	立野遺跡	1	和歌山県教育委員会	すさみ町	弥生時代前期
弓	立野遺跡	1	和歌山県教育委員会	すさみ町	弥生時代前期
斧柄（伐採斧直柄）	立野遺跡	2	和歌山県教育委員会	すさみ町	弥生時代前期
弥生土器 壺（遠賀川式土器）	堅田遺跡	3	御坊市教育委員会	御坊市	弥生時代前期
弥生土器 甕（遠賀川式土器）	堅田遺跡	1	御坊市教育委員会	御坊市	弥生時代前期
突帯文土器 深鉢	堅田遺跡	2	御坊市教育委員会	御坊市	弥生時代前期
磨製石斧	堅田遺跡	2	御坊市教育委員会	御坊市	弥生時代前期
太形蛤刃石斧	堅田遺跡	1	御坊市教育委員会	御坊市	弥生時代前期
石鏃・石錐（サヌカイト製）	堅田遺跡	5	御坊市教育委員会	御坊市	弥生時代前期
打製石剣（サヌカイト製）	堅田遺跡	1	御坊市教育委員会	御坊市	弥生時代前期
石庖丁（石製穂摘具）	堅田遺跡	1	御坊市教育委員会	御坊市	弥生時代前期
用途不明石製品	堅田遺跡	1	御坊市教育委員会	御坊市	弥生時代前期
広鋤 未製品	堅田遺跡	1	御坊市教育委員会	御坊市	弥生時代前期
堅杵	堅田遺跡	1	御坊市教育委員会	御坊市	弥生時代前期
弥生土器 壺（遠賀川式土器）	神崎遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	弥生時代前期
弥生土器 甕（遠賀川式土器）	神崎遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	弥生時代前期
突帯文土器 深鉢	神崎遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	弥生時代前期
小型柱状片刃石斧	神崎遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	弥生時代前期
打製石剣（サヌカイト製）	神崎遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	弥生時代前期
石庖丁（石製穂摘具）	神崎遺跡	2	和歌山県教育委員会	和歌山市	弥生時代前期
大型石庖丁	神崎遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	弥生時代前期
太形蛤刃石斧	神崎遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	弥生時代前期
弥生土器 壺（紀伊第Ⅱ様式～Ⅲ様式）	八丁田圃遺跡	1	田辺市教育委員会	田辺市	弥生時代中期
弥生土器 壺（紀伊第Ⅲ様式）	八丁田圃遺跡	3	田辺市教育委員会	田辺市	弥生時代中期
扁平片刃石斧	八丁田圃遺跡	1	田辺市教育委員会	田辺市	弥生時代中期
弥生土器 高杯	八反田遺跡	1	和歌山県教育委員会	新宮市	弥生時代中期
弥生土器 細頸壺・広口壺	八反田遺跡	3	和歌山県教育委員会	新宮市	弥生時代中期
打製石器	八反田遺跡	3	和歌山県教育委員会	新宮市	弥生時代中期
太形蛤刃石斧	八反田遺跡	1	和歌山県教育委員会	新宮市	弥生時代中期
弥生土器 広口壺	太田・黒田遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	弥生時代中期
弥生土器 高杯	太田・黒田遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	弥生時代中期
石鏃	太田・黒田遺跡	8	和歌山県教育委員会	和歌山市	弥生時代前期・中期
石錐	太田・黒田遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	弥生時代前期・中期
太形蛤刃石斧	太田・黒田遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	弥生時代前期・中期
石庖丁（石製穂摘具） 未製品	太田・黒田遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	弥生時代前期・中期
石庖丁（石製穂摘具）	太田・黒田遺跡	3	和歌山県教育委員会	和歌山市	弥生時代前期・中期
木製高杯	太田・黒田遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	弥生時代前期・中期
広鋤 未製品	太田・黒田遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	弥生時代前期・中期
石棒	太田・黒田遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	弥生時代前期
石棒	立野遺跡	1	和歌山県教育委員会	すさみ町	弥生時代前期
石棒	堅田遺跡	1	御坊市教育委員会	御坊市	弥生時代前期
石棒	徳蔵地区遺跡	3	みなべ町教育委員会	みなべ町	弥生時代前期
突帯文土器 深鉢（長原式（生駒西麓産））	徳蔵地区遺跡	3	みなべ町教育委員会	みなべ町	弥生時代前期
条痕文系土器 深鉢（東海地方系 馬見塚式）	徳蔵地区遺跡	2	みなべ町教育委員会	みなべ町	弥生時代前期

資料名	遺跡名	点数	所有者	所在地	時代
浮線網状文土器 浅鉢（中部地方系 浮線網状文土器（氷1式））	徳蔵地区遺跡	2	みなべ町教育委員会	みなべ町	弥生時代前期
弥生土器 広口壺（瀬戸内中部系 阿方式）	神前遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	弥生時代前期
弥生土器 広口壺（瀬戸内東部系（播磨産））	神前遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	弥生時代前期
弥生土器 広口壺（瀬戸内東部系）	堅田遺跡	2	御坊市教育委員会	御坊市	弥生時代前期
弥生土器 甕（瀬戸内系）	堅田遺跡	1	御坊市教育委員会	御坊市	弥生時代前期
弥生土器 広口壺（東海地方系 条痕文系土器（水神平式））	堅田遺跡	1	御坊市教育委員会	御坊市	弥生時代前期
弥生土器 壺（東海地方東部～中部高地系 平沢型壺）	高見遺跡（みなべ町）	1	みなべ町教育委員会	みなべ町	弥生時代中期
弥生土器 壺（東海地方系 条痕文系土器（岩滑式））	八丁田圃遺跡	3	田辺市教育委員会	田辺市	弥生時代中期
弥生土器 壺・甕（東海地方系 条痕文系土器（続水神平式））	八丁田圃遺跡	2	田辺市教育委員会	田辺市	弥生時代中期
弥生土器 壺（東海地方系 朝日式）	八丁田圃遺跡	1	田辺市教育委員会	田辺市	弥生時代中期
弥生土器 壺（東海地方系 条痕文系土器（岩滑式））	熊岡Ⅱ遺跡	1	みなべ町教育委員会	みなべ町	弥生時代中期
弥生土器 壺・甕（東海地方系 貝田町式（伊勢湾西岸））	八反田遺跡	6	和歌山県教育委員会	新宮市	弥生時代中期
弥生土器 壺（東海地方系 続条痕文系土器）	八反田遺跡	1	和歌山県教育委員会	新宮市	弥生時代中期
弥生土器 台付鉢（河内第Ⅳ様式（生駒西麓産））	八反田遺跡	1	和歌山県教育委員会	新宮市	弥生時代中期
弥生土器 壺（東海地方系 朝日式）	大古Ⅱ遺跡	2	和歌山県教育委員会	白浜町	弥生時代中期
弥生土器 甕（紀伊型甕）	太田・黒田遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	弥生時代前期
弥生土器 甕（紀伊型甕）	神前遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	弥生時代前期
弥生土器 甕（紀伊型甕）	堅田遺跡	1	御坊市教育委員会	御坊市	弥生時代前期
弥生土器 甕（紀伊型甕）	八丁田圃遺跡	1	田辺市教育委員会	田辺市	弥生時代中期
弥生土器 甕（紀伊型甕）	大古Ⅱ遺跡	1	和歌山県教育委員会	白浜町	弥生時代中期
弥生土器 甕（紀伊型甕）	八反田遺跡	2	和歌山県教育委員会	新宮市	弥生時代中期
有本銅鐸（扁平紐1式流水文）	有本銅鐸出土地	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	弥生時代中期

第3章 古墳時代以降の地域性

弥生土器 甕（V様式甕）	西田井遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	弥生時代後期
弥生土器または土師器 甕（熊野型甕）	八反田遺跡	1	和歌山県教育委員会	新宮市	弥生時代後期～古墳時代前期
土師器 高杯（畿内系）	津ノ森遺跡	1	高山寺（和歌山県立博物館保管）	三重県熊野市	古墳時代前期
土師器 広口壺（東海地方系）	津ノ森遺跡	1	高山寺（和歌山県立博物館保管）	三重県熊野市	古墳時代前期
弥生土器または土師器 甕（熊野型甕）	津ノ森遺跡	3	高山寺（和歌山県立博物館保管）	三重県熊野市	弥生時代後期～古墳時代前期
棒状土鍾	西庄遺跡	20	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期

⑤春期企画展「黒江・商家のくらしと漆器」

期 間：令和6年3月16日（土）～3月31日（水）（令和5年度分）

会 期：14日（当該年度分）

内 容：海南市黒江は、江戸時代の初期から職人や商人が集まり、紀州藩の保護を得て漆器を盛んに製造した地域である。黒江塗は、日常生活で手軽に使える器を大量生産することを特色とするため、さまざまな職人が漆器づくりの工程を分業した。また、漆器問屋など商人は海を通じて江戸や上方、四国、九州、さらに明治時代以降には、海外にも販路を拡大した。

本展示では、「つくる」・「あきなう」・「くらす」をテーマに、黒江の町で行われる漆器づくりの道具と製品、商家の生活用具を通じて、江戸期から昭和期にかけての黒江における仕事、商い、くらしの変遷を紹介した。

入館者数：302 人

(※展示目録は、次号に掲載)

(2) 企画展・特別展以外の展示

①ジュニア学芸員養成講座

期 間：令和5年7月28日（金）～8月18日（日）

会 期：21 日

内 容：7月28日、博物館の仕事や考古学・民俗学に興味のある小学生・中学生が抱く素朴な疑問について、学芸員の講座や調べ方の体験などを交えて分かりやすく紹介した。また、参加した子供たちを「ジュニア学芸員」として博物館の仕事に関わる体験をしてもらい、本物の資料に触れ、くわしく調べ、紹介するなど、将来、博物館学芸員や研究者をめざす人を育成する講座を新たに企画した。イベント当日は、小学生9名、中学生1名が参加し、各自が解説シートを作成して成果報告を行った。また、解説シートは8月18日までロビーにて展示を行った。



写真4 子供たちの発表を専門職がサポート

②ミニ展「ジュニア考古学研究応募作品展」

期 間：令和5年12月12日（火）～令和6年1月14日（日）

会 期：34 日

内 容：令和5年4月1日から11月14日にかけて社会科歴史分野に関する小学生及び中学生の自由研究作品を募集した。令和5年度「チャレンジ！ジュニア学芸員」について、応募作品全5点（小学生個人の部・4点、中学生団体の部・1点）を展示した。

主な展示品：※「2 普及活動」の項を参照

③パネル展「岩橋千塚・埼玉・西都原 魅力発信パネル展示」

期 間：令和6年1月27日（土）～2月4日（日）

会 期：9 日

内 容：令和6年1月20日に大阪で開催したシンポジウム「特別史跡の古墳群を語る－岩橋千塚・埼玉・西都原の価値と魅力－」（主催：和歌山県教育委員会）の関連展示。1月27日には当館学芸員より概要説明を含む講座を開催し19名の参加があった。

④ミニ展「和歌山市立西和佐小学校作品展 「町の幸福論」と岩橋千塚古墳群」

期 間：令和6年3月28日（火）～4月4日（日）

会 期：8 日

内 容：和歌山市立西和佐小学校6年生の児童が国語科「町の幸福論」単元において、地域住民間の交流する場として当館及び特別史跡岩橋千塚古墳群を活用し、古墳群の価値を周知する方法を子供たちが提案する取り組みを実施した。

2 普及活動

(1) ものづくり体験

タイトル	実施日	参加人数
勾玉づくり（学校・団体）	春秋遠足等	2,354
埴輪づくり（学校・団体）	春秋遠足等	3,092
合 計		5,446

(2) 催しもの

タイトル			実施日	参加人数
展示・公開	春期企画展	岩橋千塚古墳群のはじまり	3/18(土)～6/18(日)	5,406
	夏期企画展	紀伊の地を馬が駆ける	7/15(土)～9/3(日)	2,049
	秋期特別展	律令国家成立前夜	9/30(土)～12/3(日)	3,280
	冬期企画展	紀伊半島の東と西	1/20(土)～2/25(日)	900
	春期企画展	黒江・商家のくらしと漆器	3/16(土)～6/16(日)	302 (5,598)
	古墳公開	大日山 35 号墳	3/3(日)	83
講 座	学芸員講座	岩橋千塚②	7/2(日)	23
	学芸員講座	岩橋千塚②	9/10(日)	27
	学芸員講座	岩橋千塚③	12/17(日)	27
	学芸員講座	熊野⑩	7/9(日)	22
	学芸員講座	熊野⑪	9/3(日)	23
	学芸員講座	熊野⑫	12/24(日)	18
	展示講座①	春期企画展	4/16(日)	12
	展示講座②	夏期企画展	7/16(日)	14
	展示講座③	冬期企画展	2/11(日・祝)	17
	古墳ガイドツアー①	前山 A13 /A58/A67 号墳	4/23(日)	29
	古墳ガイドツアー②	郡長塚 / 知事塚 / 将軍塚	1/28(日)	30
	民家ガイドツアー	谷村家・小早川家住宅	6/11(日)	3
	館長講座①	旅と博物館①	7/8(土)	14
	館長講座②	旅と博物館②	11/11(土)	13
	館長講座③	旅と博物館③	3/2(土)	14
	中村館長退任記念講座	ぶらりあるき博物館	3/23(土)	31
	ボランティア養成講座①		5/13(土)	0
	ボランティア養成講座②		5/27(土)	1
	ボランティア養成講座③		6/10(土)	1
	ボランティア養成講座④		6/24(土)	1
	特別展開連講座①	※後頁に掲載	10/15(日)	29
	特別展開連講座②	※後頁に掲載	10/22(日)	31
	特別展開連講座③	※後頁に掲載	11/19(日)	44
	特別展シンポジウム	※後頁に掲載	11/5(日)	70
	風土記の植物①		4/29(土・祝)	13
	風土記の植物②		9/9(土)	8
	風土記の植物③		11/25(土)	11
	風土記の植物④		3/9(土)	22
	風土記の昆虫①		5/20(土)	10
	風土記の昆虫②		7/22(土)	11
体 験	実物大の埴輪を作ろう①		6/17(土)	7
	実物大の埴輪を作ろう②		9/2(土)	8
	第 14 回 HANI-1 選手権	ハニワ①、②	5/7(日)、14(日)	53
	GW ものづくり体験	ハニワ①、②	5/3(水・祝)、4(木祝)	142
		まが玉①、②	5/5(金・祝)、6(土)	38
	夏休みものづくり体験	ハニワ①～④	7/29(土)、30(日)、8/5(土)、6(日)	664
		まが玉①	8/19	163
	鋳造体験	鏡	8/20(日)	19
	カラーまが玉づくり		9/16(土)	24
	風土記まつり		10/29(日)	1,647
	ふどきっず①	田植え	5/28(日)	26
	ふどきっず②	うなりごま	7/23(日)	25
	ふどきっず③	稲刈り	10/8(日)	25
	ふどきっず④	わら細工	11/26(日)	24
	ふどきっず⑤	土器炊飯	12/3(日)	31

タイトル			実施日	参加人数
体験	ハニワ作り	ハニワ①～⑫	10/7、21、11/4、18、12/2、16 1/6、20、2/3、17、3/2、16 ※隔週土曜日	94
その他	ジュニア学芸員養成講座		7/28（金）	9
	ジュニア学芸員研究発表		12/10（日）	7
	オンラインツアー		2/9（金）	11

【主な催しものの内容】

①特別展関連講座・シンポジウム

- ・令和5年度秋期特別展関連講座（第1回）

開催日：令和5年10月15日（日）13:30～15:30

内 容：上村 緑（当館）「紀伊の終末期古墳」

富加見泰彦氏（元県立紀伊風土記の丘）「紀伊の古代寺院と日本霊異記の世界」

- ・令和5年度秋期特別展関連講座（第2回）

開催日：令和5年10月22日（日）13:30～15:30

内 容：藤原郁代氏（天理大学附属天理参考館）「天理の古墳と物部氏」

丹野 拓氏（和歌山県教育庁）「瓦からみた紀伊と大和」

- ・令和5年度秋期特別展シンポジウム「古墳時代から律令国家への変化と紀伊」

開催日：令和5年11月5日（日）13:00～16:30

内 容：高橋照彦氏（大阪大学大学院教授）「古墳時代後～終末期の古墳と氏族」

諫早直人氏（京都府立大学准教授）「飛鳥寺塔心礎埋納品からみた仏教の受容」

溝口優樹氏（中京大学教養教育研究院准教授）「文献から読み解く古代氏族の動向」

上村 緑（当館）「紀伊の古代氏族とその遺跡」

討論 上記講演・報告者による討論

- ・令和5年度秋期特別展関連講座（第3回）

開催日：令和5年11月19日（日）13:30～16:00

内 容：堀 真人氏（公財 滋賀県文化財保護協会）「石室と葬送儀礼からみた畿内と紀伊」

一石棚をもつ古墳を中心に一」

平井洸史氏（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館）「蘇我氏と渡来人の古墳」



写真1 特別展関連講座開催状況



写真2 特別展関連シンポジウム討論状況

②チャレンジ！ジュニア学芸員

趣 旨： 考古学に関する小中学生の研究成果を募集・表彰し、その成果を発表する場を設けることで、小中学生が考古学の楽しさを知るとともに、資料をまとめプレゼンテーションをする力をつけるなどの研究活動を推奨する機会とする。

応募内容： 和歌山県内の考古学や歴史学など社会科歴史的分野に関係する研究成果で、学校外で未発表のもの。レポート・作品・歴史新聞など形態は問わない。

対 象： 和歌山県内の小学校・中学校および特別支援学校の小学部または中学部のいずれかに在籍する児童・生徒、または和歌山県在住の児童・生徒。

応募点数：5点

【個人研究部門・小学生の部】

最優秀賞「僕の好きな縄文時代」河野仁宥（和歌山市立川永小学校6年生）

優秀賞「和歌山で真綿は作られていたのかな」河野日香（和歌山市立川永小学校4年生）

奨励賞「石見型埴輪のモデルは何？」村岡英太郎（和歌山市立四箇郷北小学校4年生）

奨励賞「はにわしんぶん」八重橋望実（橋本市立柱本小学校2年生）

【団体研究部門】

最優秀賞「釣り針の変遷」和歌山市立高積中学校 科学部

・関連イベント：令和5年度「チャレンジ！ジュニア考古学」優秀作品表彰式及び研究発表会

開催日時：令和5年12月10日（日） 13：30～15：00

場 所：紀伊風土記の丘資料館 研修室

作品展示：令和5年12月12日（火）～令和6年1月14日（日）

3 研修・実習等

（1）博物館実習

・令和5年度博物館学芸員実習

期 間：令和5年8月24日（火）～8月28日（土）

参加者：3名（他インターンシップ1名、計4名で実施）

京都府立大学1名、桃山学院大学1名、大阪大谷大学1名

内 容：紀伊風土記の丘の博物館活動（講義） 考古資料の保存と活用、民俗資料の取扱い方
教育普及事業、岩橋千塚古墳群の整備事業

展 示：展示資料の調査（館蔵の郷土玩具：馬のおもちゃ）、展示企画・立案

展示（ミニ展示「郷土でウマれたおもちゃたち」）8月16日（土）～9月21日（木）

（2）職場体験実習（インターンシップ）・職場体験学習

当館では、「中学生職場体験学習」及び「和歌山県教育庁等におけるインターンシップ」による中・高校生対象の実習の受け入れを行った。

職場体験

和歌山市立紀之川中学校	期日	令和5年9月27日（水）～28日（木）	対象	中学2年生2名
	内容	園内の維持管理業務、資料整理業務		
和歌山大学教育学部 附属特別支援学校	期日	令和5年11月14日（火）～16日（木）	対象	中等部3年生5名
	内容	園内の維持管理業務、火おこし体験		
和歌山盲学校	期日	令和5年11月30日（木）	対象	中等部1年生1名、2年生1名
	内容	園内の維持管理業務		
紀伊コスモス支援学校	期日	令和5年12月13日（水）～14日（木）	対象	13日：6名、14日：14名
	内容	園内の維持管理業務		

県立和歌山商業高等学校	期日	令和5年11月7日（火）～8日（水）	対象	高校2年生3名
	内容	園内の維持管理業務、資料整理業務		
高校生インターンシップ				
和歌山大学教育学部 附属特別支援学校	期日	令和5年7月26日（水）～28日（金）	対象	高等部1年生1名、2年生1名
	内容	園内の維持管理業務、イベントの広報準備作業		
大学生インターンシップ				
大阪大谷大学	期日	令和5年8月22日（火）～26日（土）	対象	大学3回生1名
	内容	博物館実習と同内容 ※上記（1）参照		

(3) 教員対象の研修

当館の学校向けプログラム等の理解を図るため、教員対象の研修(中堅教諭等資質向上研修:教育センター学びの丘と連携、地域社会体験研修)を受け入れた。

教員対象の研修

中堅教諭等資質向上 研修	期日	令和5年8月29日(火)、30日(水)		
	対象	在職期間が原則10年に達した県内小・中・高・特別支援学校教諭 8月29日:15名、8月30日:15名、計30名参加。		
	内容	学校との連携・協力による博物館づくり・授業づくりの研究―社会教育施設と学校教育の関わり方―をテーマに、資料館展示・施設、教育普及、博学連携活動等の問題の洗い出しと、その改善策の検討を行い、併せて博物館施設の活用の在り方を検討した。		

(4) 博学連携

当館では、古墳、民家、展示室及び広い園内の見学や考古・民俗資料を利用した古代生活体験及び昔の暮らし体験などの幅広い学習活動を行っている。

また、当館に来館できない学校へ職員が赴き、地域の歴史や昔の暮らしの解説、昔の暮らし体験・モノ作り体験の指導を移動博物館(出前授業)として行っている。このほか、オンライン授業で遠隔地の小学校と当館学芸室とをつなぎ、当館の展示や仕事を紹介する「オンラインツアー」を試験的に開始した。

○来館校数、来館者数

来館校数は91校、来館者数は4,879人(引率教員378人を含む)。校種別では小学校が81校と約89.0%を占める。また、月別来館校数では5月に32校(35.2%)、6月に17校(18.7%)、10月に10校(11.0%)となり、春(4, 5, 6月)、秋(10, 11月)の遠足シーズンで81校と全体の約9割を占めている。

(校種別来館校数・来館生徒数)

校種	校数	割合(%)	来館生徒数	割合(%)
幼稚園・保育所・こども園	5	5.5%	122	2.7%
小学校	81	89.0%	4,301	95.6%
中学校	2	2.2%	28	0.6%
高等学校	1	1.1%	28	0.6%
特別支援学校	2	2.2%	22	0.5%
短大・大学・専修学校	0	0.0%	0	0.0%
計	91	100%	4,879	100%

(月別来館校数)

月	幼・保	小学校	中学校	高等学校	特別支援	短大・大学	計	割合(%)
4月	1	6					7	7.7%
5月		30	1	1			32	35.2%
6月		17					17	18.7%
7月							0	0%
8月							0	0%
9月							0	0%
10月	1	8	1				10	11.0%
11月	1	13			1		15	16.5%
12月		1					1	1.1%
1月	1						1	1.1%
2月	1	3			1		5	5.5%
3月		3					3	3.3%
計	5	81	2	1	2	0	91	100%
割合(%)	5.5%	89.0%	2.2%	1.1%	2.2%	0%	100%	

○小学校等の活動内容

来館校とは事前に打合せを行い、古墳めぐり（オリエンテーリング）、民家・展示見学及び園内や考古・民俗資料を利用した各種の活動プログラムを組み合わせ、発展段階に応じて様々なねらいや内容を設定した学習を提供している。

- ・資料館展示や古墳・民家の見学 ドングリ拾いや植物観察などの園内散策、モノ作り体験。
- ・教科書に対応した体験学習（小学校6年生の古代生活体験、3・4年生の昔のくらし体験など）
- ・「総合的な学習の時間」でのグループ学習他。

6～7月は小学校6年生の社会科に対応した『古代生活体験』を、10～1月は小学校3・4年生の社会科に対応した『「昔のくらし」体験学習』を行う学校が多い。

【『古代生活体験』のプログラム】

- ・古代学習：資料館の展示や古墳の見学、火おこしや竪穴住居での体験をととして、古代の人々の生活について学ぶ。
- ・古墳めぐり：古墳群をめぐり、古墳の大きさや形、多さ、石室の中の広さや暗さ、体感温度などを実際に肌で感じる。
- ・風土記の丘オリエンテーリング：紀伊風土記の丘の園内にある古墳と江戸時代の移築民家をグループ行動で見学し、調べ学習を実施する歴史体験学習。
- ・モノ作り体験：モノ作りの歴史や方法などの解説



写真3 モノ作り体験の受け入れ状況

来館日	団体名称	人数	来館日	団体名称	人数	来館日	団体名称	人数
4月4日	放課後デイ オーパセカンド（泉南）	15	5月23日	慶風高等学校	33	10月20日	小倉小学校	50
4月18日	みどり幼稚園	67	5月24日	松江小学校	82	10月20日	楠見西小学校	27
4月16日	東貴志中学校	35	5月25日	三田小学校	69	10月26日	田鶴・港小学校	45
4月22日	放課後倶楽部オーパ	15	5月25日	四箇郷北小学校	61	10月27日	南部小学校	40
4月27日	高野口小学校	26	5月26日	打田中学校仙溪分校	13	10月27日	西和佐小学校	455
4月27日	応其小学校	51	5月26日	貴志南小学校	69	11月1日	上南部小学校	41
4月28日	根来小学校	92	5月26日	楠見東小学校	67	11月2日	泉南市立砂川小学校	99
4月28日	和佐小学校	56	5月30日	鳴滝小学校	8	11月7日	日方小学校	65
4月28日	清水小学校（橋本）	20	5月30日	川永小学校	65	11月9日	印南小学校	20
5月2日	岩出小学校	62	5月31日	伏虎義務教育学校	97	11月10日	西和佐幼稚園	16
5月2日	山崎北小学校	113	6月1日	山野・和佐・江川小学校	30	11月11日	サポートセンターロード	29
5月2日	橋本小学校（橋本）	39	6月1日	貴志小学校	58	11月16日	さくら支援学校	11
5月2日	湊小学校	21	6月6日	浜宮小学校	67	11月16日	紀伊小学校	77
5月2日	隅田小学校	98	6月8日	直川小学校	57	11月17日	岡崎小学校	104
5月9日	あやの台小学校	62	6月8日	川辺西小学校	46	11月21日	大新小学校	26
5月9日	藤戸台小学校	162	6月9日	三百瀬小学校	12	11月22日	宮原小学校	49
5月10日	野崎西小学校	58	6月9日	堺市立市小学校	53	11月23日	きりんせんなん	18
5月11日	上岩出小学校	64	6月13日	安原小学校	95	11月24日	箕島小学校	37
5月11日	恋野小学校	12	6月13日	湯川小学校	48	11月24日	内海小学校	43
5月11日	西部小学校（橋本）	37	6月18日	松江小物作りサークル	18	11月24日	中津小学校	21
5月12日	智辯学園和歌山小学校	143	6月20日	西脇小学校	75	11月28日	巽小学校	68
5月12日	芦原小学校	10	6月23日	堺市立五箇荘東小学校	101	11月30日	川原河小学校	21
5月12日	田中小学校	82	6月30日	由良小学校	41	12月14日	アンキッズアカデミー	30
5月12日	山東小学校	36	6月30日	高松小学校	87	12月20日	和田小学校	32
5月12日	三石小学校	50	7月1日	文成中学校美術部	10	1月18日	桃郷つぼみ園	19
5月16日	有功小学校	61	7月22日	紀の国森社中（橋本）	35	2月8日	きのかわ支援学校	26
5月16日	野崎小学校	31	8月3日	ほうかごキッズ（岩出）	6	2月8日	ひまわり園	17
5月16日	四箇郷小学校	75	9月12日	わかやまシュタイナー学園	5	2月9日	西和佐保育所	18
5月16日	広瀬小学校	27	9月29日	稲原小学校	31	2月12日	WBC	14
5月19日	新南小学校	50	10月6日	河南中学校	27	2月16日	龍神小学校	4
5月19日	名草小学校	65	10月12日	西和佐幼稚園	40	2月20日	西和佐小学校	65
5月20日	田母親子供クラブ	21	10月13日	木本小学校	101	2月22日	藤並小学校	133
5月23日	砂山小学校	42	10月18日	巽小学校	61	3月1日	上秋津小学校	35
			10月19日	たちばな幼稚園	96	3月7日	三栖小学校	51

を聞きながら、石や粘土から勾玉やハニワを作る体験をする。

【『昔のくらし体験学習』のプログラム】

- ・昔のしごと体験：センバコキで米の脱穀、背負子や天秤棒で物を運ぶ、石臼できな粉を挽くなどを体験する。

- ・民家見学・体験：園内に移築された民家で、昔の生活の場の見学及びカラウス搦きの体験をする。

また、遠足・社会見学では古代生活体験・古墳めぐりなどフィールド活動やモノ作りに重点を置き、後日に移動博物館（出前授業）として、学校周辺の遺跡等を単位とした講義を実施する場合もある。

岩橋千塚古墳群を広く周知したい当館としては、体験学習と講義を合わせた系統的な学習となり、効果的なプログラムとして位置づけている。
令和5年度の来館校の活動プログラムの利用状況は、一覧表のとおりである。

	考古・歴史学習			民俗・民家学習
	古代生活			昔のくらし体験
	古代生活体験	モノ作り体験		（民具・民家ワークショップ、昔のしごと、あそび体験）
	火おこし	勾玉	埴輪	
4月	4		4	
5月	17	13	10	
6月	9	13	3	
7月				
8月				
9月				
10月	4	6	1	
11月	5	4	5	2
12月	1	1		
1月			1	
2月	1		3	2
3月			2	1
計	41	37	29	5

主な活動プログラムの利用状況一覧

○移動博物館（出前授業）

遠方の学校や交通機関を利用しての来館が困難な学校、遠足で古墳めぐりを実施後に講義を希望する学校、カリキュラムにおいて時間数確保のため来館して学習することが困難な学校や団体等を対象として、「移動博物館（出前授業）」を実施している。

職員が直接出向き、モノ作りや昔のくらし体験活動を行う他、「和歌山の歴史」「学校周辺の歴史」など「ふるさと学習」に係る講義や本物の土器や装身具に触る体験など、学校のニーズに応じて学習支援を行っている。また、小学校のPTA・育友会・子どもセンター学童保育等の活動や公民館・資料館等の生涯学習活動においてもモノ作り体験等を実施している。

実施にあたり、県内公立学校の教育課程に位置づけた学習については、県教育委員会総務課の「エキスパート職員派遣事業」を活用している。依頼の時期や地域によっては直接相談に応じている。

移動博物館（出前授業）の利用状況

湯浅町立湯浅小学校	期日	令和5年6月7日（水）	対象	小学生8名
	内容	勾玉づくり体験		
和歌山市立藤戸台小学校	期日	令和5年6月15日（木）	対象	小学生155名
	内容	埴輪づくり体験（エキスパート職員派遣事業）		
橋本市立橋本小学校	期日	令和5年7月4日（火）	対象	小学生36名
	内容	埴輪づくり体験		
岩出市立岩出小学校	期日	令和5年7月5日（水）	対象	小学生57名
	内容	埴輪づくり体験		
橋本市立清水小学校	期日	令和5年7月7日（金）	対象	小学生17名
	内容	埴輪づくり体験		
県立 たちばな支援学校	期日	令和5年7月12日（水）	対象	高等部21名
	内容	火おこし体験		
和歌山市立名草小学校	期日	令和5年7月13日（木）	対象	小学生61名
	内容	勾玉づくり体験等		
紀の川市立西貴志小学校	期日	令和5年7月14日（金）	対象	小学生63名
	内容	埴輪づくり体験		
海南市立加茂川小学校	期日	令和5年7月21日（金）	対象	小学生19名
	内容	埴輪づくり体験		

海南市立日方小学校	期日	令和5年10月13日（金）	対象	小学生26名
	内容	埴輪づくり体験（エキスポート職員派遣事業）		
広川町観光・地域交流センター いなむらの杜	期日	令和5年10月21日（土）	対象	小学生22名、幼児2名
	内容	勾玉づくり体験		
海南市立日方小学校	期日	令和5年12月8日（金）	対象	小学生19名
	内容	勾玉づくり体験（エキスポート職員派遣事業）		
和歌山市立広瀬小学校	期日	令和5年12月15日（金）	対象	小学生47名
	内容	埴輪づくり体験、火おこし体験（エキスポート職員派遣事業活用）		
印南町立切目小学校	期日	令和6年1月23日（水）	対象	小学生14名
	内容	昔の暮らし体験（エキスポート職員派遣事業）		
紀の川市立池田小学校	期日	令和6年1月31日（水）	対象	小学生64名
	内容	昔の暮らし体験（エキスポート職員派遣事業）		
紀の川市立安楽川小学校	期日	令和6年2月6日（火）	対象	小学生21名
	内容	埴輪づくり体験（エキスポート職員派遣事業）		
紀の川市立こばと保育所 保護者会	期日	令和6年2月7日（水）	対象	小学生48名
	内容	埴輪づくり体験		
（福） 浩和会	期日	令和6年2月10日（土）	対象	一般9名、小学生6名、幼児3名
	内容	埴輪づくり体験		
印南町立清流小学校	期日	令和6年2月14日（水）	対象	小学生16名
	内容	昔の暮らし体験（エキスポート職員派遣事業）		

合計：734名

○オンラインツアー「紀伊風土記の丘」

来園が容易でない県内西牟婁・東牟婁地域の小学生（高学年）を対象に、オンラインにより資料館の展示や園内に所在する岩橋千塚古墳群の解説を実施。オンラインツアーは、資料館の教育ネットワーク接続パソコンからオンライン会議アプリ（Webex）を通じて、学芸室と小学校を中継し配信した。

- ・串本町立古座小学校 6年生11名

令和6年2月9日（水）：風土記の丘・古墳群の概要説明、常設展示、企画展示、収蔵庫の解説

○他組織イベントへの参加

- ・サマー遊 ing（和歌山県立図書館文化情報センター）

令和5年7月25日（火）：勾玉づくり体験

- ・夏休み宿題応援ワークショップ大集合（森と水の源流館：奈良県川上村）

令和5年7月17日（月・祝）：まが玉づくり体験

- ・むきばんだフェスタ（鳥取県立むきばんだ史跡公園）

令和5年10月15日（日）：火おこし体験教室

4 広報活動

①資料提供（展示やイベント毎にチラシ等の資料を提供）

県教育記者クラブへの資料提供数 10件

新聞等記事等掲載数 20件

② 情報提供（定期刊行物に展示やイベント等の情報を提供）

- ・「県民の友」（毎月発行：和歌山県広報課）
- ・和歌山文化情報誌「ワカピー」（隔月発行：和歌山県 編集：一般財団法人和歌山県文化振興財団）
- ・「わかやま探検ミュージアム」（隔月発行：白光印刷株式会社）
- ・「輝く！紀の国の教育」（年2回：和歌山県教育広報紙：和歌山県教育庁教育総務局総務課）
- ・「教育ラジオ番組 はばたく紀の国」（和歌山県教育庁教育総務局総務課）

③情報提供（不定期）

- ・「読売新聞和歌山版」（読売新聞社）

- ・「毎日新聞和歌山版」(毎日新聞社)
- ・「紀伊民報」(紀伊民報)

④インターネット・データによる情報提供

- ・いこまい (<https://travel-ikomai.com>) 風土記紹介
- ・わかやま歴史物語 (<https://wakayama-rekishil00.jp>) 館情報の更新
- ・The KANSAI guide (<https://www.the-kansai-guide.com>) 館情報の更新

⑤テレビ・ラジオによる情報提供

- ・県広報課(テレビ和歌山)「きのくに 21」令和5年5月7日(春期企画展)
- ・読売テレビ「かんさい情報ネット ten. 若一調査隊」令和5年7月19日(岩橋千塚古墳群)
- ・県広報課(テレビ和歌山)「お届け! 県政最前線」令和5年8月29日(秋期特別展)
- ・県教育総務課(テレビ和歌山)「教育の窓」令和5年10月24日(秋期特別展)
- ・テレビ和歌山「6waka イブニング」令和5年10月13日(秋期特別展)
- ・NHK「ギュギュっと和歌山」令和5年10月17日(秋期特別展)
- ・NHK「おはよう関西」令和5年10月27日(秋期特別展)

⑥パンフレット・チラシ等による情報提供

- ・令和3年度イベントガイドの配布
- ・夏休みモノづくり体験等のチラシの配布
- ・各イベントのチラシの配布

⑦その他

- ・海南市、紀の川市、岩出市校長会説明(令和5年5月9日)
- ・田辺市校長会説明(令和5年8月21日)

5 ボランティア活動

紀伊風土記の丘ボランティア(平成23年4月設置)は、利用者に対して園内の古墳・民家・万葉植物園等の解説や、資料館の展示解説、学校遠足や体験教室における補助・助言・指導等の活動を行っている。令和5年度のボランティア登録者数は37名である。

令和5年度に実施したボランティア関連事業及びボランティア活動は、以下のとおりである。

(1) ボランティア養成講座

- ・日程: 令和5年5月13日(土)、5月27日(土)、
6月10日(土)、6月24日(土) 全4回毎
回 13:30 ~ 15:30 研究室及び園内で講習
- ・受講者数: 1名 (うち修了者1名)

(2) ボランティア研修会

- ・令和5年度夏期・冬期・春期企画展及び秋期特別展に係る展示ガイド研修(参加者計49名)
- ・ボランティア育成事業研修(参加者18名)

(3) ボランティア活動

①古墳・資料館等ガイド解説



写真1 ボランティアによる古墳ガイドの活動状況

令和5年度 事前申込みガイド実績（団体等）

活動日	活動内容	申込者	申込者所在地	参加人数	対応人数
5月23日	古墳ガイド	慶風高等学校	和歌山市	33	7
6月4日	資料館ガイド	中井町ローズクラブ	大阪府	45(中止)	0
6月10日	資料館・古墳ガイド	東大阪文化財を学ぶ会	大阪府	50	5
8月3日	資料館・民家ガイド	NPO 法人 堺観光ボランティア協会	大阪府	6	1
9月12日	古墳・資料館ガイド	(一社) わかやまシュタイナー学園	紀の川市	4	1
10月27日	古墳・資料館ガイド	南海国際旅行 古代史紀行	大阪府	12	5
11月4日	古墳・資料館ガイド	丹波の文化を伝承する会	京都府	29	5
11月7日	古墳・資料館ガイド	海南市立日方小学校	海南市	65	6
11月21日	古墳ガイド	和歌山市立大新小学校	和歌山市	26	4
11月25日	資料館ガイド	三重県建築士会伊賀支部	三重県	24	3
11月28日	古墳ガイド	海南市立巽小学校	海南市	68	3
12月1日	古墳・資料館ガイド	NPO 法人 堺観光ボランティア協会	大阪府	50	6
12月15日	古墳ガイド	国際交流サービス 紀の川流域史跡探訪	大阪府	28	6
12月16日	古墳・資料館ガイド	個人	京都府	2	1
2月12日	古墳・資料館ガイド	田辺ジオパーク研究会	田辺市	5	2
2月16日	古墳・資料館ガイド	橋本市人権啓発推進委員会	橋本市	30	5
3月26日	古墳・資料館ガイド	河合町郷土を学ぶ会	奈良県	25	3
合計		17 件		457 名	64 名

令和5年度 資料館待機ガイド実績（個人等）

活動日	活動内容	申込者	申込者所在地	参加人数	対応人数
4月2日	古墳・資料館ガイド	個人	大阪府	1	3
4月16日	古墳・資料館ガイド	個人	和歌山市他	5	2
4月23日	古墳・資料館ガイド	個人	兵庫県他	3	1
4月30日	資料館ガイド	個人	大阪府他	5	4
5月14日	資料館ガイド	個人	和歌山市	3	3
5月21日	資料館・竪穴住居ガイド	個人		15	3
5月28日	資料館ガイド	個人		4	3
5月30日	資料館ガイド	個人		8	3
6月4日	資料館ガイド	個人	大阪府	1	3
6月18日	資料館ガイド	個人	福井県	2	1
6月25日	資料館ガイド	個人	和歌山市	5	3
7月15日	資料館ガイド	個人	岡山県	5	1
7月16日	資料館ガイド	個人		5	1
7月23日	古墳・資料館ガイド	個人	兵庫・奈良県	6	3
8月6日	資料館ガイド	個人	大阪府	1	3
8月20日	資料館ガイド	個人	カナダ他	14	3
9月10日	資料館ガイド	個人		2	3
9月12日	資料館ガイド	個人		5	1
9月17日	資料館ガイド	個人		4	1
10月7日	古墳・資料館ガイド	個人	北海道	2	1
10月15日	資料館ガイド	個人		10	3
10月21日	資料館・民家ガイド	個人	大阪府	30	1
10月22日	古墳・資料館ガイド	個人	大阪府他	3	2
10月28日	古墳・資料館ガイド	個人		12	5
11月12日	資料館ガイド	個人		数名	3
11月19日	資料館ガイド	個人		3	1
11月26日	古墳ガイド	個人	大阪府	2	1
12月17日	資料館ガイド	個人	大阪府	2	3
12月24日	資料館ガイド	個人	愛知県	3	1
1月7日	資料館ガイド	個人		4	4
2月11日	資料館ガイド	個人		6	3
2月18日	古墳ガイド	個人	御坊市	3	1
2月25日	資料館ガイド	個人		1	3
3月3日	資料館ガイド	個人	京都府	1	1
3月10日	資料館ガイド	個人	大阪府他	6	2
3月31日	古墳・資料館ガイド	個人	千葉県他	4	2
合計		35 件		177 名	79 名

②学校遠足・体験教室における補助等

ゴールデンウィークモノづくり体験（5月）、夏休みモノづくり体験（7月～8月）、学校遠足（4～6月、10月）、ふどきっず（5月、7月、10月、11月、12月）、風土記まつりの体験補助・指導・助言を行った。

③その他

古墳ガイドツアー：前山A地区（令和5年4月23日）、郡長塚古墳・知事塚古墳・将軍塚古墳（令和5年12月19日）、古墳公開：大日山35号墳（令和6年3月3日）において、ボランティアが運営に参加した。この他、ボランティア有志による曜日別勉強会（水曜日・土曜日）、ガイド用教材作成を行った。

（４）ボランティア活動10年継続者の表彰

【令和5年度対象者（平成26年度：第4期ボランティア登録者）】該当者2名

6 管理運営・環境整備

（１）文化財の維持管理

特別史跡「岩橋千塚古墳群」周辺の整備及び重要文化財民家等の維持管理

①古墳群周辺の整備

- ・園内笹草等除去処分業務（2,090千円）

公園内の最高所にある将軍塚古墳群をはじめ、公開古墳の周辺や小古墳群が見学できる地域及び周辺などを入園者を安全かつ快適に利用できるように面積100,000㎡の笹草除去を業者委託により行う。（令和5年12月）

②重要文化財民家等維持管理

- ・民家防虫防除等（171千円）

重要文化財民家（旧柳川家、旧谷山家）、県指定文化財民家（旧小早川家、旧谷村家）、復元竪穴住居に薬剤処理を行った。（令和5年12月）

（２）資料館及び史跡公園内の管理・環境整備

来館者・来園者の安全、快適性・利便性を確保するため、職員による進入路、園路の補修、樹木剪定、草刈り・落ち葉清掃等史跡公園内の管理環境整備を行っている。また、業務委託により警備、清掃、防火設備管理等資料館及び公園内の維持管理並びに危険木伐採等の補修整備を行っている。

①史跡公園内の管理・環境整備

- ・幹線園路及び公開古墳の清掃、園内周辺の落ち葉清掃及び芝草刈り、樹木の剪定
- ・園内の倒木の撤去、排水路の浚渫
- ・移築民家4軒及び和船展示施設の管理、茅葺き民家と竪穴住居の燻蒸、防火用水の管理、石垣・竹垣の管理補修
- ・進入路、万葉植物園等の植物への水遣り及び万葉植物園の竹柵等設置
- ・毛虫発生時の殺虫剤散布、ハチの巣駆除

②資料館及び園内の施設・維持管理

- ・資料館及び園内の警備業務委託（4,785 千円）
- ・資料館清掃及び園内トイレ清掃の業務委託（2,640 千円）
- ・電気保安管理、浄化槽維持管理、防火設備管理及び貯水槽清掃の業務委託（497 千円）
- ・建築基準法 12 条に基づく定期点検業務（99 千円）
- ・フロン法点検（108 千円）

③資料館及び園内の主な修繕整備

- ・資料館進入路給水管漏水修繕（428 千円）（6 月） ・連絡道路復旧工事（3,905 千円）（8 月～9 月）
- ・駐車場用給水管修繕（378 千円）（9 月） ・揚水ポンプ制御盤修繕（374 千円）（10 月）
- ・竪穴住居屋根葺替保存修繕（8,635 千円）（12～3 月） ・給水管修繕（4,288 千円）（1 月～3 月）
- ・重要文化財旧柳川家住宅北側外壁補修保存修繕（996 千円）（3 月）

④園内工事

- ・連絡道路復旧工事（3,905 千円）（8 月～9 月）
- ・天王塚古墳復旧工事（10,249 千円）（9 月～11 月）

7 特別史跡岩橋千塚古墳群保存修理事業

（1）保存修理事業

①特別史跡岩橋千塚古墳群歴史生き生き！史跡等総合活用整備事業（国庫補助事業）

総事業費 53,361,155 円（国庫補助額 26,678,000 円）

・天王塚古墳整備工事

天王塚古墳の公開活用のため、古墳の整備工事を令和 4 年度から令和 10 年度まで実施する。令和 5 年度は墳丘周辺の伐採および伐木搬出のための仮設道の設置（約 120.4 m）、前方部北側の土留め工及び墳丘整備工事を先行して実施した。

・古墳保存修景工事

毀損の進む前山 B78 号墳の墳丘保護のため、墳丘上の支障木の伐採、盗掘坑等の埋め戻し、墳丘の養生等を行った。

・雨水対策整備工事

大日山 35 号墳の横穴式石室の滞水状況を改善するため、横穴式石室上部である後円部墳丘上に吸出し防止材、面状排水材の設置、張芝を実施した。また、石室内の温湿度を一定に保つ目的で石室扉を設置した。

・竪穴系埋葬施設整備工事実施設計

竪穴系埋葬施設である前山 A47・100・111 号墳整備について、周辺環境調査を実施し、その結果をもとに実施設計を行った。実施設計については、委託により実施した。

・特別史跡岩橋千塚古墳群説明板製作設置

第 3 期整備計画のサイン計画に従い、特別史跡岩橋千塚古墳群の全体案内板を 1 箇所設置した。

・天王塚古墳整備工事施工監理

・整備検討会議他

②特別史跡岩橋千塚古墳群歴史生き生き！史跡等総合活用整備事業（石垣調査）（国庫補助事業）

総事業費 2,750,515 円（国庫補助額 1,375,000 円）

・前山 A13 号墳・前山 A24 号墳・郡長塚古墳横穴式石室 3 次元計測委託業務

前山 A13 号墳横穴式石室（44 m²）、前山 A24 号墳（27 m²）、郡長塚古墳（前山 B112 古墳、52 m²）の SfM/MVS による 3 次元計測およびオルソ画像作成を実施した。

・大谷山 16 号墳横穴式石室 3 次元計測委託業務

大谷山 16 号墳横穴式石室 1 基（85 m²）の SfM/MVS による 3 次元計測およびオルソ画像作成を行った。

・報酬・共済費・費用弁償

③地域の特色ある埋蔵文化財活用事業（国庫補助事業）

事業費 4,937,799 円（国庫補助額 1,375,000 円）

・埋蔵文化財 3 次元計測等業務

重要文化財大日山 35 号墳出土品のうち埴輪 5 点、県指定銅鐸 2 点、大型土器 3 点について SfM/MVS で 3 次元デジタルデータを委託して取得した。また、その他、87 件についてはデジタルデータ取得用機器を賃借し、直営で 3 次元デジタルデータの取得や高精細写真の撮影を行った。

・データベースサイト等の機能追加業務

ポータルサイト（「和歌山ミュージアムコレクション」 <http://wakayama.museum/>）にコンテンツ（地図から見る、年表）の機能追加を委託で行った。機能追加業務は和歌山県立博物館施設 3 館で実施したが、和歌山県立紀伊風土記の丘負担分のみの委託料を計上した。

・収蔵資料データ移行業務

既存の埋蔵文化財に関する PDF 等データ 100 件を、和歌山県立紀伊風土記の丘収蔵品データベース（<https://jmapps.ne.jp/wakayamakiifudoki/index.html>）へと委託で移行・整備し、活用を促進した。データベースへ移行したデータは和歌山県立紀伊風土記の丘ホームページ（<https://www.kiifudoki.wakayama-c.ed.jp/koukoshiryou/index.html>）と接続し、公開を行った。

④重要文化財和歌山県大日山 35 号墳出土品美術工芸品保存修理事業（国庫補助事業）

事業費 4,072,582 円（国庫補助額 2,035,000 円）

重要文化財和歌山県大日山 35 号墳出土品（埴輪 25 点、須恵器 6 点、附（埴輪残欠 10 点、須恵器残欠 2 点）のうち、劣化が進む埴輪について、抜本的な修理を実施する。令和 5 年度は、胡籐形埴輪 1 点及び 3 分割焼成の家形埴輪 1 点の接合及び一部復元並びに保管台座・支技具の設計を実施した。

⑤特別史跡岩橋千塚古墳群整備検討会議

第 1 回整備検討会議 令和 5 年 6 月 13 日 於 紀伊風土記の丘（福永・小野・増渕委員）

第 2 回整備検討会議 令和 6 年 2 月 6 日 於 紀伊風土記の丘（福永・小野・禰亘田・増渕委員）

整備検討会議の構成（所属は当時）

氏 名	所 属 等	専 門 等
小野 健吉	大阪観光大学 特任教授	遺跡整備
禰亘田 佳男	大阪府立弥生博物館 館長	考古学
増渕 徹	京都橘大学 名誉教授	遺跡整備
福永 伸哉	大阪大学大学院 教授	考古学
和田 晴吾	兵庫県立考古博物館 館長	考古学
中村 浩道	当館 館長	考古学



写真1 天王塚古墳墳丘整備状況



写真2 墳丘外北側の盛土、のり面成形



写真3 大日山35号墳石室扉設置状況

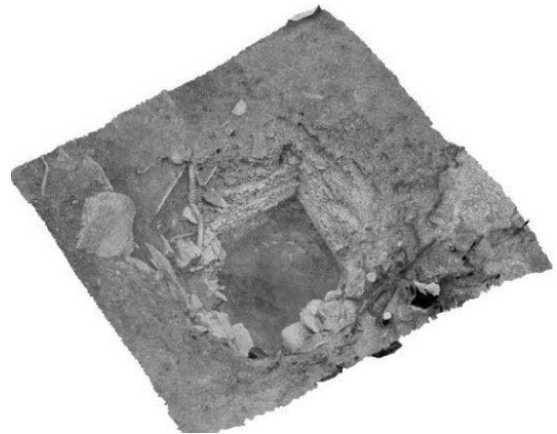


写真4 前山B78号墳3次元モデル



写真5 気象観測ステーション設置状況



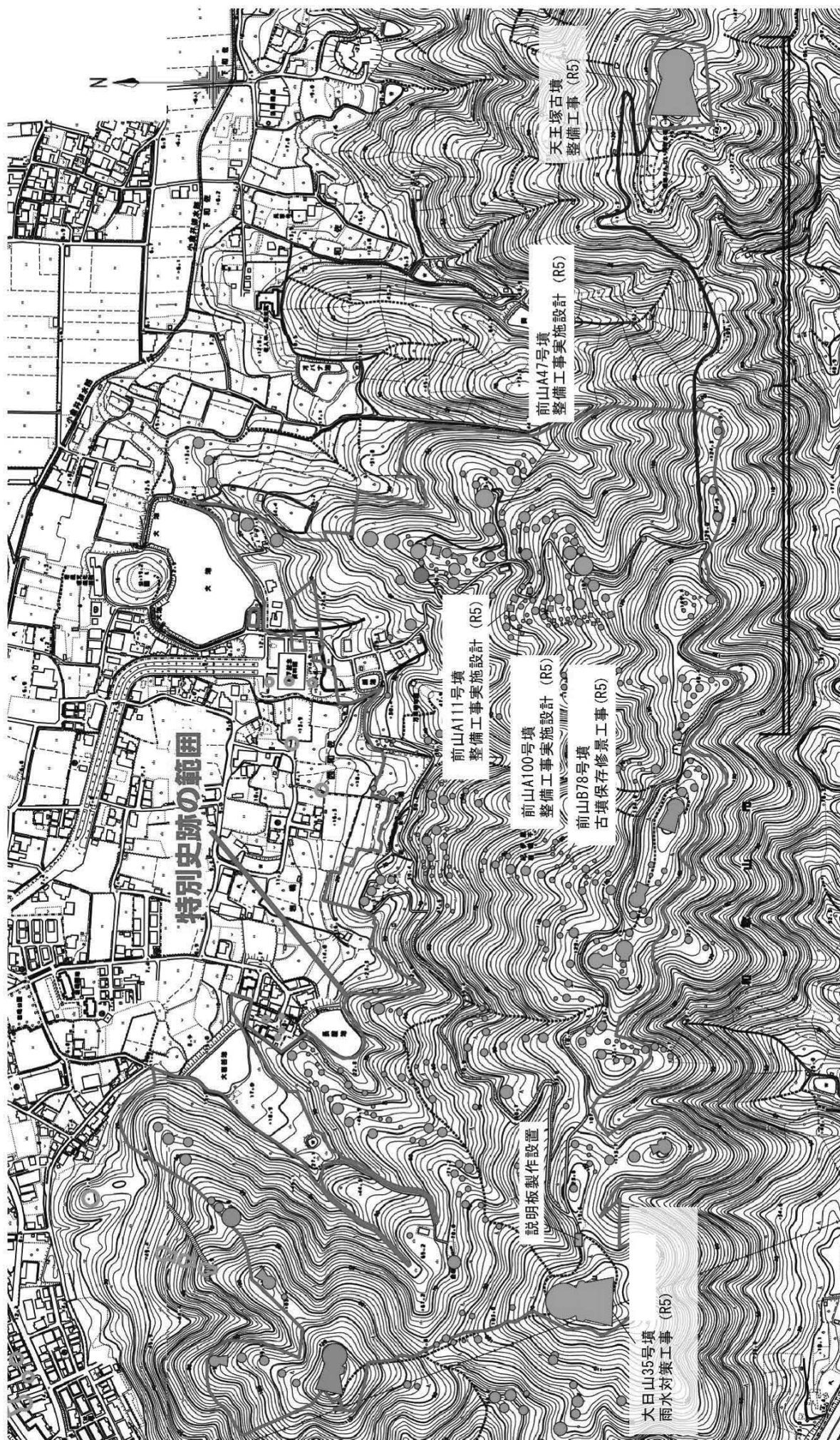
写真6 園内説明板設置状況



写真7 郡長塚古墳（前山B112号墳）オルソ画像



写真8 3分割焼成の家形埴輪（身舎）接合作業



令和5年度 特別史跡岩橋干塚古墳群保存修理事業位置図 S=1/7000

（２）調査報告

①古墳保存修景工事に係る石室実測調査報告（前山B 78号墳）

１）調査の目的

特別史跡岩橋千塚古墳群では、過去の盗掘による石積みの崩落及び経年劣化による土砂の流出によって毀損が進む古墳について、墳丘及び埋葬施設の保存のための整備として古墳保存修景工事を実施している。令和５年度は前山B 78号墳を対象とし、工事を実施した。

古墳保存修景工事は、埋葬施設の清掃の後、その内部を養生砂及び軽量盛土（工業用発泡スチロール・EPS）で埋戻しを行う。さらに、墳丘の凹凸を真砂土の盛土で修景し、地表面に植生マットを敷設することで保存と修景を両立させている。そこで、埋戻しに先立ち埋葬施設の清掃後の記録作成を目的として前山B 78号墳の実測調査を行った。

２）既往の調査と周辺環境

今回調査の対象とする前山B 78号墳は、『特別史跡岩橋千塚古墳群保存活用計画』（和歌山県教育委員会2019）掲載の古墳一覧ではT字形石室で、両袖式の横穴式石室とされる。

既往の調査では、昭和41年に関西大学による分布調査（関西大学1967）、昭和57年に大野嶺夫による石室平面図の実測調査が行われているが（大野1985・1986）、発掘調査は実施されていない。そのため、古墳および埋葬施設の構造、時期、副葬品の内容は不明である。

前山B 78号墳は前山B地区に所在し、岩橋山塊主稜線上に位置する知事塚古墳付近から北に派生する尾根筋上に立地する。同一の尾根筋上には前山B71・B73・B76号墳などの円墳が存在し、それぞれ直径14～20mの墳丘規模をもつ。また、近隣の前山B73・B74・B76号墳は、「T字形石室」である。

３）調査の方法

実測調査は、埋葬施設の内部の流入土除去及び支障木伐採、露出石材の清掃の後、記録作成を行った。記録作成の方法についてはこれまで手実測による図化と写真撮影を実施してきたが、令和４年度からフォトグラメトリ（SfM/MVS）により作成した３次元データからオルソ画像を生成し、このオルソ画像を用いた図化と写真撮影を行っている。これにより記録作成に係る作業時間の短縮を図った。

４）調査の成果

ア 墳丘

前山B 78号墳は、南北の直径約16.8m、東西の直径16.4m、高さ約1.2～2.0mの円墳である。尾根筋上の北斜面に位置する平坦面に対して、盛土を行うことで墳丘を築くため、北側の墳丘盛土が高い。墳丘上には樹木が繁茂し、墳丘頂部には天井石とみられる長さ0.9m、幅0.6mの石材が分布する。墳丘からの遺物の出土は認められなかった。

イ 埋葬施設

埋葬施設は両袖式の横穴式石室であり、西方向に開口する。石室は玄室幅に対して玄室長が短く、横長の玄室に羨道が取りつくいわゆる「T字形石室」である。天井石は欠失し、玄室奥壁及び両側壁、前壁が残存する。羨道は流入土により不明である。奥壁及び右側壁については石積みの残存状況は良好であるが、左側壁西側は抜き取りまたは崩落により上部は欠失する。

石室の規模は、現状の計測値で玄室幅は石室中心で1.62m、玄室長は石室主軸で約1.24mとなる。玄室の平面形は正方形に近い。玄門幅約0.49m、奥壁幅約1.80m、石積み残存範囲での玄室高は約1.45m測る。

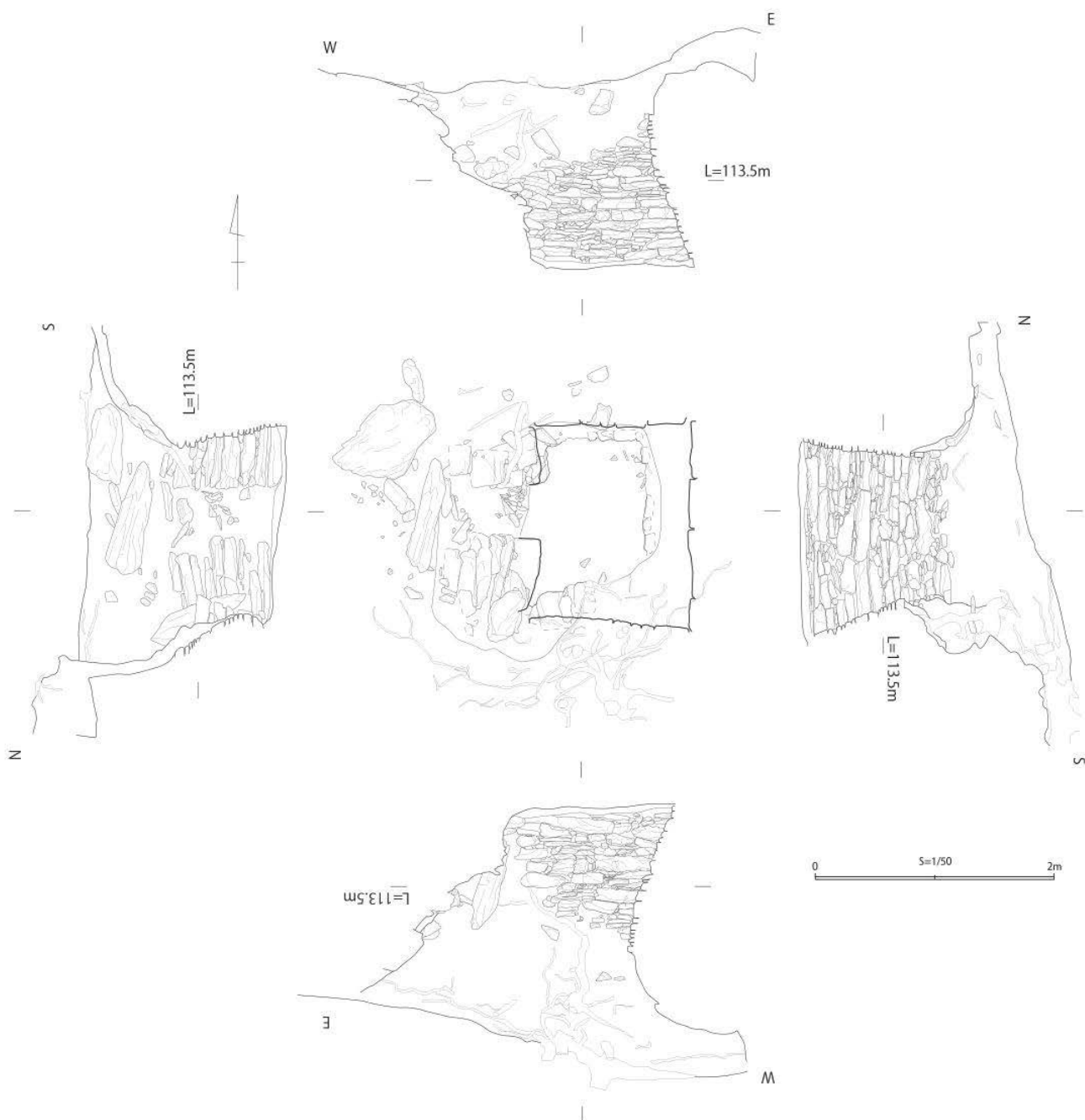


図1 前山 B78 号墳石室展開図 (S=1/50)

玄室奥壁および側壁の石積みは、石材の小口面を壁体に用いる小口積みと、小口長辺を横向きに用いる平積みを交互に行う。玄室前壁の石積みは平積みにより行う。石積みの順序については前壁と側壁の関係では前壁が先行し、奥壁と側壁の関係ではそれぞれ交互となる。一部側壁の石積みが崩落した範囲では墳丘盛土または地山が露出しており、石室石積みの奥行きは1石程度であり、石室掘形に対する石積みは最小限とみられる。

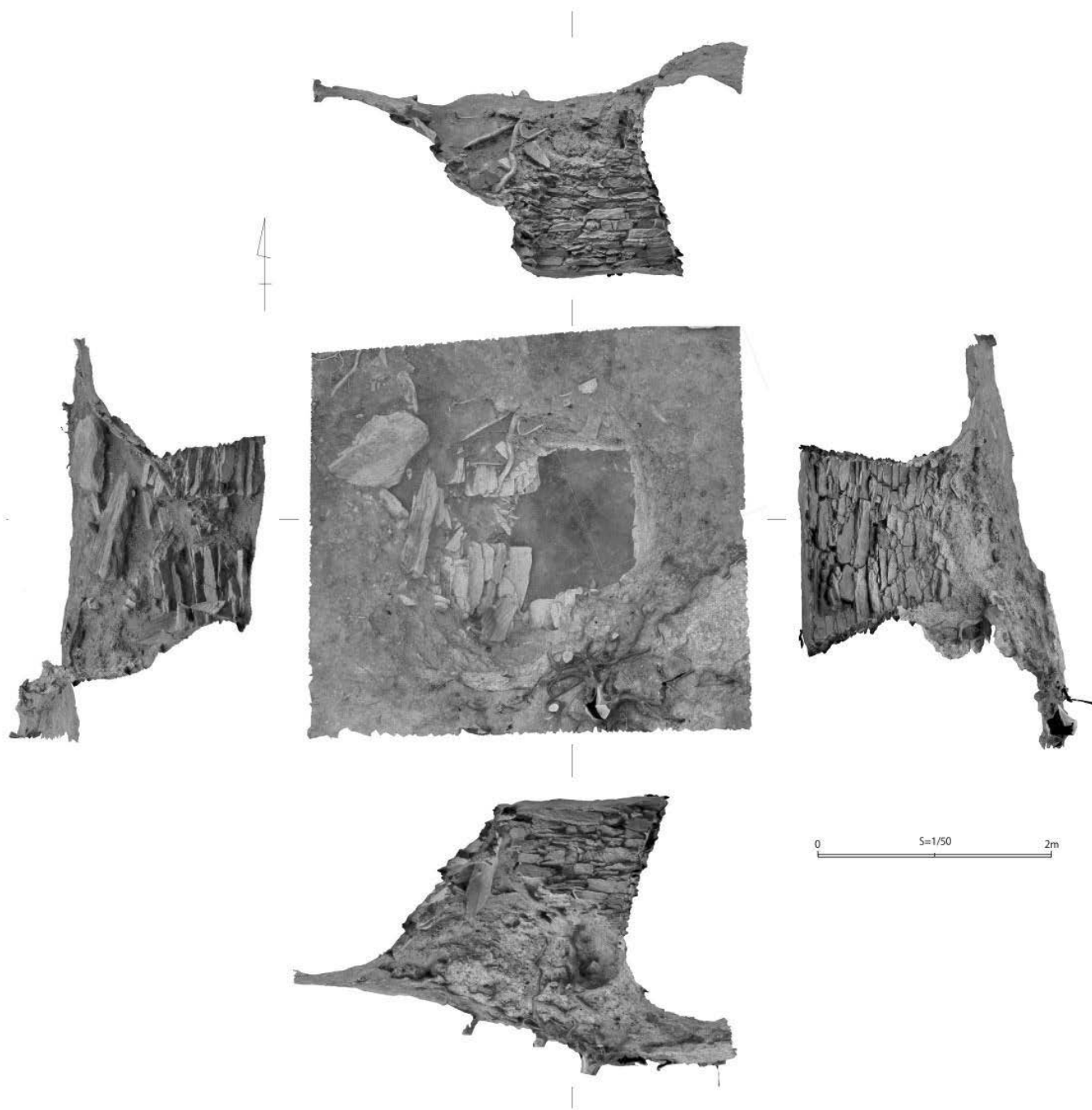


図2 前山 B78 号墳石室オルソ画像展開図 (S=1/50)

玄室床面の構造は現状では不明であるが、直径約 10 cm の川原石が複数点在する。このため、床面は川原石敷きであり、現状の床面の高さは本来の床面の高さに近いと考えられる。

埋葬施設清掃に際しての遺物の出土は、認められなかった。

表1 岩橋千塚古墳群におけるT字形石室一覧表

古墳No.	墳丘形態		埋葬施設	内寸 (長さ/幅)	埋葬施設特徴など	T字形石室	
	墳形	墳長				今回*1	大野 1985・1986
大日山14	円	8	横穴式	1.3/2.0	T字形か	▲	
大日山15	円	5	横穴式か	1.7/-	T字形か	▲	
大日山72	円	15	横穴式	1.65/1.8	T字形	●	
前山A2	円	10	横穴式	1.03/1.92	T字形、TK43-209	●	○
前山A6	円	5.5	竪穴式か	-/-	-	△	○
前山A99	円	12	横穴式	1.56/1.83	両袖式、北に開口、正方形か	●	○
前山B5	円	13.5	横穴式	1.4/1.8	T字形、天井石欠失、両袖式	●	○
前山B22	円	10.5	横穴式	1.7/-	奥壁と左側壁確認	△	○
前山B23	円	12.5	横穴式	1.6/1.9	T字形	●	○前山B25
前山B52	円	6.3	竪穴式か	2/0.6	-	△	○
前山B63	円	11	横穴式	-/1.9	正方形～T字形か	▲	
前山B73	円	13	横穴式	2.3/1.89	両袖式、T字形、北東に開口、石棚、石梁、扉石	●	○
前山B74	円	12	横穴式	1.3/6.5	両袖式、T字形	●	○
前山B76	円	10	横穴式	1.26/2	両袖式、T字形、北東に開口、石棚1、玄門に柱石	●	○
前山B78	円	16.8	横穴式	1.24/1.62	両袖式、T字形	●	○
前山B86	円	16.5	横穴式	-/-	両袖式、T字形	●	○
前山B89	円	17	横穴式	1.5/1.85	両袖式、T字形	●	○
前山B113	円	11.5	横穴式	0.75/1.6	両袖式、T字形、玄門板石閉塞	●	○前山B117
前山B116	円	7	-	-	-	△	○前山B122
前山B120	円	12×9	横穴式	-/2	両袖式、東に開口	△	○
前山B124	円	14.5	横穴式	1.9/2.1	両袖式、T字形	●	○
前山B133	円	10	横穴式	2/1.9	両袖式、T字形か	▲	
前山B135	円	11	横穴式	-/-	両袖式、T字形か	●	○
前山B134	円	14	横穴式	1.14/1.87	右片袖傾向、T字形、6世紀前半	●	○
前山B136	円	14.5	横穴式	-/2.1	両袖式	△	○
前山B142	円	16	-	-	-	△	○
前山B147	円	8.5×6.5	横穴式	1/6.5	右片袖式、T字形	●	
前山B150	円	14	横穴式	1.8/2.2	右片袖傾向、T字形、TK10、埴輪	●	○
前山B152	円	14	横穴式	0.9/1.6	両袖式、T字形、北西に開口、6世紀中葉	●	
前山B178	円	6.5	横穴式	1.7/2	正方形またはT字形	△	○
前山B196	円	9.5	横穴式	-/1.8	北西に開口	△	○
前山B199	円	11.5	横穴式	1.35/1.9	両袖式、T字形、南西に開口	●	○
前山B207	円	9.5	横穴式	1.1/1.8	小形のT字形、南西に開口、羨門に閉塞石	●	
前山B255	円	7.5	横穴式か	-	T字形か	▲	
前山B264	円	12	横穴式	1.4/-	両袖式、T字形	●	
前山B335	円	11.5	横穴式	1.2/1.8	両袖式、T字形、旧前山B65号墳	●	
前山B369	円	10	横穴式	1.2/2.1	両袖式、T字形	●	
寺内36	円	13	横穴式	1.2/1.9	石棚、教明寺1号墳、TK209	●	○寺内37
寺内18	前方後円	31	横穴式	0.91/1.65	後円部側、TK10	●	○
前山A86	円	14.5	横穴式	1.85/1.9	南南東に開口、正方形	×	○
前山B49	円	13	横穴式	1.8/1.95	玄室完存、床面玉石敷き、正方形	×	○
前山B90	円	19	横穴式	1.85/1.95	両袖式、玄室前道、玄門に閉塞石、正方形か	×	○
前山B93	円	7	竪穴式	1.7/0.5	-	×	○

*1 凡例 ○：大野1985・1986でT字形石室(または正方形)とされるもの
 △：大野1985・1986でT字形石室とされるが、現在は埋没等により不明なもの
 ●：現時点でT字形石室として認められるもの
 ▲：現時点でT字形石室の可能性のあるもの
 ×：大野1985・1986以降の知見でT字形石室と認められないもの
 : T字形石室の群在

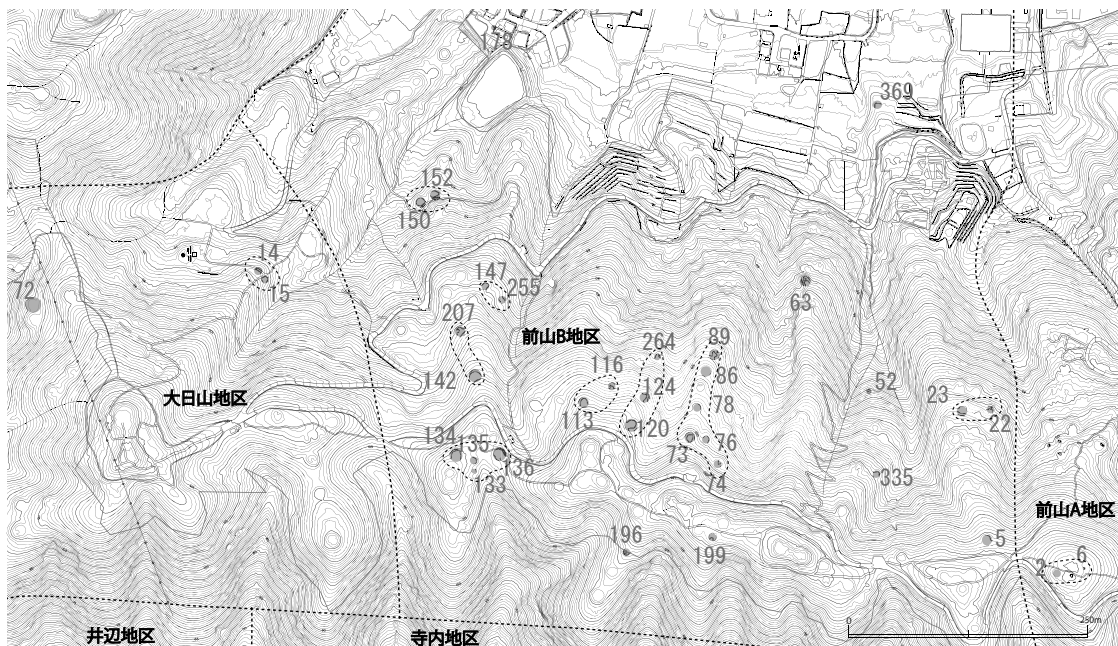


図3 岩橋千塚古墳群におけるT字形石室の分布(特別史跡地内とその周辺)

4) 調査のまとめ

ア 調査成果

現状記録の作成により、前山 B78 号墳は T 字形石室をもつ直径 16.4 ～ 16.8 m の円墳であることが判明した。

イ T 字形石室の検討

T 字形石室は大野嶺夫による集成研究がある。その後の調査成果から、現状での岩橋千塚古墳群における T 字形石室は詳細が不明のものも含めて約 39 基である（表 1）。なお、T 字形石室には明確な定義がないため、玄室長 / 玄室幅の平面指数が 0.9 以上のものを T 字形石室として暫定的に認定した。ただし、平面形が正方形のものとの構造または埋葬理念での区分は現状では不明瞭である。

T 字形石室の分布をみると、知事塚古墳から北に派生する尾根筋上には前山 B73・B74・B76・B78・B85・B89 号墳が、郡長塚古墳から北に派生する尾根筋上には前山 B113・B116・B120・B124・B263 号墳が、前山 B134 号墳周辺には B133・B134・B135 号墳が分布し、それぞれまとまりをもつことがわかる。この点は大野により既に指摘はあるが（大野 1985）、その他でも前山 B150・B152 号墳、前山 B22・B23 号墳など T 字形石室を持つ古墳が隣接しており、一定の集中が認められる。

また、T 字形石室の墳丘規模は、円墳で全長 5 ～ 17 m であり、前方後円墳の寺内 18 号墳で 31m を測り、墳形・規模において他の石室とは差が認められない。前山 B78 号墳直径 16.4 ～ 16.8 m の規模を示しており、T 字形石室と墳丘規模の相関関係は認められない。

これらの T 字形石室については、竪穴系埋葬施設や小型石室などとともに、岩橋千塚古墳群に特徴的に分布している埋葬施設であり、その多様性を示している。今後の古墳保存修景工事では注意しつつ、記録作業を実施したい。

【参考文献】

関西大学文学部考古学研究室 1967『岩橋千塚』

和歌山県立紀伊風土記の丘 2009『平成 19 年度 紀伊風土記の丘年報』第 35 号

8 和歌山県立紀伊風土記の丘再編事業（令和４・５年度）

（１）経緯

和歌山県は平成 29 年 4 月に和歌山県長期総合計画（2017 年度～ 2026 年度）を策定し、このうち「文化遺産の保存と活用」に係る主な施策の中で「県立紀伊風土記の丘資料館を考古博物館に再編し、特別史跡「岩橋千塚古墳群」出土遺物を中心とした県内の考古資料の保存と活用を図ります。」と記載した。また、平成 30 年 3 月に策定された和歌山県教育振興基本計画（2018 ～ 2022 年度）でも同様に、「文化遺産の保存の活用と推進」に係る施策の中で「特別史跡岩橋千塚古墳群の整備・活用及び紀伊風土記の丘の再編整備」について明記している。

これに基づき、上記の施策を実現するために現資料館の再編整備について検討することとなり、平成 30 年度に有識者の指導、助言を得ながら「和歌山県立考古民俗博物館（仮称）基本構想」を策定した。また、令和元年度には「和歌山県立考古民俗博物館（仮称）基本計画」策定のため、和歌山県立考古民俗博物館（仮称）基本計画有識者会議を開催して理念、事業活動、展示、施設、運営に係る計画内容を検討して同基本計画素案としてまとめた。その後、展示計画の修正を経て令和 3 年度に同基本計画を策定した（令和 4 年度に施設計画修正に伴い改訂を実施）。

以上に基づき、和歌山県立考古民俗博物館（仮称）の造成工事、展示・収蔵設備工事、博物館（新築・改修）・収蔵棟・体験学習棟建築工事に係る各基本設計業務を令和 4 年度に実施し、さらに各実施設計業務を令和 5 年度に実施することとなった。

（２）基本構想・基本計画策定の経過

平成 30 年度	和歌山県立考古民俗博物館（仮称）基本構想策定
令和元年度	和歌山県立考古民俗博物館（仮称）基本計画策定有識者会議開催（計 4 回）及び基本計画素案作成 「和歌山県立考古民俗博物館（仮称）基本計画策定支援業務」発注（7,260 千円） 受託者：株式会社乃村工藝社 インクルーシブデザインに係るワークショップ開催（令和元年 11 月 協力：和歌山県立和歌山盲学校 講師：塩瀬隆之（京都大学総合博物館）・小林大祐（一般財団法人たんぼぼの家）） ワークショップ「紀伊風土記の丘 夢計画」開催（令和 2 年 2 月 協力：和歌山市立西和佐小学校）
令和 2 年度	ワークショップ「紀伊風土記の丘 夢イベント計画」開催（令和 3 年 3 月 協力：和歌山市立西和佐小学校）
令和 3 年度	考古資料・民俗資料共通テーマ調査研究及び開館 50 周年記念特別展「海に挑み、海をひらく－きのくに七千年の文化交流史－」開催 特別展開催に伴う調査研究に基づく基本計画素案（展示計画）の修正 ワークショップ「みんなでつくろう！夢の博物館」開催（令和 4 年 3 月 対象：小学生・中学生） 和歌山県立考古民俗博物館（仮称）基本計画策定
令和 4 年度	基本計画（施設計画）修正に伴う一部改訂（令和 4 年 5 月）

（３）令和 4 年度 基本設計業務

ア 基本設計発注概要

a 測量業務

「和歌山県立考古民俗博物館（仮称）測量業務」（12,043 千円） 受託者：株式会社イーホッシュ

b 造成基本設計業務

「和歌山県立考古民俗博物館（仮称）設計業務」（11,136 千円）

受託者：株式会社センダイ工部コンサルタント

c 展示・収蔵設備工事基本設計業務

「和歌山県立考古民俗博物館（仮称）展示・収蔵設備基本設計業務」（31,900 千円）

受託者：株式会社丹青社

d 博物館（新築・改修）建築工事基本設計業務

「考古民俗博物館（仮称）新築他基本設計業務」（38,500 千円） 受託者：石本・堀田設計共同体

e 収蔵棟・体験学習棟建築工事基本設計業務

「考古民俗博物館（仮称）収蔵棟新築基本設計業務」（5,390 千円） 受託者：不二設計

イ 経過概要

令和4年6月～令和5年3月 各基本設計の検討及び連絡調整会議の開催

令和4年7月 ワークショップ「みんなでつくろう！夢の博物館」開催（対象：小学生・中学生）

令和4年12月 文化庁協議

令和4年12月・令和5年1月 ワークショップ「紀伊風土記の丘 夢博物館計画」開催（協力：和歌山市立西和佐小学校）

令和5年2月 ワークショップ「みんなでつくろう！新・博物館」開催（対象：小学生～一般）

令和5年2月 インクルーシブデザインに係るワークショップ開催（協力：社会福祉法人和歌山県身体障害者連盟）

令和5年3月 各基本設計業務完了

（４）令和５年度 実施設計業務

ア 実施設計発注概要

a 造成工事实施設計業務

「和歌山県立考古民俗博物館（仮称）設計業務」（26,357 千円） 受託者：和歌山航測株式会社

b 展示・収蔵設備工事实施設計業務

「和歌山県立考古民俗博物館（仮称）展示・収蔵設備実施設計業務」（52,441 千円）

受託者：株式会社丹青社

c 建築工事实施設計（博物館棟（新築・改修）・収蔵棟・体験学習棟）業務

「考古民俗博物館（仮称）新築他実施設計業務」（83,787 千円） 受託者：石本・堀田設計共同体

イ 経過概要

令和5年5月 各基本設計概要・抜粋を当館ホームページへ公開

令和5年5月・12月 文化庁協議

令和5年5・6月 地元自治会へ基本設計概要資料配布

令和5年5月 和歌山東ロータリークラブ（昭和46年植樹寄贈）へ基本設計概要を説明

令和5年5・6月 和歌山市立西和佐小学校（令和4年度ワークショップ参加）へ基本設計概要説明

令和5年6月～令和6年3月 各実施設計の検討及び建築・展示合同打合せの実施

令和5年8月 和歌山バス株式会社へ基本設計概要を説明

令和6年2・3月 各実施設計業務の完了

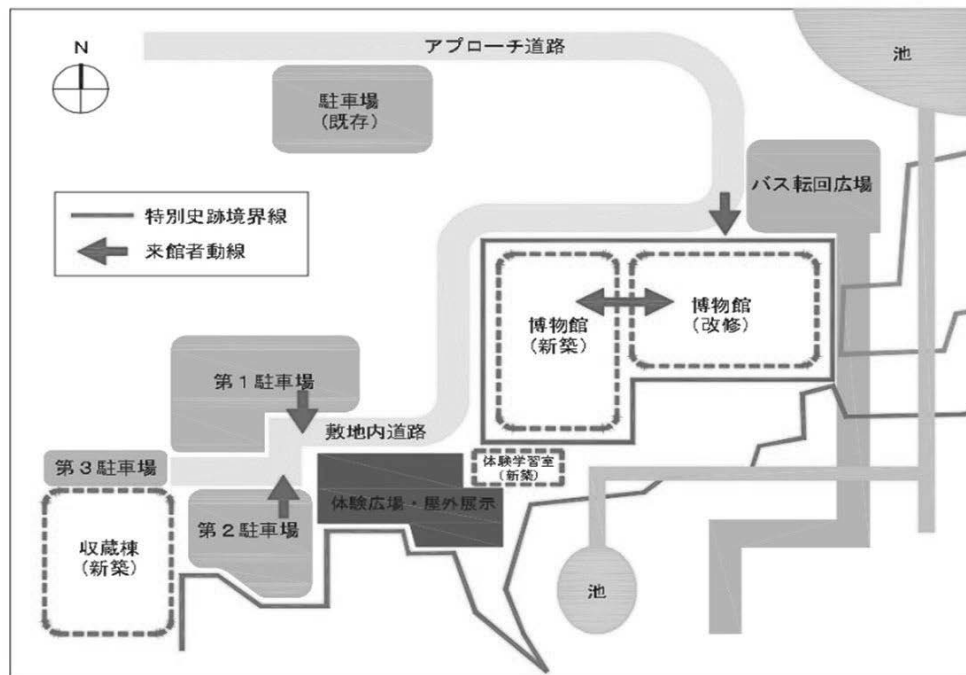


図1 敷地配置図

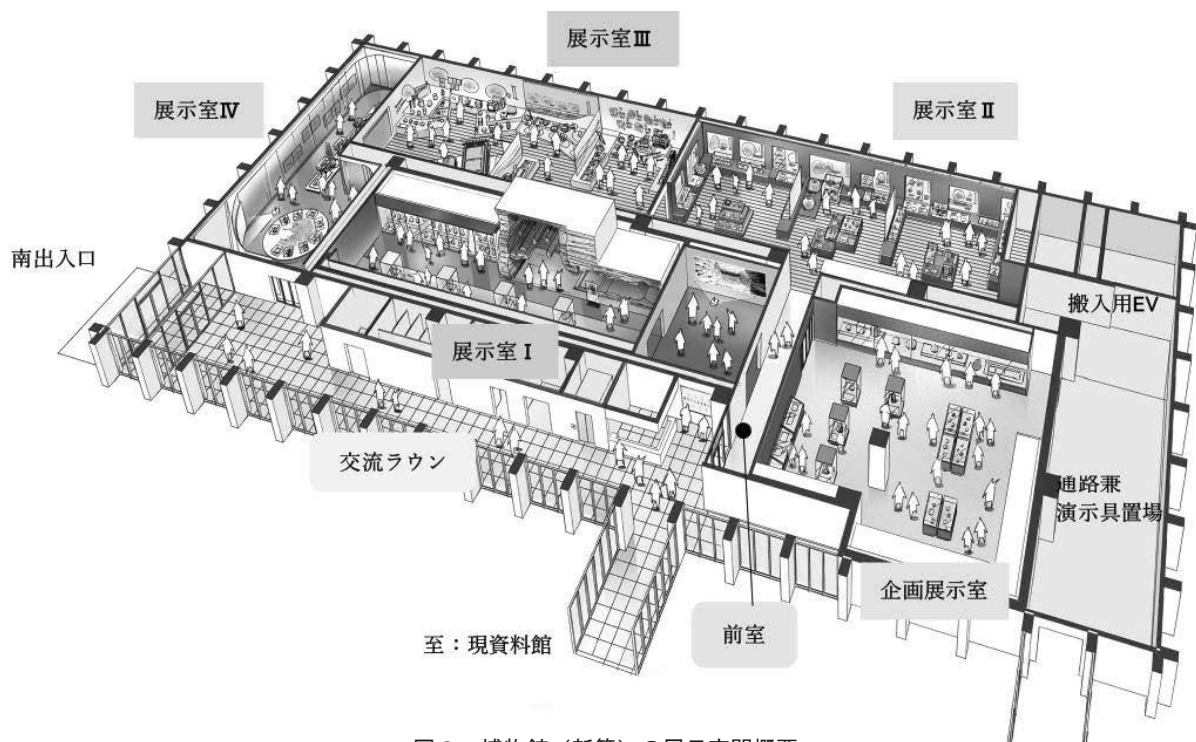


図2 博物館（新築）の展示空間概要

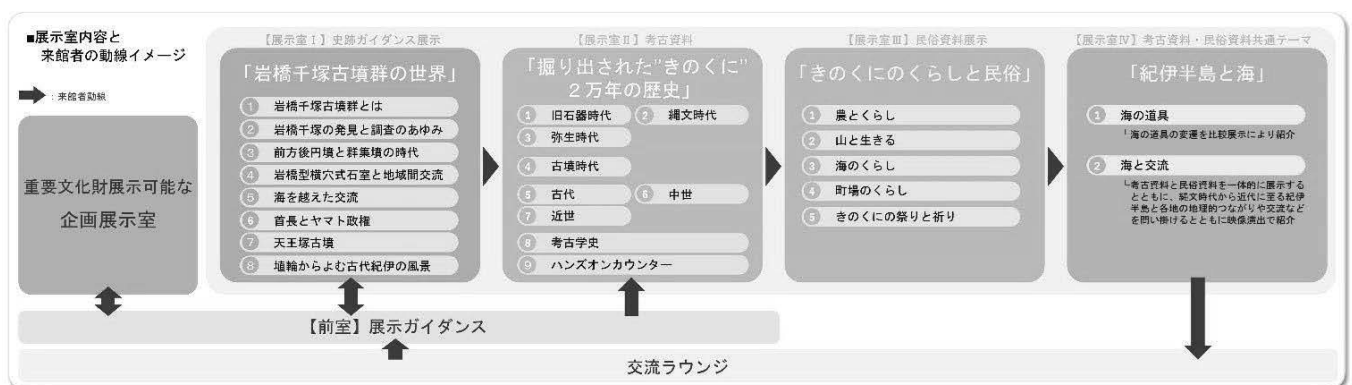


図3 展示構成概要と来館者動線



図4 博物館（新築・改修）外観イメージ【北から】
（模型）



図5 博物館（新築・改修）外観イメージ【南東から】

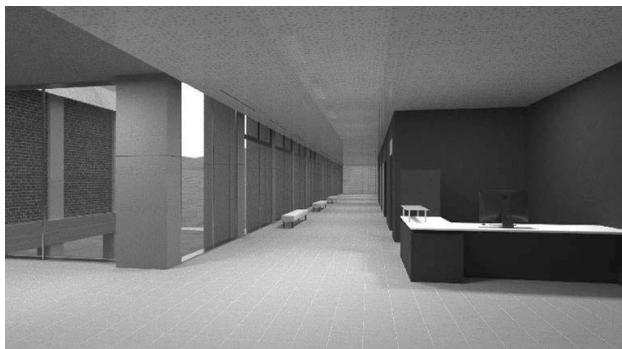


図6 博物館（新築）2階交流ラウンジ イメージ



図7 博物館（新築）1階エントランスホール イメージ



図8 体験学習棟イメージ【北西から】



図9 収蔵棟イメージ【東から】

Ⅲ 入館者の動向

年度別資料館入館者及び園内利用者数（令和５年３月３１日）

年度	(年目)	開館日数	資 料 館 入 館 者							園内利用者	
			有料			無料			合計		
			個人	団体	小計	個人	団体	小計			
46	1	199	48,684	23,825	72,509			0	72,509		
47	2	301	42,409	27,003	69,412			0	69,412		
48	3	305	26,924	26,038	52,962			0	52,962		
49	4	293	22,950	26,937	49,887			0	49,887		
50	5	295	19,878	30,365	50,243			0	50,243		
51	6	294	14,937	24,339	39,276			0	39,276		
52	7	295	12,334	29,302	41,636			0	41,636		
53	8	291	10,870	24,200	35,070			0	35,070		
54	9	303	9,667	25,231	34,898			0	34,898		
55	10	304	10,831	27,300	38,131			0	38,131		
56	11	294	10,262	22,140	32,402			0	32,402		
57	12	292	8,760	21,687	30,447			0	30,447		
58	13	295	8,021	21,065	29,086			0	29,086		
59	14	295	8,386	23,343	31,729			0	31,729		
60	15	263	7,428	23,782	31,210			0	31,210		
61	16	294	6,313	18,245	24,558			0	24,558		
62	17	295	5,993	15,998	21,991			0	21,991		
63	18	291	5,629	14,533	20,162			0	20,162		
1	19	295	6,244	16,559	22,803			0	22,803		
2	20	296	6,409	13,987	20,396			0	20,396		
3	21	293	6,216	14,209	20,425			0	20,425		
4	22	296	6,615	11,723	18,338			0	18,338		
5	23	290	5,883	11,153	17,036			0	17,036		
6	24	290	4,370	10,498	14,868	800		800	15,668		
7	25	288	3,966	8,809	12,775	3,621		3,621	16,396		
8	26	297	5,457	8,220	13,677	3,112		3,112	16,789		
9	27	305	5,670	8,169	13,839	3,773		3,773	17,612		
10	28	296	5,524	8,355	13,879	4,256		4,256	18,135		
11	29	296	4,520	7,606	12,126	3,988		3,988	16,114		
12	30	281	3,817	8,121	11,938	3,454		3,454	15,392		
13	31	306	4,963	8,733	13,696	4,182		4,182	17,878		
14	32	305	4,530	8,266	12,796	3,606		3,606	16,402		
15	33	307	4,741	8,448	13,189	3,991		3,991	17,180		
16	34	300	3,555	364	3,919	6,452	13,243	19,695	23,614	3,173	(民家利用者数)
17	35	122	2,052	156	2,208	5,649	11,621	17,270	19,478	15,006	(民家利用者数)
18	36	290	3,688	60	3,748	6,625	11,321	17,946	21,694	12,125	(民家利用者数)
19	37	309	3,017	535	3,552	6,212	10,795	17,007	20,559	11,292	(民家利用者数)
20	38	308	3,756	380	4,136	5,986	11,388	17,374	21,510	208,074 3,260	(園内利用者数) (民家利用者数)
21	39	307	3,128	297	3,425	5,426	10,289	15,715	19,140	210,235 2,730	(園内利用者数) (民家利用者数)
22	40	308	4,667	236	4,903	7,173	9,142	16,315	21,218	206,579 3,058	(園内利用者数) (民家利用者数)
23	41	301	3,326	346	3,672	4,683	11,182	15,865	19,537	210,368 2,395	(園内利用者数) (民家利用者数)
24	42	301	3,580	392	3,972	5,280	9,613	14,893	18,865	209,743 2,519	(園内利用者数) (民家利用者数)
25	43	300	3,580	302	3,882	5,152	10,402	15,554	19,436	208,844	(園内利用者数)
26	44	300	3,758	184	3,942	5,356	8,774	14,130	18,072	195,303	(園内利用者数)
27	45	300	3,140	87	3,227	4,930	8,255	13,185	16,412	198,511	(園内利用者数)
28	46	300	3,791	180	3,971	5,929	8,113	14,042	18,013	186,367	(園内利用者数)
29	47	300	4,026	143	4,169	6,492	8,715	15,207	19,376	191,821	(園内利用者数)
30	48	302	3,073	93	3,166	5,363	7,544	12,907	16,073	187,899	(園内利用者数)
元	49	302	3,515	49	3,564	7,082	7,245	14,327	17,891	197,181	(園内利用者数)
2	50	297	1,963	29	1,992	2,797	3,119	5,916	7,908	194,419	(園内利用者数)
3	51	300	2,742	61	2,803	4,045	4,432	8,477	11,280	195,188	(園内利用者数)
4	52	298	2,816	38	2,854	3,985	5,399	9,384	12,238	197,696	(園内利用者数)
5	53	298	3,198	78	3,276	3,925	5,288	9,213	12,489	176,024	(園内利用者数)
合計		15,483	425,572	582,199	1,007,771	143,325	175,880	319,205	1,326,976		

* 無料入館者 平成 6 年 11 月 3 日から、65 歳以上及び障害者等を無料とする。平成 16 年 4 月 1 日から、高校生以下を無料とする。平成 16 年度から高校生以下の団体の人数は「無料」の人数に含む。

* 園内利用者 平成 16 年 10 月 20 日から民家（文化財民家 4 棟および復元竪穴住居）の利用者を集計（19 年度で終了）。平成 20 年 4 月 1 日から自動利用カウンターにより、紀伊風土記の丘全体の園内利用者の集計を開始。
平成 20 年度以降の民家利用者数は、行ったイベント参加者を集計した。

IV 紀伊風土記の丘協議会

和歌山県博物館協議会条例に基づき、紀伊風土記の丘の博物館運営に関し、館長の諮問に応じ、館長に意見を述べる機関として設置している。令和5年度は2回開催した。

①開催状況

- ・令和5年度 第1回紀伊風土記の丘評議会 会場：紀伊風土記の丘研修室
期 日：令和5年6月13日（火）
議 題：（1）令和4年度事業実施報告について （2）令和5年度予算及び事業内容について
（3）令和6年度以降の特別展・企画展案について
- ・令和5年度 第2回紀伊風土記の丘評議会 会場：紀伊風土記の丘研修室
期 日：令和5年12月14日（木）
議 題：（1）令和5年度事業進捗について （2）令和5年度の事業計画（案）について
（3）特別史跡岩橋千塚古墳群整備事業について （4）紀伊風土記の丘再編事業について
（5）受贈・受託基準及び資料収集方針等の策定について

②紀伊風土記の丘協議会

紀伊風土記の丘協議会 名簿

氏 名	所属・役職等
和田 晴吾	兵庫県立考古博物館 館長
高瀬 要一	元紀伊風土記の丘 館長
酒井 千佳	前和歌山市立広瀬小学校 校長
千森 督子	和歌山信愛大学 教授
鳥居 賀柄子	元和歌山市子ども総合支援センター職員
平野 真理	一般社団法人ガールスカウト和歌山県連盟 監事
福田 光男	元和歌山市立雄湊小学校 校長
増渕 徹	京都橘大学 名誉教授
松木 武彦	国立歴史民俗博物館 教授
森 隆男	元関西大学 教授
山神 達也	和歌山大学 准教授
山田 みゆき	(株) テレビ和歌山 報道制作本部 制作部長待遇 アナウンサー

V 調査・研究

(1) 考古資料等の収集・調査に関すること

①資料の寄贈

＊和歌山市吉礼砂羅谷窯跡出土資料 2894 点 大阪大谷大学博物館より寄贈

②調査研究活動

＊藤井幸司

○執筆等

- ・「表紙解説」「岩橋千塚古墳群での三次元データの活用」『月刊文化財』2023 年 8 月号（7 月 25 日）
- ・「特別史跡 岩橋千塚古墳群」『教育旅行』1 月新年号（公財）日本修学旅行協会（1 月 1 日）

○発表等

- ・春期企画展展示講座 於：紀伊風土記の丘（4 月 16 日）
- ・シンポジウム特別史跡の古墳群を語る関連イベント「シンポジウム概要説明」「埴輪生産からみた王権と紀伊」於：紀伊風土記の丘（1 月 27 日）

＊萩野谷正宏

○執筆等

- ・「縄文・弥生時代の交流と紀伊半島」『季刊わかやまの子供と教育』第 90 号 国民教育研究所（12 月 1 日）
- ・「雑賀崎の漁業史（2）——一本釣り漁師の漁業歴と漁具——」『紀伊風土記の丘研究紀要』第 12 号 池田佳祐と共著（3 月 31 日）
- ・シンポジウム「紀伊半島をめぐる海の道と文化交流」討論記録『紀伊風土記の丘研究紀要』第 12 号 川島秀一・中園成生・穂積裕昌・寺前直人・櫻井敬人・蘇理剛志と共著（3 月 31 日）

○発表等

- ・連続講座岩橋千塚（第 22 回）「岩橋型石室からみた岩橋千塚古墳群の展開」於：紀伊風土記の丘（9 月 10 日）
- ・冬期企画展展示講座 於：紀伊風土記の丘（2 月 11 日）

＊田中元浩

○執筆等

- ・「歴史遺産が地方を拓くためには 書評 藤田達生編『歴史遺産が地方を拓く』①紀伊半島の文化財・②紀伊半島の創生」『紀伊考古学研究』第 26 号 紀伊考古学研究会 小林高太・佐藤純一と共著（8 月 31 日）
- ・「海浜集落から王権と地域社会を考える」『海浜集落からみた王権と地域 紀伊考古学研究会第 26 回大会発表要旨集』紀伊考古学研究会（11 月 3 日）
- ・「庄内式土器研究の現在」『庄内式土器 - 豊中で発見された古墳時代の土器 - 豊中市郷土資料館一周年記念講演会資料』豊中市教育委員会・豊中市郷土資料館（11 月 12 日）
- ・「庄内形甕の出現とその意義」『古墳出現期土器研究』第 10 号 古墳出現期土器研究会（12 月 25 日刊行）
- ・「特別史跡岩橋千塚古墳群におけるデジタル技術の活用について——課題先進県和歌山の挑戦——」『令和 5 年度埋蔵文化財担当職員講習会 資料集』文化庁（1 月 31 日）
- ・「紀伊の製塩土器」『古代学と遺跡学—坂靖さん追悼論文集—』坂靖さん追悼論文集刊行会（2 月 8 日）
- ・「(2) 調査報告」『令和 4 年度 紀伊風土記の丘年報』第 50 号（3 月 31 日）
- ・「御坊市阪東丘 2 号墳の研究—紀伊風土記の丘館所蔵資料と巽三郎収集資料から—」『紀伊風土記の丘研究紀要』第 12 号 佐藤純一・濱崎範子・横白彩江と共著（3 月 31 日）
- ・「第 5 章 前山 B 地区の調査成果」『岩橋千塚古墳群—特別史跡岩橋千塚古墳群第 4 次追加指定事業に伴う発掘調査報告書—』和歌山県教育委員会（3 月 31 日）

○発表等

- ・大阪府立狭山池博物館 令和 5 年春季企画展「土木遺産展—水をはこぶ—」第 2 回講演会「宮井用水 古墳時代から続く紀氏の遺産」：大阪府立狭山池博物館（4 月 23 日）

- ・古代学研究会 5 月例会ミニシンポジウム「近畿弥生社会の体系的把握に向けて」於：パル法円坂（6 月 20 日）
- ・連続講座岩橋千塚第 21 回「新発見の横穴式石室墳―前山 B 132 号墳の発掘調査―」於：紀伊風土記の丘（7 月 2 日）
- ・夏期企画展展示講座 於：紀伊風土記の丘（7 月 16 日）
- ・紀伊考古学研究会第 26 回大会「海浜集落から王権と地域社会を考える」「海浜集落の研究視点」於：和歌山県立図書館（11 月 3 日）
- ・庄内式土器 - 豊中で発見された古墳時代の土器 - 豊中市郷土資料館一周年記念講演会「庄内式土器研究の現在」豊中市郷土資料館（11 月 12 日）
- ・令和 5 年度埋蔵文化財担当職員講習会「特別史跡岩橋千塚古墳群におけるデジタル技術の活用について―「課題先進県」和歌山の挑戦―」於：和歌山城ホール（2 月 1 日）
- ・大阪府立弥生文化博物館令和 5 年度冬季特別展「紀元一世紀の社会変革―弥生後期のはじまりをさぐる―」関連講演会第 2 回「近畿地方南部における弥生時代後期への移行過程」於：大阪府立弥生文化博物館（2 月 10 日）

＊金澤 舞

○執筆等

- ・「ウマと人の営み」『季刊わかやまの子供と教育』第 88 号 国民教育研究所（6 月 1 日）
- ・「文化財 3D モデル公開に関する検討会議」『デジタル技術による文化財情報の記録と利活用 6』奈良文化財研究所（3 月 28 日）
- ・「宮田啓二『昭和二七年秋冬 岩橋千塚古墳群 調』―大日山地区編②―」『紀伊風土記の丘研究紀要』第 12 号 石丸彩・上村緑・瀬谷今日子・富永里菜・中西瑠花・仲原知之・馬場彩香と共著（3 月 31 日）

＊上村 緑

○執筆等

- ・和歌山県立紀伊風土記の丘令和 6 年度秋期特別展『律令国家成立前夜』図録（9 月 30 日）
- ・「紀伊の古代氏族とその遺跡」『秋期特別展 律令国家成立前夜シンポジウム予稿集』（11 月 5 日）
- ・「和歌山県の動向」『日本考古学年報』75 号 日本考古学協会（12 月 14 日）
- ・「きのくには木国（きのくに）？」『季刊わかやまの子供と教育』国民教育研究所（3 月 1 日）
- ・「文化財 3D モデル公開に関する検討会議」『デジタル技術による文化財情報の記録と利活用 6』奈良文化財研究所（3 月 28 日）
- ・「宮田啓二『昭和二七年秋冬 岩橋千塚古墳群 調』―大日山地区編②―」『紀伊風土記の丘研究紀要』第 12 号 石丸彩・金澤舞・瀬谷今日子・富永里菜・中西瑠花・仲原知之・馬場彩香と共著（3 月 31 日）

（2）民俗資料等の収集・調査に関すること

①資料の寄贈

- ・カヤ油搾油用具 7 件（紀美野町） 和歌山市立科学館より寄贈

②調査研究活動

＊蘇理剛志

○執筆等

- ・シンポジウム「紀伊半島をめぐる海の道と文化交流」討論記録『紀伊風土記の丘研究紀要』第 12 号 川島秀一・中園成生・穂積裕昌・寺前直人・櫻井敬人・萩野谷正宏と共著（3 月 31 日）

○発表等

- ・連続講座熊野（第 10 回）「熊野信仰の地方伝播と展開―山岳信仰・西国巡礼との関係―」於：紀伊風土記の丘（7 月 9 日）
- ・和歌山県教育関係神職協議会研修会「和歌山の祭りと獅子舞」於 和歌山県神社庁（8 月 9 日）
- ・日本遺産「鯨とともに生きる」ガイド養成研修「祭りの中の鯨文化」於 太地町立くじらの博物館 熊野灘捕鯨文化継承協議会（2 月 15 日）

職員名簿（令和5年度）

職 名		氏 名
館 長		中 村 浩 道
副 館 長		西 山 耕 司
教育企画員		松 下 重 喜
課 名	職 名	氏 名
総 務 課	総務課長	藤 井 達 也
	主 査	川 崎 康 弘
	主 査	竹 内 夫 美
	主 事	植 田 拓 真
	主 事	山 本 蒼 大
	公園内環境整備職員（会計年度任用職員）	青 木 一 法
	清掃作業員（会計年度任用職員）	岩 上 宏 子
	移築民家管理等職員（会計年度任用職員）	大久保 善 博
	受付窓口業務員（会計年度任用職員）	奥 山 容 子
	業務補助職員（会計年度任用職員）	桂 誠 志
	業務補助職員（会計年度任用職員）	雑 賀 陽
	移築民家管理等職員（会計年度任用職員）	佐 藤 眞 一
	公園整備員（会計年度任用職員）	松 本 誠
学 芸 課	専門員兼学芸課長	藤 井 幸 司
	主任学芸員	萩野谷 正 宏
	主査学芸員	蘇 理 剛 志
	主査学芸員	田 中 元 浩
	学芸員	金 澤 舞
	学芸員	上 村 緑
	学芸員（臨時職員）	仲 克 幸
	主 事	谷 祐 輝
	体験学習補助員（会計年度任用職員）	植 松 裕 太
	業務補助職員（会計年度任用職員）	大 川 起 司
	埋蔵調査員（会計年度任用職員）	立 岡 瑞 穂
	埋蔵整理作業員（会計年度任用職員）	玉 井 朱 美
	埋蔵整理作業員（会計年度任用職員）	谷 口 敦 子
	園内植物管理員（会計年度任用職員）	松 下 太

紀伊風土記の丘研究紀要 第13号

【論 考】

土器製塩に関する実験考古学的研究

—ワークショップ古墳時代の塩づくりに基づく実験・分析・観察—

田中元浩・石丸 彩・岩崎郁実・佐藤純一・仲辻慧大・
中西瑠花・馬場彩加・沼野月子・山田望海 . . . 1

【研究ノート】

前山 A87・88 号墳の横穴式石室とその構造 萩野谷正宏 . . . 19

雑賀崎の漁業史（3）——本釣漁師の四国出漁—— 萩野谷正宏・池田佳祐 . . . 25

『日本漁民事績略』にみる紀州漁民の活動 蘇理剛志 . . . 34

伝花山 10 号墳出土品—須恵器、埴輪、土師器— 金澤 舞・仲辻慧大・上田 緑 . . . 49

宮田啓二『昭和二七年秋冬 岩橋千塚古墳群 調』—前山・西和佐地区編—
石丸 彩・上田 緑・金澤 舞・瀬谷今日子・
富永里菜・中西瑠花・仲原知之・馬場彩加 . . . 55

【活動報告・シンポジウム記録】

博物館、現代社会、ボランティア、地域力（講演記録） 小山田宏一 . . . 67

シンポジウム「畿内と紀伊の群集墳から読む古墳時代社会」討論記録
太田宏明・絹畠 歩・仲辻慧大・萩野谷正宏 . . . 79

執筆者一覧

萩野谷 正宏	和歌山県立紀伊風土記の丘 主任学芸員	考古学
蘇 理 剛 志	和歌山県立紀伊風土記の丘 主査学芸員	民俗学
田 中 元 浩	和歌山県立紀伊風土記の丘 主査学芸員	考古学
上 田 緑	和歌山県立紀伊風土記の丘 学芸員	考古学

<外部執筆者 五十音順>

池 田 佳 祐	漁業・fisherman's Table & Stay 新七屋代表	漁業史
石 丸 彩	公益財団法人和歌山県文化財センター埋蔵文化財課 技師	考古学
岩 崎 郁 実	奈良県立橿原考古学研究所 主任技師	考古学
太 田 宏 明	河内長野市教育委員会生涯学習部文化課	考古学
金 澤 舞	和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課 主査	考古学
絹 畠 歩	奈良県立橿原考古学研究所 主任研究員	考古学
小山田 宏 一	大阪府立狭山池博物館 館長	考古学
佐 藤 純 一	白浜町教育委員会 主任	考古学
瀬 谷 今 日 子	和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課 主任	考古学
富 永 里 菜	和歌山市産業交流局文化スポーツ部文化振興課 主査	考古学
仲 辻 慧 大	和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課 主査	考古学
中 西 瑠 花	有田市教育委員会 主事	考古学
仲 原 知 之	公益財団法人和歌山県文化財センター埋蔵文化財課 主任	考古学
沼 野 月 子	奈良女子大学大学院	考古学
馬 場 彩 加	田辺市教育委員会生涯学習課 事務員	考古学
山 田 望 海	東海大学大学院	動物考古学

<論考>

土器製塩に関する実験考古学的研究
- ワークショップ古墳時代の塩づくりに基づく実験・分析・観察 -

田中元浩・石丸 彩・岩崎郁実・佐藤純一・仲辻慧大・
中西瑠花・馬場彩加・沼野月子・山田望海

はじめに

ワークショップの概要 和歌山県立紀伊風土記の丘（以下、「当館」とする。）では、教育普及活動として、体験イベントやワークショップ（以下、「ワークショップ等」とする。）を実施している。

令和6年9月15日(日)にはワークショップ「古墳時代の塩づくり」として、当館敷地に移設された和歌山市西庄遺跡の石敷製塩炉に関連した古墳時代の土器製塩実験を行い、15名の参加者を得た（以下、「第2回実験」とする。）。また、令和5年12月3日には、「ふどきっず⑤土器炊飯」にて予備実験として製塩実験を行った（以下、「第1回実験」とする。）。

本ワークショップは、一般参加者への体験学習としての学びを得るとともに、実験考古学による研究成果を得ることとの両立を企図した。そのた

め、最新の研究成果に基づく考証や検討を経た実験考古学に一般参加者も触れることによって考古学への関心を高め、その実験考古学の成果を考古学の研究に還元することを目指した。このため、第1回実験は小学生を対象とした土器炊飯での予備実験とし、参加者へは土器製塩の方法を提示するのみにとどめたが、第2回実験では、一般参加者向けのワークショップと併せて研究者による製塩実験を実施した（写真1・2）。

本ワークショップの内容は次のとおりである。
①古墳時代の和歌山は塩の一大生産地であったこと、各地に塩が運ばれたことなどを説明した。②複数種類の製塩土器があること、その使用方法についてよくわかっていないことなどを紹介し、実験の目的として、これらの工程や用途の違いを考えることを示した。③実験の準備として、実験土器の観察、重量の計測などを行った。④製塩実験の実施、鹹水の継ぎ足しを数回程度とし、時間を短縮した。⑤実験後の実験土器の観察と重量の計測などを行った。ワークショップでは開催時間の関係から、一般参加者は、実験前・実験後の製塩土器の計量と観察により製塩量と土器使用痕の把握を行い、製塩実験に関わった。なお、一般参加者へは実験土器と塩を配布して各自観察することとしたため、一般参加者へ配布した実験土器については、今回の検討の対象から除外している。

本稿の目的 本稿では、企画の意図を踏まえ、ワークショップ等に基づく製塩実験・使用痕分析・経過観察の成果を提示し、実験考古学から古墳時代の土器製塩の工程や製塩土器の機能について言及する。そして、博物館等施設の活動におけるワークショップ等の意義について考えたい。

なお、本ワークショップには一般参加者とともに有志の研究者が参加し、実験の実施と記録にあたった。参加者は次のとおりである。



写真1 ワークショップ開催状況1



写真2 ワークショップ開催状況2

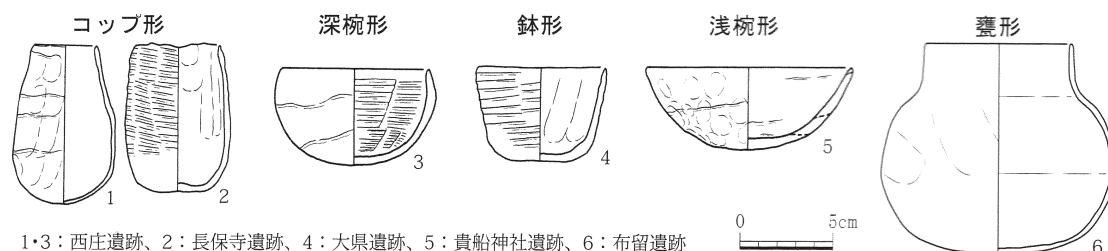


図1 製塩土器の分類（岩崎2022より引用）

第1回実験（令和5年12月3日）：石丸彩・岩崎郁実・河本光月・木村日向子・佐藤純一・田中元浩・仲辻慧大・中西瑠花・沼野月子・馬場彩加・丸山真史・山田望海。第2回実験（令和6年9月15日）：石丸彩・岩崎郁実・田中元浩・仲辻慧大・中西瑠花・沼野月子・濱崎範子・馬場彩加・山田望海。（田中）

1. 土器製塩研究の現状と検討課題

西庄遺跡と土器製塩 古和歌浦湾に面した西庄遺跡は、古墳時代中期から古墳時代後期にかけての製塩・漁撈に関わる生産遺跡である。古墳時代における手工業生産と海との関係を考える上で、重要な遺跡であることから、現在、有志の研究者による西庄遺跡研究会により再検討と再整理が行われている。

西庄遺跡は、砂堆上に15基以上の石敷製塩炉が一定の間隔で並んだ状態で検出され、その西側の谷部には灰層が厚く堆積し、土器製塩に係る生産域を形成する。調査では1,400箱以上ものコンテナに収納された多くの製塩土器が出土しており、製塩遺跡の実態が明らかになった。出土した製塩土器は「丸底式製塩土器」とされるコップ形と深碗形（丸底Ⅰ式・丸底Ⅱ式、図1）、甕形で構成され、報告書掲載数でおよそ4:4:2の割合で共伴する。これらの遺構や製塩土器から西庄遺跡における土器製塩は、①海藻を用いて濃度の濃い塩水を採取する「採鹹」、②鹹水を煮詰め結晶塩（粗塩）を作る「煎熬」、③結晶塩（粗塩）を加熱処理し、水分・不純物を取り除いた精製塩を作る「焼塩」という工程が想定される。

丸底式製塩土器のそれぞれの器形と容量から何らかの機能差が想定されるものの、これまでの研究では具体的な機能・用途の限定には至って

いない。一方、最近では、生産地では甕形が多く存在するとともに、消費地でもコップ形・深碗形の分布が異なっており、生産や運搬、経路による違いが指摘されつつある（岩崎2023、田中2024）。また、石敷製塩炉とこれら丸底式製塩土器は共存することから、これらの機能的な関連性や有効性、その出現経緯なども注目される（広瀬1994、積山2014）。（田中）

検討課題の設定 こうした製塩遺跡における土器製塩研究の現状を踏まえ、ワークショップ等では、次の2点を検討課題とした。a 石敷製塩炉と丸底式製塩土器を用いた土器製塩の工程の復元と、b 丸底式製塩土器に見られるそれぞれの器形がどの工程や機能を反映するかの検討である。

すでに採鹹については藻塩法による工程が復元されているが、西庄遺跡でも調査区西の谷部にかけては灰層の存在やウズマキゴカイ及びボサツガイなどの微小貝を含む灰土坑が検出されており、遺構からもその工程の存在が検証できる。一方、煎熬・焼塩は石敷製塩炉を用いたことは想定されるものの同一地点で行われたため、遺構からの検証は難しく、工程の実態は不明な点が多い。

そこで、実験用の石敷製塩炉と製塩土器を復元製作し、これらを用いて製塩実験を行うこととした。製塩実験では、製塩土器の器形が煎熬と焼塩の工程の違いによるものと想定し、検証を行った。さらに、実験結果を踏まえ、実験土器と実物資料の製塩土器の使用痕分析による比較、実験土器の経過観察を実施して、製塩実験の蓋然性と妥当性をより高めることとした。（田中・岩崎）

2. 土器製塩の実験

実験の目的 土器製塩の工程に対しては、2つの問いがある。1つ目は、煎熬から焼塩までを同

一の製塩土器で行うことと、焼塩時に新たな土器へ移し替えるのとでは、生産・保存の面でどれほど有効性に違いがあるのかである。2つ目は、製塩土器の様々な器形・法量の大小が、煎熬・焼塩の各工程にどのような適性を示すのかである。

さらに筆者らは、西庄遺跡の製塩土器に対して、煎熬用土器に加えて、焼塩用土器があった可能性を仮説として考えた。煎熬で生成されたペースト状の粗塩を別の製塩土器に移し替えて焼塩を行う、焼塩用土器が存在した可能性を想定するのである。具体的には、法量の大きな甕形で煎熬を行い、その後、小型の深碗形・コップ形へできた粗塩を移し替え、焼塩を行うというものである。(岩崎)

実験の方法 これら2つの問いや仮説を検証すべく、本実験では、2つの製塩工程＝使用パターン（以下、「工程」とする。）を設けた。すなわち、

A：煎熬から焼塩の生成まで一貫して用いるもの

B：粗塩を移し替え、焼塩の生成のみに用いるものである。そこで、次の工程により実験を実施した。

1. 製塩炉に製塩土器Aと、粗塩を作るための煎熬のみの土器を並べ、鹹水を注ぐ。

2. 加熱を開始する（煎熬）。煎熬中に土器内の鹹水が無くなれば、その都度継ぎ足すが、継ぎ足し作業は1時間に限って行う。

3. 塩がペースト状化すれば、煎熬のみの土器から粗塩を取り出して製塩土器Bへ移し替え、加熱を開始する。Aは引き続き加熱を続ける（焼塩）。

4. A・Bとも、塩が完全に固形化した段階で加熱を終了する。

なお、第1回実験と第2回実験は、再現性を確保すべく、薪の火力調節を除き同様の方法で行った。

実験において用意したものは、次の通りである。いずれも、発掘調査成果から得られた考古学的事象を復元できるよう、考証を行った。

実験土器：陶芸家赤坂宏による製作方法に基づき（富加見 2003）、赤坂氏からの指導を得て田中が実験土器を製作した。実験土器の製作は陶芸用粘土（赤玉2号）を用い、焼成は電気窯で700℃の設定で12時間行った。実験では製作した実験土器60点から、容量・法量の近い深碗形：16個、コップ形：14個、甕形：10個を抽出した。

鹹水（濃縮鹹水）：海水（塩濃度3.4%）は、

表1 第1回実験の経過

時刻	加熱開始から	作業内容	経過・詳細
9:30	-	準備	製塩炉へ製塩土器Aを並べる。
10:25	-	加熱準備	土器の隙間へ薪を置き火をつける。製塩土器を空焚きして温める。
10:30	0分	煮沸開始	鹹水を土器容量の約8割まで注入し、煎熬を開始。以後、土器内の鹹水量が減るたびに継ぎ足した。
10:42	12分	A:煎熬	深碗形で喫水線に塩の結晶がつき始める。
10:50	20分		コップ形・甕形でも喫水線に塩の結晶がつき始める。
10:54	24分		コップ形・甕形では鹹水が沸騰する。
11:12	42分		製塩土器の外表面（甕形は頸部外表面）、口縁部内面に泡状の剥離が生じる（写真8）。
11:25	55分		器形による差が明確になってくる。 コップ形：沸騰する。吹きこぼれる例が多い。 深碗形：沸騰しない。 甕形：沸騰する。内部でうまく対流が起きており吹きこぼれることはない。
12:10	1時間40分	A:煎熬終了	シャーベット状になってきた。
13:30	3時間5分	A・B:焼塩	Aは加熱を続け、焼塩工程へ。 Bへ粗塩を移し、焼塩を開始。
13:35	3時間10分	Aの一部とB:焼塩終了	Aのコップ形・深碗形、Bで水分が完全に蒸発し、固形化したため加熱を終了。
13:55	3時間25分	A:焼塩終了	Aの甕形もすべて固形化したため実験終了。

海南市琴ノ浦沖合 200m から和歌山県立自然博物館が取水したものをを用いた。IH ヒーターにより 8 日間加熱することで 120 ℓ を 20 ℓ まで濃縮し、鍋底にはカルシウム化合物の結晶が付着した状態の鹹水（塩濃度 20%）を得た。

石敷製塩炉：直径 0.2 ～ 0.3 m の川原石 90 個（紀ノ川河川敷、岩出市西野大宮緑地公園で採取）、真砂土 12 袋（0.27 m³）を用いて、1.8 m × 1.2 m の製塩炉を構築した。西庄遺跡の石敷製塩炉 2（689-SX）を参考とし、縦・横方向に石の目地を十字形にとおして並べた（写真 3）。

薪：当館敷地内伐木（針葉樹）を薪用としてポリバケツ（120 ℓ）8 杯分、焚付用としてポリバケツ 1 杯分を準備した。発掘調査では、石敷製塩炉上には灰が厚く堆積していたことから、第 2 回実験では炎を上げない熾火を作り、煎熬・焼塩を行った（写真 4）。（田中・岩崎）

実験の結果 第 1 回実験を実施した令和 5 年 12 月 3 日（日）は、曇り時々雨のち晴れ、気温は 10 ～ 12℃、湿度は 72% 前後であった。実験は、10 時 30 分から加熱を開始し、13 時 55 分までの 3 時間 25 分間で行った（写真 5）。第 2 回実験を実施した令和 6 年 9 月 15 日（日）は晴れ、気温は 35℃、湿度は 65% 前後であった。実験は、10 時 44 分から加熱を開始し、13 時 10 分までの約 2 時間 20 分間で行った（写真 6）。

表 1 には、第 1 回実験の結果を当日の経過・土器の状況とともに示す。表 2 には、第 2 回実験の結果を各種の計測値とともに示す。これら 2 回の結果を、器形による差と、製塩土器の工程 A・B による差との 2 つの観点から述べていく。

①器形による差 煎熬を始めると、深碗形で塩の結晶化が最も早く生じ、コップ形・甕形がこれに続いた。加熱を続けると、深碗形では鹹水の沸騰が起きなかったのに対し、コップ形・甕形では沸騰が起きた。コップ形は、沸騰するとすぐに吹きこぼれたため、鹹水の流出を防ぐためには、炉内で位置を変えるなどの対応が必要であった。対して、甕形は吹きこぼれが生じず、内部で鹹水の対流が確認できた（写真 7）。

煎熬中の 1 時間は、土器内の鹹水が蒸発した

後に継ぎ足していたが、その回数はコップ形・深碗形のほうが甕形よりも多い傾向にある。焼塩工程では、塩が固形化するまでに、甕形では他の器形よりも 15 分ほど長く時間を要した。これは甕形の法量が他に比べ大きいことによるものと考えられる。

また、最終的に生成された塩の状態をみると、深碗形では特に灰が多く入り込み、灰の混じった塩ができた。これは、口縁部が大きく開き、器高が低いという深碗形の器形的な特徴による。

②工程による差 まず A・B それぞれの工程で、煎熬から焼塩までにかかった時間を整理する。第 1 回実験では A が 3 時間 10 ～ 30 分、B が 3 時間 10 分であった。第 2 回では、A が 1 時間 20 分～2 時間 20 分、B が約 2 時間であった。つまり、完全に固形化するまでに要する時間に差はない。

つづいて、生産効率について整理してみる。煎熬から焼塩まで続けて用いた A の製塩土器では、非常に多くの塩及び白色物質が内面の器壁に固着した（写真 9）。一方で、焼塩のみの B の製塩土器では、塩の固着は少なかった（写真 10）。具体例を挙げると、A の甕形 K 4 は、500g の鹹水から最終的に 20g の固形塩を採取できた。B の甕形 K 12 は、600g の鹹水からできた粗塩（K 11）を加熱し、最終的に 50g の固形塩を採取できた。採取率を計算すると、K 4 は 4%、K 11 は 83% である。すなわち、B の工程の方が生産性が高い。

小 結 器形による違いは、焼塩では小さく、煎熬で特に明確であることが分かった。具体的には、甕形は沸騰による吹きこぼれはなく、鹹水の継ぎ足し回数も少ない。対して、深碗形・コップ形は内容量が小さいため塩の結晶化が早いものの、吹きこぼれや灰の混入、継ぎ足し回数が多くなる。このようにみると、今回の実験では、煎熬においては深碗形・コップ形は不適な点が多く、甕形を用いる方がより適当であったといえよう。

そして、製塩土器の工程について、A：煎熬から焼塩まで一貫して用いるか、B：焼塩時に移し替えるかでは、B がより生産性が高いことが分かった。これは、海水成分のなかでも早くに析出するカルシウム化合物やマグネシウム化合物と

表2 第2回実験の各計測値

器形	用途	土器 No.	実験前		実験中						実験後		
			土器容量 (ml)	土器重量 (g)	開始 時刻	終了 時刻	加熱 時間	A:鹹水を 足した数 (回)	①A:注いだ 鹹水(g)	②B:移し た粗塩(g)	終了後の 土器+塩 (g)	③土器から 取り出せ た塩(g)	①・②に対 する③の 割合(%)
甕形	A	K1	600	405	10:46	12:34	1:48	1	400		555	55	14
	A	K2	500	415	10:46	12:47	2:01	1	400		495	25	6
	A	K4	600	395	10:46	12:47	2:01	2	500		500	20	4
	A	K5	500	390	10:44	13:03	2:19	2	500		530	20	4
	粗塩用	K6	700	395	10:44	12:22	1:38		400		510	200	(50)
	粗塩用	K8	700	425	10:44	11:59	1:15		600		640	290	(48)
	粗塩用	K9	800	495	10:44	11:59	1:15		500		715	315	(63)
	粗塩用	K11	680	450	10:44	12:15	1:31		600		675	115	(19)
	粗塩用	K3	680	445	10:46	12:15	1:29	1	400		535	170	(42)
	B	K12	500	345	12:34	13:09	0:35			115	410	50	43
コップ形	A	C6	120	90	11:36	13:23	1:47	3	80		115.7	5.7	7
	A	C7	120	84	11:36	13:06	1:30	3	80		113.4	4.7	6
	A	C8	115	89	11:36	12:59	1:23	3	80		113.4	2.4	3
	A	C9	160	146.5	11:36	12:46	1:10	2	200		189.7	6.2	3
	A	C11	110	136	11:36	12:46	1:10	4	80		163.1	3.8	5
	A	C12	100	117.5	11:36	13:24	1:48	1	70		138.2	2.4	3
	A	C14	140	157.5	11:36	13:14	1:38	2	100		180.5	3.1	3
	A	C16	100	113	11:36	13:06	1:30	4	130		147.0	5.6	4
	B	C19	70	66	12:17	12:36	0:19			120	110.9	32.8	27
	B	C20	110	105.5	12:17	12:36	0:19			170	143.4	17.9	11
	B	C22	140	110	12:17	12:36	0:19			170	148.9	20.5	12
	B	C10	120	131.5	12:47	13:12	0:25			160	141.2	9.7	6
深碗形	B	C21	130	102	12:17	12:36	0:19			165	133.1	10.3	6
	A	F1	130.3	113.2	11:15	12:35	1:20	3	150		151.1	13.3	9
	A	F2	74.8	89.6	11:15	12:58	1:43	3	70		114.9	5.6	8
	A	F3	127.2	108.3	11:15	13:05	1:50	3	130		145.9	10.8	8
	A	F4	113.9	82.8	11:15	13:05	1:50	2	110		117.0	7.6	7
	A	F5	110.7	108.3	11:15	12:35	1:20	3	170		151.0	13.9	8
	A	F6	105.7	81.7	11:15	12:58	1:43	3	140		130.2	12.2	9
	A	F10	115.1	104.9	11:15	13:28	2:13	3	130		143.2	10.0	8
	A	F11	103.2	70.2	11:15	12:35	1:20	3	140		103.5	9.6	7
	A	F12	109.5	101	11:15	13:28	2:13	3	150		151.5	16.4	11
	A	F13	109.3	68	11:15	12:35	1:20	3	170		108.7	12.2	7
	B	F14	91.7	59.9	12:30	12:40	0:10			75	72.4	11.7	16
	B	F15	101.4	76.9	12:30	12:40	0:10			95	87.8	12.2	13
	B	F16	83.7	79	12:30	12:45	0:15			110	97.2	17.8	16
	B	F17	76.2	68.8	12:30	12:45	0:15			90	82.3	13.8	15
	B	F18	92.6	66.6	12:47	13:03	0:16			85	76.5	10.0	12
	B	F19	63.1	63.1	12:47	13:02	0:15			80	72.8	10.0	13

いったにがり成分が煎熬用土器へ溶け出すことで、焼塩用土器で生成した塩には不純物が少なく、結果として多くの塩が採取できるということを示していると考ええる。また、このことは後述の経過観察とも関連する。

これらの実験結果から得られた知見は、次のようにまとめられる。

①焼塩時に新たな土器へ移し替えて行うBの工程が、生産性は優位であること。

②煎熬には甕形が最も適しており、次いでコップ形＞深碗形の順に有用であること。

③焼塩では器形による差異は小さいが、小型の深碗形・コップ形ではより短時間で固形化・結晶化できること。

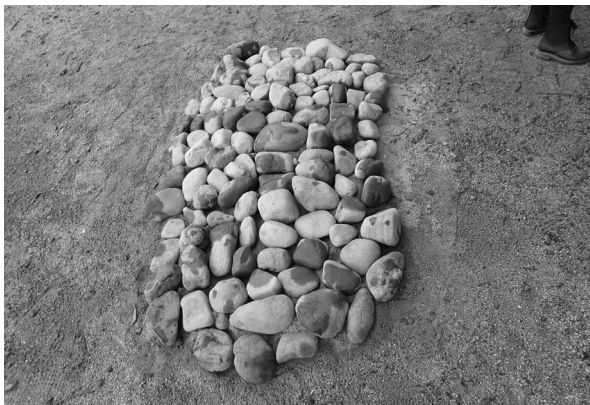


写真3 復元した石敷製塩炉（第1回）



写真4 熾火の作成（第2回）



写真5 煎熬工程（第1回）



写真6 煎熬工程（第2回）



写真7 甕形A 煎熬時（第1回）



写真8 深碗形A 煎熬時の使用痕跡（第1回）

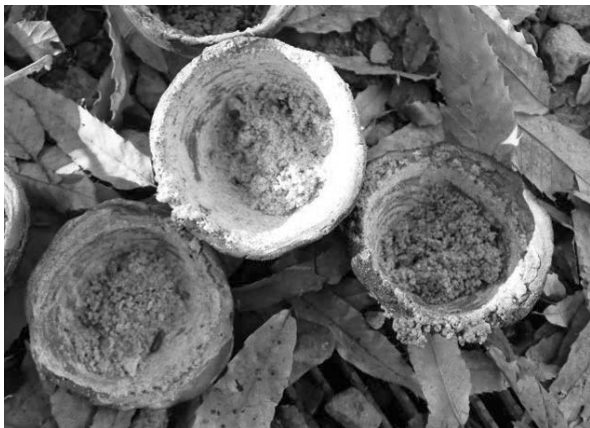


写真9 コップ形A 実験終了後（第1回）



写真10 深碗形B 実験終了後（第1回）

以上は、「甕形を煎熬に用い、深碗形・コップ形を焼塩に用いる」という仮説とも矛盾しない。

(岩崎)

3. 製塩土器の使用痕分析

製塩作業に伴う製塩土器の使用痕に着目し、実験土器と実物資料を比較することで、製塩実験の妥当性を検証する。

(1) 製塩土器の使用痕に関する理解

製塩土器の使用痕については、①製塩土器特有の二次焼成による変色、②海水・鹹水に由来する付着物、③塩の作用による土器の破損、の3点に着目した。現状における使用痕の理解は次のとおりである。

①製塩土器の変色 製塩土器の変色は、当初から製塩土器特有の焼け＝赤褐色として認識されており、製塩に伴う二次焼成痕という理解が主であった。近藤義郎はこうした痕跡を、「製塩土器の破片の一部にみられる変色と覚しい大小の斑痕は…長時間煮沸に伴う海水中の各種金属などの作用によって生じたものと推定」、「白色、灰色、桃色、紫色、褐色（赤褐色もふくむ）、黒色などあり、濃淡がある」、「相接して白と桃色、桃色と紫色などのように変色部分が並ぶこともある」、「変色斑痕は広範囲に及ぶ場合、多くの小斑をなす場合、帯状や点状をなす場合などさまざま」と表現している（近藤 1980）。

②製塩土器の付着物 製塩土器の内面には、灰白色の物質が付着していることが観察できる。実験土器では、煎熬土器に特に顕著である。近藤義郎は、灰白色物質は煎熬過程で溢出したまたは廃棄された、カルシウム化合物（ CaCO_3 炭酸カルシウム・石灰、 CaSO_4 硫酸カルシウム・石膏＝スケール・こうら）、マグネシウム化合物（ MgCl_2 塩化マグネシウム＝にがり）、ナトリウム化合物（ NaCl 塩化ナトリウム＝塩）の各結晶であるとした（近藤 1958）。灰白色物質は土器の外表面、内表面を問わず固化した状態で付着し、中には土器の断面を覆うように付着するものもある（近藤 1962）。また、縄文時代の製塩実験では煎熬後の火床が実験土器の底部周辺に付着し、発泡状の空隙がみられるこ

とから、ふきこぼれた鹹水が火床に浸透したものと推定している（中村 1998）。さらに、濃灰色付着物についても性質は不明であるが、認められる。

③製塩土器の破損 ③製塩土器の破損は、鹹水濃縮につれて析出した結晶が膨張することによって剥離が生じる（近藤 1980）。製塩土器の内外面には亀裂・割れ・剥離による破損が日常土器に比べ顕著であり、製塩遺跡では割れて細片となった状態で出土する。

製塩土器の使用痕に関する課題 以上の変色・付着物・破損などの使用痕は、近藤義郎の研究以降、報告や観察などで着目されることはあっても、具体的な検討はなされないままであった。また、付着物の理化学分析は行われているが、これらが土器全体でどのように分布するか、それが工程に基づく用途や機能とどのように対応するかという使用痕の検討は皆無である。これは、完形品が少ないという遺存性ととも、使用痕がどのような工程を経て生じるかという検証が不足していたためと考えられる。そのため、製塩実験による実験土器と実物資料の使用痕の比較とともに、使用痕の形成要因を検討する必要がある。

(2) 日常土器の使用痕についての理解

一方、日常土器の使用痕については、鍋釜の使用痕（スス・コゲ・吹きこぼれ）として、複製深鍋を用いた調理実験、民族誌の比較分析、理化学的分析を組み合わせ使用痕の形成要因を特定し、小林正史らにより検討が行われている（小林 2011 ほか多数）。

小林らの使用痕の検討方法は、外面A・B、内面A・Bの4面観察を行い、外面のスス濃・淡、スス酸化、吹きこぼれ、内面のコゲ、炭化穀粒痕の記録を行う。そして、外面のススと内面のコゲの対応関係により、ススと吹きこぼれの順序を復元し、炊飯工程を復元する。

そこで、製塩土器の使用痕についても、観察項目は異なるものの、これらの観察と記録の方法を用いて検討を進めることとした。

(3) 製塩土器の使用痕分析

使用痕分析の方法 小林らの使用痕の記録方法を参考とし、西庄遺跡出土製塩土器の使用痕の

観察項目を次のとおり定め、観察結果を写真と図化(S = 1/1・1/2)で記録(外形線や割れを実測し、色鉛筆で痕跡を記入)した。

使用痕の観察項目については、①色調変化、②付着物、③破損、そして④スス・コゲについて観察した。詳細は次のとおりである。

①色調変化：色調変化は、赤(紫・黒赤)色、ピンク色、オレンジ・淡褐色として、濃い色から淡い色へと順に変化し、さらに褐色へと変化する。

②付着物：付着物は、白色物質・灰色物質、濃灰色物質であり、白色物質・灰色物質は塩生成過程で析出したカルシウム化合物・マグネシウム化合物・ナトリウム化合物とみられる。

③破損：剥離・割れを線で表現した。

④スス・コゲ：実験土器では外面のみでススが観察される。コゲは観察されなかった。また、黒色の汚れについても記録した。(田中)

実物資料の使用痕分析 使用痕分析を行った実物資料は、いずれもススの付着は確認されなかった(図2・3)。

甕形は器面の欠損が大きく、使用による脆弱化が進んでいると考えられる。また、コップ形・深碗形に比べ使用痕が広範囲に認められ、口縁部と底部付近において顕著に観察される。特に付着物では、濃灰色物質が残存部位の全体に広がる。色調変化では、外面と内面とで赤色、ピンク色の色調変化に対応関係がみられる資料がある(甕形：報告書138・479・709)。色調変化が内外面で対応することは、部位によって被熱に強弱があったことを推測させる。器高が低い古墳時代後期の甕形：報告書2303は欠損が少なく、色調変化が面的に広がり、他の資料とは被熱範囲が異なる使用方法であった可能性がある。

コップ形は、他の器形に比べ使用痕は少なく、特に内面の使用痕はほとんど観察されない場合もある。外面に灰色付着物と黒色の汚れ、ピンク色、オレンジ・淡褐色の色調変化および、白色物質の付着など複数種類の使用痕が隣接・重複する傾向にあるが、全体における使用痕の範囲は限定的である。コップ形の報告書951・952・642は、粘土紐接合痕に沿って横位に割れる。

深碗形の使用痕は個体差が存在するが、土器の中でも偏って認められる(図3)。色調変化は、円形に認められ、色が濃いほど狭小な範囲に限定され、色が淡いほど広範囲となる。色調変化が外面と内面とで対応関係が認められる。また、中心から外側へ向かうほど赤色→ピンク色→オレンジ・淡褐色となるようにグラデーションをみせる。付着物では灰色物質がもっとも広範囲に及び、白色物質が複数の点状となって観察される。一部であるが口縁部外面付近においてのみ灰色物質が観察されるものもある(深碗形：報告書88)。割れは、口縁部から下方へ向かって生じる傾向にあり、口縁部の一部を欠損する例もみられる。

実験土器の使用痕分析 実験土器については使用痕がほぼ共通することから、代表例だけを図化した(図4)。甕形は体部外面の広範囲にススが付着する。胴部外面には剥離が生じており、実験では加熱後に器面が剥離した。甕形の外面と内面とでは、使用痕の様相は大きく異なる。内面は、頸部のくびれを境として使用痕の分布に差異が認められる。口縁部付近の使用痕はわずかでありながら、頸部から胴部にかけて白色物質が広範囲に付着する。内面の使用痕の特徴は、実験で甕形では吹きこぼれが生じなかったことから、頸部のくびれによって対流が生じ吹きこぼれが緩和されたとみられる。

コップ形の使用痕は、灰色・濃灰色物質や黒色汚れの付着が主である。実物資料のコップ形とは異なり、A：煎熬→焼塩ではC18をはじめ、すべての実験土器の外面にススの付着や黒色の汚れが確認される。外面に付着する濃灰色物質は、実物資料のコップ形に比べやや範囲が広い。内面は内部に塩が無い範囲に色調変化があり、口縁部付近までの上半部を一周するように帯状に認められる。A：煎熬→焼塩のC18は、内面上半部に白色物質が広がる。また、B：焼塩のみのC19のみ内面片面に淡褐色の色調変化が観察された。

深碗形は、A：煎熬→焼塩のF5・12は、B：焼塩のみ行った他の同一器形に比べ、汚れや濃灰色物質の付着が口縁端部から広範囲に分布し、外面の白色物質は接合痕に沿って付着する。また、

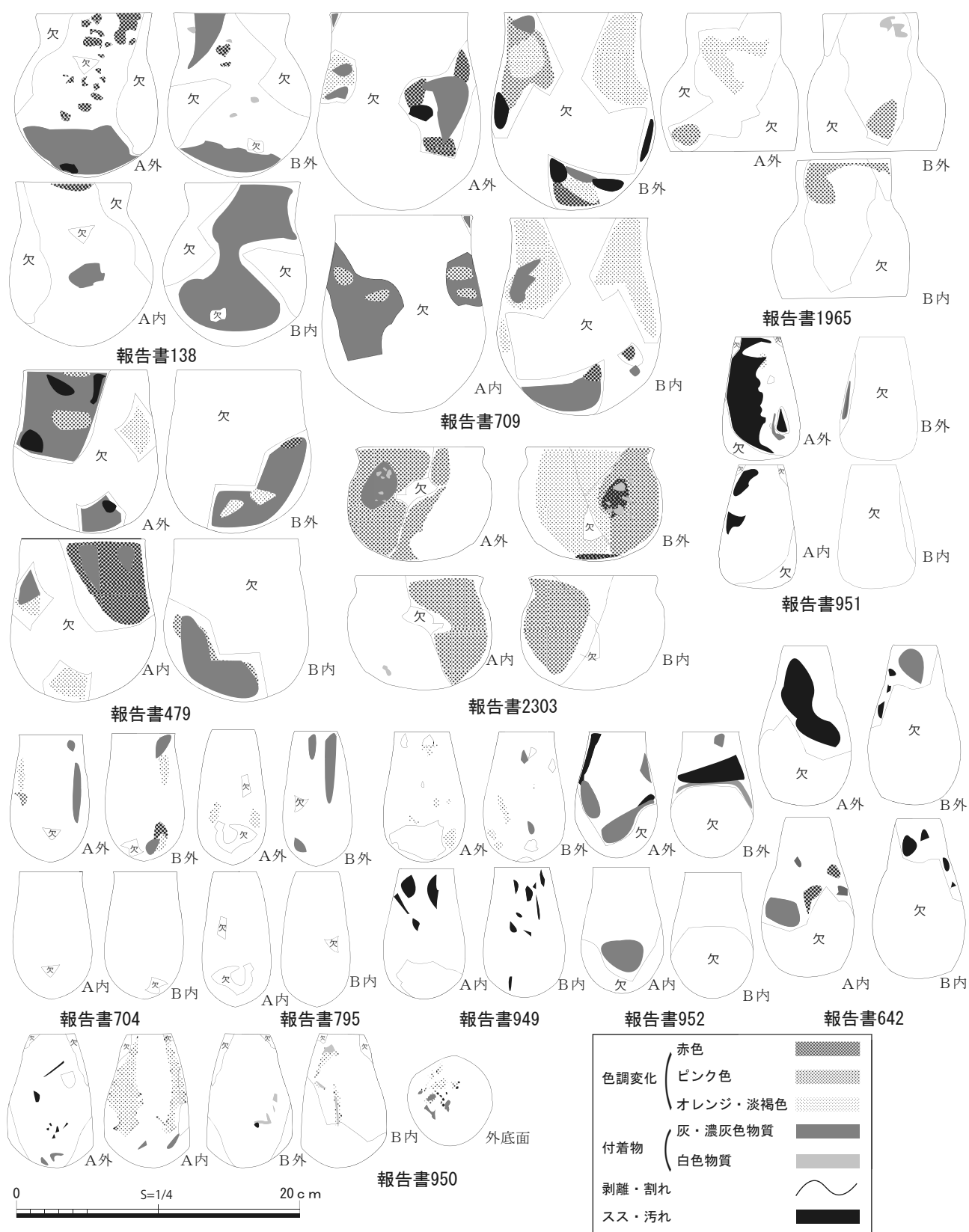


図2 実物資料 甕形・コップ形 (S=1/4)

B：焼塩のみでは、口縁部内面において黒色の色調変化が帯状に分布する。下半部では使用痕が少ない。これは、コップ形と同様に内部に塩が無い範囲に色調変化が認められている。また、白色物

質の付着、ピンク色、オレンジ・淡褐色の色調変化が局所的に、かつ円形に観察される。F 16では、内面底部付近において赤色、ピンク色、淡褐色の色調変化と白色物質が点在する。

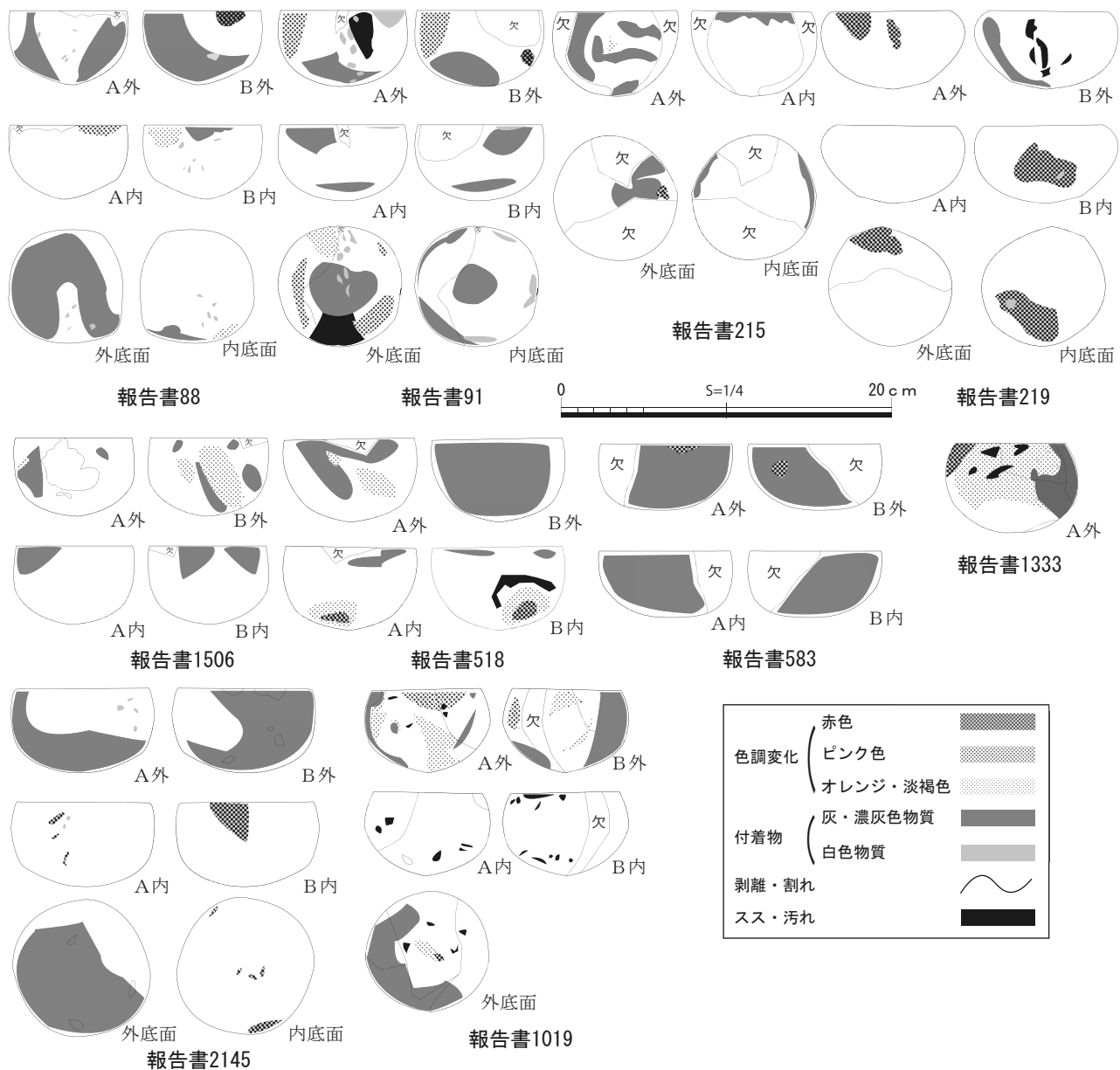


図3 実物資料 深碗形 (S=1/4)

小 結 実物資料と実験土器との比較からは次のことが言える。実物資料の甕形は顕著なスス付着が認められず、濃灰色付着物や汚れが広範囲に及ぶ。この点はススが広範囲に付着する実験土器とは異なる。濃灰色物質は塩が器面に再結晶化し、さらに溶けて付着した可能性がある。深碗形では、円形にかつ局所的に色調変化などの使用痕が認められる点は実物資料と実験土器で共通する。しかし、実物資料では口縁部内面に帯状に広がる使用痕が見出せず、実験土器との差異が指摘できる。また、コップ形の実物資料と実験土器とでは、使用痕がそれほど目立たない点で共通する。

続いて、使用痕からみた工程の違いについては、次のことが言える。鹹水を煎熬し粗塩を生成した

K 9・11、A：煎熬→焼塩のC 18、F 5・12は、いずれも外面にススや黒色の汚れ、内面に濃灰色物質の付着があった。使用痕が広範囲かつ面的な広がりを見せる点は、実物資料とは異なる。この点は、他のAの工程で用いた実験土器とも共通する。B：焼塩に用いた実験土器は、Aの実験土器に比べ白色物質の付着は広範囲でない。つまり、Aの実験土器で顕著に観察された内面の白色物質は、鹹水を煎熬する工程で生じたマグネシウム化合物やカルシウム化合物と考えられる。実物資料において、煎熬工程への使用が仮定される甕形は、焼塩での使用が想定されるコップ形・深碗形に比べ、内面の使用痕は広範囲にわたっており、実験土器と類似した傾向を示す。

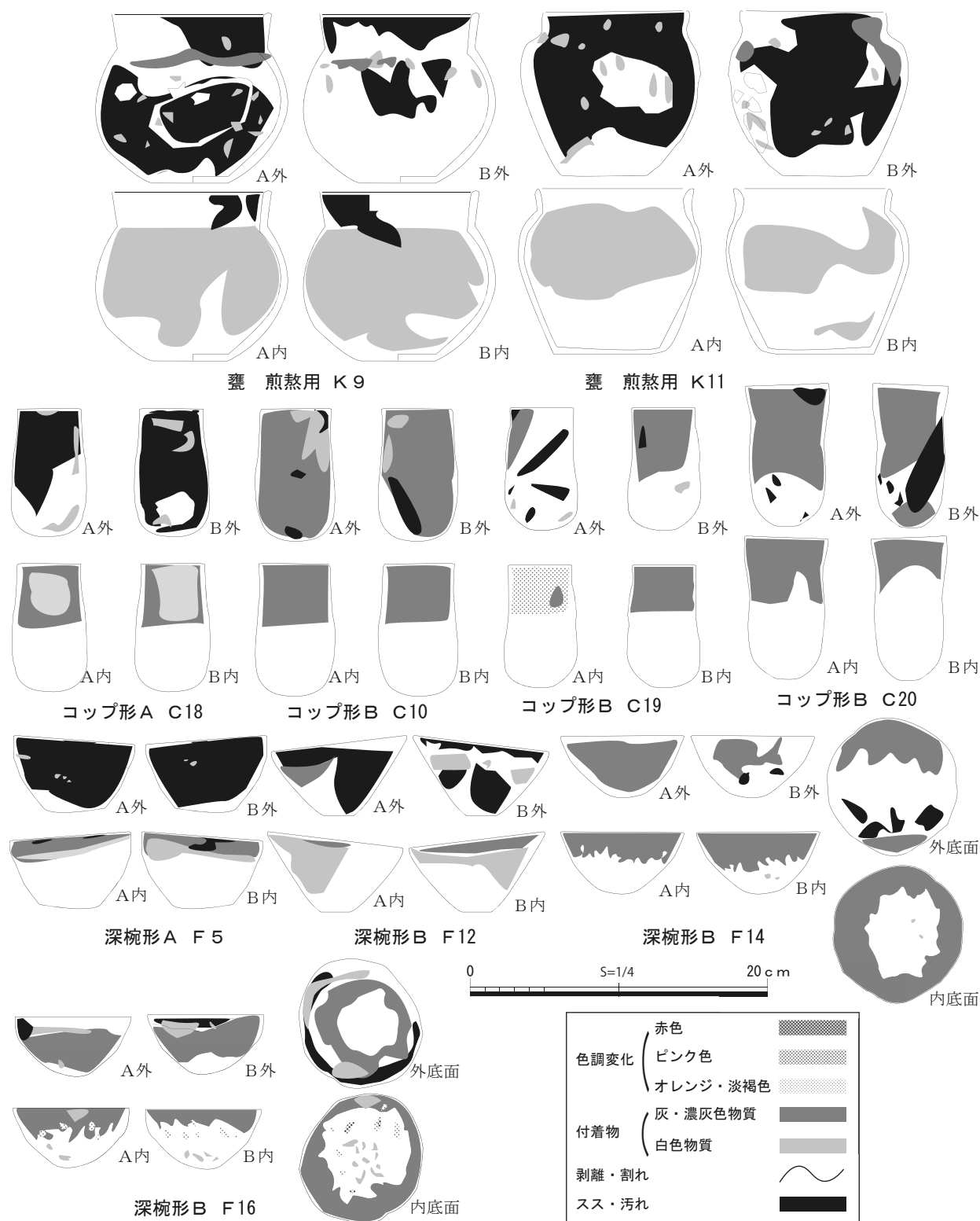


図4 実験土器 甕形・コップ形・深碗形 (S=1/4)

使用痕分析の結果、実物資料と実験土器のうち、コップ形、深碗形には共通する点が認められた。特に、工程ではB:焼塩のみの工程と共通し、ススや汚れが顕著ではない点で、製塩実験の結果を補強するとともに実験の蓋然性を高めることとなった。

一方、色調変化については実物資料と実験土器で異なる色調変化が認められ、甕形の実物資料にはススが認められないなどの違いも認められた。この点は、実験による被熱時間や工程復元の違いを反映している可能性もある。また、実物資料が長期に及ぶ埋没環境下にあったことを考慮す

ると、実験土器の時間経過とともに使用痕に変化が生じた可能性もある。（沼野）

4. 実験土器の経過観察

実験で得られた塩と実験土器の経過観察を行い、製塩土器の工程（煎熬のみ、A：煎熬→焼塩、B：焼塩、）と器形（深碗形、コップ形、甕形）の差が塩の保存性と製塩土器の保管性にどのような差が表れるかを検討した（以下、経過観察では器形（保存容器）と工程を組み合わせ、深碗形A、深碗形B、コップ形A…で表記する。）。（田中）

（1）経過観察の方法

経過観察の方法（第1回実験） 第1回実験で生成した塩について、①塩の状態（粗塩か焼塩か）、②工程による差（AかBか）、③保存容器（製塩土器のままか、プラスチックのタッパーか）の3つの観点から経過観察をおこなった。観察に用いた試料は、表3の1～6の6点である。各容器に入れた状態での重量の変化を記録した。観察は、実験日の令和5年12月3日から令和6年4月25日までの140日間で、温度13.8～21.5℃、湿度42～50%の環境で保管した。（岩崎）

経過観察の方法（第2回実験） 第2回実験後の経過観察では、実験土器の全点を対象として経過観察を行うこととし、湿度が相対的に高い場所（当館体験教室の流し台の下、湿度70～85%・気温8～25℃：日中）で保管した。途中1月12日の計測後、2週間程度、湿度が低い場所（和歌山県文化財収蔵庫、湿度40～50%・気温8～14℃）へ移動し、変化を観察した。保管方法は収納用コンテナに実験後の土器に塩が入った状態とし、製塩土器の保管性についても検討を行った。

経過観察は、実験終了から約140日間、①塩の状態、②実験土器の状態、③重量の各項目について毎月1回の間隔で観察と計測を実施した。また、潮解は随時確認した。（田中）

（2）経過観察（第1回実験）の結果

第1回実験後の実験土器の経過観察（深碗形A、BとタッパーA、Bで実施）の結果は次のとおりである。

①塩の状態 タッパーで保存した2と4とを

比較した。2は固形化した焼塩、4は水分を含む粗塩である。2では、観察期間を通じてほとんど変化がないのに対して、4は10.3gの減少がみられた。このことから、粗塩は、焼塩に対して潮解性が高いことが指摘できる。

②工程による差 どちらもタッパー保存の5と6を比較した。5はA：煎熬→焼塩、6はB：焼塩のみの工程である。結果、5・6ともに140日間を通じた重量の増減は1g未満であり、ほとんど変化はなかった。このことから、焼塩の状態では、製塩土器の工程A・Bの間で塩の保存性に違いはみられないといえる。

③保存容器 1と2はどちらも甕形のK2から取り出した焼塩で、1は製塩土器で保存し、2はタッパーで保存した。その結果、1は18.1g増量したのに対し、2では重量に変化がみられなかった。さらに、3と4はどちらも甕形のK5から取り出した粗塩で、3は製塩土器で保存し、4はタッパーで保存した。その結果、3では19日後までに25.2gの減少がみられた。しかし、24日後に計測するため持ち上げると、土器全体が崩壊してしまったため、以後の計測はできなかった。4では、10.3gの減少がみられた。3・4とも塩の状態が粗塩であり、減少傾向を示したことは、①でみたように潮解性の高さに起因する可能性がある。一方で、製塩土器で保存した3の方が減少率は明らかに大きい。

第1回実験後の実験土器の経過観察の結果、深碗形A、タッパーAの粗塩のみで潮解が認められたことから、焼塩と粗塩では潮解の速度に差が認められる。（岩崎）

（3）経過観察（第2回実験）の結果

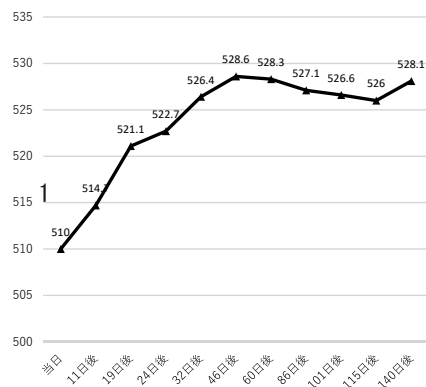
第2回実験後の経過観察（深碗形A、B、コップ形A、B、甕形煎熬のみ、A、Bで実施）の結果は次のとおりである（表4、図6）。

①塩の状態 塩の状態では、潮解の有無を主な対象とした。塩の潮解の過程としては、散状・塊状の塩が吸湿により、徐々に湿気を帯びて、さらに一定以上の湿度下では液状になる。今回は、結晶塩が液状へと変化しはじめた段階を潮解として認定した。

表3 第1回実験の経過観察結果

実験No.	1	2	3	4	5	6
役割	A	1と共通	A	3と共通	A	B
器形	甕形		甕形		深碗形	深碗形
土器No.	K2		K5		F9	F17
塩の状態	焼塩		粗塩		焼塩	焼塩
加熱時間	3:23		0:58		3:12	0:11
保存容器	製塩土器	タッパ	製塩土器	タッパ	タッパ	タッパ

計測日	経過 (日)	計測 時間	温度 (度)	湿度 (%)	容器+塩の重量(g) ※タッパは21.8g					
					1	2	3	4	5	6
2023.12.03	0	16:00	15.4	47	510	31.8	660	50	26.5	35
2023.12.14	11	20:36	18.4	45	514.7	32.2	652.1	49.8	26.8	34.4
2023.12.22	19	19:15	17.7	42	521.1	32.2	634.8	49.8	26.8	34.4
2023.12.27	24	7:35	15.7	44	522.7	32.3	破損	47.3	26.7	34.3
2024.1.4	32	18:12	13.8	50	526.4	32.3		46.3	26.7	34.2
2024.1.18	46	17:15	15.1	47	528.6	32.3		44.8	26.8	34.4
2024.2.1	60	16:20	15.3	45	528.3	32.2		40.5	26.7	34.7
2024.2.27	86	18:30	16.1	44	527.1	32.2		40	26.8	34.3
2024.3.13	101	17:25	16.2	44	526.6	32.2		39.9	26.7	34.3
2024.3.27	115	17:25	17.1	44	526	32.2		39.3	26.7	34.2
2024.4.25	140	13:30	21.5	47	528.1	32.3		39.7	26.8	34.2
増減(g)					△18.1	△0.5	25.2	10.3	△0.3	0.8



縦軸は重量 (g)、横軸は経過日数

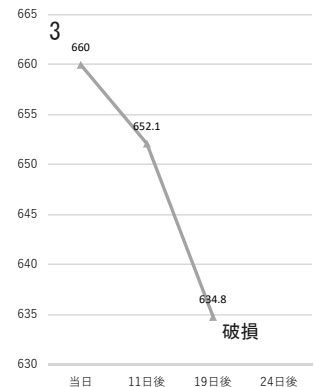
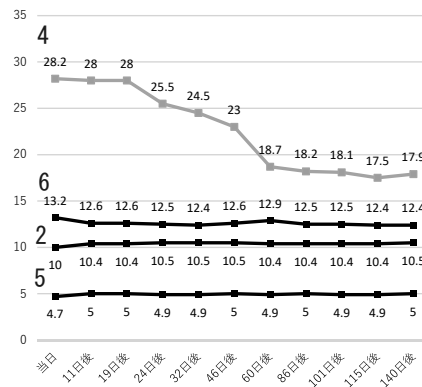


図5 第1回実験の経過観察結果

経過観察開始30日後(10月15日)には深碗形AのF6に潮解が認められ、70日後(11月24日)にはすべての深碗形Aに潮解が認められた。約30～70日程度で潮解が認められ、高湿度下では塩へ水分が吸湿することで潮解が進んだと考えられる。その後、91日前後(12月15日)に深碗形BのF18に潮解が、約100日前後(12月28日)には、深碗形BのF14・15・17が潮解し、129日後(1月12日)にはコップ形AのC6～9・11～12・14・16・18、コップ形BのC10・C22に、140日後には深碗形AのF16、コップ形BのC19に潮解が認められた。なお、140日後でも深碗形BのF19、コップ形BのC20・21には潮解が

認められなかった。

以上から、塩の状態については、深碗形A→深碗形B→コップ形A→コップ形Bの順で潮解が生じており、器形では深碗形の方が、コップ形に比べ潮解が早く、工程ではA:煎熬→焼塩の方が、B:焼塩に比べ潮解が早いということがわかった。また、潮解の度合いも深碗形とAのそれぞれの液状化が顕著であった。なお、甕形Bについても潮解は生じておらず、コップ形・深碗形に対する甕形の保管性については検討の余地がある。

②実験土器の状態 実験土器の状態については、破損(亀裂・割れ・剥離)、付着物の有無を観察した。

深碗形

表 4 第 2 回実験の経過観察結果

		役割	A										B						A
			土器No.	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F10	F11	F12	F13	F14	F15	F16	F17	F18	F19
実験前		土器重量(g)	113.2	89.6	108.3	82.8	108.3	81.7	104.9	70.2	101	68	59.9	76.9	79	68.8	66.6	63.1	
実験後	塩の状態		煎熬→焼塩										焼塩						粗塩か
	土器重量(g)	2024/9/15(a) 0日	151.1	114.9	145.9	117.0	151.0	130.2	143.2	103.5	151.5	108.7	72.4	87.8	97.2	82.3	76.5	72.8	
		2024/10/10 25	152.6	115.7	146.7	117.8	152.7	131.0	144.0	105.6	152.3	109.5	73.0	88.6	99.0	89.0	80.1	73.6	
		2024/11/24 45	171.5	121.0	155.0	120.5	170.5	125.5	160.5	114.5	152.0	122.0	74.5	102.5	103.0	93.0	90.5	78.5	120.0
		2024/12/15 21	168.0	121.0	155.6	116.3	167.2	125.0	158.0	111.3	150.2	116.7	74.9	103.8	108.8	94.8	92.1	85.2	119.3
		2025/1/12 28	166.6	119.5	153.7	115.8	167.0	122.0	156.6	110.7	148.7	117.4	77.7	108.3	113.0	99.0	92.4	89.4	114.1
		2025/2/2(b) 21	153.7	99.0	145.1	105.8	154.4	111.6	139.4	108.0	144.8	113.1	77.1	101.0	110.3	95.4	89.2	87.8	105.5
		増減 (a-b) 140	△ 2.6	15.9	0.8	11.2	△ 3.4	18.6	3.8	△ 4.5	6.7	△ 4.4	△ 4.7	△ 13.2	△ 13.1	△ 13.1	△ 12.7	△ 15.0	△ 105.5

コップ形

	役割	A										B				
		土器No.	C6	C7	C8	C9	C11	C12	C14	C16	C18	C19	C20	C22	C10	C21
実験前		土器重量(g)	90	84	89	146.5	136	117.5	157.5	113	109.5	66	105.5	110	131.5	102
実験後	土器重量(g)	塩の状態	煎熬→焼塩										焼塩			
		2024/9/15(a) 0日	115.7	113.4	113.4	189.7	163.1	138.2	180.5	147.0	139.1	110.9	143.4	148.9	141.2	133.1
		2024/10/10 25	119.5	116.8	119.6	201.6	170.0	143.6	190.8	154.8	147.8	107.7	151.2	158.2	145.1	143.8
		2024/11/24 45	125.6	120.2	125.7	213.5	177.0	149.0	201.0	162.5	156.5	104.5	159.0	167.5	149.0	154.5
		2024/12/15 21	126.6	118.3	124.7	214.0	182.0	152.3	204.5	160.8	156.6	105.5	160.0	162.3	169.0	155.6
		2025/1/12 28	128.0	120.8	127.1	216.5	183.6	153.4	207.0	163.3	161.0	109.9	170.5	163.8	173.0	156.9
		2025/2/2(b) 21	119.4	112.7	124.3	205.6	179.5	148.5	201.6	156.5	154.9	106.3	160.2	155.2	168.2	150.1
		増減 (a-b) 140	△ 3.7	0.7	△ 10.9	△ 15.9	△ 16.4	△ 10.3	△ 21.1	△ 9.5	△ 15.8	4.6	△ 16.8	△ 6.3	△ 27.0	△ 17.0

甕形

		役割	煎熬→移し替え					A				B
		土器No.	K6	K8	K9	K11	K3	K2	K4	K5	K1	K12
実験前		土器重量(g)	395	425	495	450	445	415	395	390	405	345
実験後	塩の状態		粗塩					粗塩				焼塩
	2024/9/15(a)	0日	—	—	—	—	535	495	500	530	555	410
	2024/10/10	25	493.8	584.3	649.3	630.5	528.5	513.8	529.3	555.5	526.0	422.5
	2024/11/24	45	477.5	528.5	583.5	586.0	522.0	532.5	558.5	581.0	497.0	435.0
	2024/12/15	21	498.5	549.0	615.0	593.0	538.0	549.5	582.5	585.5	506.0	438.5
	2025/1/12	28	496.0	546.5	615.0	597.0	538.5	544.5	566.5	589.5	509.0	439.5
	2025/2/2(b)	21	481.7	525.9	580.9	579.3	525.4	534.5	544.7	568.2	505	434.9
	増減 (a-b)	140	—*	—*	—*	—*	9.6	△ 39.5	△ 44.7	△ 38.2	50.0	△ 24.9

* 移し替えを行ったため正確な重量を反映していない

①潮解、②割れ・剥離 ③重量
 重量増加
 重量減少
 器面剥離・割れ

保管場所の環境（日中）		
2024/9/15	25℃	45%
2024/10/10	—	—
2024/11/24	20℃	46%
2024/12/15	14℃	40%
2025/1/12	—	—
2025/2/2	8℃	41%

* 乾燥場所へ 2 週間移動

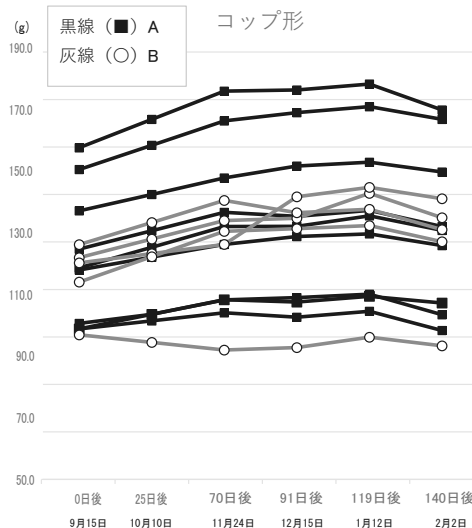
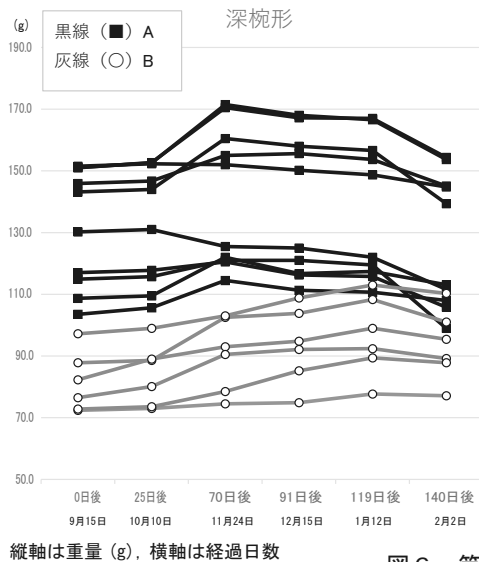


図 6 第 2 回実験の経過観察結果

実験終了時（9 月 15 日）では、深碗形 A の F 4・6、コップ形 A の C 11・12、甕形の煎熬のみと A のすべてには、器表面に亀裂や剥離が生じていた。さらに 70 日後（11 月 24 日）には深碗形 A の F 2・3・10～12・21、コップ形 A のすべてに亀裂及び剥離が認められた。また、119 日後（1

月 12 日）には、深碗形 A の F 1・5 が接合痕に沿った割れが認められた。いずれの個体も亀裂や割れからさらに剥離が生じており、器面の摩滅も著しい。

破損の傾向としては、深碗形 A では粘土紐接合痕に沿って亀裂や割れが生じる。また、コッ

プ形Aは体部外面に顕著な剥離があり、器面に空いた穴から、直径1 cm内外の剥離が認められる。甕形は、底部および体部下半の接合痕に沿って、5～10 cmの器表面の面的な剥離が発生した。

器表面は潮解過程で浸み出した塩水と吸湿により、器表面が濡れた状態となる。この濡れた状態では、さらに剥離や割れが進んだ。なお、119日後（1月12日）には計測のため、湿度の低い保管場所（湿度40～50%）へと移動した。2週間ほど放置したところ、実験土器の外面に薄く、薄い針状や霜状の結晶塩が付着するのが確認された。その後、元の保管場所に戻すと、今度は結晶塩が溶けて灰色状の膜となって土器に付着した。こうした灰色物質の付着は実物資

料においても認められ、製塩時ではなく、保管時に付着した塩の可能性がある（写真12）。

以上の実験土器の状態の観察からは、深椀形A、コップ形A、甕形の煎熬のみ・A→深椀形B、コップ形Bの順に破損が生じた。このため、器形の差にかかわらずA：煎熬→焼塩がB：焼塩に比べ、破損がやすく、保管性の面で影響があることが分かった。

③重量 経過観察では、定量的な変化の指標とするため、実験後の塩を含めた実験土器の重量の増減を検討した。破損した破片についても併せて計量し、実験土器と塩の重量の変化を対象とした。甕形の煎熬のみは、移し替えを行い、B：焼塩の工程を行ったため、増減は検討していない。

実験終了（9月15日）から70日後（11月24日）まで、コップ形BのC19を除いて実験土器も重量が増加した。70日後までの平均重量の増加は、コップ形Aで平均14.5 gの増加→コップ形Bで平均11.3 g→深椀形A 9.6 g→深椀形B 8.8 g

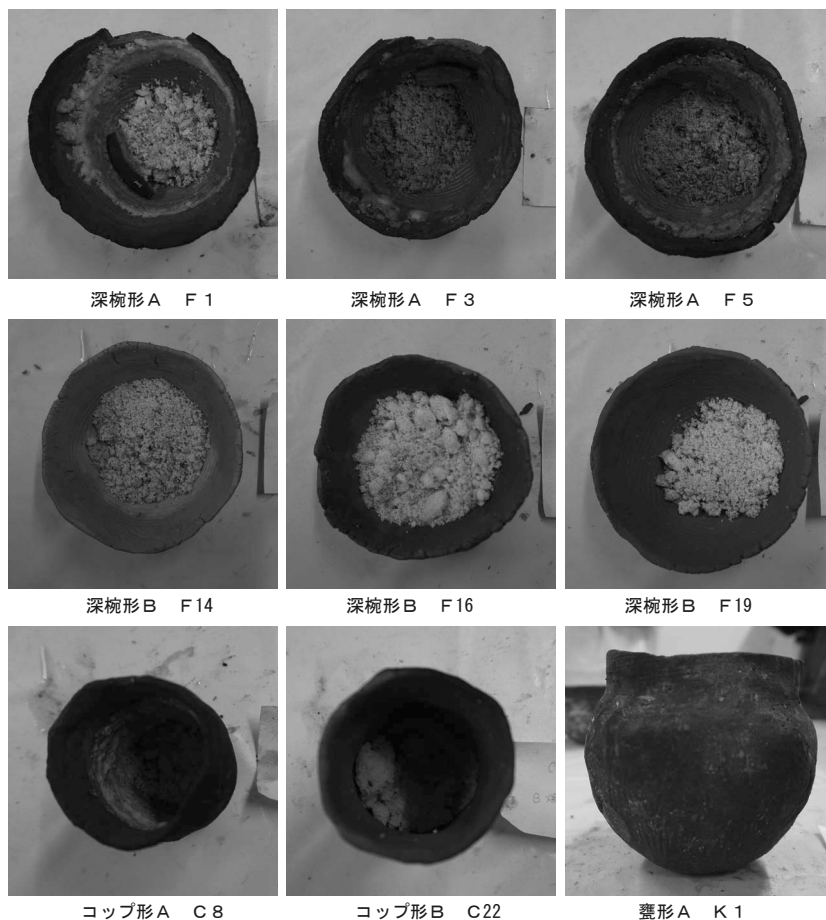


写真11 経過観察 実験終了91日後（2024.12.15）

の順となる。

91日後（12月15日）には、すべての深椀形Aで重量の減少が認められた。それに対して、深椀形B、コップ形A・コップ形Bは重量が増加する。これは深椀形Aの塩に潮解が認められるのに関連しており、潮解に伴う塩水の流出による重量減少が、吸湿による重量の増加を上回った結果と考えられる。119日後（1月12日）までは深椀形Aは微減し、それ以外の深椀形B、コップ形A、Bは微増またはほぼ変化なしとなる。また、140日後（2月2日）には、深椀形B、コップA・Bともに重量の減少が認められる。多くの実験土器で潮解が認められており、重量にも影響が認められると考えられる。

（4）経過観察に対する考察

塩の保存性 ①塩の状態、③重量からは、塩の保存性については、器形ではコップ形＞深椀形、工程ではB：焼塩＞A：煎熬→焼塩という結果が得られた。経過観察（第1回実験）の結果からは、

すでに焼塩＞粗塩という結果が得られている。塩の保存性の面では、粗塩中の塩化マグネシウムが吸湿性のない酸化マグネシウムに変わることから吸湿しにくくなるという、焼塩の有効性が認められる。

さらに、経過観察（第2回実験）では、焼塩でも移し替えを行うB：焼塩がA：煎熬→焼塩に比べ、優位な結果が得られた。これは煎熬に際して実験土器内面に付着したカルシウム化合物、マグネシウム化合物が潮解しやすいため、塩の移し替えを行うことで、潮解が生じる原因を取り除くこととなる。このため、煎熬後、焼塩に際して塩の移し替えを行うことが塩の保存性の面で有効であり、焼塩用製塩土器が別に必要とされると考えられる。

製塩土器の保管性 また、①

からは、器形の差は、コップ形の方が深碗形に比べ、塩の保存性に優位な結果が得られた。これはコップ形の形により、空気に触れる塩の表面積が少ない点によるとみられる。加えて、③の重量からは、コップ形の方が吸湿により重量の増加が顕著であったことから、土器による調湿効果がコップ形の方が高いと考えられる。以上の点から、深碗形に対してコップ形の方が、製塩土器の保管性の面でも有効であるといえる。

次に、②実験土器の状態からは、製塩土器の保管性では、器形に関わらず工程ではB：焼塩＞A：煎熬→焼塩という破損に対する強度が認められた。これは煎熬に際しての被熱だけでなく、器壁への含浸した塩が、乾湿の繰り返しにより水分とともに土器表面に移動し、塩の結晶化に伴う圧力や結晶自身によって、土器表面の粉化、層状剥離あるいは皮殻化が生じ、土器の破損へとつながる（青木 1985）。このため、製塩土器の保管性に

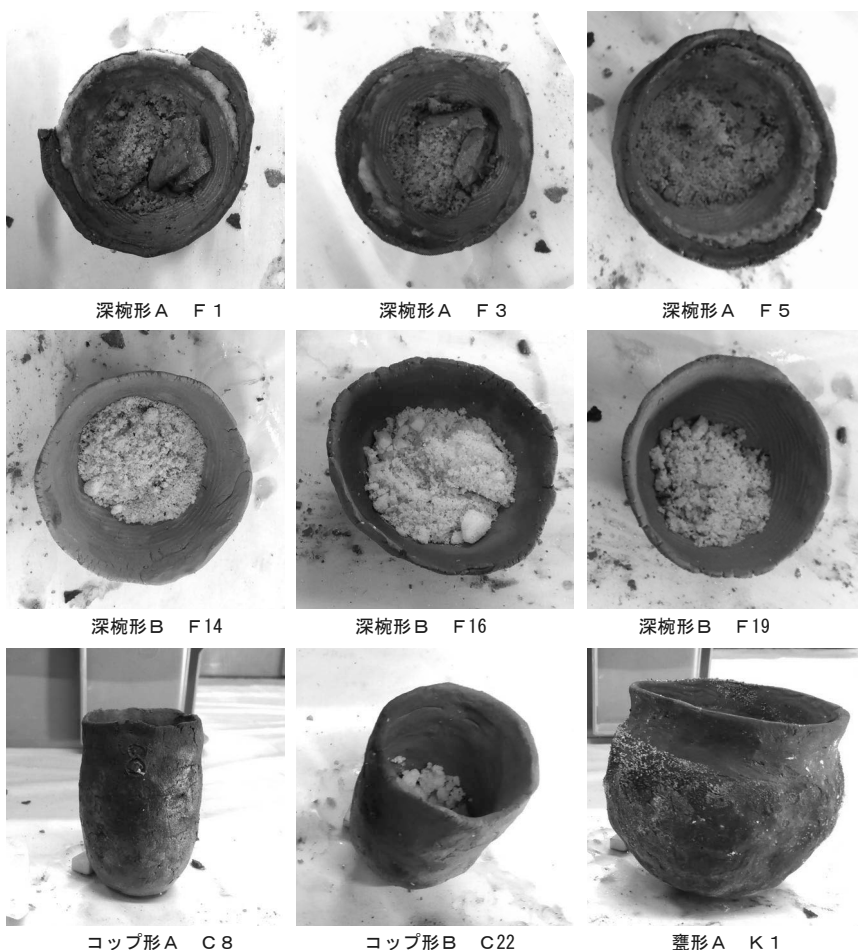


写真 12 経過観察 実験終了 119 日後 (2025. 1. 12)

においてもB：焼塩が有効であり、強度の面からも運搬性に優れていると考えられる。（田中）

5. 実験考古学的研究成果

製塩実験、使用痕分析、経過観察のそれぞれの検討からは、石敷製塩炉と丸底式製塩土器を用いた土器製塩の工程の具体を復元することができた。丸底式製塩土器にみられるそれぞれの器形の比較では、甕形が煎熬で、コップ形・深碗形が焼塩での使用が適当であり、生産性が高い。製塩実験と使用痕分析からは、工程によりそれぞれの製塩土器が使い分けられていたことを考察した。そして、経過観察では、コップ形の器形が吸湿と調湿という製塩土器の保管性の面でも有効であることがわかった。

さらに経過観察による工程の比較では、焼塩が塩の保存性の面で有効であり、A：煎熬→焼塩に比べ、独立した工程として移し替えを行ったB：

表5 実験・分析・観察からみる工程及び器形の有効性

	有効性	実験結果
工程	塩の保存性	B：焼塩＞A：煎熬→焼塩＞煎熬のみ（粗塩）
	製塩土器の保管性	
器形	塩の生産性	甕形＞コップ形・深碗形
	塩の保存性	コップ形＞深碗形
	製塩土器の保管性	
	製塩土器の生産性	深碗形＞コップ形
	製塩土器の収納性・運搬性	

焼塩は、潮解の原因となるカルシウム化合物、マグネシウム化合物を除去するという点で、製塩土器の保管性の面でも有効であることが判明した。本稿の検討からは、潮解とその原因となる吸湿を防ぐことが、塩の保管上重要とされたと考えられる。

では、コップ形に保管性の面で劣る深碗形の必要性が課題になるが、次の2点で深碗形が有効であると考ええる。1点目は深碗形の生産性を想定する。実験土器の製作においては、コップ形は1点あたり120～180秒を要したのに対し、深碗形が1点あたり50～60秒を要したことから、生産性の面で有効であるということである。また2点目は製塩土器の運搬性や収納性を想定する。コップ形が重ねることができないのに対し、深碗形は重ねることができる点などが収納性の面で優れていると考えられる。

以上の実験結果からは、製塩土器の器形と工程にそれぞれ機能と有効性が認められた。先行研究におけるこれまでの製塩実験では、考古学的事象と、実験目的、実験の復元精度の3者の間に乖離があり、土器製塩ができる／できないという結果のみの追求であった。そのため、実験によって得られた成果と考古学事象との接合には多数の可能性や未検証仮説を伴っていた。そこで本実験では、これら3者の接合を図り、製塩実験にとどまらず、使用痕分析及び経過観察による複合的な検討により、検証の蓋然性を高めていくことを目指した。こうした実験考古学的研究により、古墳時代の土器製塩に関して新たな知見が得ることができたといえる。（田中）

おわりにーワークショップと実験考古学ー

本稿では、当館が開催したワークショップを通じて第1回実験、第2回実験に基づいて、古墳時代の土器製塩について検討を行った。本ワークショップにおける一般参加者からは、「古墳時代の塩づくりの工程がよく分かった。」「製塩土器の用途の違いが理解できた。」「古墳時代の塩づくりを体験することができてよかった。」「和歌山県が当時塩の一大生産地であったことに驚いた。」「自宅でも経過観察を続けたい。」などの感想を聞くことができた。これらからは、本ワークショップの当初の目的はおおむね達成できたといえる。

翻って、全国の博物館等施設をみると、様々なワークショップ等が実施されている。しかし、その多くが、また当館においても、一般参加者へ向けてすでに結論が定まった予定調和的な実験内容であったり、その実験結果から考古学の研究へ還元が認められないものも少なからずあることも事実である。

考古学の成果を一般に広く伝え、その成果を還元していくためには、最新の研究成果に基づく内容であるべきだが、なぜそう考えたかという考古学の思考過程を共有することで、より研究の魅力を伝えることができるのではないだろうか。他方、考古学的事象と明確な実験目的、復元精度の高い実験が無ければ、なぜ専門性をもった学芸員や専門職員が担当者として実施するのかというジレンマに陥ってしまう。事実、ワークショップ等の開催や準備が、業務上の負担と感じている担当者も多いのではないか。

今後、こうしたワークショップ等を行う場所や体制が限られる中、博物館等施設におけるワークショップ等は、実験考古学的研究における重要な場となるだろう。そのためには、一般参加者が体験学習としての学びが得られることと、担当者が研究者として実験考古学による研究成果を得ることとの両立が、持続可能なワークショップ等の開催に向けて必要といえる。

ただし、本ワークショップが一回性のものであり、実験の準備から実施まで、その後の観察や

分析を参加者が行い、その結果を自ら考察するところまでに至らなかった。博物館等施設における学芸員-来館者という枠組みを崩し、共に考えるという関係の再構築を行うようなワークショップ等となるよう開催できるかどうか（加藤・松山2007）、今後の課題である。

今後とも当館では、古墳時代の土器製塩の研究に資するべく、引き続き検討を行うとともに、その成果を現代社会へと還元し、考古学が地域の資源や活力となるよう努力を続けていきたい。

（田中）

本稿の執筆は石丸 彩・岩崎郁実・佐藤純一・田中元浩・仲辻慧大・中西瑠花・馬場彩加・沼野月子・山田望海が実験後の検討・協議の上、それぞれを執筆し、文責は各項に示した。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、次の方々からご教示をいただいた。末筆ながら記して感謝の意を表します。

赤坂 宏・青柳泰介・揖 善継・小林正史・丸山真史・富加見泰彦・西庄遺跡研究会の諸氏

【参考文献】

- 青木繁夫 1985「土製品の保存・修復研究Ⅰ」『保存科学』第24号 東京文化財研究所
- 岩崎郁実 2022「奈良盆地における製塩土器―布留遺跡、十六面・薬王寺遺跡、南郷九山遺跡を対象に―」『国家形成期の近畿地方における馬と塩の関係に関する基礎的研究』奈良県立橿原考古学研究所
- 岩崎郁実 2023「生産地と消費地からみた製塩土器」『海浜集落からみた王権と地域』紀伊考古学研究会第26回大会資料集 紀伊考古学研究会
- 加藤幸治・松山千穂 2007「実践報告 歴史系博物館におけるワークショップの可能性」『紀伊風土記の丘年報』第33号 和歌山県立紀伊風土記の丘
- 近藤義郎 1958「師楽式遺跡における塩生産の立証」『歴史学研究』223
- 近藤義郎 1962「能登式製塩土器の研究」『日本塩業の研究』5

- 近藤義郎 1976「土器製塩と焼塩」『考古学研究』第22巻第3号 考古学研究会
- 近藤義郎 1980「土器製塩の話」2『考古学研究』第26巻第4号 考古学研究会
- 小林正史 2011「土器使用痕の分析方法」『土器使用痕研究―スス・コゲからみた縄文・弥生土器・土師器による調理方法の復元―』小林正史編
- 積山 洋 2004「大阪湾沿岸の古墳時代土器製塩」『畿内の巨大古墳とその時代』季刊考古学別冊14 雄山閣
- 積山 洋 2014「塩業と漁業」『講座日本の考古学』8 古墳時代下 青木書店
- 田中元浩 2024「紀伊の製塩土器」『古代学と遺跡学―坂靖さん追悼論文集―』同刊行会
- 田邊えり 2019「付着物質の分析による製塩土器の再検討―関東地方の縄文時代における事例―」『筑波大学先史学・考古学研究』第30号 筑波大学考古学フォーラム
- 中村敦子 1998「土器製塩研究と実験考古学―加曽利貝塚博物館による製塩実験―」『貝塚博物館研究紀要』第25号
- 広瀬和雄 1994「大阪府」『日本土器製塩研究』青木書店
- 富加見泰彦 2003「丸底製塩土器について―西庄遺跡を例にとつて―」『古代近畿と物流の考古学』学生社
- 富加見泰彦 2006「実験 古代の塩づくり」『紀伊風土記の丘年報』第32号 和歌山県立紀伊風土記の丘
- 松葉竜司 2021「第II部 地域の歴史と文化遺産の調査（京都府外）土器製塩実験から古代若狭の生産塩を考える」『フィールド調査集報』第7号 京都府立大学文学部歴史学科
- 安 英樹 2002「実験古代の塩づくり」『石川県埋蔵文化財情報』第8号

前山 A87・88 号墳の横穴式石室とその構造

萩野谷正宏

はじめに

和歌山県立紀伊風土記の丘では、特別史跡岩橋千塚古墳群の主要古墳を対象として昭和 54・55 (1979・1980) 年度に公開古墳台帳作成事業を実施した。公開古墳など 17 基の古墳を対象に埋葬施設である石室の現状を把握し、整備の基礎資料とする目的で実測調査が実施され、10 基の石室実測図面が公表された (和歌山県立紀伊風土記の丘 1982)。また、図面が未公表であった石室についても、平成 15 (2003) 年度以降実施中の古墳群整備事業に伴う発掘調査や、令和 4 (2002) 年度より実施の三次元計測により情報が更新され、成果が順次公表されている (和歌山県教育委員会 2010、和歌山県立紀伊風土記の丘 2024)。

しかし、上記事業対象古墳のうち前山 A87 号墳及び前山 A88 号墳の二基については、現状では石室が埋め戻されているためにこれを視認することができず、また古墳一覧表にも詳細は未記載であるため (和歌山県教育委員会 2019)、当時の調査記録が唯一の情報となっている。当該古墳は、いずれも岩橋型横穴式石室 (以下、岩橋型石室と表記する) を埋葬施設とし、その変遷過程のうち新相に位置づけうる型式学的特徴を有し、須恵器編年の TK209 型式期以降、6 世紀末から 7 世紀前半頃に築造された可能性が高い。

岩橋千塚古墳群では、TK209 型式期以降の岩橋型石室の様相については石室の残存状況が良好な事例が少

なく必ずしも検討が進んでいない。前山 A87 号墳・88 号墳は、当該期の石室構造を理解するうえで重要な情報を含んでいることから、当時の記録類を精査したうえで公表するとともに、その型式学的特徴から石室の構造及び編年の位置について検討を試みたい。

1 前山 A87・88 号墳の立地

前山 A87 号墳・88 号墳は、岩橋千塚古墳群の前山 A 地区に所在する (図 1・2)。丘陵主稜線から北及び北東方向へ派生する複数の尾根上に古墳が密集して分布するが、このうち北東に延びる尾根上の標高 95～110 m 付近には 10 基の古墳が密集する。これらは、二基の縦穴式石室を埋葬施設とする前山 A65 号墳など横穴式石室導入以前に築造された古墳や、TK43 型式期の築造で大型の岩橋型石室をもつ中型円墳の前山 A67 号墳など、埋葬施設の種別や築造時期の異なる古墳から構成され、当地区の特徴をよくあらわしている。

前山 A87 号墳は、このうち尾根の南側斜面に位置する直径 9 m の円墳である。事業報告によれば (和歌山県立紀伊風土記の丘 1982)、調査時には石室の玄室前道から羨道部は流土が堆積しており、

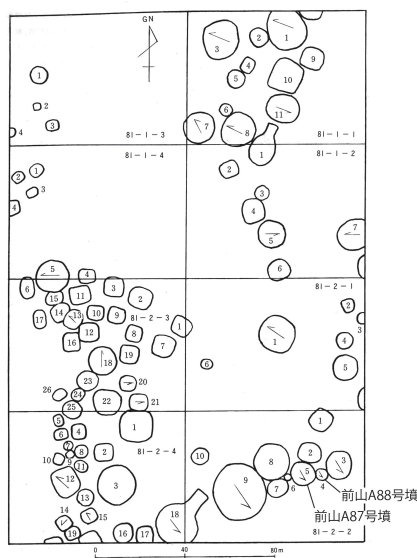


図 1 前山 A87・88 号墳位置図
(和歌山県立紀伊風土記の丘 1987)

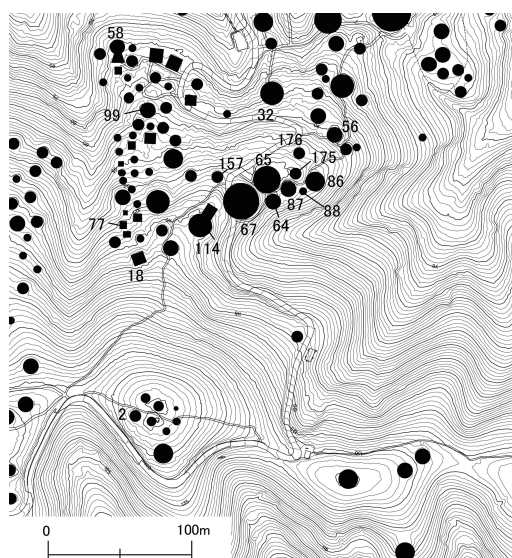


図 2 周辺古墳分布図
(和歌山県教育委員会 2019 を一部改変)

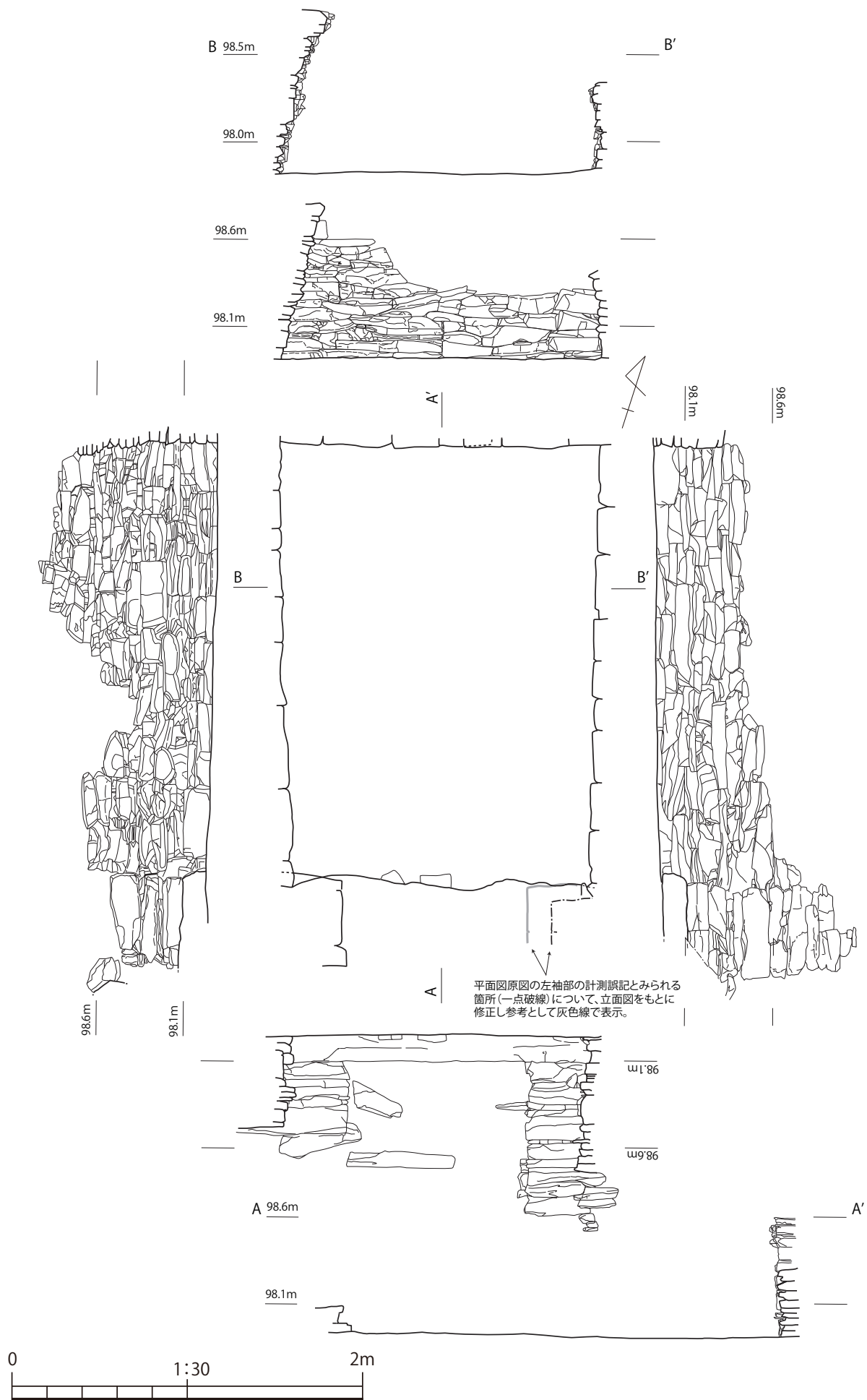


図3 前山 A87 号墳 横穴式石室実測図



图4 前山 A88 号墳 横穴式石室実測図

玄室の側壁は、床面から 0.9 m までが残存していた。天井石や側壁の上部は過去の乱掘により石材が除去されている。また、玄室床面の玉石もほとんど除去されていたとされる。前山 A88 号墳は、前山 A87 号墳の東側に近接する直径 5 m の円墳である。西側には直径 9 m の円墳である前山 A86 号墳が隣接し、両古墳に挟まるように立地する。石室の羨道部は床面付近に流土が堆積し、玄室側壁は床面から 0.8 m まで残存するのみで、天井石と側壁上部は乱掘に伴い除去されていたとされる。現在、両古墳の石室は埋め戻されている。

2 前山 A87 号墳の岩橋型石室

実測調査では、玄室及び玄室前道が確認された。以下、実測図及び写真をもとに特徴を記述する。

玄室は、長さ 2.5 m、奥壁幅 1.83 m、前壁幅 1.7 m で、わずかに奥壁幅が広いことから平面プランは羽子板形に近い。前壁のほぼ中央に玄室前道が接続する両袖式で、袖幅は玄室前道基石の直上では左袖幅 0.35 m、右袖幅 0.37 m である。玄室前道は羨道側が流土で埋没しているが、幅 1.05 m と幅広で、長さは主軸で 0.5 m 以上とみられる。

石材は結晶片岩の板石を用いており、側壁は幅 0.2 ～ 0.5 m の小口面を玄室内側に向けた小口積みが基本である。側壁の角度は右側壁の奥壁側で約 73 度、左側壁の前壁側で 83 度、奥壁の角度は約 84 度である。奥壁も小口積みとするが、主軸より西側（右側壁側）では厚さ 0.1 m 未満の扁平な石材を用いるのに対して、東側（左側壁側）では比較的厚手の石材を多く用いるようだ。

袖部は、横長扁平な石材を用いた平積みで一段一石積みとする。当該石材は玄室前道側壁の北側部を構成し、そこでは幅 0.3 ～ 0.5 m の小口面を向けている。玄室前道の基石は、厚さ 0.15 m、前壁幅 1.7 m を超える大型の石材を用いており、基石上に上記の石積みが構築されている。

3 前山 A88 号墳の岩橋型石室

実測調査では玄室、玄室前道及び羨道の一部が確認されている。玄室は、長さ 2.16 m、奥壁幅 1.08 m、前壁幅 1.04 m で、幅狭の長方形の平面

プランを呈する。玄室の前壁のほぼ中央に玄室前道が接続する両袖式であり、袖幅は前道基石の直上では左袖幅 0.11 m、右袖幅 0.14 m で、著しく狭い。玄室前道は、幅が 0.66 ～ 0.77 m、化粧石を含む玄室前道長は 0.4 m である。

石材は結晶片岩の板石を用いており、側壁及び奥壁は幅 0.2 m ～ 0.5 m の石材による小口積みを基本するとみられる。側壁の角度は両側壁ともに奥壁側で約 84 度であり、奥壁の角度は 87 度である。袖部及び玄室前道側壁は一段一石積みとする。玄室前道の基石は、長軸 0.8 m 以上、短軸 0.35 m の石材を用いており、その東端は玄室前道左側壁に接しているが、西端は右側壁下にあると推測される。したがって、基石は玄室前道の幅を超えるが、前壁幅を超えないと考えられる。

玄室前道と羨道の間には、確認される範囲で長軸 0.52 ～ 0.67 m の複数の板状石材が縦位に据えられており、化粧石と考えられる。化粧石より南には羨道が接続し、左側壁のみの確認であるが、約 1.6 m の範囲で小口積みを確認される。また、化粧石より南 1.58 m で床面に羨道基石とみられる短軸 0.32 m の板石が据えられており、当該部を羨門とする場合には、羨道長は 1.75 m となる。羨門から南における羨道前庭の有無は不明である。遺物は、清掃作業中に須恵器坏が出土した。

4 岩橋型石室の構造と編年的位置

岩橋型石室は、先行研究により型式学的特徴や時間的変遷が明らかにされており（森 1967 ほか）、筆者も大型石室の構造的分析を基軸にした 1 型式から 5 型式までの型式設定と、併行する中・小型石室の変遷及び構造について考察した（萩野谷 2019）。また TK209 型式期以降の岩橋型石室についても検討をおこなったことがある（萩野谷 2021）。本節では前稿に基づき、中・小型石室である前山 A87・88 号墳の石室の検討を行いたい。

前山 A87 号墳の石室は、①左右袖部が各々平積み 1 段 1 石積みの袖部 d 類である、②基石の幅が前壁幅を超える基石 d 類である、③玄室平面プランは長方形ではなく、やや羽子板型に近い、④前壁幅 1.7 m に比して玄室前道幅は最大が 1.05 m



写真 1 前山 A87 号墳 全景



写真 2 前山 A87 号墳 左側壁



写真 3 前山 A87 号墳 右側壁



写真 4 前山 A87 号墳 奥壁



写真 5 前山 A87 号墳 前壁



写真 6 前山 A88 号墳 全景



写真 7 前山 A88 号墳 左側壁



写真 8 前山 A88 号墳 右側壁



写真 9 前山 A88 号墳 前壁



写真 10 前山 A88 号墳 羨道側壁

と幅広であり、袖幅が短い、⑤玄室幅指数（玄室幅／玄室長×100）は、奥壁幅をとる場合は73.2である、などの特徴を認めた。このうち①～④は、石室規模は異なるが、岩橋千塚古墳群 TK209 型式期の大型方墳で首長墓と評価される井辺 1 号墳（仲辻 2024）の岩橋型石室と共通する特徴であることは注目される。

井辺 1 号墳の石室は、玄室の長さ 4.15m、奥壁幅 2.7m、前壁幅 2.3m で平面プランは羽子板形を呈し、石棚・石梁を有する。玄室幅指数は 65.0 である。前山 A88 号墳の石室は、井辺 1 号墳例に比して玄室幅指数がやや高く、羽子板形についても奥壁幅と前壁幅の差異が小さく井辺 1 号墳例と相似ではない。一方で、玄室長 2.5m の中型石室でありながらも、袖部 d 類、基石 d 類などの大型石室の主要な属性を踏襲し、かつ幅広の前道を有することから、当該石室は 5 型式の影響を受けて構築されたと評価される。帰属時期については、井辺 1 号墳に近接した TK209 型式期と考えたい。

次に、前山 A88 号墳の石室は、玄室長 2.16 m の小型石室であり、①玄室平面プランは幅狭の長方形で、玄室幅指数は 50.0 である、②前壁幅が 1.04 m に比して玄室前道幅は最大 0.77 m と著しく幅広であり、袖幅が極めて短い、③玄室前道基石は従来の基石 c2 類に比して前壁の幅により近く、前壁の石積みに明確に組み込まれる技法は顕著ではない、⑤玄室左側壁と羨道左側壁が直線上に位置し、玄室幅と羨道幅が近似する可能性が高い、などの特徴を見出せる。こうした特徴は、小型石室では大谷山 38 号墳（和歌山県教育委員会 2004）や寺内 87 号墳（和歌山県教育委員会 2020）の石室と類似し、岩橋型石室で最も新相の型式学的特徴と考えられる（萩野谷 2021）。これらは 5 型式及びこれに準じた構造に比して玄室平面プランが幅狭長方形化するのに伴い、玄室の幅が羨道の幅に近い値となるとともに、玄室前道も著しく幅広になった構造である。石室の主軸併行の遺骸配置に対応した形態と考えられる。

以上より、前山 A88 号墳は、5 型式併行よりも新相の特徴をもつ一群に含めて理解することが可能であり、帰属時期については大谷山 38 号

墳と同様に飛鳥 I・II 期に位置づけうる。また、大型石室である寺内 56 号墳（和歌山県教育委員会 2020）は玄室前道や羨道の構造に不明な点があるが、玄室長 3.3 m、幅 1.78m で玄室幅指数は 53.9 と幅狭長方形の平面プランを呈し、上記小型石室との関連性がうかがえる。これらは 5 型式に後続する岩橋型石室最終型式の一類型及び、それに準じた構造をもつ小型石室として理解でき、飛鳥 I～II 期に至り顕在化する可能性が高い。

以上、前山 A87 墳・88 号墳の型式学的特徴から構造及び編年の位置について考察した。紙幅の都合で検討できなかった点については、再考する機会をもちたい。

【参考文献】

- 萩野谷正宏 2019 「岩橋千塚古墳群における岩橋型石室の展開過程」『古代学研究』219 古代学研究会
- 萩野谷正宏 2021 「岩橋型石室の終焉についての覚書」『紀伊風土記の丘研究紀要 第 9 号』和歌山県立紀伊風土記の丘
- 仲辻慧大 2024 「井辺 1 号墳の調査成果」『岩橋千塚古墳群―特別史跡岩橋千塚古墳群第 4 次追加指定事業に伴う発掘調査報告書―』和歌山県教育委員会
- 森浩一 1967 「岩橋千塚の横穴式石室」『岩橋千塚』関西大学考古学研究室
- 和歌山県立紀伊風土記の丘 1982 「紀伊風土記の丘公開古墳台帳作成事業」『紀伊風土記の丘年報 第 8 号』
- 和歌山県立紀伊風土記の丘 1987 「岩橋千塚古墳群詳細分布図作成事業」『和歌山県立紀伊風土記の丘年報 第 13 号』
- 和歌山県立紀伊風土記の丘 2024 「特別史跡岩橋千塚古墳群保存修理事業」『令和 4 年度 紀伊風土記の丘年報 第 50 号』
- 和歌山県教育委員会 2004 『和歌山県埋蔵文化財調査年報 平成 14 年度』
- 和歌山県教育委員会 2010 『特別史跡岩橋千塚古墳群発掘調査・保存整備事業報告書 1』
- 和歌山県教育委員会 2019 『特別史跡岩橋千塚古墳群保存活用計画』
- 和歌山県教育委員会 2020 『岩橋千塚古墳群寺内地区確認調査報告書』

雑賀崎の漁業史（3）――一本釣漁師の四国出漁――

萩野谷正宏・池田佳祐

はじめに

和歌山市雑賀崎では、近代に一本釣漁師が多く活躍するとともに、長崎県の五島列島から、千葉県房総半島に至るまで広範囲における旅漁をおこなってきたことで知られている。

雑賀崎における旅漁は近世にまでさかのぼり、羽原又吉により「カタフネ」の漁業組織や末子相続の家族制度とともに漁業史の考察がおこなわれた（羽原 1955）。また平成 3（1991）年に高野山大学及び財団法人和歌山社会経済研究所による調査が実施され、近代の一本釣漁から、昭和 20 年代以降の小型底曳網漁への主要漁法の転換についてまとめられた（檜垣 1992）。

現在の雑賀崎においても底曳網漁が盛んであるが、一方で「下げ釣り」と呼ぶ伝統的な一本釣漁に従事し、旅漁をおこなっていた漁師も近年まで活躍していた。本稿で紹介する西山良夫氏はそのひとりである。雑賀崎で旅漁を経験する最後の世代である西山氏の漁業歴や出漁範囲等を記録に残すことは、和歌山県域における漁業史を理解するうえでも重要と考えられる。

ところで、本論の執筆者の一人である池田は、代々営まれてきた漁業を継承しながら、宿泊業及び食堂を経営して雑賀崎地域の活性化に取り組むとともに、当地域の歴史や伝統文化を研究する。一方、萩野谷は、令和 3（2021）年度より県域の漁具を調査する過程で、池田の協力で雑賀崎の漁師への聞き取り調査と、漁具の調査をおこなってきた。

本稿は、前稿までの研究（池田・萩野谷 2022・2024）に引き続き、長年雑賀崎で活躍された漁師への聞き取り調査記録に、若干の考察を加えたものである。以下、1 を池田と萩野谷が、2・3 は萩野谷が執筆し、最終的に両者で討議・修正をおこなった。

1 聞き取り記録

今回聞き取りにご協力いただいた西山良夫氏は、昭和 23（1948）年生まれで、家は雑賀崎で代々漁業を営んできた。聞き取り時は 74 歳である。中学 3 年生の頃より父から一本釣漁を学び、高知県から和歌山県の広域で旅漁をおこなってきた。氏の経験は、雑賀崎の漁業史を理解するうえで不可欠な情報を含むことから、出漁範囲や季節、対象魚種、漁法などの詳細について聞き取りを実施した。

聞き取り調査は、令和 5（2023）年 5 月 21 日に和歌山市雑賀崎の食堂「うらら」にて実施した。

以下、「」は西山氏の発言内容であるが、項目別の整理と一部ご発言への補足を（ ）書きで行っている。

徳島・高知への出漁 「昔からタイの一本釣をやっていた。春はタイ釣って、夏は潮岬（和歌山県串本町）でメダイ[メイチダイ]、アカッポとかメンドリ[ヒメジ類]とかそういうものを釣っていた。」

「僕はずっと一本釣で、（底引）網は乗ったことはない。昔やったら一本釣の船は最盛期で 80 杯ほど。底引き網より多かった。今やったら、一本釣は 8 隻。僕ら泊まり込みで船に寝て行ったが、今のグループはそんなことはしていない。

10 年前までは船に泊まって（一本釣を）やっていた。春、3 月から 5 月のかかりまでは白浜（和歌山県白浜町）でタイ釣り。蒲生田岬（徳島阿南市）で 12 月ぐらいまでアジ、イサキ、ガシラを釣る。雑賀崎を出て、（良い）天気やったら、1 日、2 日泊まって、魚をもって家へ帰ってきた。それからまた潮岬へアカッポとかメダイ[メイチダイ]を釣って、12 月には高知県に行った。室戸岬に行き、東陽町の甲浦かんのうらというところで、アマダイ、タイを釣った。徳島県の穴喰との境の甲浦

で泊まって、冬だったら室戸岬まで商売していく。水揚げはここでやったり、向こうにまわったり。こっち（甲浦）なら毎日風呂あったし、向こうならないから、タクシーで二日に一回くらい^{おか}陸にあがらなければならない。こっち行きの船は7杯はいてた。「ナカマブネ」で、ここを拠点にして。天気がいい日には、（高知県室戸市）椎名に泊まらせてもらったこともあった。この間でアマダイ、タイを釣ったりして。冬場の北西やったら風がいつもない。冬やったら。東や南（の風）は絶対あかん。地元では大敷網やったり、カツオ釣りにいったりしている。僕は奈半利（高知県奈半利町）までしか行ったことがない。足摺岬まで行こうと思っても風が北西（の風）ばかりでよう行かんと、ここでとまってしまった。

仲間、ここでクエ縄をやっていた。底引き網をやる前やで。僕は18歳くらいから行っていたが、（雑賀崎では）その前から行く習慣はあった。僕は行かなかったけど、五島列島まで皆行っていたので。時期によってあっちへいったり、こっちへいったりしていた。」

「（徳島県阿南市の）伊島に港があり、橋がかかっている。こちら（伊島の西側）は人が住んでいない。倉庫ばかり。この間に磯がいくつもあり、そこらで商売していた。ガシラ釣ったり。父と二人で乗ってた。〇〇さんがおか（陸）に上がったんで、その船買うてからは、二杯で一人ずつやってた。明けになったら釣る。4時30分まわったらやってるで。」



写真1 西山 良夫 氏

「三重へは行かない。潮岬は超えなかった。西ばかり。（徳島県牟岐町の）大島でもよく。この湾口でもよく寝たよ。天気よかったらやで。あかなんだら（徳島県美波町）由岐というところよく行った。出羽島で魚買うてくれたらしい。僕は売ったことはないが。魚が傷まないし。」

「（高知県では）船の中泊まるよって、天候によっては、こっちきたら甲浦に泊まったり、椎名に泊まったり。漁やってる近いとこでな。（高知県室戸市）佐喜浜は川の港よって中は行ったら真水よってエビは死ぬやろ。椎名では大敷網が出るまで邪魔にならないように。ここやったらテレビもよう映るし。昔やったら、窯で木炊いたが。僕乗ってから、小さなガスボンベのガス釜。」

「四国には9年前まで行っていた。タイ釣っても金にならなくなってから行かなくなった。

（最盛期は）正月前に帰ってきたらキロ8千円、9千円くらい。最後の年はキロ3千円くらい。現在は（雑賀崎の一本釣は）加太の沖でアジ釣っているだけ。泊まり込みは行かない。

安いし、エサもない。エビももてない。みんな年いってきて。」

「（風は）北西ならええ加減。北からなら前からくるから（悪い）。南や東なら、ここらうねりで船は乗れない。風がきたら、すぐ波くる。どこぞの港に入らないと死んでまう。」

「親は、大島までしか行かなかった。自分の代で、アジアカエビ、シラサエビ〔ヨシエビ〕で、室戸岬の鼻へタイ釣りをようやった。クエ釣ったり。大きなカンパチ。小さいやつならあがるが、大きいのだったら上がらない。室戸岬の鼻は大きな魚が多かった。

その頃は、ヤマみてかかりをやった。その頃、ソナーはなかったんで、ヤマを見て。20年前は僕ら（ソナーを）持っていたが、最初はなかったの。」

「あが一人になってからは、潮岬までしか行かない。潮岬ではアカッポ、メイチがある、高知県ならグシ〔アカアマダイ・シロアマダイ〕、イトヨリ、タイやらなんでもあった。あがの自分の好みでな。

天気具合で働くところが変わる。釣って、大島のところから、白浜へ魚卸しにもよういったで。

一本釣のカブラ 「僕は一本釣ばかり。その場所で釣るものが違う。ここ（徳島県伊島）では疑似餌でアジやイサキばかり。高知県では、エビもって。アマダイはカブラ（を使った）。いまは使わないけどな。アマダイとタイ（の道具）は、カブラは一緒。魚によって大きなハリを使うか小さいハリを使うかの違いだけで。」（写真2・3・4）

かかり釣り漁師について 「かかり釣りは、Tやん（がやっていた）。磯の具合でよいポイントに船を据える。エサ籠に入れて撒いて、その中に釣針とエサ仕込んで一緒に流す。Tやん、今でいうたら、双子島、中ノ島、その上にかかったところでばかりやってた。朝エサ引いて。（籠に）エサ入れるやろ。ひっくり返し落として、ある程度の所で止めといたら、エビ出やしてよ。それで、釣針をエサさして一緒に放り込んでおくよ。カワツ（エビ）と一緒に出すというんかな。それで釣ってたんよ。エサ撒いてると魚ついてくるんよ。

それあかなんだら、春、高知県のタイ釣りによう来ていた。室戸岬までまわってやってた。春だけやで、秋行かなんだ。安かったけど高知県のほうがタイよう釣れた。値段は安かったけどね。魚大きかったな。面白かった。よう釣れたから。」

雑賀崎の五島列島出漁について 「雑賀崎の灯台を造っているときに、（その）上から、みんなが五島列島へ行くのを、うちの父が行くの見送りに行ったことがある。小学校のかかりぐらいかな。僕が船に乗ってからはいつも行っていない。それで（五島列島行き）終わったからな。「カタフネ」で皆行った。5、6杯でかたまっていたと思う。五島列島の宇久島へ。」

「五島列島へは一週間ぐらいかかったと聞いている。室戸岬は、（当時は）12時間くらいかかった。昔のエンジンは小さかったから、そのぐらいかかった。」

深日・由良・鳴門への餌の仕入れ 「泉南の深日にエビ買いに、兵庫県の淡路島の由良にもよう買いに行った。鳴門に買いに行く人もあった。あち

こち行っただ。船で。頼んでいて、向こうの船に買いにいった。（買ったエビは）船の中の生け簀に活けておく。高知県だったら、二週間、半月漁に出るから。

寒くなったら雑賀崎でエサの都合をつけたが、秋先に深日や由良で買うていった。グループで買って、みんなで、割って。それから潮岬、白浜から向こうにいった。多い時は6人くらいで割った。鳴門は50年くらい前。僕の船は昭和58年に卸した。

（鳴門へは）僕らも4、5回行ったことがあるが、鳴門は、撫養の瀬戸の潮が早いからいいことがなかった。エサ買いに行っても泊まらなければならぬ。晩に泊まって、あくる日に帰る。いやだった。他のところなら朝行って戻って帰ることができる。エビは、シラサエビ。あのエビが一番（魚の）喰いがよかった。

タイ釣りに行ったら、室戸岬の鼻いったら、アジアカエビを割いてやった。小さいやつをカブラにつけて。シラサエビをエサにさしてやっても魚食にくるが、頭ちぎったらけえへん。アジアカエビはちょっと釣針に残っていても魚くる。シラサエビではけえへん。エサでも違う。

春だったら、カワツエビ、こころでトビというが、それが一番良かった。船の中の生け簀に砂を引いて、生きのいいのは砂に潜っていて1か月くらいは死ななかった。

高知県でも、白浜行く時でもエビを入れるが、生け簀の砂の中に潜ると活きがいい。全部昔からの知恵。親に聞いてよ。今はエビはいらない。今は疑似餌こしらえてアジ釣るだけだから。今雑賀崎の漁師でエビ使う漁師はいないよ。カブラはもう使わへん。」

「（潮の流れが特に早く危険な場所について、）鳴門が一番早い。撫養の細い所（撫養の瀬戸）、小さい船は、撫養のところ抜けて通る。撫養の港で、エビよう買うた。昔の漁船は、五島行くのも、ここ通った。瀬戸内海とおって。（鳴門は）潮早いて、ここ（撫養の瀬戸）は緩いんよ。この間抜けて雑賀崎まで行けた。」

「兵庫県の（淡路島の）由良のところまで行った。由良に灯台がついている。エサ買って、雑賀崎まで戻ってきた。由良までは2時間もかからない。1時間半くらい。そこ行って、11時くらいまでにエサ買って、それで港へ戻ってきて、あくる日、潮岬まで行ったよ。」

「トキジオ」「ニツ」「シショウ」「瀬戸内海の向こうは行ったことないので知らんけど、「トキジオ」といって、潮下げてきたら「シショウ」と言う。上げてくる潮は「ニツ」と僕は言う。日ノ御埼までしかその潮はないんよ。伊島から30分、1時間も向こうに行くと、もうその潮行けへん。「トキジオ」ないんよ。「トキジオ」で行くのは、日ノ御埼と伊島の境界線で、仮に12時に「ニツ」いてるやろ、あくる日になると、1時前に潮が絶対下りてくる。潮岬、白浜行っても、高知県に行っても、（潮が）どっちから来るか、現場に来るまでわからない。（潮が）上っていたら、20日上るか、ひと月上るかかわからない。上^{かみ}にいてたら、今日何時にきた潮が、明くる日に何時に（下る）かがだいたいわかる。潮の時間で行くのは、日ノ御埼から伊島境界より上は「トキジオ」というが、こっち（境界より下）はなんなわからん。」

「加太なら確実に潮が時間でやってくる。関空ができてから潮の流れが変わったというが。」

日ノ御埼の鼻ちょっと行ったらそんな潮いてへん。御坊の沖、鯉島行ったら、この潮いてへん。潮がどっち流れてるかわからん。」

「底引きより、釣りのほうが潮の具合は繊細。田倉崎の鼻にいてて、友ヶ島のところの沖とは、30分、早くても25分ぐらいは潮が違う。田倉崎の方が早い。こっち（雑賀崎）帰ってくるには、向こう（沖）にいてたほうが遅れる。向きや、走っている間隔でわかる。」

「潮岬は、着いてみないと潮はわからない。こっち（境界より上）ならだいたいわかる。仮に今日は10日だったら、「ニツ」のぼってくるとかわかるが、（境界より下では）こっちではわからん。潮岬、白浜行っても、潮が上ってるか、下がってるかは（現地につかないと）わからん。」

「「ニツ」、「シショウ」は、上り、下げともいうかもわからんが。「シショウ」とは「四」ということ。雑賀崎だけかもわからん。白浜では上り潮、下り潮というだけで、わからん。」

潮岬への出漁 「潮岬は、潮は平気に下げてる。あそこは、年がら年中、潮の向きが。（潮が）下げたら、南東の風やったら潮逆らうのでえらいで（南東から風が吹いてきて潮が下げたら波が高くなる）。」

「潮岬には、時期によって、秋なら6時ごろ浜行って、行ったけどな、すさみ（和歌山県すさみ町）に晩に泊まる。日置（同白浜町日置）の鼻で釣りやって、すさみに泊まって、あくる日、天気良かったら、潮岬の方向いて行った。天気の具合で行けやんときあるけど。三日くらい泊まって、また白浜の瀬戸（同白浜町瀬戸）に魚を売ってた。今は瀬戸には市場はない。アカッポとかメイチとか、そこは値よかった。キロ5000円くらいよの。春はタイとかそこで卸していた。」

江住（同すさみ町江住）で泊まっていた。枯木灘から潮岬向いて行ったところに鼻がある。その湾口の中で寝た。港に入って。港と言っても、在所の外や。」

イカ釣 「（ヤケ）イカを釣るのに、「スッテ」いうて、鉄の爪が何本もついたやつよ。アジの塩もんとかコンコ（タクアン）を竹の上にのせてくくっておく。平たい竹でこしらえた。それでヤケイカ釣った。糸や、細い針金とかでぐるぐるに巻き付けた。ヤケイカはシリヤケイカだ。昔はぎょうさんイカが釣れた。この近辺で、釣りの船も下からぎょうさん来てた。双子島の近辺で。昔はガスランプ付けて、電気でできてからは電気を付けて。夜中、多い時は一晩で千（四）くらい釣った。（一度に）二つ、三つかかかってきた。双子島の沖、灯台の沖でイカ釣りをやった。昔だったらなんぼでもいた。餌木（えぎ）はアオリイカだが、アオリイカはそんなに釣れなかった。ヤケイカが釣れたのは僕らが二十歳になっていないとき、50年以上前の頃。その頃は、底引きよりも一本釣の船の方が多かった。」



写真2 雑賀崎漁港（2022年2月撮影）

カブラの鉛について 「最初は、竹の筒を切って、泥で止めて、そこに鉛を流した。それを自分の好みによって、重たい、軽いに切断して、切り込み入れてはめ込まなければならない。

昔はそうだったが、僕らの世代には、（カブラの鉛は）店で売っていた。5番、6番とか。誰もそんなこと（手作り）はしてなかったが。一本釣はじめたときは、鉛はもう手に入っていた。（しかし、）仕掛けは自分で作る。人によって、仕立て方があるから、自分で研究して仕掛けをこしらえた。深さの具合によっても、ナイロンの延びるところと延びない所とを調整した。60m、70mと、120mで深さが違うと、延びる分ばかりだと（魚の）かかり悪い。延びるのを、下だけ伸びないやつを作るとか研究したよ。」

漁船について 「ヤンマーディーゼルで、単発の6馬力。エンジンはセルと違って手でかけた。それから、ダブルエンジンの12馬力になって、次に、3気筒の17馬力になった。高知県までは、17馬力で10時間かかった。帰りはもう少し早いが。」
「サゲブネは、中学校のころは木造の船、潮岬行っていたころはFRPの船。（大きさは、）3.5トン。」
「木造のサゲブネは、わしのいま乗ってる船（FRP）で33尺（だから）、あれと同じだと思うが。いま乗ってる船は3.4トン。僕が乗るのは一人。全部ひとり。大きい船も小さい船も。」

連中について 「連中は、四人おった。屋号はなかった。」

雑賀崎の漁業 「昔はサゲブネが底引き（網）よ

り多かった。僕らも昔は底引き（網）の許可持っていた。親が持っていた。Kちゃんにその許可買ってもらった。親から底引きするかと言われたけど、釣りのほうが好きやった。一人になってから、持ってもしょうがないと思って買うてもらうた。」
「Sちゃんの親、あの人らも潮岬までサゲでな。Tさんもあまり遠いとこまでいかなんだ。Nのおばあちゃんの親らも遠くまでいかなんだ。日ノ御崎まで。自分の好みで働いたさかいよ。

僕は室戸岬まで、潮岬を超えたことがない。潮岬の鼻まで商売したけど、エナ（江住か）というところで寝に来たけど、向こうに回って寝てない。船泊まるには。」

「今はサゲブネは、6杯くらいしかない。底引きでも継ぐ人いないわして。底引きも減るばかり。うちの孫でも底引きせえへんて。どこでも継ぐ子なく漁師減るばかり。」

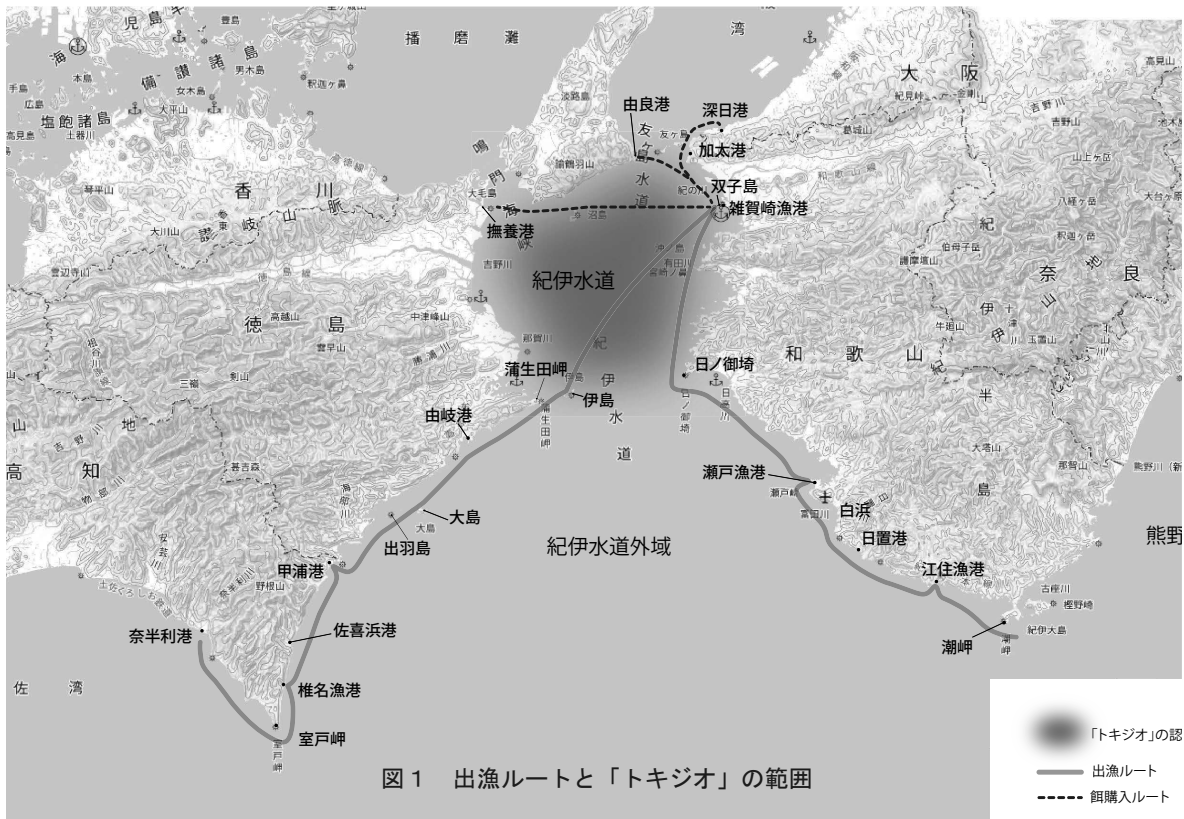
2 考察

西山氏は、昭和38(1963)年頃から平成25(2013)年頃までの約50年間にわたり雑賀崎の一本釣漁師として旅漁に従事されてきた。現在、雑賀崎では旅漁を伴う一本釣漁はおこなわれていないため、旅漁経験をもつ最後の世代として聞き取り内容は重要な情報を多く含む。

以上の西山氏への聞き取り記録から出漁範囲及び宿泊地、時期、漁法、魚種などを図1・表1・2にまとめた。以下では、旅漁を含む出漁範囲と漁場、潮流について若干の考察をおこないたい。

①出漁範囲の概要

図表に示すように、西山氏の出漁範囲は、四国の室戸岬周辺（高知県室戸市）を西限とし、紀伊半島の潮岬（和歌山県串本町）を東限とする範囲であり、おおむね紀伊水道外域に相当する。また1年間のうち春季は白浜（同白浜町）、夏季より秋・冬までは伊島（徳島県阿南市）から大島（徳島県牟岐町）と、和歌山県の日置（和歌山県白浜町）から潮岬、冬季には甲浦（高知県東陽町）・室戸岬・奈半利（高知県奈半利町）へ出漁しており、季節ごとに漁場を変えているほか、雑賀崎の双子島沖



(和歌山市)でもイカ釣をした。漁法は一貫して一本釣漁であり、対象魚種はタイを主体としつつも季節や漁場で最も適した魚種を選択していることに特徴がある。

また、聞き取り内容から、一回の出漁期間は、最も遠方の高知県への出漁は2週間ほど、潮岬への出漁で3日間であった。出漁期間中の宿泊は、徳島県では大島の湾口、高知県では甲浦や椎名(室戸市)、和歌山県内では江住(すさみ町)の湾口に船を停泊して船内に宿泊し、船内のガス釜を使用し調理をしたという。高知県へは、7隻ほどの船の「ナカブネ」で出漁している。また長崎県の五島列島への出漁も「カタフネ」で出漁していたという目撃証言からも、遠方への出漁は「カタフネ」制度による「ナカブネ」であったと推測される。

②漁場の重層性

前稿(萩野谷・池田 2024)で報告した昭和20年代の一本釣漁師である池田健一氏の出漁範囲は、雑賀崎の双子島沖、有田・由良・日ノ御崎周辺(和歌山県有田市～美浜町)のほか、白浜・すさみ・串本周辺(同白浜町～串本町)、さらに紀

伊半島東岸の熊野・尾鷲(三重県熊野市・尾鷲市)から志摩半島の浜島(三重県志摩市)である。

紀伊半島西岸の紀伊水道及び紀伊水道外域、紀伊半島東岸の熊野灘を広く漁場とし、さらに長期間の旅漁として五島列島(長崎県)への出漁を経験していた。また当時、房総半島(千葉県)まで出漁する漁師がいた一方で、日ノ御崎までの紀伊水道を主要な漁場とする漁師もいたことから、個々の漁師による漁場の選択は多様であったとみられる。

一方、西山氏が経験した昭和30年代後半以降の漁場においても、四国東岸から潮岬までの紀伊水道外域を漁場とする一方で、他の漁師では日ノ御崎までを主要な漁場とする漁師や、「かかり釣り」による双子島周辺を主要な漁場とする漁師もいるなど、出漁範囲は一様ではなく、個々の戦略に基づき漁場が選択され活動していたとみられる。

以上より、雑賀崎の漁師の出漁範囲は、①雑賀崎周辺、②紀伊水道、③紀伊水道外域(四国東岸・紀伊半島西岸)、④熊野灘(紀伊半島東岸)のほか、⑤五島列島や房総半島など遠方地域など、九州か

出漁先	時期	宿泊	漁法	対象魚種
白浜（和歌山県白浜町）	春季（3月～5月）		一本釣り	タイ
蒲生田岬・伊島・大島周辺 （徳島県阿南市～牟岐町）	夏季～12月	徳島県牟岐町（大島）	一本釣り	アジ・イサギ・ガシラ
日置・潮岬 （和歌山県白浜町日置～串本町）	夏季・秋季	和歌山県すさみ町江住	一本釣り	アカッポ・メダイ（メイチダイ）・メンドリ（ヒメジ類）
甲浦～椎名（高知県東洋町～室戸市）	12月	高知県東陽町甲浦	一本釣り	タイ・アマダイ
室戸岬・奈半利周辺 （高知県室戸市～奈半利町）	冬季	室戸市椎名	一本釣り	タイ・クエ・カンパチ
双子島周辺（和歌山県雑賀崎）			一本釣り	シリヤケイカ

表1 ヒアリングにもとづく出漁先一覧

餌購入先	期間	餌
撫養（徳島県鳴門市）	一泊二日	エビ（シラサエビ）
由良（兵庫県洲本市）	日帰り	エビ
深日（大阪府岬町）	日帰り	エビ

表2 ヒアリングにもとづく餌購入先一覧

り記録した宇田によれば、潮岬方面では「下りシオ」（東行流）と「上りシオ」（西行流）があり複雑に変化するとともに、「下りシオ」

ら関東地方までの広域で重層的な広がりをみせていたことがわかる。このうち、③④⑤で船への宿泊を伴う旅漁が実施されていたことになる。

③潮について

西山氏への聞き取りからは、加太沖から、徳島県の蒲生田岬・伊島と和歌山県の日ノ御埼を結んだ範囲（紀伊水道）で生じる「トキジオ」が、漁業活動に一定の影響を与えていることがわかる。昭和期に全国各地の漁師間の伝承を記録した宇田道隆によれば、規則正しい潮汐の干満に応じた潮汐流は、漁師によって「時（とき）潮」と呼ばれ（宇田 1984）、「トキジオ」はこれと同義とみられる。一方、「ニツ」と「シショウ」は各々が「上げ潮」、「下げ潮」の地域名称とみられるが、雑賀崎地域独自の呼称であるかは明らかではない。紀伊水道の「トキジオ」は、通航ルートや移動時間の予測、漁場の選択に影響を与えるものとして、その把握が当地域を漁場とする一本釣り漁師にとって重要であったと考えられ、長期間にわたり経験則として受け継がれていたと推測される。

一方で、紀伊水道外域のエリアについては、「トキジオ」が確認されないため現地に到着しなければ潮の予測が困難ということ、また、潮岬は一年を通して「潮が下げ」、南東風の場合は高波となるという西山氏の証言は興味深い。

紀伊水道外域は黒潮の影響が強く、その流れと風向き、漁況に係る漁師間の伝承を詳細に聞き取

では過去に八丁櫓船でものぼれぬほどの強流があったことが記される。また、黒潮はすさみ町「三つ磯」（三ツ石）に接岸後、分流して潮岬に向かう「下りシオ」と田辺沖に向かう「上りシオ」になり（宇田 1984）、地元では「振り分け潮」と呼称される（竹内 2006）。こうした潮の変化は、黒潮の直進流路と大蛇行流路に関わることが明らかにされており（竹内 2006）、直進流路をとる場合は潮岬周辺では「下りシオ」となり、強流となるようだ。

今後も漁師からの聞き取り調査によりさらなる情報の蓄積が必要ではあるが、紀伊水道と紀伊水道外域における潮の条件の差異が、旅漁を含む一本釣り漁師の漁業活動に一定の影響を与えていたことを指摘しておきたい。

3 おわりに

最後に、これまでの聞き取り調査から明らかとなった昭和・平成期の一本釣り漁師の漁業活動についての漁業史的意義について、若干の見通しを示し閑筆したい。

農林省水産局刊行『舊藩時代の漁業制度調査資料』（農林省水産局 1934）及び羽原又吉による『日本漁業経済史』（羽原 1955）によれば、近世の雑賀崎浦では縛網、手繰網、延縄漁などが行われていたが、明和・安永年間（1764～1781）に一本釣り（下ガ釣り）へ転換したこと、当時から志摩・阿

波・土佐に出漁し、一年の大半を他国で廻漁したとされている。また、『海草郡誌』には、享保年間（1716～1736）に堂ノ浦（徳島県鳴門市）の漁師からサワラ釣の漁法を教授された者が帰郷して、その技術が普及したとされる。

さらに大正6（1917）年の『雑賀崎漁業組合調査』（和歌山市史編纂委員会 1979）においても、「古老ノ言伝」として手繰網から縛網へ、さらに延縄漁に変遷した後、「今ヨリ式百年前」から一本釣漁へ漸次変遷したとされ、「三重南牟婁郡及徳島県海部郡方面ノ出漁ハ」「其起原百年前ニアリ」と記されている。また組合員は「鯛・鰯・鰯・鰯等ノ一本釣漁業ニ其大部分ヲ占メ」ており、明治12（1879）年の土佐出漁、明治20（1887）年の福岡・佐賀・長崎への出漁が開始され、「六月ヨリ十一月二掛ケ福岡・佐賀・長崎各県沿岸二拾数隻、十一月ヨリ翌年二月ニ至ル間徳島県沿岸二数十隻、十一月ヨリ翌年四月ニ互リ百数隻ノ漁船ハ東郡以東三重県沿岸に出漁スルヲ常例トス」と具体的に大正期の漁業活動が記されている。

近世の漁法や出漁の実態については、今後は古文書などの史料からの検証作業が必要ではあるが、ひとまず上記からは、おおむね18世紀頃に雑賀崎浦にて一本釣漁への転換がはかられ、18～19世紀には四国東岸から熊野灘へ出漁していた可能性があり、さらに明治・大正期はこれらの出漁先に加えて九州北部沿岸へも出漁したことになる。一方、『雑賀崎漁業組合調査』の「漁獲物運搬」の項目では「当組合漁船ハ常ニ西牟婁郡潮岬迄ノ沿岸ニ開展シ漁撈ニ従事スルモノナレバ」との記述があることから、大正期に紀伊半島西岸を盛んに漁場としていたことも確認できる。

予察ではあるが、明治・大正期の一本釣漁における広域の出漁範囲は、前節で明らかにした昭和・平成期における雑賀崎漁師の出漁範囲と重複していることは重要であり、長期間にわたる旅漁の伝統が、雑賀崎の漁師から漁師へと、技術とともに受け継がれてきた、海の生業の歴史として評価できるだろう。

多年にわたり活躍されてきた漁師がもつ経験や

知識は、残された漁具などの民俗資料とともに、その地域がもつ伝統文化のひとつとして詳細に記録していく必要がある。

今後も、聞き取り調査を継続していきたい。

末筆ながら、聞き取り及び民俗資料調査にご協力いただいた西山良夫氏に感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 池田佳祐・萩野谷正宏 2022「雑賀崎の漁業史（1）——一本釣り漁師への聞き取り調査から——」『紀伊風土記の丘研究紀要』第10号
- 池田佳祐・萩野谷正宏 2024「雑賀崎の漁業史（2）——一本釣り漁師の漁業歴と漁具——」『紀伊風土記の丘研究紀要』第12号
- 宇田道隆 1984『海と漁の伝承』玉川大学出版部
- 羽原又吉 1955『日本漁業経済史 下巻』
- 竹内淳一 2006「紀伊半島周辺の黒潮と振り分け潮」『和歌山県農林水産総合技術センター水産試験場事業報告 平成16年度』和歌山県農林水産総合技術センター
- 檜垣巧 1992『和歌山市雑賀崎地区調査報告書』高野山大学社会学研究室・財団法人和歌山社会経済研究所
- 農林省水産局 1934『舊藩時代の漁業制度調査資料』
- 和歌山市史編纂委員会 1979『和歌山市史 第8巻 近現代史料Ⅱ』和歌山市
- 和歌山県海草郡役所 1926『和歌山県海草郡誌』
- 和歌山県立紀伊風土記の丘 2021『開館50周年記念 令和3年度秋期特別展 海に挑み、海をひらく——きのくに七千年の文化交流史——』



写真3 カブラ（西山氏所蔵）

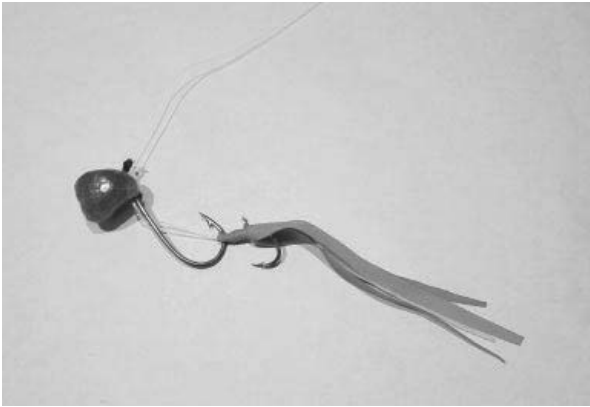


写真4 カブラ（西山氏所蔵）



写真5 雑賀崎漁港（西山氏所蔵）

『日本漁民事績略』にみる紀州漁民の活動

蘇理剛志

はじめに

『日本漁民事績略』（以下『事績略』と表示）は、財団法人日本常民文化研究所が、昭和30年（1955）に同所の機関紙である「常民文化研究」第73輯として刊行した水産史関連の研究書である。

本書は、日本の漁業史的に功績のあった人々の事績について、江戸時代から明治期にかけての文献資料から漁民の動向について人物ごとに抄出し、日本各地での漁業の創始や変遷、伝習、改良などを通覧して、日本漁業の歴史を網羅的に把握しようとする目的があった。

本書には、和歌山県（紀伊国）の漁民等の事績も多く紹介され、我が国の漁業の歴史の中での紀州漁民が果たした役割やその動向、技術の変遷、他地域との交流等を見るうえで重要な内容を多く含んでいる。そこで、本書の内容から和歌山県の漁業等に関連する事績を人物単位に抜粋し、事績の年代順に一覧表を作成して、本県における漁業史研究を進めるうえでの今後の参考としたい。

1 渋沢敬三の漁業史研究の構想

日本常民文化研究所を主宰した渋沢敬三（1896-1963）は、祖父である渋沢栄一の志を継いだ政財界人の道と、自身の関心である生物学・民俗学の学者の道という二足の草鞋を履き、昭和前半期の日本の政財界を牽引する傍ら、大正14年（1925）に自邸にアチック・ミュージアムを創設し、民俗学の同人を集めて1930年代以降、日本の常民文化に関する共同研究をさかんに行った。

このなかで日本漁業の生活史は、渋沢が生涯をかけ追及した中心的課題の一つであり、戦後の昭和20年代には水産庁の委託を受けて全国の水産資料の調査事業などが精力的に行われた。

渋沢は、民具研究をはじめとする常民文化研究を進める上での手がかりとして、日本各地のくら

しの中に生きた「①ことば（言語伝承）」、「②ひと（行為伝承）」、「③もの（造型伝承）」を重視し、この3つのテーマ設定から庶民のくらしの歴史を明らかにしようと考えた。漁業に関しては、従前の漁業史一般以外に「①魚名」「②漁民」「③漁具」の三方面からみた漁民の生業史的な実態解明をめざした。

『事績略』は、上記の渋沢の研究方針のうち②に関する研究成果として刊行されたものであり、とくに各地の文献記録や地元民の口頭伝承として伝えられる個人の事績や生活記録に注目し「水産に関しての発明その他功労のあった、また技術を伝播した人々の事績」（渋沢1954）をまとめたものである。

内容は、前近代から明治末年ごろまでの漁業者の事績を主な対象とし、「各種漁業関係雑誌其の

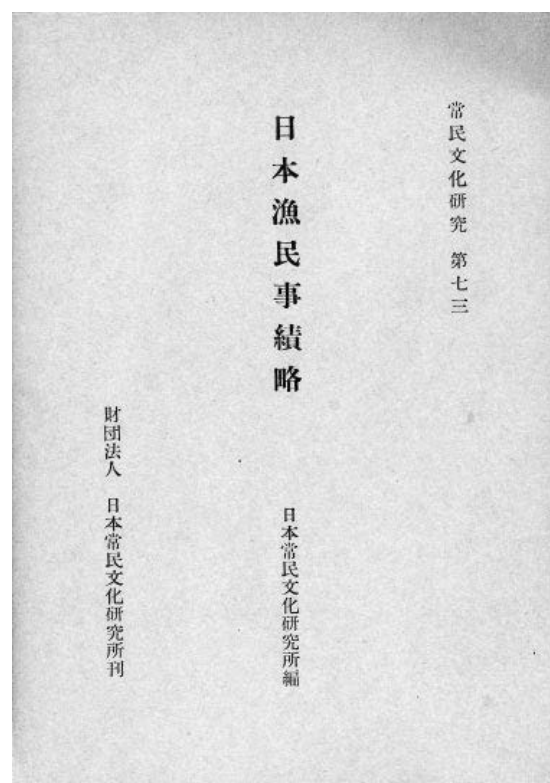


写真1 『日本漁民事績略』
（日本常民文化研究所1955）

他の文献から断片的に報告されて居る我国漁民の事績記録を蒐集する」ことを通じて、「漁場発見、漁具の発明や改良、漁法の改善又は伝播教導、魚族保護、魚介藻の移植や新規養殖水産製造等各種事績（中略）を一つの場に集めて通覧すると我国漁業史を検討する上に索引的な意味から極めて価値ある資料たり得る」と考え、鈴木行三が主担当となり漁民の事績に関する情報蒐集と編纂にあたった。

2 本書の構成と抽出法

本書に収録・紹介された日本全国の漁業関係者の数は、2459人に及ぶ。また本書が底本にした引用文献は、江戸時代の史料、地誌類をはじめ、近代の都道府県史、水産関係調査報告、内国勸業博覧会報告など390点である。

取り上げた事績については、各地域の漁業の創始や発祥を文化史的に示したい考えから、各地の地誌等に記載される神話・伝説等も積極的に盛り込んでいる点に特色があり、このため事績が掲載された人物の時代については、およそ古代の伝説的漁師から明治・大正・昭和戦前期を生きた人々まで幅広く取り上げられている。

和歌山県に関する参考文献に関しては、江戸時代に編さんされた『紀伊続風土記』や『南紀徳川史』、明治になって刊行された『和歌山県東牟婁郡捕鯨沿革』、『水産博覧会第一区第一類出品審査報告』などを採用している。なかでも昭和9年に農林省水産局が編さんした『舊藩時代の漁業制度資料』は、旧藩時代の漁業制度の沿革について全国調査した報告書だが、和歌山県については江戸時代から明治時代にかけての各村の漁業実態が詳しく紹介されているため、これを参考書として大いに役立てている。

こうした文献調査の結果、和歌山県（紀州）出身または関係する人々が207人抄出されたほか、紀州で活躍または紀州人と交流した人々は20数名を数えるなど、本書で紹介された事績の約1割弱を占めている。

『事績略』は、事績の項目を地域の別なく、人

物名の五十音（アイウエオ）順に配列し編集している。このため、地方史研究の資料としては事績に関する時間軸や地域分布がやや分かりにくい。そのため本稿では、『事績略』の内容を基に、事績をおおよそその時系列に沿って配列しなおし、事績の文について必要ヶ所を抜書し、旧字を新字に変換するなどして、紀州の漁業に関連する人物の事績一覧を作成した。

3 紀州漁民による網漁の変遷

『事績略』から抄出した紀州漁民の活動に関する一覧表は、漁業の種類等に従って、便宜上、「網漁」、「釣漁」、「捕鯨」及び「塩業」「紀州以外の出身者」に分け、原書のアイウエオ順を活動の時期を大まかな年代順に配列し直した。以下にその概略を付記する。

（1）網漁

紀州における網漁の歴史は、近世以前から活動の様子が記録され、とくに江戸時代以降は紀伊水道から熊野灘にかけての各地において、有力な漁家や商家が大型の網を作り、網元となって漁師を雇い入れての組織的な網漁を操業していた。すでに室町時代には「旅網」と称して紀州領外の他国の海へも出漁していたことが知られており、本県の漁業の変遷史のなかでの大きな特色として位置づけられる。

『事績略』における最も古い年代の記述は、日高郡塩屋（御坊市）の岡本左近之進が建久9年（1198）に藁製の地曳網を使用したという記述だが、鎌倉時代初期の内容で由緒的記述であるため、史実としては判然としないとみるべきであろう。その後は、下総国九十九里で鰯網漁を始めたと伝えらえる紀州出身の西之宮久助が関東の鰯地曳網漁の濫觴とされ、概ね16世紀後半から17世紀にかけて網漁が大きく発達していくとみられる。このうち旅網に関しては、加太浦の大甫七重郎、広浦の崎山次郎右衛門、下津浦の七兵衛・市郎右衛門、大崎浦の田広与次兵衛などの事績が、地元や旅漁先において知られている。また、漁業者ではないが、紀州徳川家初代の徳川頼宣は漁業につい

ても漁村の開拓や漁民の移住など漁業の振興に多くの功績があるほか、有田郡の栖原角兵衛、浜口儀兵衛も水産業を基盤に事業を拡大させ、海路での商品流通により巨利を紀州へもたらした。

『事績略』に載る漁師の出身地別にみると日高郡が最も多い。これは引用文献の『舊藩時代の漁業制度資料』の記載法にもよるが、歴史的にみて紀州でもとくに網漁が盛んな地域としてひとまず判断できる。網漁による魚種については、イワシ・ボラ・ハマチのほか、熊野灘に面する牟婁地域ではアジ・サンマ・サヨリ・キビナゴなどがあり、カツオやマグロ網漁も江戸時代後期の一時期試みられた。

網の漁法については、17世紀には地曳網、任せ網による漁を操業し、干鰯生産のためのイワシ網をはじめ、17世紀後半からはハマチ網の記述が増えていく。四艘張網漁は享保年間（1716～36）から記述がみえ、このころ普及していったとみられる。18世紀後半以降は、魚介の流通・加工に即して網の改良が盛んになり、網の規模、素材等を改良し、大型網のほか、建網や手繰網など小型網についての記述もみえる。

他地域との交流についてみると、近世前期は房総・江戸・伊豆など関東方面への記述が顕著で、各地で網漁を創始したという事績を残す。18世紀後半からは、紀州周辺との交流についての記述が増え、紀州領内間での技術交流のほか、阿波、淡路、和泉、志摩との間で、網漁の伝習・伝授の関係が散見される。

（２）釣り漁

釣り漁も古くからある漁法の一つであるが、『事績略』に掲載される紀州の釣り漁に関する漁師の事績は、17世紀後半より確認される。なかでもカツオ漁に関する事績が多く収録されている点に紀州漁民の特色が出ている。

釣り漁師の出身地については、網漁と同じく日高郡が多いが、串本周辺の漁師の名も目立つ。一方、紀北地域は、雑賀崎を除いて釣漁の事績が少ない点も気になる。

釣り漁の魚種に関しては、カツオ、タイ、サワラ、

アジ、イサキなどのほか、延縄によりサバ・マグロ・サメなどを獲っている。

技術面のうち、カツオに関しては印南漁師を中心に鰹節の加工技術が発展し、印南浦の甚太郎親子により、17世紀後半からその製造技術が開発され、八兵衛、久保田助五郎が四国・九州へ普及させたほか、印南出身の与市によって土佐から伊豆・房総方面に製法が伝わっている。

一方、阿波国（徳島県）堂の浦からは、享保（1716～36）頃からサワラやタイ釣りの技術が雑賀崎や西牟婁郡に伝習された事績が記され、雑賀崎から各地へ釣り技術が伝わっている。また、延縄漁については、幕末頃から明治前期にかけて伊豆（静岡県）方面から伝習した事績が複数あるほか、疑似餌釣りに関しても、幕末から明治にかけて工夫が凝らされた事績があり、周辺地域との交流の跡が認められる。

（３）捕鯨

捕鯨に関する事績については、17世紀初頭から太地浦はじめ熊野地域の人物を中心に多くの記述がある。しかし、寛永（1624～44）ごろには湯浅の庄助、藤代（藤白）の藤松半右衛門など、紀北出身の漁民が熊野の漁民とともに鯨組を組織し、九州北部に鯨法を伝え、肥前の周辺海域で西海捕鯨が始まるなど、17世紀中には捕鯨の拠点は太地・古座・三輪崎以外にもあったことが知られている。

太地浦では、和田家が代々捕鯨を生業とし、延宝5年（1677）に太地浦の和田角右衛門頼治が鯨網を工夫して網掛突取法を開発すると、肥前や土佐へ伝習されて捕鯨業が栄えた。また、太地寛右衛門家出身の近藤伝右衛門は、享保9年（1724）に奥州磐城（福島県）江名浜へ移り、同地に太地の鯨法を伝授したとの事績が載る。

古座浦は、17世紀前半から捕鯨が行われ、同地出身の三郎太郎は西海捕鯨にも進出して長崎五島の史料にその名を残したが、万治2年（1659）には紀州藩により古座に鯨方役所が設置され、古座組鯨方が組織された。

三輪崎を拠点にした新宮組鯨方は、貞享3年

(1686) に組織され、宝永ごろに中断した後、寛政 (1789 ~ 1801) ごろから復興して、新宮城主水野家直営のもとで石垣家代々により操業が継続されている。

明治以降も、資本家を替えてしばらくは古式捕鯨が継続されるが、明治時代後半には海外出稼ぎの経験等から西洋式の捕鯨銃が導入されるなど、捕鯨法の近代化が図られていった。

(4) 塩業、紀州以外の出身者

『事績略』には、漁業関係者と別項で「塩業」関係者の事績が列記されている。

この項に列せられる 141 名のうち 3 名が紀州の関係者であるが、このうち藤太郎は和泉の住人で天文年中 (1532 ~ 55) に紀州「雑賀塩」を壺焼きして諸国に売り出した。宝永頃に名草郡船尾(海南市) に塩田を開いた川端六兵衛は河内出身であり、同郡加茂村小松原の大庄屋中尾五郎右衛門は文化初年に大崎村に一町の塩田を開墾している。

一覧表の終わりには、紀州以外の出身で紀州との関わりのある人物 24 名の事績を年代順に列記した。

近世初期は、捕鯨とのつながりで尾張・摂津・肥前・土佐など、捕鯨の技術を伝習した後、紀州から伝播した人々との人的交流が生まれた。また、干鰯製造、鰹節製造に関わり出漁した先で関わりを持った人物の事績が多い。

一方、他国から紀州へ出漁した漁民は、捕鯨を伝えた尾張師崎の漁師、宝暦 (1751 ~ 64) ごろに白崎村へ手繰網を伝えた和泉岸和田の漁師、寛政 (1789 ~ 1801) や天保 (1831 ~ 44) 期にカマス網漁やタイ延縄漁を南部村に伝えた淡路の漁師のほか、阿波、伊豆などおもに太平洋岸地域で活動する漁民との交流の跡が垣間見える。

まとめにかえて

渋沢敬三は、『事績略』を「通覧して気付くことは総じて漁民が自分の仕事に熱心で常に生産向上に意をそそいで居たこと、つまり一見原始的生産に伴う技術の渋滞性はある乍らも個々については不断の努力が払われて居たことが想像以上盛ん

であること、更に技術の進歩がある時その伝播が意外に速かに且つ広範囲に亘って見られること等」を挙げ、「これらの点は我国の漁業史を探求する上に各種の示唆を与える」と述べている。

本書に掲載された漁民の事績は、それぞれ時代的な継続や地縁・血縁的な関連性を持って紹介される人物もあれば、遊漁や出稼ぎを通じて個別に活動した結果、他国へ赴いて漁業技術を伝習しまたは伝播する事績を残した人物もいる。そうした出来事のなかで、紀州の漁民の営みが続けられてきたことに改めて関心を寄せる必要がある。

一つ一つの事績の内容は、資料的に史実として明確なものや伝承や伝聞的なものも含まれるが、少なからず地域で記録・記憶されたものである。事の大小に関わらず地域に残された有名・無名の漁民の活動の痕跡に目を凝らせば、今からでも新たな事実がフィールドから得られる可能性がある。そのような先哲の研究に思いを致しつつ、今後さらに研究を深めていきたい。

【参考文献】

- 財団法人日本常民文化研究所 1955 『日本漁民事績略』 岡書院
- 渋沢敬三 1954 「所感一昭和十六年十一月二日社会経済史学会第十一次大会にて」『祭魚洞樵考』 岡書院
- 蘇理剛志 2021 「紀州網漁の編年史的把握のために」令和 3 年度秋期特別展関連シンポジウム『紀伊半島をめぐる海の道と文化交流 予稿集・論考集』 和歌山県立紀伊風土記の丘
- 農林省水産局編 1934 『舊藩時代の漁業制度調査資料』 (水産調査資料第三輯)
- 安室 知 2019 「渋沢敬三と魚名研究—その特徴と学史的意義—」『国際常民文化研究叢書』 13
- 安室 知 2022 「魚と民具—渋沢敬三の歴史研究と「生物学的人生観」—」『日本民俗学』 311 号 日本民俗学会
- 和歌山県立紀伊風土記の丘 2021 『令和 3 年度秋期特別展図録 海に挑み、海をひらく—きのくに七千年の文化交流史—』

表 『日本漁民事績略』にみる紀州漁民の事績一覧

【網漁関係】

時代	名前	出身地	事 績	引用文献	人名番号
建久9年 (1198)	岡本左近之進	日高郡 塩屋	建久九年、同人の藁地曳、使用最古と云われる。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【394】
宝治頃 (1247～49)	西之宮久助	紀州産	宝治（弘治か；1555～58）年間吹き流され、九十九里に漂着。剃金村で小地引網にて鰯漁を始めしが、同地地引の最古記録。	『江浦干鰯問屋仲 買根源記』	【1533】
慶長6年 (1601)	籠某	東牟婁郡 古座	楯網の創始者。慶長六年、検地帳に鯨（ムロアジ）網一帳と見える故、それ以前より使用。現福松はその後裔という。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【472】
慶長頃 (1596～ 1615)	花野弥左衛門	有田郡 湯浅	慶長頃、当地で任せ網使用と云う。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1613】
慶長頃～天 明・寛政 (1596～ 1801)	丸本彦四郎	東牟婁郡 宇久井湊	慶長から天明・寛政へかけて、漁業で巨利を博した家。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1927】
元和頃 (1615～24)	大甫七重郎	海部郡 加太浦	初め薩摩国甕島へ出稼ぎ、元和頃、伊豆国手石浦に至り八手網を下し、遂に上総国矢の浦に移住。翌年、紀州湯浅の漁夫貝甲（一に貝柄に作る）助右衛門、栖原の四平次兩人来り、三人で共同漁業。片浜鰯網および二艘張八手網は茲に創始と伝える。 また彼らの干鰯製造も関東では嚆矢といわれ、製品を上方に送るために浦賀で一度仕切る便法が定まる。これ東浦賀干鰯商売の根元と云う。	『大日本産業事 績』、『水産博覧 会第一区第一類出 品審査報告』、 『江浦干鰯問屋仲 買根元記』	【1138】
元和頃 (1615～24)	五左衛門	西牟婁郡 鴨居	元和年中、新田を開発、一軒家という。藩主徳川頼宣より漁場独占を付与、網を下賜。寛文年中に地曳網を開始。当地の嚆矢。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【748】
元和末年 (1624)	栖原角兵衛 (初)	有田郡 栖原村	初代。源義家後裔、摂津国川辺郡北村郷を領し北村氏と号す。初代茂俊の祖父・信茂、紀州有田郡吉川村に帰農。茂俊同郡栖原村に転住、北村角兵衛と称す。後代々角兵衛という。茂俊漁業に志し、元和末年、奥州荻浜に投網す。爾来、各所の潮流を探索し最後に上総国天羽郡荻生村に漁業永続。宝永三年、荻生に客死。佐貫円隆寺に葬る。	『栖原家家譜』、 『南紀徳川史』、 『鮭鱒聚苑』	【1086】
寛永18年 (1641)	貞助	東牟婁郡 津荷	寛永一八年、藩主頼宣巡国に際し彦右衛門他一名と水主を勤めし功にて捕鰯の特許下賜。この鑑札二枚今に保存。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1336】
寛永頃 (1624～44)	塩崎次郎左衛門 (初)	日高郡 津久野	寛永年中、この地に鰯地曳網を創始。その後、文化頃に四艘張網も使用。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【934】
寛永頃 (1624～44)	与次兵衛	海部郡 大崎浦	寛永年中、相模国真鶴に来り、鰯漁を伝播。	不明	【2191】
正保元年 (1644)	宮井六兵衛	日高郡 切目村島田	正保元年、名屋の浜（現浜畑）開発、下人に網職を為さしむ。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1971】
明暦2年 (1656)	崎山次郎右衛門	有田郡 広浦	明暦二年、下総国飯沼に来住、任網で鰯漁を行う。また高神村外川浦を漁場とし、寛文元年、今宮より外川に移住、八手網の創始と伝わる。元禄頃、紀州よりの移住者多く、外川の如きは千戸以上、次郎右衛門邸は豪奢を極める。今に「外川大繁昌」の語あり。しかるに宝暦五年より漁獲衰頹、農民と軋轢、明和にその極に達し遂に外川漁場はわずかに網方二、三人、商人六、七戸となり、安永三年、当代次郎右衛門紀州に帰り、百余年繁昌の漁場も寒村となる。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【868】
寛文4年 (1664)	徳川頼宣	(紀州藩主)	慶長七年生。寛文一一年没。海草郡雑賀に泉州漁民を移住せしむ。熊野・都賀浦より茂兵衛・茂太夫・チョメクマなる漁夫を有田郡宮崎村小豆島矢櫃へ招き、鮑取りをさせ、寛文四年移住せしむ。西牟婁郡瀬戸に鰯網を特許。寛文五年、捕鯨振興のため雄湊に鯨を突かしむ。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1368】
年代不詳	塩崎六郎右衛門 (初)	日高郡 比井崎村産湯	紀州藩主頼宣来遊に際しハマチ群来を見、勧奨されしによりハマチ地曳網を開始。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【937】
延宝頃 (1673～81)	新平	北牟婁郡尾鷲	延宝年中、サンマ漁にも八田網を用いしを改良、小形とし船一艘省く。	『水産博覧会第一 区第一類出品審査 報告』	【1047】
貞享元年 (1684)	岡本次左衛門	日高郡 塩屋	貞享以前、新出来網なる地曳網を創始。貞享元年、和田浦の某その藤袋を窃取り紛争惹起せりという。	『和歌山県日高郡 史』	【395】
貞享年間 (1684～88)	丸山専左衛門	有田郡 田栖川村	貞享年間、房州に赴き任せ網を見、郷里に創始。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1928】
元禄元年 (1688)	栖原角兵衛 (2)	有田郡 栖原村	二代。俊興。漁事を継承。元禄元年、江戸鉄砲洲に薪炭問屋を、木場にて材木業を兼営。	『栖原家家譜』、 『南紀徳川史』、 『鮭鱒聚苑』	【1086】

時代	名前	出身地	事 績	引用文献	人名番号
元禄頃 (1688～ 1704)	栖原角兵衛 (3)	有田郡 栖原村	三代。茂延。漁業経営を挙げて上総国沿岸の住民に授与。自ら江戸に転移し、材木薪炭業に全力を注ぎ、飛騨屋久兵衛の元禄以来の蝦夷松移出に資金供給。これ蝦夷との関係の端緒。	『栖原家家譜』、 『南紀徳川史』、 『鮭鱒聚苑』	【1086】
元禄頃 (1688～ 1704)	藤浪辨常	紀州熊野	遠州川崎に移住し、地曳網を創始。元禄年間没。	『静岡県水産誌』	【1764】
年代不詳	栖原角兵衛 (4)	有田郡 栖原村	四代。茂村。着実に先代の業を遵守。	『栖原家家譜』、 『南紀徳川史』、 『鮭鱒聚苑』	【1086】
年代不詳	清水三郎兵衛	日高郡 比井崎村比井	ハマチ曳網を創始。享和頃より廃絶す。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【996】
宝永頃 (1704～11)	市郎右衛門	海部郡 下津浦	同村七兵衛と宝永年中に三浦半島にて鰯網を開業。関東任網の元組という。	「江浦干鰯問屋仲 買根元記」	【155】
宝永頃 (1704～11)	七兵衛	海部郡 下津浦	宝永年中、関東鰯網漁の評判を聞き、市郎右衛門と相州三浦郡下浦に來り、鰯網を開始。関東任網の根元と云われる。	「江浦干鰯問屋仲 買根元記」	【953】
享保初年 (1716)	六右衛門	西牟婁郡 日置浦	大永三年頃、当地は辺置浦と云い戸数百、五ヶ所に散在。元禄年中、日置浦と改称。享保初年、藤八と地曳網を創設。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【2218】
享保頃 (1716～36)	唐尾善次郎	有田郡 南広村	享保・元文ごろ、衣奈村に四艘張網を伝播。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【541】
享保頃 (1716～36)	智林	日高郡 三尾村	享保年間、鰯網を創設。智林は法名。吉田七太夫の祖という。子の与四郎は手網（四艘張）創始。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1307】
享保頃 (1716～36)	木村五郎兵衛	日高郡 名田村上野	享保・元文ごろ、銚子に鰯網を仕込み出稼せり。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【640】
享保頃 (1716～36)	前堀太郎右衛門	日高郡 比井崎村	享保年中、始めてハマチ地曳網を使用。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1851】
宝暦頃 (1751～64)	嘉右衛門	日高郡 衣奈村小引	宝暦・明和頃、房州へ出稼し鰯地曳網を伝授すという。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【463】
宝暦頃 (1751～64)	兵七	日高郡 白崎村大引	宝暦頃、ハマチ網・鰯網を作り、大阪魚問屋より資金を借入。ハマチ大網を創始。何れも百年から百五十年続しも、海嘯により廃絶。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1800】
明和2年 (1765)	栖原角兵衛 (5)	有田郡 栖原村	五代。茂勝。中絶せる漁業再興に志し、明和二年、単身蝦夷に渡り福山小松前町に支店を設置、栖原屋と称し支配人を置き漁場を管理、自ら江戸～松前間の往復勞々、物産の交易に従事。初代支配人は栖原三郎兵衛。	『栖原家家譜』、 『南紀徳川史』、 『鮭鱒聚苑』	【1086】
明和頃 (1764～72)	熊藏	西牟婁郡 富田浦	明和年中、阿波国に出稼ぎして漁法を伝習し帰郷。サヨリ網を創始。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【690】
天明6年 (1786)	栖原角兵衛 (6)	有田郡 栖原村	六代。茂則。天明六年、松前藩より天塩および天売・焼尻二島の漁業請負を命ぜられ、同七年さらに留萌・苫前を請負。寛政一一年、幕府の蝦夷直轄となり御用達を命ぜられる。また官命によりクシュンコタンと宗谷間に五百石積以上の帆船二艘を備え、樺太～本道間の定期航路を開始。	『栖原家家譜』、 『南紀徳川史』、 『鮭鱒聚苑』	【1086】
天明頃 (1781～89)	井玉伝吉	日高郡 比井崎村阿尾	天明頃、泉州に手繰網を伝習、帰来て同地に創始。田端弥三・坂田勘七起業。嘉永三年には三七艘となる。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【147】
天明頃 (1781～89)	古谷半之右衛門	日高郡 名田村野島	同地地曳網・小網は天明頃、半之右衛門、同与三太夫等、兄弟共同元網を始めしもの。後、四、五十年を経て、古谷藤太夫新網を作り、その後また原文なる者、新出来網を作る。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1792】
天明頃 (1781～90)	古谷与三太夫	日高郡 名田村野島	(古谷半之右衛門の項を参照。)	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1793】
天明・寛政頃 (1781～ 1801)	堀井安左衛門	日高郡 名田村	天明・寛政の頃、四艘張網創製、後中止。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1817】
寛政11年 (1799)	浜中藤兵衛 (初)	北牟婁郡 矢口浦	同地の鮪網の創始者。初代より五代。寛政十一年頃、湾中に鮪群泳せるも漁法知らず。鰯地曳の妨害とて舷を叩き駆逐す。初代藤兵衛、工夫を重ねるも妙案なし。	『水産博覧会第一 区第一類出品審査 報告』、『大日本 水産事績』	【1634】
寛政頃 (1789～ 1801)	田広与次兵衛	海部郡 大崎	寛政年中、相模国真鶴に來り漁業に従事。当時紀州藩用達を勤め、大磯より伊豆山まで鰯網を専有。遠近に魚籃を置き神速に捕魚。世人、鰯網与次兵衛という。第一回水博に田広甚七郎鰯網図出品し受賞。	『水産博覧会第一 区第一類出品審査 報告』	【1267】
寛政頃 (1789～ 1801)	東太右衛門	東牟婁郡 大島村須江	寛政年中、須江の清水網代を発見。現今は楯網漁場として有名。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【39】

時代	名前	出身地	事 績	引用文献	人名番号
享和3年 (1803)	吉田七太夫	日高郡 三尾村	享和三年以前より田杭の白井治左衛門とハマチ地曳網を創始。法名智林。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【2179】
享和3年 (1803)	白井治左衛門	日高郡 比井崎村阿尾 田杭	享和三年、三尾村吉田七太夫とハマチ地曳網を創始。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1016】
享和頃 (1801～04)	玉木平市	日高郡 比井崎村産湯	享和年中、新出来網ハマチ地曳を小浦より購入し使用創始。為に当地のヅルハマチ網廃絶。明治二三年、孫平市再興せるも二八年再び廃絶。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1273】
文化元年 (1804)	弥吉	日高郡 衣奈村戸津井	文化元年、善四郎、武平、喜四郎と在来のタタキ網を廃し、ハマチ地曳網を開始。明治七、八年最盛。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【2059】
文化6年 (1809)	栖原角兵衛 (7)	有田郡 栖原村	七代。信義。文化六年、村山喜右衛門・伊達林右衛門と樺太漁場を預かり（伊達すぐに辞退）共同し商社を福山に開き、支配人・通詞を置きアニワ湾一帯より西海岸四八ヶ所の漁場を開発。久春古丹に運上屋を設け統括し、土人を撫恤し漁事を経営。	『栖原家家譜』、 『南紀徳川史』、 『鮭鱒聚苑』	【1086】
文化12年 (1815)	坂野才助	西牟婁郡 富二橋村	文化一二年、串本にて伝習せるボラ網を初めて使用。従来は地曳・手繰のみ。嘉永二年、コノシロ網調製するも不振。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【856】
文化頃 (1804～18)	矢倉甚兵衛	西牟婁郡 串本村	文化年中、秋季卵を孕む鰯を漁し、カラスミを作った。子孫甚兵衛、また漁業に功あり。第二回関西九州聯合水産共進会より追賞。	『旧藩時代の漁業 制度資料』、『大 日本水産会報（報 告）』、『府県聯 合水産共進会審査 復命書』、『第二 回水産博覧会審査 報告』	【2061】
文政元年 (1818)	竹田利兵衛	有田郡 田栖川村	文政元年、地曳改良ハマチ漁を為す。明治一五年、岡山地方よりモジ網地を取り寄せ袋とし試用、奏効。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1198】
文政初年	佐吉	西牟婁郡 富田村	文政初年、湯浅町で四艘張網を見、これに倣い開業。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【867】
文政初年	大川浅右衛門	東牟婁郡 大島村 字アジカミ	文政初年、良好漁場を発見。爾来、魚付林を殖成。今に「浅右衛門網代」と呼ぶ。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【321】
文政3年 (1820)	源兵衛	西牟婁郡 西富田村堅田	鰹網等を開始。文政三年、鮪網を開始。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【732】
文政5年 (1822)	芝田吉之丞	北牟婁郡 須賀利浦	文政五年、鮪網を使用三三〇尾を得る。鮪網のこの地の嚙矢。さらに方言「マツクリ」なる網を考案、湾中を立切り要所に駆逐するもの。天保一二年頃、大鮪七万尾を得る。水揚げの三分五厘を貯蓄し漁具修理等に充る。村民感謝し積立金を吉之丞に分与せんとせしも固辞。改めて字ソナシロの杉檜山林一ヶ所を贈与。第一回水博で鮪捕網を出品し受賞。	『水産博覧会第一 区第一類出品審査 報告』 『大日本産業事 績』	【965】
文政頃 (1818～31)	中村喜兵衛	日高郡 比井崎村阿尾	文政頃、ハマチ刺網及び鰯刺網を創始。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1465】
天保元年 (1829)	浜中藤兵衛 (2)	北牟婁郡 矢口浦	二代。二木島の半次郎なる製網巧みなる者を雇い、更に志州の海士を招き、海況測定後、適応せる網を造りしも、隣村の鰯漁の為、鮪湾入せず。漸く八年目に五尾を得る。発意後二十年を経て、文化五年に至り費用嵩み、維持困難となる。天保元年、更に藁網を改良、自ら魚監となり魚道を計り、二種の網にて捕魚初めて成功。然るに又隣村の妨害にて魚来湾せず。依て引本浦と約定し収利十分の一を贈るに協定。さり乍ら、漁事盛大に及び種々葛藤生じ、遂に藩の公裁にて収捕百分の八を贈ることとなり落着。第一回水博にその網模型を出品し受賞。	『水産博覧会第一 区第一類出品審査 報告』、『大日本 水産事績』	【1634】
天保4年 (1833)	塩崎紋兵衛	日高郡 比井崎村産湯	天保四年、志賀村高岡新右衛門と阿尾より今出来網（ハマチ地曳）を買い開始。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【936】
天保5年 (1834)	花岡和八	日高郡 名田村	天保五年頃、阿波より鰹シバリ網漁者共を雇い入れ、伝習せしも成績不良、廃絶。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1609】
天保12年 (1841)	栖原角兵衛 (8)	有田郡 栖原村	八代。茂信。天保一二年、伊達林右衛門と挾捉を請負、伊達辞退し単独経営。同一四年、大阪博労町に支店を開設。松前物産問屋を開始。	『栖原家家譜』、 『南紀徳川史』、 『鮭鱒聚苑』	【1086】
天保頃 (1831～44)	新右衛門	日高郡 衣奈村	当地は掛網のみ。天保頃、新右衛門ハマチ曳網を創始。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1034】
天保頃 (1831～44)	塩崎六郎右衛門 (2)	日高郡 比井崎村産湯	天保年中、鰯カタゲ網を開始。これは一人で肩に担い使用不可能、網の長さ一六尋。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【937】

時代	名前	出身地	事 績	引用文献	人名番号
天保頃 (1831～44)	大出弥右衛門	日高郡 比井崎村阿尾	天保年中、鰯地曳網を開始。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【310】
天保頃 (1831～44)	喜四郎	日高郡 衣奈村小引	天保ごろ、淡路国沼島より鯖点火漁を伝習し普及。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【604】
天保頃 (1831～44)	塩地権兵衛	日高郡 塩屋	天保ごろ、地曳を麻網に改良。爾来、麻藁二種をこの地で併用。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【938】
天保・弘化頃 (1831～48)	深見栄蔵	日高郡 名田村	天保・弘化頃、道平七、北野権七と共同、廃絶せる四艘張網を再興せしも五年にて止む。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1731】
天保・弘化頃 (1831～48)	道平七	日高郡 名田村	深見栄蔵（上記）を参照。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1958】
弘化頃 (1844～48)	北野権七	日高郡 名田村	弘化年中、深見栄蔵と四艘張網を使用し失敗。明治中葉に古網で試み、また失敗。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【615】
弘化頃 (1844～48)	坂本藤次郎	日高郡 塩屋	袋網の材料は古来太厚い藤布なりしを、弘化・安政頃、縦横細い糸の藤布に改良し好評。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【861】
弘化・嘉永頃 (1844～54)	長太夫	日高郡 南部村堺	弘化・嘉永の頃、キビナゴ地曳網を創始。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1302】
嘉永6年 (1853)	岩崎勝右衛門	東牟婁郡 三輪崎	嘉永六年、敷網および釣魚の好適漁場を発見。今に「勝右衛門島」の漁場といわれる。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【212】
嘉永頃 (1848～54)	磯野新五郎	日高郡 比井崎村阿尾	嘉永年中、鰯地曳網を新設「新五郎網」と称す。明治六年ごろに廃絶。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【142】
嘉永頃 (1848～54)	北川常右衛門	日高郡 印南村	嘉永年中、同地方に鯖点火漁を創始。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【606】
嘉永頃 (1848～54)	中川太吉	日高郡 戸津井村	嘉永年間、ハマチ地曳網を創始。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1417】
嘉永頃 (1848～54)	濱口儀兵衛	有田郡 広村	同地は銚子・五島等へ出稼ぎせるも、専業漁者なし。儀兵衛、嘉永年間に船・漁具を調製、漁業を営ましむ。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1619】
嘉永頃 (1848～54)	福原伝次郎	日高郡 塩屋村	嘉永頃より、手繰網を同地に創始。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1744】
安政初年 (1854)	倉橋常七	東牟婁郡 宇久井	安政初年、蝦網漁場を四ノ島に発見。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【701】
安政2年 (1855)	栖原角兵衛 (9)	有田郡 栖原村	九代。茂寿。安政二年、幕府直轄地以外の場所請負を継続。同三年、日本橋四日市に支店を設け松前物産問屋を開始。	『栖原家家譜』、 『南紀徳川史』、 『鮭鱒聚苑』	【1086】
安政5年 (1858)	甚七	日高郡 岩代村泰地	安政五年頃、与平、弁右衛門と三名で共同漁業を開始。この時まで当村漁業なし。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1038】
万延頃 (1860～61)	雑賀源助	日高郡 松原村浜ノ瀬	従来の地曳網の引揚げに腰網を用いしに、万延・文久頃、源助初めて轆轤を用い能率が増進。当時小形で巻棒八本。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【820】
万延元年 (1860)	栖原角兵衛 (10)	有田郡 栖原村	一〇代。寧幹。万延元年、天塩・苫前・留萌は庄内藩領となり、同藩の用達となり漁場従前通り。文久三年、樺太奥地の漁業差配を命ぜらる。当時露人の妨害頻々、収支償わざるを、よく引受時に武装守備を要した。明治八年、開拓使より引揚げの命あり損失莫大。同一一年、千島に欽山試掘。同一三年、ウルップに漁場創始。同一四年、本姓北村を栖原に改姓。	『栖原家家譜』、 『南紀徳川史』、 『鮭鱒聚苑』	【1086】
文久頃 (1861～64)	福田六太夫	日高郡 松原村浜ノ瀬	文久頃、高引網を改良。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1740】
元治頃 (1864～65)	中野長次郎	日高郡 衣奈村	元治頃、手繰（網）創設。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1449】
慶応元年 (1865)	坪内与四郎	日高郡 比井崎村小浦	慶応元年、同村共有の鰯地曳網廃絶せるを再興。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1328】
慶応頃 (1865～68)	本村庄左衛門	日高郡 比井崎村阿尾	慶応年間、鰯地曳網を工夫。土地でこれを庄左衛門網と呼ぶ。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1836】
慶応頃 (1865～68)	松村文右衛門	日高郡 比井崎村阿尾	慶応年間、鰯地曳網を考案。文右衛門網と呼ぶ。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1912】
維新前 (年代未詳)	土井長七	日高郡 南部村垣代	維新前（年代未詳）ハマチ、ブリ曳網を創始。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1355】
幕末頃	高島長七	日高郡 塩屋	幕末、有田郡宮崎村矢櫃より手繰網を購入、使用。網は琉球藁製。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1159】

時代	名前	出身地	事 績	引用文献	人名番号
年代不詳	小熊佐太郎	日高郡 比井崎村阿尾	イサキ網を創始。年代不詳。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【747】
年代不詳	清水弥右衛門	東牟婁郡 太地浦	従来使用の立網に於ける魚の捕縛を改良、奏効。爾来一般に普及。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1000】
明治元年 (1868)	井上伊助	日高郡 印南村	明治元年、地曳鰯網を創始。今尚継続。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【180】
明治元年 (1868)	村岡久左衛門	日高郡 名田村	明治元年、前田喜作と塩屋村に倣い手繰網を創始、爾後普及。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【2000】
明治元年 (1868)	森下次郎松	日高郡 比井崎村	井上勘助と蝦建網を創始。また明治元年、鰯建網を泉州佐野より購入し創始。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【2040】
明治元年 (1868)	井上勘助	日高郡 比井崎村	森下次郎松（上記）を参照。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【181】
明治初年	椎崎伊右衛門	有田郡 湯浅	明治初年、従来の鰯縛網を改良考案、ヘゴなる三角形袋を附着、漁効を挙げる。爾来、有田郡へ普及、また福井・徳島両県へ伝授。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【933】
明治初年	岩崎茂七	日高郡 白崎村神谷	明治初年、鯛ゴチ網を開始。船一艘に四人乗り組み。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【221】
明治初年	入海庄作	東牟婁郡 勝浦	明治初年、土佐の南北網なる平敷網を当地へ伝播。第二回水博に出品。夜焚し鯆鯖を漁する小網の収益確実。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【206】
明治初年	平左衛門	日高郡 名田村	明治初年、カツヲ島沖の沖の瀬に、かし新、古谷藤兵衛、原文、藤蔵と四艘張網五帖を作り使用。一時盛大、漸衰中止。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1799】
明治2年 (1869)	石田久左衛門	日高郡 比井崎	明治二年、鰯刺網を開始。一般二、三人乗組み磯端に張り、岩礁間の魚を追出す。夜間網に刺し、昼間金突にて突取る。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【123】
明治2年 (1869)	上田重三郎	日高郡 比井崎村方杭	天保以来廃絶の鰯網を明治二年、山本徳蔵等を再開。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【235】
明治3年 (1870)	上西邦助	日高郡 比井崎村比井	明治三年、西下吉十郎と小形鰯地曳網をこの地に創始。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【239】
明治5年 (1872)	源太夫	日高郡 比井崎村	久三郎とハマチ刺網を創始し漸増。明治五年頃に七張。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【731】
明治5年 (1872)	堀太郎右衛門	日高郡 比井崎村	明治五年、海參網を創始。後、のぞき突に代わる。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1823】
明治9年 (1876)	塩崎次郎左衛門 (2)	日高郡 津久野	明治九年、天保年中に中絶した手繰網を再興、その後不振。同二一年西網開始。同二六年これを大形地曳に改良。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【934】
明治14年 (1881)	羽藤三郎兵衛	海草郡 塩津	同村魚問屋。大崎村の漁民に手繰網一帖ごとに銀一貫を前貸し、節季費用に宛て翌年漁獲物全部をもって返済せしむ。明治一四年頃より漁夫前借り止め、自由販売となる。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【266】
明治14年 (1881)	成田次郎兵衛	有田郡 田栖川村栖原	明治一四年、一種の漁網考案、テンテコ網と命名。簡単なる地曳で調製、費用半額、使用便利。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1502】
明治14年 (1881)	山本重平	東牟婁郡 大島村樫野	樫野の漁業は、古来悉く重平の仕込により運営、漁夫の食糧及び租税まで代納。その代わり漁獲物は一切同人の独占し、精算の上受払の慣習。明治一四年、漁夫負債を弁し、以後独立。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【2139】
明治15年 (1882)	島崎清左衛門	東牟婁郡 大島村樫野	明治一五年、在来の小舞網の夜間専用なるを改良、昼夜兼用とす。爾来普及。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【981】
明治16年 (1883)	名古屋太郎吉	日高郡 比井崎村阿尾	鰯地曳網を製す。太郎吉網と呼ぶ。明治一六年、大字小浦へ売却。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1491】
明治17年 (1884)	喜右衛門	日高郡 衣奈村小引	従来の鯖点火漁法では次第に漁利薄し。明治一七、八年頃、喜右衛門西牟婁郡日置沖に出漁を開始。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【586】
明治18年 (1885)	梅本亀太郎	日高郡 衣奈村小引	明治一八、九年頃、丸山の漁夫を雇い大網打（鯛ゴチの一種、沖漁用）を開始。同二一年頃より漸盛。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【273】
明治18年 (1885)	村山孫太郎	日高郡 塩屋村	明治一八年、泉州白深に倣い、鰯網を創始。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【2021】
明治21年 (1888)	浜詰伝六	日高郡 白崎村大引	兵庫県三原郡沼島の漁夫につき、鯛ゴチ（網）を伝習。明治二一年、弟捨松が創始。最初、地曳網に害ありと反対受けしも、漸次普及。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1631】
明治22年 (1889)	土岐助七	日高郡 比井崎村産湯	明治二二年、村共有大形鰯地曳網新調を発起、実現。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1364】
明治22年 (1889)	崎山藤次郎	日高郡 塩屋	明治二二年、三尾村より地曳網・礁引網を購入、当地で創始。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【869】

時代	名前	出身地	事 績	引用文献	人名番号
明治22年 (1889)	橋本自助	海草郡 雑賀崎村	明治二二年、釣船生け間、従来一ヶ所を五ヶ所に改良、且つ水孔を多くし長時生息に適せしむ。二三年、沈子鉛を従来の鉄槌で打延すを鉄棒で切断するに改良、能率増進、右法普及。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1584】
明治23年 (1890)	井上芳松	日高郡 比井崎村阿尾	明治二三年、同志と鰯地曳網を新設。今尚継続。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【193】
明治23年 (1890)	津村孫七	日高郡 比井崎村	明治二三年より大字阿尾字洲野地曳網漁場を改良。これは嘉永四年より六年まで改良せるも未完成なりしものなり。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1332】
明治23年 (1890)	竹中源兵衛	西牟婁郡 西ノ谷村	明治二三年頃、沖ノ島・灘ノ島に海老網で磯魚捕りを創始、漁利あり。爾来漁場として普及。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1201】
明治24年 (1891)	山田儀兵衛	日高郡 塩屋村	明治二四年、鰯網の一種、小目網を創始。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【2109】
明治25年 (1892)	白井長蔵	日高郡 比井崎村阿尾	明治二五年、当地に鰯地曳網を開始。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1020】
明治26年 (1893)	竹本竹蔵	日高郡 比井崎村	明治二六年、塩崎平助と神網なる鰯地曳を創始。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1210】
明治26年 (1893)	山本得太夫	日高郡 和田村	明治二六年頃、鰯網の袋の小目網を太布（藤布）の袋に代替、爾後普及。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【2146】
明治26年 (1893)	山本政吉	日高郡 比井崎村	明治二六年、唐崎徳太郎、溝川長左衛門、上西邦助、塩崎次郎左衛門と、明治二一年創始の西網を、大形地曳に改良。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【2149】
明治28年 (1895)	溝川長左衛門	日高郡 比井崎村	明治二八年、鰯地曳を用う。溝川網を案出。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1954】
明治29年 (1896)	中井与八	日高郡 南部村堺	明治二九年、目白沖で掛網創始。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1401】
明治30年 (1897)	浜富太郎	東牟婁郡 大島村	明治三十年、甲島賊、鰯島賊兼用の釣具を發明。世人大島形と云ひ普及。第二回水博に出品。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1633】
明治32年 (1899)	若野太郎七	日高郡 和田村	古来藁縄なりし高曳網を、明治三二年頃初めて芋網に改良。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【2225】
明治37年 (1904)	中野幸三郎	日高郡 塩屋	明治三七年頃、当地地曳に芋網創使。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1446】
明治41年 (1908)	中村邦太郎	西牟婁郡 田辺江川浦	江川浦漁業組合理事。明治四一年、大工中西竹松を率い焼津の発動機船視察、帰国後に南海漁業株式会社創立。和洋折衷海南丸を造る。当初異議多く乗組員を得るに困難。一ヶ年後、空気一新就業。	『田辺漁業小史』	【1467】
明治年間	長太郎	北牟婁郡	明治年間、和歌山県西牟婁郡潮岬村出雲の平沢伴助にアバ付網を伝授、以後普及。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1303】
年代不詳	中西八蔵	日高郡 比井崎	蝦建網を創始。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1440】
大正5年 (1916)	森本常七	日高郡 南部町	伊勢蝦の畜養を多年研究、夏季より魚骨を与え、冬季に二割半目方増す事を発見。大正五年、養蝦池築造、四万匹収容。	『和歌山県日高郡 史』	【2051】

【釣り漁関係】

時代	名前	出身地	事 績	引用文献	人名番号
延宝頃 (1673～81)	甚太郎	紀州熊野	延宝年中、土佐幡多郡西ノ岬沖に出漁、鰹を多く獲る。宇佐浦に泊り脯（ほじし）に製す。当時、当浦生節のみ脯の製法を知らず、播磨屋佐之助これを伝習、爾来精品を出す。一説に、延宝二年、甚太郎宇佐浦にて始めて燻乾法により鰹節を製出した。以前も火乾したが目的は急乾燥にあったが、甚太郎薪を藁に代え燻製長期保存の固乾品を作る。その子甚太郎、清水の越浦に移住、清水にも製法伝わるという。	『第三回内国勸業 博覧会審査報告』	【1042】
享保頃 (1716～36)	出和三八	海部郡 雑賀崎	享保年中、同村浜田権兵衛、宮田才三郎、奥野久太郎、中西佐五八等と阿波堂の浦漁師より鯖釣りを伝習し帰郷、普及。	『和歌山県海草郡 誌』	【1348】
享保頃 (1716～36)	和七	日高郡 白崎村大引	享保頃、吉兵衛、長五郎と磯近くにて鰯釣り創始。右は明治六年頃、熊野長島の儀兵衛来住により沖合出漁となる。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【2230】
明和頃 (1764～72)	坂口三郎兵衛	日高郡 印南村	市松の祖。屈指の旧家。庄屋を務め古文書所蔵。そのうち明和頃、土佐・熊野・銚子等へ出漁せる船数五三艘。なお、土佐・日向等の鰹釣りは本村漁夫が出漁して伝授せりとの口碑あり。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【850】

時代	名前	出身地	事 績	引用文献	人名番号
年代不詳	久保田助五郎	日高郡 印南村	久保田為次郎の祖。数代にわたり土佐国幡多郡へ鰹・鰯漁に出漁。足摺沖に鰹釣りに出漁。年代不詳。土佐節製法も本村出漁者の伝授という。	『旧藩時代の漁業制度資料』	【686】
年代不詳	佐平	西牟婁郡 富田	阿波国堂の浦より鰯釣り船来るを見て、伴蔵と倣い開始。またその後、田辺の鰹釣りを見て模す。	『旧藩時代の漁業制度資料』	【925】
享和元年 (1801)	与市	日高郡 印南村	土佐の燗乾法鰹節を伝え土佐の与市と呼ぶ。享和元年、江戸鰹節問屋山田屋辰五郎実兄、伊豆西浦安良里村五十集屋こと高木五良右衛門に毎日金一步酒三升の日当で雇われ、土佐節製法を伝授。伊豆節はより名声挙がる。文化一〇年（安房郡誌は享和三年と記す）安房に來り、朝夷郡朝夷村渡辺久右衛門に寄寓、鰹節の製法を伝う。安房節の起源と云う。同一二年没、五八才。千倉東仙寺に埋葬。明治二八年、遺功を偲び建碑。碑文には安永元年紀州に生まれ、安房より紀州へ向かう如く記し、年代不合理。また没年も文政一二とするも東仙寺の過去帳と相違す。	『静岡県水産誌』、『静岡県之産業』、『水産界』	【2159】
文政頃 (1818～31)	湯川儀兵衛	日高郡 比井崎村阿尾	文政年中、畑木弥平等と鰹漁業振興。従来五、六人乗りの小型船を十二、三人乗りに改良。安政頃に衰退。	『旧藩時代の漁業制度資料』	【2158】
天保頃 (1831～44)	谷野佐吉	日高郡 比井崎村阿尾	父永吉、天保頃同地に鰹釣り創始。佐吉、安政二年、鯖釣り創始。またイサキ夜釣りおよび鰹釣り創始。明治元年、沖建網を、同三年、熊野灘に鮪縄を初めしも漁利少なく廃絶。	『旧藩時代の漁業制度資料』	【1260】
天保頃 (1831～44)	田村文助	日高郡 比井崎村阿尾	天保年中、イサキ夜釣りを開始。	『旧藩時代の漁業制度資料』	【1281】
天保頃 (1831～44)	村崎伊助	日高郡 比井崎村産湯	天保年中、鰹及びイサキ釣りを創始。	『旧藩時代の漁業制度資料』	【2013】
安政元年 (1854)	岩橋市右衛門	西牟婁郡 富二橋村園ノ川	安政元年、知野儀右衛門等と伊豆漁法に倣い鮪釣りを開始、爾来漸増。	『旧藩時代の漁業制度資料』	【227】
慶応元年 (1865)	亀光太夫	東牟婁郡 三輪崎	慶応元年、鯛・鯖等に好適の一種擬餌鉤を發明。但し熟練を要す。第二回水博に出品。	『旧藩時代の漁業制度資料』	【533】
慶応年中 (1865～68)	甚七	西牟婁郡 田並村	慶応年中、伊豆国より縄漁を伝習、帰來して実施。爾後普及。	『旧藩時代の漁業制度資料』	【1039】
年代不詳	田島嘉四郎	西牟婁郡 串本村	串本村往古よりシオ（島鰯）釣りは昼間に限る。嘉四郎暗夜漁場にヒキ（俗に霊魂の火という）を目撃、必ず魚族來集と思ひ立縄を試み、漁利多く、本漁法発達。	『旧藩時代の漁業制度資料』	【1214】
年代不詳	八兵衛	日高郡 印南村	土佐・日向へ出漁、土地に鰹漁法伝授。土佐月灘村周防形では其徳を頌し小祠を建つ。	『旧藩時代の漁業制度資料』	【1601】
幕末頃	矢倉利八	日高郡 南部村堺	幕末、鯖点火釣り、当地に創始。爾来普及。	『旧藩時代の漁業制度資料』	【2062】
明治初年	杉村忠蔵	日高郡 印南村	明治初年、村井五郎と西牟婁郡江住村沖に出漁、鰹縄を伝習。爾後漸次普及。	『旧藩時代の漁業制度資料』	【1059】
明治初年	喜平	日高郡 切目村西ノ地	明治初年、熊野の漁夫を雇い、鰹釣りを伝授せしむ。	『旧藩時代の漁業制度資料』	【631】
明治初年	吉川和兵衛	西牟婁郡 和深村	明治初年、陰曆五、六月上り鰹・下り鰹と称し群來あるを串本村漁者と契約、立切網を船六、七艘へ積込み、真浦沖に数ヶ月試みしも効空し。	『旧藩時代の漁業制度資料』	【2174】
明治初年	林七	東牟婁郡 田原村	明治初年、和泉より擬餌釣を伝習す。	『旧藩時代の漁業制度資料』	【2216】
明治頃	磯本惣市	日高郡 名田村	有地文助と串本に行き、鰹釣りを見舞い自村に伝習。明治三〇年より衰微。	『旧藩時代の漁業制度資料』	【143】
明治8年 (1875)	高島万太郎	日高郡 塩屋村	明治八年頃、鯖釣りのビシ（方言ソビキまたはシャッピン）を片ビシにし、鯨ホウを金属に改め漁効を収む。	『旧藩時代の漁業制度資料』	【1159】
明治14年 (1881)	下坂喜太郎	日高郡 印南村	明治一四年頃、釣り具を改良。	『旧藩時代の漁業制度資料』	【1004】
明治14年 (1881)	吉蔵与助	日高郡 松原村吉原	明治一四年頃、小鰹釣を創始。	『旧藩時代の漁業制度資料』	【2175】
明治15年 (1882)	大江甚助	日高郡 白崎村	熊野浦の鮪延縄を伝聞。明治一五年、田浦才助・森本孫市と創始。	『旧藩時代の漁業制度資料』	【317】
明治15年 (1882)	井上善輔	西牟婁郡 周參見浦	明治一五、六年、熊野浦に夜焚鯖釣の盛行を見、鰹釣へその害のおよぶを憂い統計的に影響を研究、意見書を発表。	『水産博覧会第一区第一類出品審査報告』	【188】

時代	名前	出身地	事 績	引用文献	人名番号
明治15年 (1882)	坂口久六	日高郡 塩屋村	明治一五年頃、名田村を倅いウツボ釣りを開始せるも、すぐに廃業。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【848】
明治15年 (1882)	某	西牟婁郡 下芳養村	明治一五年、初めてツナシを鯉釣りの餌に試む。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【2270】
明治16年 (1883)	藪田常七	日高郡 名田村	名田村のイサギ釣りは文化頃より夜焚釣りなりしを、明治一六年、岩崎岩古を昼間流し釣りに改良。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【2084】
明治16年 (1883)	吉田元八	和歌山市 新通	第一回水博に釣具及び漁網各種を出品、入賞。	『水産博覧会第一 区第一類出品審査 報告』	【2184】
明治17年 (1884)	松尾桂次郎	日高郡 塩屋村	明治一七年頃、点火鯖釣漁を創始、爾後普及。また同二六年頃、松原村字浜ノ瀬に倅いエビ釣を創始。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1889】
明治18年 (1885)	芝亀太郎	東牟婁郡 大島村須江	明治一八年、小鯉釣擬餌を發明。漁民シャボテンと称す。シャボテンハゲなる鳥賊の皮で製作。第二回水博に出品。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【963】
明治25年 (1892)	平沢伴助	西牟婁郡 潮岬村出雲	明治二五年頃、三重県北牟婁郡の長太郎よりアバ付網を伝習。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1699】
明治25年 (1892)	福島三五郎	東牟婁郡 大島村須江	従来月夜に限りシモイカ釣りを明治二五年に改良。月の有無に拘わらず使用可能の釣具を考案。爾後普及。第二回水博出品。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1736】
明治25年 (1892)	山田春松	日高郡 塩屋村	明治二五年、雑賀崎に倅い、鯖釣りを創始。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【2118】
明治28年 (1895)	前垣長松	日高郡 南部村堺	明治二八年、鯖縄出漁の際、鱧縄を伝習・創始。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1838】
明治28年 (1895)	和歌山県		宝暦・明和頃は熊野節全盛なりしも秘法たりしを、漸次衰退。明治二八年、高知より教師を招き伝習。明治二三年、漁具図解を第三回内国博に、同三〇年、水産調査書を第二回水博に出品。	『第二回水産博覧 会審査報告』、 『第三回内国勸業 博覧会審査報 告』、『旧藩時代 の漁業制度資料』	【2305】
明治37年 (1904)	川口清兵衛	日高郡 塩屋	明治三七、八年頃、阿波国津田の漁法を伝習。従来の太刀魚エバ釣に代替。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【551】
年代不詳	下坂平助	日高郡 印南村	およそ十里沖合に「桁出」と称する漁場を発見。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1006】
年代不詳	沖弥之助	東牟婁郡 大島	海岸岩石に棲むイワメを発見。鯛その他釣りに試み奏効。爾来、餌虫普及。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【405】
年代不詳	川村孫三郎	日高郡 比井崎	祖先の孫三郎はアジ・イサギ夜釣りを創始。昔は磯端に松篝火、後はランプ。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【567】
明治末年	清助	日高郡 南部村堺	明治末年、印南漁師より鯖縄を伝習し創始。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1104】

【捕鯨関係】

時代	名前	出身地	事 績	引用文献	人名番号
慶長11年 (1606)	和田忠兵衛頼元	東牟婁郡 太地浦	勘之丞頼国の弟、忠兵衛頼之の孫。慶長一一年、堺浪人伊右衛門、尾州知多郡師崎伝次と七挺艀舟で初めて鯨突を試む。寛文四年、八挺艀塗舟を作る。延宝五年、鯨網を創む。慶長一九年没。法名は鉄菱軒雷光全俊居士と号す。	『紀伊続風土 記』、『南紀徳川 史』	【2237】
慶長11年 (1606)	和田金右衛門頼興	東牟婁郡 太地浦	慶長一一年、与平次を羽刺とし突鯨を行う。捕鯨業の始祖。	『鯨史稿』、『熊 野太地浦捕鯨 志』、『大日本水 産会報（報告）』	【2234】
慶長頃 (1596～ 1615)	与平次	東牟婁郡 太地浦	慶長頃、和田金右衛門、紀州太地に捕鯨創始の時、羽差として活躍。	『水産博覧会第一 区第一類出品審査 報告』	【2207】
元和元年 (1615)	土屋源太	西牟婁郡 有田村	元和元年、初めて同地に捕鯨を開始。元禄一三年まで継続。四代目与一郎、元禄一一年同村正覚寺住職に捕鯨の祈祷を託す。	『旧藩時代の漁業 制度資料』	【1320】
寛永3年 (1626)	庄助	有田郡 湯浅	寛永三年、肥前国有川に自ら組頭となり突取捕鯨を開始。	『捕鯨史』	【1012】
寛永頃 (1624～44)	三郎太郎	東牟婁郡 古座浦	寛永年中、肥前国五島有川村に来住。名主江口甚右衛門と捕鯨突組を開始。同村突組の創始。	『捕鯨史』	【922】

時代	名前	出身地	事 績	引用文献	人名番号
寛永頃 (1624～44)	藤松半右衛門	紀州藤代	寛永年中、多久島で、また慶安頃、肥前で突鯨を営む。	『鯨史稿』	【1769】
寛永頃 (1624～44)	与四兵衛	紀州	寛永年中、船二〇艘で肥前の山大島に捕鯨、また慶安四年、船三〇艘で九州に捕鯨漁場を開くと伝う。	『鯨史稿』	【2190】
正保5年 (1648)	和田頼照	東牟婁郡 太地浦	和田忠兵衛頼元の後裔。頼興・頼治の父。正保五年没。	『熊野太地浦捕鯨志』	【2253】
万治2年 (1659)	古座組鯨方	東牟婁郡 古座浦	万治二年より鯨突を始む。創業者不詳。寛文四年、紀州藩は鯨方役所を設け、器械等一切を備え漁夫を養う。之を古座組鯨方と云う。慶応二年に廃止。	『和歌山県東牟婁郡捕鯨沿革』	【2309】
延宝3年 (1675)	和田角右衛門頼治	東牟婁郡 太地浦	南紀徳川史には総右衛門頼治と記す。金右衛門頼興の弟忠兵衛頼元の裔頼照の二子。世々捕鯨を業とす。兄頼興病のため公私の職を辞せるため、頼治代りて家職を継ぎ、正保元年大庄屋役となる。 延宝三年、鯨突定書を作る。同五年、鯨網を工夫し藁網を作り試みしも不成功。さらに工夫を重ね芋に代えて成功。そのため座頭九〇、背美二頭の年産記録を作る。後、長男頼盛に角右衛門の名を譲り、惣右衛門と改む。 鯨史稿はかつて肥前大村の深沢義太夫、突組法を習いに來たが、後義太夫芋網を案出、今度は角右衛門大村へ赴き伝習すと記す。	『和歌山県東牟婁郡捕鯨沿革』、 『鯨史稿』、『南紀徳川史』	【2233】
	和田総右衛門	東牟婁郡 太地浦	和田角右衛門を参照。		【2236】
貞享3年 (1686)	新宮組鯨方	東牟婁郡 三輪崎	紀州三輪崎。貞享三年より宝永二年まで継続。	『和歌山県東牟婁郡捕鯨沿革』	【2310】
元禄頃 (1688～ 1704)	太地角右衛門 (初)	東牟婁郡 太地浦	初代。頼盛。和田角右衛門の子。大庄屋。捕鯨に専業。一族の世襲株とし収益の半を一族に分与、山見方・機械方等の部長たらしむ。元禄年間、土佐国津呂組奥宮に漁法を伝える（一説に天和二年、土佐国多田吉左衛門に伝ふとあり、この方真に近し）。領主より太地姓を賜る。	『和歌山県東牟婁郡捕鯨沿革』	【1136】
年代不詳	太地角右衛門 (2)	東牟婁郡 太地浦	二代。頼雄。頼盛の長子。家業を継承。	『和歌山県東牟婁郡捕鯨沿革』	【1136】
年代不詳	太地角右衛門 (3)	東牟婁郡 太地浦	三代。頼勝。頼雄の子。家業を継承。	『和歌山県東牟婁郡捕鯨沿革』	【1136】
享保9年 (1724)	近藤伝右衛門	東牟婁郡 太地浦	紀州太地捕鯨家寛右衛門の実子。享保九年、父代理に江戸に来て掛金を積込み、帰国の念を断ち磐城石城郡江名浜に來り、佐藤忠信二世の子孫・空兵衛の嗣となり、太地の捕鯨法を伝授。当地捕鯨の嚆矢。その他各種漁業の振興。苗字帯刀を許される。	『大日本水産会報』	【817】
寛政頃 (1789～ 1801)	太地角右衛門 (4)	東牟婁郡 太地浦	七代。寛政頃、捕鯨衰微し中絶せんとす。紀州藩の御仕入御手組鯨方となり宰領を拝命。	『和歌山県東牟婁郡捕鯨沿革』	【1136】
寛政頃 (1789～ 1801)	石垣利包	東牟婁郡 新宮	新宮捕鯨は藩主水野家直営。利包は斯業を統括し、寛政中自ら網代場をとし、網を製し捕鯨を提議。	『水産博覧会第一区第二類出品審査報告』	【116】
天保頃 (1830～44)	太地角右衛門 (5)	東牟婁郡 太地浦	頼在。天保頃。頼休の長男。和田次右衛門と紀州藩より返還を受け自営。嘉永二年没。	『和歌山県東牟婁郡捕鯨沿革』	【1136】
文久頃 (1861～64)	太地角右衛門 (6)	東牟婁郡 太地浦	頼成。頼在の長男。天保五年生。安政地震大海嘯あり再び衰運に傾く。文久年間、新宮藩主の仕入となり雇用関係に入る。	『和歌山県東牟婁郡捕鯨沿革』	【1136】
元治元年 (1864)	石垣包継	東牟婁郡 新宮	利包の子。鯨網の新調を説き、元治元年一月成り網と銛にて営業。	『水産博覧会第一区第二類出品審査報告』	【116】
明治4年 (1871)	太地角右衛門 (7)	東牟婁郡 太地浦	頼次。外国船渡來の防衛として鯨組を用うることを上書し採用。明治四年、捕鯨業を還付。名を覚吾と改名。引続き捕鯨に従事。後に不振中絶。	『和歌山県東牟婁郡捕鯨沿革』	【1136】
明治8年 (1875)	鈴木雄八郎	南牟婁郡 阿田和村	城内善次郎と明治八年に捕鯨を起業。三輪崎浦の漁法に則る。第一回水博に器具図・鯨図を出品し受賞。	『水産博覧会第一区第二類出品審査報告』、『水産博覧会評語』、『大日本水産会報』（報告）、『大日本産業事績』	【1082】

時代	名前	出身地	事 績	引用文献	人名番号
明治11年 (1878)	石垣徳太郎	東牟婁郡 新宮	維新後、藩主捕鯨具を売却。徳太郎有志と器械を購入、明治一一年一月より開業。第一回水博に捕鯨装置及び各種鯨兎解剖図を出品し受賞。	『水産博覧会第一区第二類出品審査報告』	【116】
明治18年 (1885)	某	牟婁郡	明治一八年頃、出漁中濠州のある海岸に漂着。ふとチョオ貝を発見、巨利を博す。同二六年、牟婁の漁夫六〇名渡航。	『編年水産十九世紀史』	【2263】
明治21年 (1888)	飯田勉次	東牟婁郡 新宮	紀州新宮藩士。安政中に受命し太地伴十郎等五名を引率し、蝦夷捕鯨の状況を視察。明治二一年、三井物産経営の下に太地・三輪崎より鯨漁夫を引率、国後島に捕鯨、海況を不知に失敗。	『津呂捕鯨誌』	【91】
年代不詳	奥家七	東牟婁郡 太地浦	壮時に渡米、巻取網漁夫として研究。帰朝後に後援者を得、捕鯨廻網を發明。	不明	【408】
年代不詳	竹村京次	東牟婁郡 太地浦	渡米出稼ぎ。前田兼蔵より数年前早く帰国し捕鯨銃を持参、銛を仕込み発射試験成功。実際の出漁実験の時、何故か銃の尻発砲と共に飛び、京次の眉間を打ち即死。	不明	【1207】
年代不詳	前田兼蔵	東牟婁郡 太地浦	青年時に渡米、銃砲を研究し、一発で三挺の銛の飛出捕鯨銃を發明（後五挺となる）。結果良好。手突銛が前田銃に替わる。	不明	【1843】
明治35年 (1902)	君太夫	東牟婁郡 太地浦	羽指の一人。名は八十市。沢太夫の子。一六才にて座頭鯨の鼻切をした豪胆者。明治三五年、熊野捕鯨会社のボンボランス銛を初めて使用し成功。	不明	【634】
明治末年	漁野富太夫	東牟婁郡 太地浦	明治末年、鯨組羽刺として異色あり。ゴンドウ鯨の藁縄網捕獲を考え、囲み得たるも、その後の手段研究中絶。	不明	【2214】

【塩業関係】

時代	名前	出身地	事 績	引用文献	人名番号
天文頃 (1532～55)	藤太郎	京都 上鴨島枝村	通称伊織。猿丸太夫の後裔。天文年中、泉州湊村に住し、紀州雑賀塩を壺にて焼き、諸国に売出し壺塩屋と号す。承応三年、女院御所より天下一の号を賜い、延宝七年、鷹司殿より折紙状を賜う。これ焼塩の濫觴なり。	『煮海私記』	【2420】
宝永元年 (1704)	川幡六兵衛	河内国	宝永元年、名草郡船尾に塩田を開発。藩主河内浜と名付く。（大日塩全）	『大日本塩全』	【2348】
文化初年	中尾五郎右衛門	名草郡 加茂村 字小松原	小松原の大庄屋。文化初年、大崎村に塩田一町開墾。	『大日本塩全』	【2400】

【紀州以外の出身者】

時代	名前	出身地	事 績	引用文献	人名番号
慶長11年 (1606)	伊右衛門	摂津国 堺	元堺の浪人、慶長一一年、紀州太地和田忠兵衛頼元を助け、始めて鯨突を試む。	『津呂捕鯨誌』	【94】
慶長11年 (1606)	師崎伝次	尾張国 知多郡師崎	慶長一一年、紀州和田忠兵衛頼元に語られ、太地に始めて鯨突を試む。	『紀伊続風土記』	【2055】
慶長頃 (1596～ 1615)	伝次郎	尾張国 師崎	慶長年間、紀州太地浦の人と銛突き捕鯨開始せりという。	『水産博覧会第一区第一類出品審査報告』、『尾三水産会報告』	【1350】
元和5年 (1619)	広島藩	安芸国 広島	元和五年、和歌山より転封に際しカキを移植。一説に浅野長政、慶長年中に和歌浦より移植と云う。	『広島県の水産』、『大日本水産会報』（報告）	【2288】
寛永3年 (1626)	江口甚右衛門	肥前国 中通島有川村	有川村名主。寛永三年、紀州人三郎太郎と鯨突組を創始。貞享元年、宇久島の山田茂兵衛と合併、小河原浦前海に網組を組織。有川村鯨網組を創始（二代目か）。	『捕鯨史』	【285】
明暦頃 (1655～58)	深沢義太夫	肥前国 大村	明暦頃、紀州太地寛右衛門より突取捕鯨法を伝習、五島魚目に開始。後、網打法を工夫。寛右衛門亦この法を伝習、紀州へ持ち帰ると云ふ。網は紀州が先との説もある。デンチウ銛は義太夫の創案と伝ふ。延宝八年、筑前小呂島で鯨組を創始。長崎郷土史は、義太夫初め中尾二郎左衛門、また浅井太郎左衛門と云ひ、武雄に住し後、大村に來り捕鯨操業、寛文二年、土木を起こし新田開発すと云ふ。二代は壱岐勝本浦に網捕鯨創始と云ふ。	『筑豊沿海志』、『鯨史稿』、『長崎県郷土史』	【1729】

時代	名前	出身地	事 績	引用文献	人名番号
寛文4年 (1664)	多田吉左衛門	土佐国 津呂	五郎右衛門の子。初名三九郎。正保四年、郷士格下賜。寛文四年、捕鯨肝煎。延宝五年、紀州太地覚右衛門網取捕鯨を始めたるを聞き、弟義次と紀州に赴けるも面会し得ず。翌年基会を開き覚右衛門を招き漸く面会す。一説に水夫に身を落とし漁夫に水練を教えつつ、二年後漸く面会、衷情を披瀝し伝習を許さると云ふ。紀州より羽刺一〇人、漁夫六〇人を率い帰国。貞享元年、藩主に上聞、紀州漁夫を帰国せしむ。ここに津呂捕鯨法一変す。宝永三年、鯨方頭元を辞し同六年没。	『大日本水産会報』（報告）	【1218】
延宝頃 (1673～81)	播磨屋佐之助	土佐国 高岡郡宇佐村	延宝頃、紀州の甚太郎宇佐浦に来住、鯨節製造に努力せるを見、熱心に援助し、製品を販売、かつ製法を伝習、漸次良品を製造。	『第三回内国勸業博覧会審査報告』	【1663】
元禄頃 (1688～1704)	兵庫屋弥右衛門	相模国 浦賀	元禄頃、紀州漁夫が房総へ出漁、干鰯を製造し大阪・和歌山辺へ回送を見、同人問屋となり転送を業とす。浦賀肥料問屋の起こり。	『第五回水産集談会日誌』	【1691】
宝暦頃 (1751～64)	某	和泉国 岸和田	宝暦頃、紀州日高郡白崎村大引の狼煙番に来たり、遊漁の如く手繰網を始めしが漁利多く、村民做う。	『旧藩時代の漁業制度資料』	【2265】
天明頃 (1781～89)	松本三郎兵衛 (初)	江戸 下谷稻荷町	釣竿師東作の名で知たる。屋号泰地屋。元紀州藩士。上野山下で骨董屋たりしも、釣好の為、天明年間に竿師開業。専門竿師の嚆矢か。鮎三仕舞手本の竿を創作。嘉永三年没。初代釣音はその弟子。	『水産博覧会第一区第一類出品審査報告』	【1692】
寛政頃 (1789～1801)	某	淡路国	淡路の漁夫。寛政年中、紀州日高郡南部村山内に来たり、カマス網を創始。	『旧藩時代の漁業制度資料』	【2256】
享和頃 (1801～04)	高木五郎右衛門	伊豆国 安良里	享和年中、五十集業。実弟山田屋辰五郎、浅草茅町に鯨節商を為す。土佐与市なる鯨節熟練工訪問。辰五郎、与市を兄に紹介。五郎右衛門、与市を酒好なるまゝ一日金一步酒三升で招き改良。時に享和三年、爾来高木方鯨節の品質頓に向上、価格上昇。田子村に伝播延べて伊豆全円におよび、伊豆節声価上がる。	『静岡県水産誌』、 『静岡県之産業』	【1144】
天保頃 (1831～44)	幸七	淡路国 沼島	天保年中、紀州日高郡南部村字塚に来漁、終に移住。鯛縄を開始。	『旧藩時代の漁業制度資料』	【740】
慶応2年 (1866)	日高亀市	日向国 東臼杵郡 伊形村赤水	弘化二年生。同地へは天保以前より紀州の任せ網、広島県小坪地方より中高網を以て、鰯や雑魚の漁業に来漁。亀市も之を使用せるも不充分、苦心の末に鰯追込み網なる沖取網を考案。慶応二年試用。明治八年、一網に三千尾、続いて五万尾を得た。この漁法の普及で沿岸各地濫獲し、同一六年以後操業困難。同二〇年敷網法を考案。嗣の栄三郎と協力し研究、同二五年鰯大敷網に成功。同四一年改良巾着網を工夫。	『明治大正水産回顧録』、 『大日本水産会報（報告）』	【1684】
慶応3年 (1867)	石田忠吉	伊豆国 賀茂郡松崎町 江奈	慶応三年、肩巾八尺の鯨船を造る。また之に乘し紀州沖で鮪・鯨延縄に出漁。	『静岡県水産誌』	【125】
慶応3年 (1867)	藤井忠吉	伊豆国 仁科村	慶応三年、紀州熊野に蟻・鮪漁に出漁。暗夜篝火でイカを釣るを見、帰村試み成績良好。爾後普及。	『静岡県水産誌（写本）』	【1751】
年代不詳	岩七	阿波国	紀州名田村原井に来住、鯨釣りを教える。	『旧藩時代の漁業制度資料』	【223】
明治18年 (1885)	石川十吉	静岡県 浜名郡舞坂	明治一八年、舞坂に鯛延縄を創始。明治四三年紀州沖視察、鮪延縄を開始。	『浜名郡史』	【117】
明治20年 (1887)	西田玄次郎	北海道 日高郡静内村	大日本水産会報告に、伊藤鉄太郎が紀州北牟婁郡九鬼浦で明治二〇年以来綿糸網を製し、好成绩なる報告を掲げたるを見、直ちに綿糸網にて鮭漁を試み、その結果を郵便報知新聞（明治二五年一月二七日）に公表。	『日本水産捕採誌』	【1529】
明治27年 (1894)	岩崎勘次郎	山口県 鶴江浦	明治二七年、苗音松らと紀州太地浦、田辺近海にイカケ漁を行う。また土佐幡多郡観音崎に出漁し、徳島沖にも操業。七ヶ月にて帰浦。	『山口県鶴江浦漁業実績』	【213】
明治29年 (1896)	清水丈吉	愛媛県 宇和島	明治二九年、紀州西牟婁郡潮崎村が敷網に好適なるを見、村民に製網及び用法を伝授。同三〇年、宇和島より漁夫を雇い開始。	『旧藩時代の漁業制度資料』	【997】
明治31年 (1898)	鳥居市右衛門	愛知県 知多郡師崎	第二回水博を見、刺激され、明治三一年、茨城県で鮪流し網を実施、習業。帰国調製し遠く紀州灘に出漁。	『尾三水産会報告』	【1389】
明治38年 (1905)	浜村伊助	不明（紀州田辺？）	濠州ポートダーウィンよりセブ島を経て、比島サンボアンガに来り、ブルー海で真珠採取の創始。同三十九年、紀州田辺の比律賓漁業会社及び太田興業会社の船、それぞれ三隻出し漁好調。ただし、本島は市民権なくして漁業権なきを以て、米人を加へ法人組織とした。	『南洋之水産』	【1640】

はじめに

和歌山県立紀伊風土記の丘（以下、「紀伊風土記の丘」という）には、花山 10 号墳出土と伝わる未報告資料（須恵器、埴輪、土師器）がある。この資料の中には、これまで不明瞭であった花山 10 号墳の築造時期を位置付ける、もしくはこれまでに花山地区で古墳の築造が空白であった古墳時代中期中葉から後葉に古墳が造られた可能性を示す資料が含まれている。そのため、本稿ではその重要性に鑑み、資料紹介を行うものである。本稿の執筆は、3 の須恵器を仲辻が、1・2・3 の埴輪と土師器を金澤が、3 の収蔵経緯と収蔵状況を上田・金澤が、4 は金澤が 3 の各自執筆内容をふまえ執筆した。なお、編集は金澤が行った。

1. 花山 10 号墳の概要

花山 10 号墳は、紀の川南岸、和歌山市東部の岩橋山塊に位置する岩橋千塚古墳群を構成する古墳の一つである。岩橋千塚古墳群は、4 世紀末から 7 世紀に約 900 基の古墳が連綿と築かれた全国でも有数の規模をもつ古墳群で、地理的なまとまり等から 10 地区に区分される。このうち、花山 10 号墳は花山地区に所在する⁽¹⁾。花山地区は、

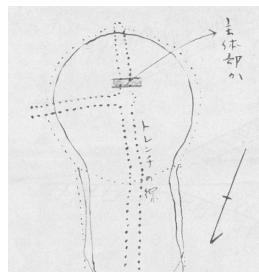
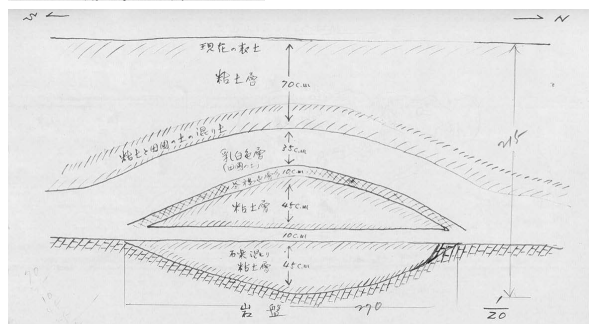


図 2 大野嶺夫氏が書き残した花山 10 号墳後円部埋葬施設のメモ

（上：墳丘における位置図、
下：埋葬施設断面図）



岩橋丘陵の北西に位置する東西約 1.3km、南北約 0.5km の東西に細長い独立丘陵である。これまでに、丘陵の東西にのびる主稜線上や南北に派生する各尾根の稜線上に、前方後円墳 9 基、円墳 75 基、計 84 基の古墳が確認され（和歌山県教育委員会 2025）、岩橋千塚古墳群の中でも比較的古い時期の古墳が多くみられる地区である。花山 10 号墳はかつて、この花山地区の丘陵中央、主稜線から南に派生する尾根上に位置した（図 1）。

花山 10 号墳は、昭和 37・38 年度（1962・1963）

に埋立用採土と宅地造成工事に先立ち、発掘調査が実施された（花山古墳緊急発掘調査会 1964）。この調査により、花山 10 号墳は全長 44 m の前方後円墳であり、後円部径 25 m、後円部高 2.75 m、前方部端幅 15 m、前方部高 1.75 m、前方部頂と後円部頂の比高差は 1 m で、わずかに後円部が高いことが判明した。ただし後円部は戦時中の要塞建設により破壊されたものと考えられている。主軸は N-30° -W

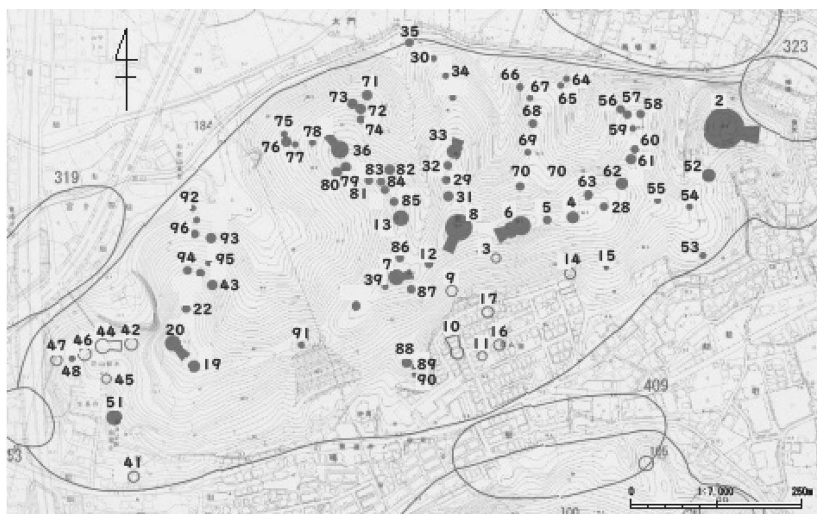


図 1 岩橋千塚古墳群花山地区の古墳分布図

で、墳形は前方部が細く、くびれ部幅と前方部幅が変わらない柄鏡状を呈する。埋葬施設は、大野嶺夫氏の記録によると後円部に主軸直交方向の粘土槨が存在した可能性が高い(図2)。また、前方部の後部側頂には、墳丘主軸に平行して長さ1.85 m、幅0.55 m、深さ0.5 mの小規模な竪穴式石室が確認されている。遺物は、竪穴式石室内部南側埋土から碧玉製管玉4点、ガラス小玉2点を確認されているほかは、墳丘等からの出土は確認されていない。築造時期は、墳形や出土遺物から5世紀前半と考えられている。なお、花山10号墳は、発掘調査後、昭和40年(1965)に土砂採取工事で墳丘が消滅したとされ、調査完了から完全に消滅するまでにはタイムラグがある。

2. 伝花山10号墳出土資料

(1) 収蔵経緯と収蔵状況

伝花山10号墳出土資料が紀伊風土記の丘に収蔵された経緯については、紀伊風土記の丘の記録や当時を知る可能性がある方々へ聞き取りを行ったが、その詳細は明らかにできなかった⁽²⁾。しかし、当該資料は、いつ頃か大野嶺夫氏や岩橋章氏により紀伊風土記の丘へ寄贈された花山古墳群表採資料とともに保管されていることから、両者どちらかにより他の花山古墳群出土資料とともに紀伊風土記の丘に収蔵された可能性がある(和歌山県立紀伊風土記の丘管理事務所1987・1989)。なかでも、大野氏は花山10号墳破壊時の記録を多数残しており、寄贈者として最も可能性が高いとみられるが、推測の域を出ない⁽³⁾。

紀伊風土記の丘が所蔵する伝花山10号墳出土資料は、すでに述べたように大野嶺夫氏や岩橋章氏により寄贈された花山古墳群出土資料と同じコンテナに収蔵されている。資料の内訳は須恵器3点、埴輪2点、土師器6点の合計11点で、大きく2つの袋に分けて収納されている。一つは須恵器、もう一つは埴輪と土師器である。埴輪と土師器が入った袋には、ラベルが3枚同封されており(写真1-①~③)、以下のとおりそれぞれ記載がある。

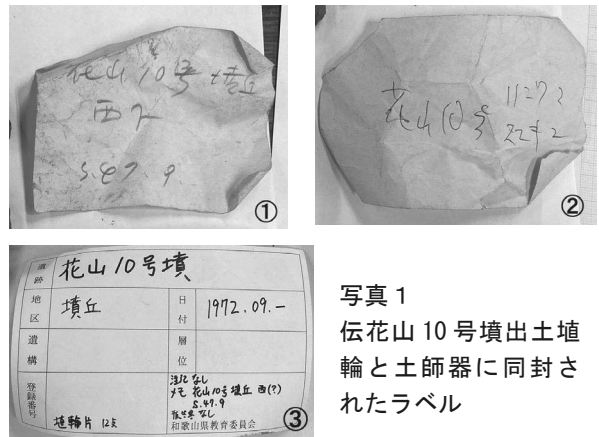


写真1

伝花山10号墳出土埴輪と土師器に同封されたラベル

①「花山10号墳丘 西下 S.47.9.」

②「花山10号 ハニワ2 須恵器2」

③「遺跡 | 花山10号墳 地区 | 墳丘 日付

| 1972.09.- 登録番号 | 埴輪片12点 欄外

| 注記なし メモ 花山10号墳丘 西(?)

S.47.9 報告書なし」

これらラベルは、紙の材質や劣化具合から①が最も古く、③が最も新しく作成されたラベルであると考えられる。また、②はラベル紙の劣化状況から①よりも後に作成されたものとみられるが、記載内容が現状並びに③と異なっている。この理由はいつか想定されるが、ラベルの作成順や記載内容からみれば、ラベル①の内訳もしくは種別の判別可能な資料を記載したものがラベル②で、その後、再整理がなされたのち、記載点数と現状資料数が合致しない点は不明確であるが、ラベル③が作成されたとみるのが最も公算が大きいと考えている。(上田・金澤)

(2) 出土資料

伝花山10号墳出土資料について、須恵器、埴輪、土師器の種別ごとに紹介する。

須恵器 須恵器は3点ある(図3、写真2)。1は、須恵器甕または小型壺の胴部から底部にかけての破片である。胴部最大径は直径11.0cmに復元できる。残存高は4.4cmである。焼成は良好であり、胎土には直径1mm以下の白色鉱物を含む。色調は外面が7.5Y4/1灰色、内面が5Y6/1灰色、7.5Y6/1灰色であり、外面がより黒色に近い。外面には胴

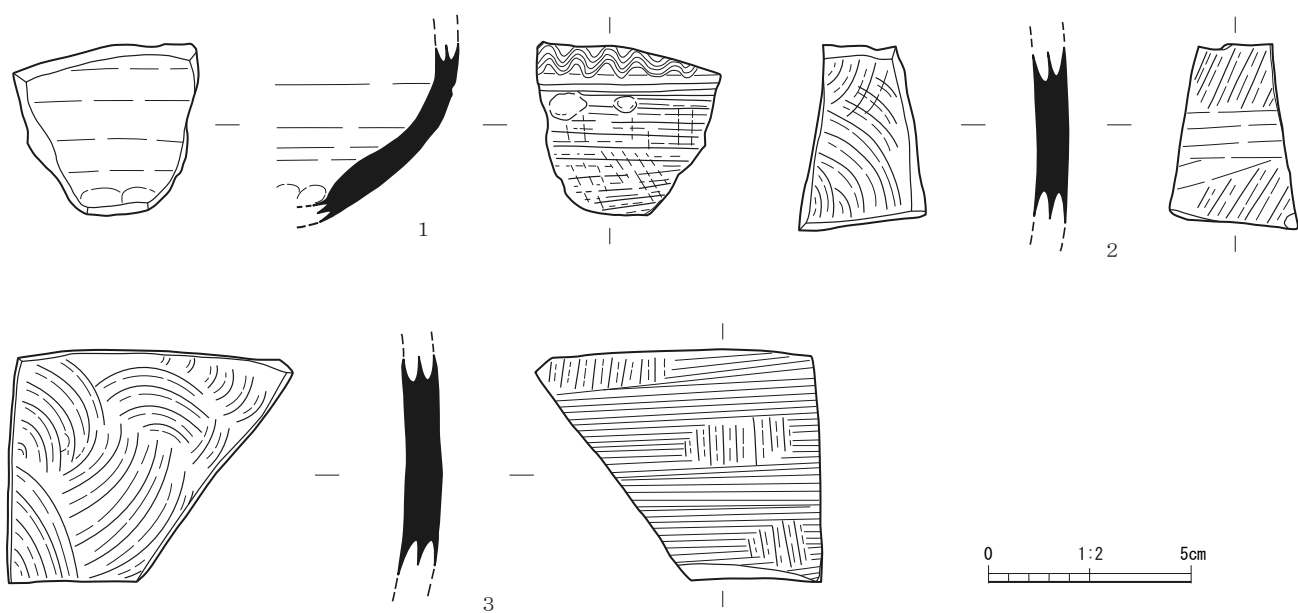


図3 伝花山10号墳出土須恵器実測図 (S=1/2)

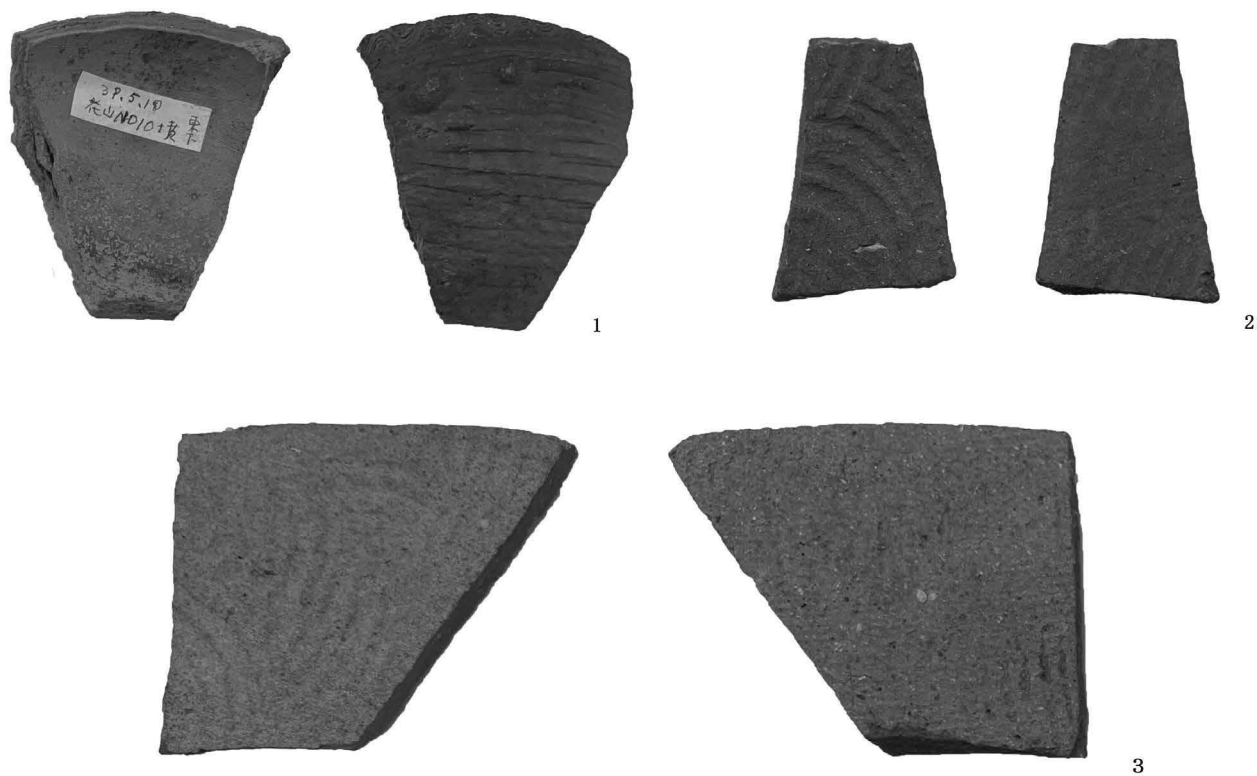


写真2 伝花山10号墳出土須恵器

部中央に波状文がみられ、その下部をヘラによる沈線で区画する。底部には平行タタキ目を確認できる。横方向の平行タタキ目が明瞭であり、それに先行すると考えられる縦方向の平行タタキ目が

薄くみられる。また、胴部中央には焼きぶくれが2カ所でみられる。内面の調整は回転ナデであり、底部内面には丸底化に伴う押圧の痕跡を確認できる。また、自然釉がわずかに付着する。

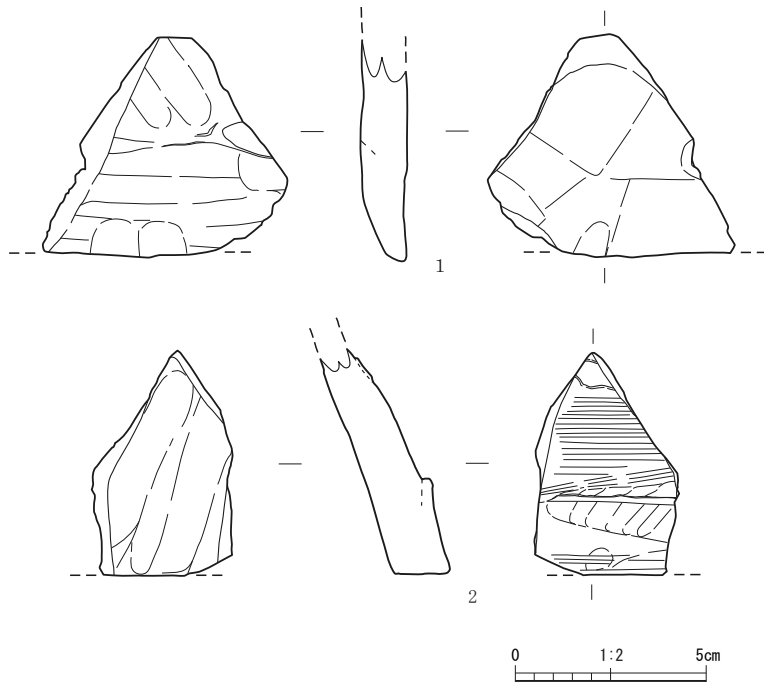


図4 伝花山10号墳出土埴輪実測図 (S=1/2)

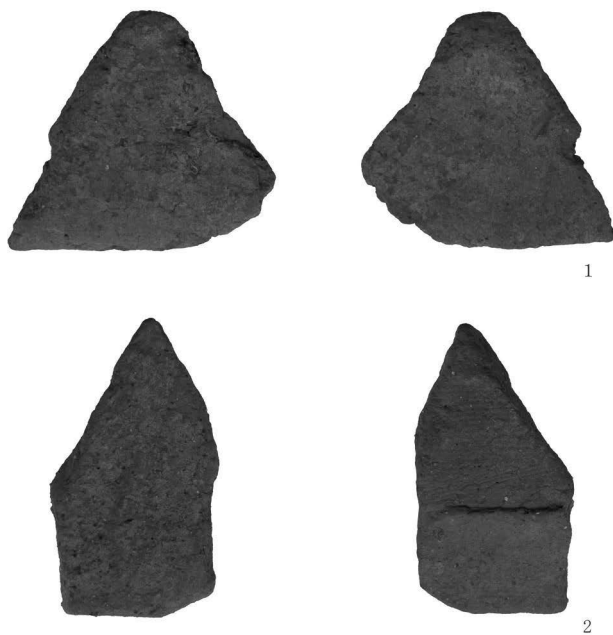


写真3 伝花山10号墳出土埴輪

なお、内面には「39.5.10 花山 N010 墳東下」と記された紙が貼り付けられており、昭和39年(1964)年5月10日に花山10号墳の東側で採集されたことを示すものと考えられる。

2は、須恵器甕の胴部の破片である。残存する最大幅は3.2cm、高さは4.2cmである。厚さは最大0.7cmであり、中型または大型品と考えられる。

色調は、内外面ともにN5/灰色であり、断面は7.5YR5/3にぶい褐色である。外面にはタテ方向の平行タタキ目と横方向のナデが確認できるが、摩滅が進んでいる。内面には同心円文が残る。3は、須恵器甕の胴部の破片である。残存する最大幅は7.0cm、高さは5.7cmである。厚さは最大0.9cmであり、大型品と考えられる。色調は外面が10YR6/4にぶい黄橙色、内面が2.5Y6/1黄灰色、断面が7.5YR5/1褐色である。外面はタテ方向の平行タタキ目のち、カキ目を施すが、自然釉が付着し、不明瞭である。内面には同心円文が確認できる。

これらの須恵器の所属時期については、1は断面形状及び法量から陶邑窯跡群における編年のTK216型式期からTK208型式期にかけてのものと考えられる。特筆される点としては、横方向の平行タタキ目がみられることである。同時期の紀ノ川下流域に集中的に分布する「楠見式土器」の特徴の一つとして、横方向のタタキ目が挙げられ、花山丘陵に近接する鳴神地区遺跡群からも横方向のタタキ目をもつ須恵器が出土しており、関連がうかがえる。2と3については、甕の破片であり、詳細な時期についての判別は困難であるものの、内面に同心円文が残ることや、3の外面がカキ目により調整されていることなどから、いずれも古墳時代の中期中葉以降の所産であると考えられるが、1のみ採集時期および場所を記した紙が貼られ、これらが同時期に同地点で採集されたかについては不明である。(仲辻)

埴輪 埴輪は2点ある(図4、写真3)。1は円筒埴輪の底部片で⁽⁴⁾、残存最大幅6.4cm、残存高5.8cm、厚さは0.5～1.2cmである。焼成はやや甘く軟質で、内外面の色調は7.5Y5/6明褐色を呈



写真4 伝花山10号墳出土土師器

する。外面には底部調整に伴う板状工具の痕跡とユビオサエが確認でき、内面にはナデ調整、特に下半部にヘラ状工具によるヨコナデがみられるほか、下端部にはユビオサエがみられる。胎土には直径1mm以下の白色鉱物を含む。時期は、埴輪の特徴から川西編年のV期に相当し（川西1967）、県内の事例に鑑みればTK23・47型式期以降の所産と考えられる。

2は、不明形象埴輪片である。残存最大幅は3.8cm、残存高は5.8cm、厚さは0.7～1.4cmである。焼成は1と同様にやや甘く軟質で、内外面の色調は7.5Y5/6明褐色を呈する。外面にはヨコハケ及びナナメハケによる調整が確認でき、下端部から上部にかけての2.4cm間に、帯状の粘土の貼り付けが認められる。また、上端部付近においても、幅0.7cmの範囲に高さ0.1cm程度の粘土の貼り付けが確認できる。内面にはユビナデによる調整が認められる。胎土には直径1mm以下の白色

並びに黒色鉱物を含む。

土師器 土師器は6点ある（写真4）。このうち最も残存状況が良いものでも法量が0.3cm四方、厚さ3cm程度といずれも細片であり、器種も明確でないことから図化は行っていない。（金澤）

3. まとめと考察

以上みてきたように、紀伊風土記の丘に収蔵されている伝花山10号墳出土の須恵器、埴輪、土師器について紹介した。各器種の同定や所属時期、特徴については表1にまとめたとおりである。このうち、須恵器甕または小型壺は、貼り付けられたラベル並びに当

時の花山地区の開発状況から、花山10号墳に帰属する可能性が考えられる⁽⁶⁾。一方、須恵器甕はラベルの貼り付けがなく、加えて点数が、埴輪と土師器が収納された袋に同封されていた②のラベルの須恵器記載数量と合致することから、埴輪2点とともに須恵器甕または小型壺とは別途、採集されたものと考えられる。須恵器甕と埴輪の採集時期や地点はラベル①の記載内容のとおりである蓋然性が高いと考えているため、須恵器甕は花山10号墳に帰属する可能性がある⁽⁶⁾。一方、埴輪については、これまでの花山10号墳の踏査や発掘調査において確認されていないことに鑑みれば、花山10号墳に帰属する可能性は低いとみられる⁽⁷⁾。

以上のように、紀伊風土記の丘に収蔵される伝花山10号墳出土資料、須恵器、埴輪、土師器は、いずれも花山10号墳に確実に帰属するとは言い難い。しかし、須恵器甕または小型壺・甕はその

表1 伝花山10号墳出土資料一覧

種別	器種	点数	時期	特徴	備考
須恵器	甕/小型壺	1	TK216～TK208	「楠見式土器」の特徴の一つである横方向のタタキ目をもつ	内面に「39.5.10花山NO10墳東下」と記された紙が貼り付けられている
	甕	2	古墳時代中期中葉以降	内面に同心円文が残る。うち1点は外面がカキ目により調整されている	
埴輪	円筒埴輪	1	TK23・47以降	底部調整が認められる	同じ袋に収納され、3つのラベルが同封される
	形象埴輪	1	不明	底部並びに上端部付近に粘土の貼り付けがある	
土師器	不明	6	不明	いずれも細片	

可能性があり、これらは花山 10 号墳の築造時期を示す可能性がある。このほか、前者が花山地区から採集された事実は重要で、これまで花山地区で空白となっていた TK216 型式期から TK208 型式期に位置づけられる古墳の存在を示すほか、鳴神地区遺跡群との関連性もうかがわせ、花山地区の古墳築造の継続性や集落との関係を考えるうえで、極めて重要な資料である。

【註】

- 1 岩橋千塚古墳群には、花山地区のほか、大谷山地区、大日山地区、前山 A 地区、前山 B 地区、井辺前山地区、井辺地区、寺内地区、和佐地区、山東地区がある。
- 2 当時を知る可能性がある関係者への連絡にあたっては、富加見泰彦氏に大変お世話になりました。伝花山 10 号墳出土資料の収蔵経緯はわかりませんでしたが、聞き取りのなかで、当時、花山 10 号墳発掘調査出土資料は現在の和歌山城にかつてあった和歌山県立図書館(平成 5 年(1993 年)に現在地に移転)に保管されていたといった貴重な情報を得ることができました。記して感謝申し上げます。
- 3 大野嶺夫氏が紀伊風土記の丘に寄贈された資料のなかには、大野氏が撮影・作成した花山 10 号墳の発掘調査や破壊時の写真、略測図、新聞スクラップがある。花山 10 号墳破壊時の様子が日付入りで記録されており、消滅古墳の状況を知るうえで大変貴重な資料である。
- 4 円筒埴輪の部位同定については、藤井幸司氏にご協力いただきました。記して感謝申し上げます。
- 5 採集場所の詳細が特定できていないため、花山 10 号墳に帰属する可能性のほか、周辺の古墳に帰属する可能性も排除できない。花山 10 号墳の東側をみると、花山 10 号墳と同様に既に土砂採取等で消滅した花山 11・16・17 号墳がある。このうち、花山 16 号墳は埋葬施設が横穴式石室であり時期に隔たりがあること、また消滅時期が昭和 37 年(1962)12 月であることから(和歌山県教育委員会 2025)、採集された時期から考えると、須恵器甕または小型壺が帰属する可能性は低いと考えられる。花山 17 号

墳においても、花山 16 号墳と同時期に消滅していることから、同様にその可能性は低いといえる。一方、花山 11 号墳は、時期が明確でない堅穴式石室を埋葬施設にもつ古墳で、花山 10 号墳に近接することから、消滅時期も近い時期であるとみられる。そのため、須恵器甕または小型壺が帰属する可能性がある。

- 6 この他、須恵器甕の時期幅が広いと、立地から花山 7・9・12・39・87～90 が帰属古墳の候補としてあげられる。
- 7 花山 10 号墳の西側に埴輪が流出する可能性がある古墳に、6 世紀に築造されたとみられる花山 12 号墳がある。花山 12 号墳からは、石見型埴輪が出土している(和歌山県立紀伊風土記の丘 2020)

【参考文献】

- 川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 巻第 2 号 日本考古学会
- 花山古墳緊急発掘調査会 1964 『花山古墳』和歌山市教育委員会
- 和歌山県教育委員会 2007 『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』
- 和歌山県教育委員会 『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』
- <https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/500700/maizou/houzouchi.html> (参照 2025-02-10)
- 和歌山県立紀伊風土記の丘管理事務所 1987 『紀伊風土記の丘年報』第 14 号
- 和歌山県立紀伊風土記の丘管理事務所 1988 『紀伊風土記の丘年報』第 16 号
- 和歌山県立紀伊風土記の丘 2020 『埴輪が語る古墳の祀り』

宮田啓二『昭和二七年秋冬 岩橋千塚古墳群 調』
—前山・西和佐地区編—

石丸 彩・金澤 舞・瀬谷今日子・富永里菜・中西瑠花・仲原知之・馬場彩加

はじめに

『昭和二七年秋冬 岩橋千塚古墳群 調』（以下、「当資料」という。）は、和歌山県の郷土史家である宮田啓二氏が昭和 26～29 年（1951～1954）に岩橋千塚古墳群などの踏査や聞き取りの記録を書き留めたものである。当時やそれ以前の岩橋千塚古墳群などの状況を知ることができる大変貴重な資料であることから、有志で令和 2 年度より書き起こしと考察を行っている。令和 2 年度には花山地区、令和 3 年度には大谷山地区、令和 4 年度には大日山地区の一部、令和 5 年度には大日山・前山 B 地区の一部の書き起こしと考察を行った（石丸ほか 2021・2022・2023・2024）。本稿では、現在の前山 A・B 地区並びに和佐地区にあたる当資料の前山西第 I 稜並び西和佐古墳・天王塚古墳について記載する 64～68・114～120・128～130・138・139・141・143 頁の書き起こしを掲載し若干の考察を行った。なお編集は金澤が行った。

書き起こしは、およそ各頁数に分けて掲載し、旧字やくずし字⁽¹⁾、誤字もすべて原文のままとした。文字が判別できないものは、『□』と表記し、補足が必要と思われる箇所には、注記《*》を付記した。



図 1 現在の前山 B 地区の古墳分布図（和歌山県教育委員会 2019） ※番号は古墳番号を示す

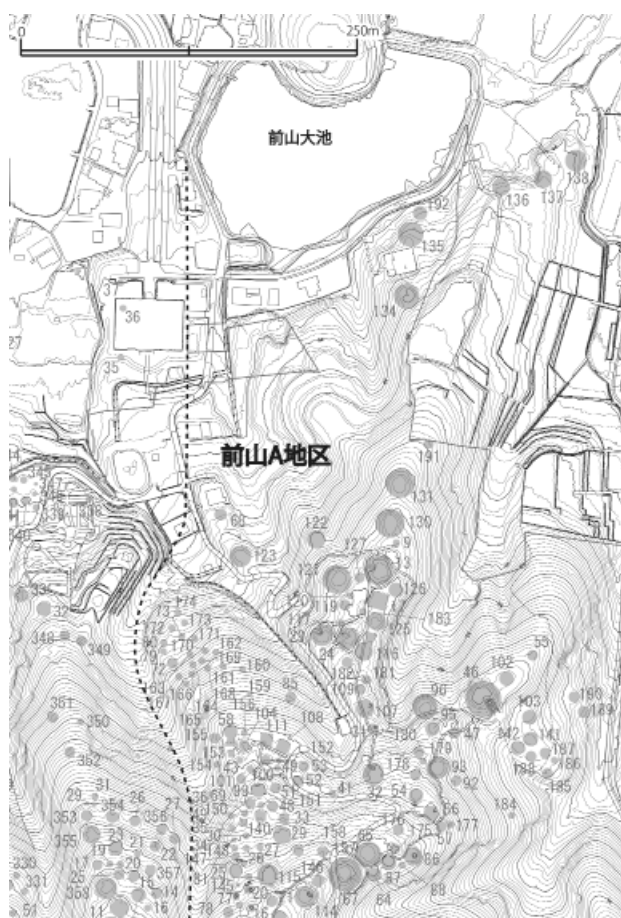


図 2 現在の前山 A 地区の古墳分布図（和歌山県教育委員会 2019） ※番号は古墳番号を示す

今回掲載できなかった残りの頁の書き起こしについては、次年度以降の『和歌山県立紀伊風土記の丘研究紀要』で公開予定である。

なお、当資料に記載されている前山 A・B 地区の古墳番号は、現在の古墳番号（和歌山県教育委員会 2019）と異なっている。記載内容をわかりやすくするため、現在の前山 A・B 地区と当資料の古墳番号との対応関係を先に示し（図 1・2、表 1）、書き起こしにも注記する。ただし、確定的でないものについては「？」を付記、もしくは複数の候補を列記した。なお、当資料和佐地区の天王塚古墳は現在の名称と変わりなく、西和佐古墳は後述するようにそもそも特定の古墳を示すものであるか定かでないため、対応をとっていない。

表 1 前山 A/B 地区古墳対関係

当資料番号	現古墳番号	当資料記載概要	備考
西第Ⅰ稜1号墳	前山B158号墳?	—	分布位置から推測。
西第Ⅰ稜2号墳	前山B156号墳?	—	分布位置から推測。
西第Ⅰ稜3号墳	前山B148号墳?	—	分布位置から推測。
西第Ⅰ稜4号墳	前山B146号墳?	—	分布位置から推測。
西第Ⅰ稜5号墳	前山B140号墳?	長さ11m、幅5mの楕円形墳。墳丘は最もよく原形をとどめる。墳丘南面に幅2mの浅い溝があり特徴的。墳丘に長さ4mの凹みあり。羨道の発掘後埋まったものか。	宮田資料では「5号墳(?)」となっている。分布位置から推測。
西第Ⅰ稜6号墳	前山B141号墳?	—	分布位置から推測。
西第Ⅰ稜7号墳	前山B149号墳?	—	分布位置から推測。
西第Ⅰ稜8号墳	前山B151号墳?	—	分布位置から推測。
西第Ⅰ稜9号墳	前山B150号墳	径9mの円墳。横穴式石室あり。右片袖式傾向。玄室長1.8m、幅2.3m、深さ1.1m。玄室前道?の天井石残存。玄室床面に5cm位の川原石あり。	位置は異なるが、石室の特徴や規模が合致。
西第Ⅰ稜10号墳	前山B208号墳?	—	分布位置から推測。
西第Ⅰ稜11号墳	前山B152号墳?	径6～7mの円墳。中央に径1m、深さ70cmの凹みあり。	分布位置から推測。墳丘規模や特徴は合致せず。
西第Ⅰ稜12号墳	前山B153号墳	径6mの円墳。横穴式石室あり。両袖式。東西主軸。玄室長2.15m、幅1.7m、高さ1m。西に開口。	墳丘規模は異なるが、位置や石室の特徴、規模が合致。
西第Ⅰ稜13号墳	前山B154号墳?	—	分布位置から推測。
西第Ⅰ稜14号墳	前山B155号墳?	—	分布位置から推測。
西第Ⅰ稜15号墳	前山B145号墳/ 前山B147号墳	—	分布位置から推測。
西第Ⅰ稜16号墳	前山B253号墳?/ 前山B254号墳?	—	分布位置から推測。
西第Ⅰ稜17号墳	前山B253号墳?/ 前山B254号墳?	—	分布位置から推測。
西第Ⅰ稜18号墳	前山B255号墳?/ 前山B256号墳?	—	分布位置から推測。
西第Ⅰ稜19号墳	前山B257号墳?	—	分布位置から推測。
前山の知門塚	知事塚古墳?	玉石に文字を刻んだものあり。	
前山大池組合石棺		箱式石棺。長辺4尺(約121.2cm)、短辺1尺25(約106.1 cm)、深さ1尺(約30cm)。長側石数1石。小口Ⅱ字型。底面に径5cm程度の川原石あり。子供の頭骨残存。頭位南。排水溝あり。石棺北東隅に土器配置。	前山大池の東南土取場で発見された組合式石棺
46号墳やや上組合石棺	前山A179号墳?	箱式石棺。長側石数1石。小口Ⅱ字型。鏡、金のサヤガネ出土。あばら骨残存。伸展葬。左?側に直刀、頭かその後ろに高坏配置。鏡は頭に、厚さ30cm程の朱を敷きその上に置く。	前山A179号墳とは箱式石棺の小口形態或使用石材枚数が異なる。
46号墳	前山A46号墳	径約27.3m。横穴式石室あり。玄室長約3.4m、幅約2.12m。石棚・石梁あり。石室外で印花文土器出土。	

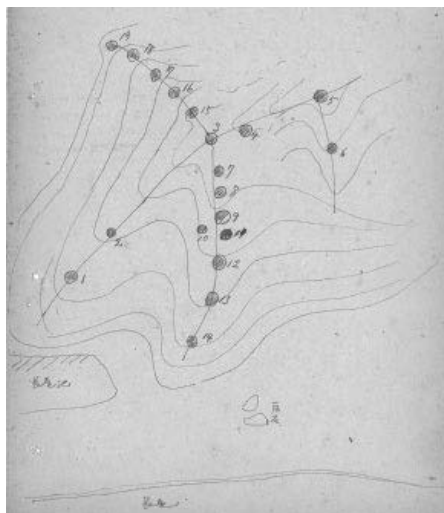
2. 宮田啓二『昭和二七年秋冬 岩橋千塚古墳群調』書き起こし

(1) 前山地区

【64 頁】

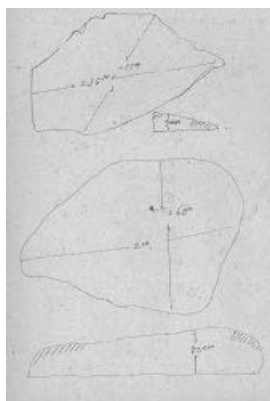
昭和 27. 1. 5

前山西第 1 稜 (沼平助 市真砂町所有山)



【65 頁】

長尾谷巨石Ⅱ個見取図

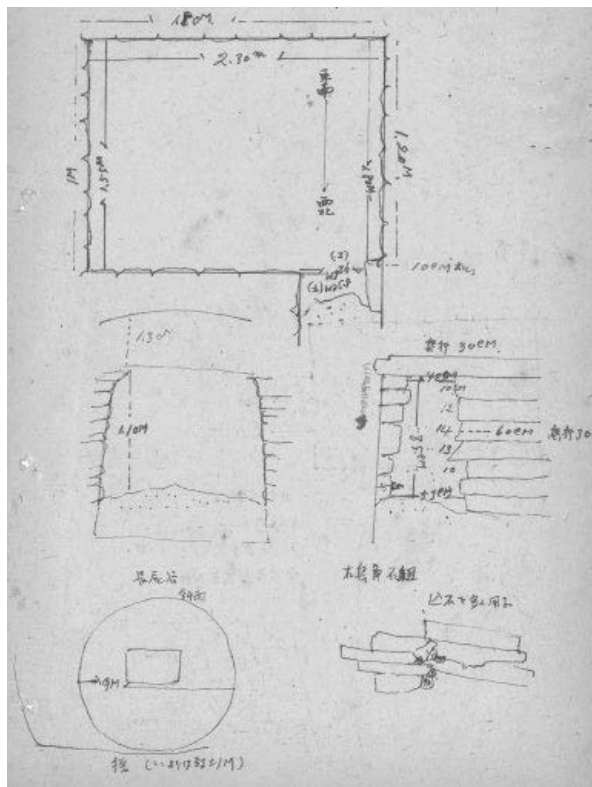


長尾池西方 100M 両石間隔 1.10M

古墳蓋石として使用せしものをここに放置するにあらぬ。本市 57 才の人語るところ子供の頃よりありしとなり。この附近発掘は明治 30 年代なれば知るべし

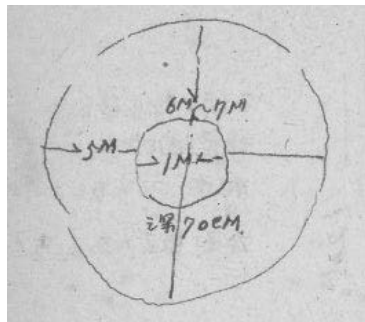
【66 頁】

前山第Ⅰ稜墳 9 号墳《*現在の前山 B150 号墳》
石組大様長壁を以て短壁を囲む形を基本とする
粗面、コシ多ク大小塩梅
床面、敷石川原石、5 cm位



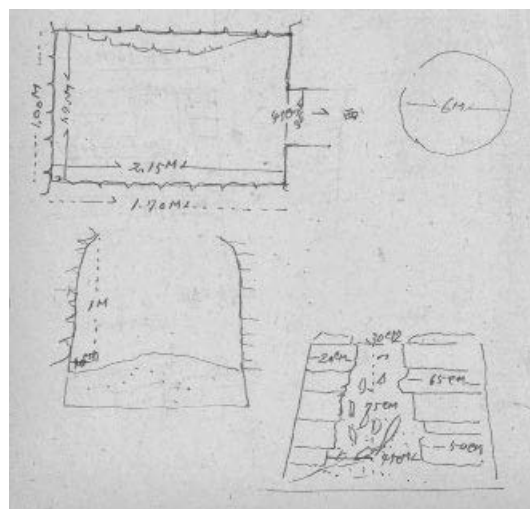
【67 頁】

11 号墳 《*現在の前山 B152 号墳》



12 号墳 《*現在の前山 B153 号墳》

東西主軸石室 南壁急カーブ 土圧に依る？
石組交互差入、大 50 cm 東及南壁完全整形



【68 頁】

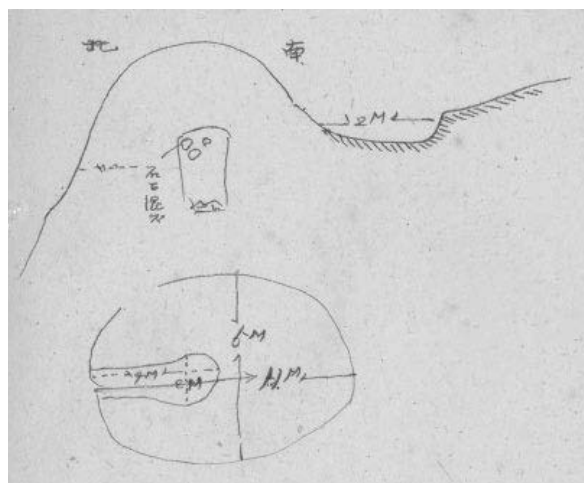
5 号墳 (?) 大日東斜面前山第一稜間

中腹に封土最もよく原形をとどめるものである

羨道面の発掘後埋りたるものか

本掘であるか不明。恐らく発掘後埋りたるものか。

南面に幅 2M の浅き溝あるは特徴也



【115 ～ 119 頁】

長尾谷所見

大日山頂から東に伸びる一段低く且つ長い尾根《*大日山第Ⅱ稜》は、長尾の名の示す通りである。この尾根の南側の谷、即ち私が長尾谷と呼ぶ谷は 長尾池に至るまでは幅員 30 m ～ 50 m 程度の笹原で別に溪流のあるといった谷ではない。雨水を集めて溜池としている事は現在この谷を頂上に通ずる細徑に沿って 水のない溝が細く振れているに依つても分る。

この徑には緑泥片岩の岩層が出ていて、古墳築造にあたっては この近距離のものを使用した？も想像されるが、更に大日南嶺第一稜にも中腹に大きい岩塊の二ヶ所露出するものがあり、岩をきり出す技術には すでに専門的に進んでいたと思はれる これら石材の出所を、少くとも附近の古墳には利用した？も想像される？である。

本日 私が調査して実はその巨大に驚いたのは、i 墳《*現在の前山 B169 号墳》の蓋石二個である。これはこのすぐ上にあり 最低墳の一つであるが こゝに使用された石材を見るに及んで 長尾池上方に放置された二個の巨石の使途も実は明瞭とな

つたのである。これは築造にあたってこれまで運び
放置されたものか、或いは使用したものを発掘後こ
の地点に放置したか、一應《*応》調べる必要は
あるが、いづれにしても古墳関係のものであるに於
て間違ない。又、こうした巨大な石材を得るには46
墳《*現在の前山A46号墳》あたりの石材を運搬
したと見るより、この附近のものをそのままこの谷に
下して使用したと見る方が妥当である。この谷は朝
日を受けるに早い、夕日は早く大日山頂に遮られて
日陰となる、狭い谷であるが、前山第一稜と対して山
脚迄古墳があり、かつて徳川頼倫侯の発掘になる山
背古墳を仰ぐ。谷の中間で埴輪断片を拾った。こ
れら古墳中にはかつて埴輪をめぐらしたものがあつ
た様□《*子?》想像される。

長尾稜線所見

長尾の東端は一部畑地となり、第一号墳に至る迄
にも戦時中耕作された畑が疎松の中にあるが馬背の
様なこの稜線に沿って古墳八基あることはすでに記
したところである。七、八号墳より以上は、径が通じ
てをり、それに沿って祠壇（約一坪許）が、両三株
の桜樹と共にあり、これについては一應置いて置きたい
と思ふ。

この上方に稍平坦となった稜角の地があり、更に
それより上方南斜面に古墳五基を認めるが、最も適
地と思はれるこの一角に古墳の無いのは何故であら
うか。

私はこの附近を再度調査してみたが遂にそれらし
い痕跡を認めなかった。

注意してみるとこのあたり路辺には、岩脈のあらは
れているものがあり、これらは築造にあたって、一掘
鑿は困難であつた為に避けたものであるまいか。そ
う考えるより他にこの地点の利用されなかつた理由を
見出せないのである。この附近からは現在疎松の地
帯となつている。この尾根端は前山同様、村持とな
つて採槨の為、灌木笹などを刈り、冬期の調査には
都合がいい。冬山のどこかに人がいて薪を採つてい
る風景である。

玄室石組についての今日の所感

奥壁前壁を左右長壁をもつて囲む手法はあたかも
木工の木組の様に共通しているが、上方に持ち送ら
れる形の構造に於て、不安定の感を伴い易い。それ
故本日調査中には二三石毎に交互に喰い違える手
法を用いたものもあり、そのいずれも自然に破損した
と認められるものもない。大枠に於て石の大小を適
宜に使用してをる。

大日山頂墳46号墳《*大日山35号墳、前山
A46号墳》の如き形、即ち私のいう家屋形（朝鮮磚
築状墳）にては、そのカーブは上方にしたがつて急
となる為、したがって長い奥行を持つ石を必要とし
したがってその露出面は共通して大きくなつてい
ることも本日、その実□《*詳か》例について知り得た
ところである。所謂、本古墳群の特徴とする石積の壁
面はかつて大野雲外氏も驚異した通りこれはこれだ
けの古墳が築造される為には自然専門的技術化して
いつたことも認められるところであり、全く驚嘆する
様なものがある。これら整正の形のものとは割合粗雑
と思はれる一群もある譯で、私は調査完了と共に一
應立成の基準をこれに認めて考えてみたいと思つて
いる。

◎前記 四隅の用石例を統計的に見れば、彼等の
持つ技術と同時に専門化されていたと想像する、彼
等の同一人に依りなされた配列も自然と明瞭になる
と思はれるのであるしその築造年代の類型が導き
出されるのではないかと思う。

凡そこの狭い玄室内に所定の設計にしたがつて行
動出来る人員は自から制限があり今日、有田辺に
於て柑橘園の石垣を築く切合石を運搬するもの、又
その積石作業の封《*幫の間違いか》助者、例え
ば石垣の懷へ、ウツゴ土を入れるもの、これらは自
から仕事を分けていて、石を積む者の技術は相當の修
業行を必要とし全く職業化されているのである。故に
限られたこの玄室内に働く人は技術的には一人を基
準とし、多くとも二人位で徐々に底面から調和をと
りつゝ積み上げたものであることは疑はないのである。
幾人も人が寄り寄りの作業状態では、相當な技巧
を□示しているカーブは統一されないことは明らかで
あり、又、今一つ思うことは、人の手につく技巧手法
は、この石積一つにも現れることであるが、その不調

和はどの玄室に於ても認めがたい。大きいものは、又 大きい石材の操作は幾人かの手をかりた？これは当然の？であるがそれを統一的に指揮した主体は今日の例に徴しても一人でなければ出来た？でない。

封土の厚さ

封土の厚さは発掘以前の復原に於て 厚くて三米《*m》、二米《*m》が普通、一米《*m》程度少数という様見受けられる 勿論これは古墳の大小に関係する？であるが、この2米《*m》を大体共通とするは偶然の手加減とは思はれない。この作業は玄室築造と併行して、多人数に依り行はれ？が想像され、玄室の積み上げられるにしたがつて、封土を築き上げて上辺に達し、自然に出来たトレーンを蓋石を引きあげて蓋い、(大きいものはコロをしき)さてその上に土盛をするとすれば 蓋石上の高さは同口の封土の延長に置かれるべきであるが無計画に土盛したものとも考えがたい 私は二米《*m》高さのもの、多い？に鑑みこれだけの多数墳の構築中には自から一つの定石めいた厚さの規格が生れ或は蓋石上に、標準となる高さを印した木などをたて、その位置まで土を盛りあげたものでないかと思ふ 大様共通しているのである。

昭和 27. 1. 5 午前 長尾山にて聞書抄

私はこの日午前中 長尾丘陵にあり実地調査をなす。午後1月例会の為帰宅。當年 58 才の人の採墳するに遭いこの人に依り次の？実を聞き得た 即ち、

- I. 長尾池尻 現在竹藪の地点より 彼が15、6才頃、素焼皿祝部のものを多数発掘した
- II. 出土土器、曲玉は ▽▽▽▽▽《*個人名》氏(煉瓦製造業)が所持している
- IV 前山の谷の名 西より
カクスジ 小谷 中谷 石原谷 楠木谷 止山
(下原との境界)

尋ねる人 ○○○○○《*個人名》

◇◇◇◇◇《*個人名》

+++++《*個人名》

▽▽▽▽▽《*個人名》

#####《*個人名》

V 前山下方 現在蜜柑畑は 50 年前は山であつた 其後の開墾になる。石垣の整正、立派さは家のあつたことを知る？が出来る。

VII 長尾谷前方(俗称のろ川) 現在柿畑となる 畑には大きい古墳があつて、これは数年前 82 才で没した人の子供の頃発掘、畑となしたと伝える。構造遺物等伝えるところがない

○植木屋宇陀◆◆◆◆◆《*個人名》(植木好きであつたから) 天井石に掘り当て、家に持ち帰ろうとした

VIII 大池のあたりは峯である。つゝみの西方では煉瓦用の土を採掘、白埴(しこかたい口《*赤？》トラどの) この辺は安藤氏の碑ある丘からひきつづいて畑地であつたものを土をとり田となしたものである。

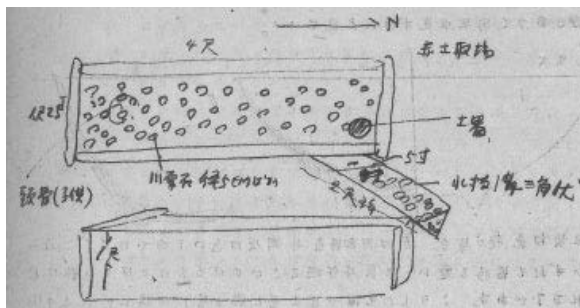
IX 現在煉瓦製造所の畑《*煙》突の立つ西方は かつて動かした土である赤(ハジワレベン)と祝部系の破片多数出土

⑫ 中沼の辺が一番低い
高橋神社辺は砂山である。

【128 頁】

宇田 ◎◎◎◎◎《*個人名》氏を訪ふ。娘二人あり 主人不在 隣家の老翁来りてこの人◎◎◎◎◎氏と共に発掘に従？せる人

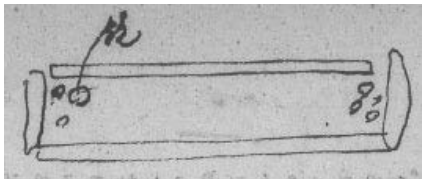
昭和 28.8 月 前山大池の東南土取場発見し組合石棺につき聴取する



その構造注意すべきは直接に川原石を敷ける事
土器見取図(口《* 11 ?》個)別に記す。

【129 頁】

※ 46 号墳《*現在の前山 A46 号墳》の少し上にある



○組合石棺中より金のサヤカネ 形状



出土

この口《*種か》棺の中に二人あとさしの形に埋めたるものある 石の蓋をとるとあばら骨はそのままに立ち伸展葬にて口《*左か》側に直刀を置き 頭の方に《*左図》の土器を置く普通の形なり



前山にて鏡出土

組合石棺の床に厚さ1寸位に朱を敷きつめその上に鏡を置くもの 一つある あり土器は頭か後ろにをき 鏡は頭のところに置く

鈴を出土 今日のと形状変わらずに鳴つた

前山の知1塚《*現在の知事塚古墳か》から玉石に文字の如きを刻めるものあり これを土口いんの口を流しあらえども体をなさず そのうち誰かに持ち去る 二口《*貫か。その場合約 7.5 kg》位ある石

【130 頁】

窯跡

大池上ノ山地 5、6 間《*約 9.1 m、10.92 m》やけ土

【138・139 頁】

29.7.2 No.1

この日田植後の閑休を見込み4時学校より直ちに西和佐、△△△《*小字で確認できない地名。おそらく現在の花山丘陵南東裾附近とみられる。なお、以降、同様の地名は同じ記号で表示する》に寄り◇◇◇◇《*個人名》氏を訪う不在 ●●●●●《*

個人名》氏を訪う不在 帰途 老翁と道に逢い話し込む即ち★★★★★《*個人名》氏 本年 74 才明治 12 年生なり 氏は少此時より前ノ山の石材採集を業として殆んど生涯を石裁りに終る。依つてこの人につき前山に於ける石材採取状況を聴取、参考とする。

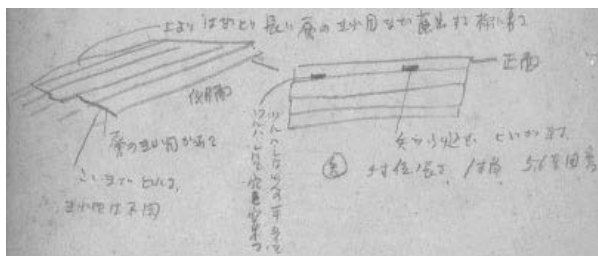
古墳築造の梁又は天井に使用する最《*長か》大なものは 楠木谷一ヶ所あるのみである。この地点は同谷の麓にあり。俗称カグラ岩一帯なり。

石材は大体次の如く裁り出す

上よりはぎとり長い層のきれ目まで露出する様にす。層のきれ目があつてこゝまでとれる

きれ目は不用 ツルハシは先の平口をツルハシにて穴を穿つ 矢をウチ込む、ヒビが来る

5 寸位ノ長さ、1 寸角、5、6 本用意



現在とれるものは普通1間位—12 間位 根気よくとれば6畳敷位のものはとれる

カグラ岩は古くから取つたものゝ様で一応とつてしまつている様な形である。私はカグラ岩下で雨を宿りふと見ると大きな蛇を認めそれきりこゝで石をとるゝを断口しすでに 20 年になる

梁石や天井石などは曳きづりあげること出来な。井にのせてかついであがるものである

口な石で 500 貫位 梁石で 300 匁位と見ている

これをはこぶゝ、は少此なものであれば怪我をしない 力があるうちは恐ろし位口いものである

屈強のもので一人で 50 貫は荷ち、口山の谷間を石を運ぶにはあまり多人数は役にたゝないよりすぐつた屈強のものを使用したろうと見る

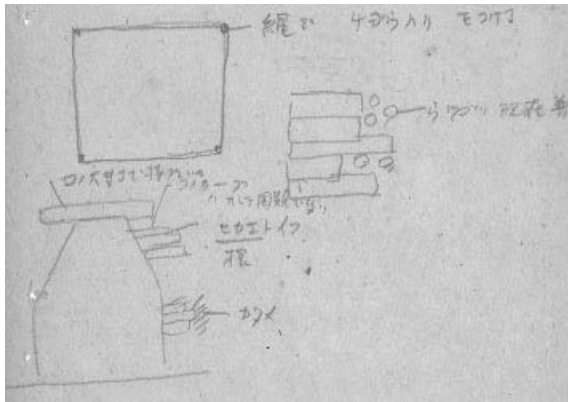
NO.2

きりとつたものを更に細く切りとるには余程くろうとなければ筋は分らない

2 年位石取りをしたゞけでは筋を見ることは尚不十分である。



○ 46 号墳《*前山 A46 号墳》の用材を氏の見積りでは（石の筋を見てしまったものとして）1人で現場で石を切り出すだけで 150 日を要する



縄でチョウハリをつける

ら□□現在普通 コノ大きさで持っている

コノカーブハサシテ困難でない

ヒカエ（根）トイフ カタメ

同氏曰く 一例のみ

フタをとった瞬間はそのまゝの骨あり6尺位□し□□

□で□頭たけのこる

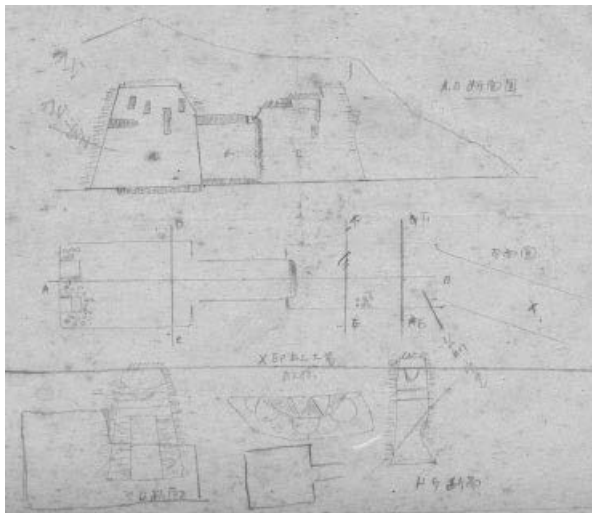
亦ハリ程ある



小谷にあつた古墳

【141 頁】

○ 46 号墳《*現在の前山 A46 号墳》西和佐古墳
臨地學習要項 昭和 24. 5.28 宮田 封土 4間半
《*約 8.2 m》経 約 15 間《*約 27.3 m》玄室
長 11.3 尺《*約 3.4 m》幅 7 尺《約 2.12 m》副
葬品 石梁 羨道 A46 号



(2) 和佐地区

【114・115 頁】

西和佐古墳調査 昭和 27. 1. 4. 午後 宮田啓二記
峯千軒

峯千軒、ヤツイ千軒、この千軒といふことばは那賀郡に浜千軒（続紀伊風土記第一輯 P ー）があり、その附近には將軍塚がある。千軒を同時に古墳時代の姿に置くというのではないが要するに居住に都合のいゝ環境であつたに於て 首肯できることばである。勿論實在でないに明らかなであるが大聚落と見る？に於て適當であるに 湯浅千軒 広千軒 同じ千軒 で□《*広か》がよい。（有田）等いふ巷間の□□《*俚謡か》如きものが案外これは古い時代をいふのではないのである。

私は本年 67 才という老人に依つて 峯千軒を訊いてみたが、この人たちが子供のころには 尚 現在前山山麓の畑地及び田園の間に多く井戸をとどめていたらしく 現在はその辺は一帯に柑橘園或は田となつて家らしいものは一軒もない。一体これらの家がかつてはこゝに群集していながら何故この地を去つたのであろうか。この転居の理由又その時代については一向に記録するものなく 勿論これらの人についてきいても分らない。思うに 交通不便という点が最大の理由でなかったかと思ふ。今一つは土地そのものが山脚湿地が多い様であり、したがつて、高きに位置したこの集団が現在の街道筋に移居したに想像に難くない様に思う。

併し我々にはかつて、人家の密集し、其の當時としてこゝに住居するに適した時代のあつたに実には頗る興味を覚えるものであつて 前記那賀の浜千軒の如きも現在の位置はさびれてしまつてゐるのである。但し昔は彼等の生活環境は適していたのである。この附近畑地を一見すれば分る様に どの畑も實に立派な石垣を持っている。その□物はかつて屋敷地であつたであらうし、又 山脚開墾の際、當然あつたと想像され、又 現在 尚 土器片をとどめるこれら畑地には古墳が存在して、それを転用したものもあるに勿論認めていゝにである。

こうした若しこれを全然口碑のない土地とするなれば 西和佐古墳を形成した人々の居住地域を別の角

度から考えてみなければならないが、かゝるに□碑はすでに古代に遭かる人間生活の環境示唆となる如く思われ 一應肯定していいのではないかと思う。

【118・119 頁】

昭和 27. 1. 5 午前 長尾山にて聞書抄
私はこの日午前中 長尾丘陵にあり実地調査をなす。午後1月例会の為帰宅。當年 58 才の人の採榎するに遭い この人に依り次の？実をき得た 即ち、
VI 峯千軒・・・宇陀の◆◆◆◆◆《*個人名》氏の祖父が この地より前方に移りし最后の人であるといふ。今あれば90才以上の人なり。現在畑地に残る井戸は幅狭くしてつるべのあたる程度のも多数。田にあるものは途中を石にてふさぎ 上に耕土を置いて田となしている。大池の西方の田にある。

⑩ 天王塚は 下原の人等に依り発掘された

⑪ かつての石取場は 凹んだところがそれである

【120 頁】

〇〇〇〇〇《*個人名》氏聞書抄 昭和 27, 1, 12 午後

1. 天王塚古墳《*現在の天王塚古墳》

西和佐古墳《*現在の天王塚古墳周辺の古墳群をさすか》中最大の構造を有つ、前山最東端上の天王塚。これは〇〇氏等に依り発掘せられたものである。氏の語るところ、実は私は興味を以て その副葬遺品につき期待したのである。

羨道南面は確實と見當をつけ 眞眞ぐつに羨道に掘り當てたが 何分幅8尺餘 高さ2間の大石は何とも出来ず、他例に倣しゲンノーを以てたゞき割る？を聡明なりと 鳴神清水氏より借用せる大ゲンノーにて一所を連打、羨道に入るゝが出来たが、更に羨道玄室の境界に扉石あり。その一角を割つて中に入つたところ何分にも暗い 燈をつけ附近玄室内を見渡したが、これ又 餘想外のことに床底の敷石は中央に山盛にされ、土器一片もとどめない。天井の石梁には梯子をかけて搜したがこれ又何一つ残していない。かすかに上方に日光の筋差し入るを見て、封土上辺を調査したところ こゝに狭き溝を掘つて、そこから玄室東上方に人の出入出来る程度の穴を開けすでに

この石組は元通りに差し入れて附近は篠竹、落葉が堆積しているので初めて既掘墳なるを知つた。すでにこの以前に於て盗掘され、床底の土はフルイに懸けていたのである。要するに本墳出土遺物はこうした経過に依る散逸か私蔵の為我々には未だにその一片の存在をすらかない。但しこれは古い時代の盗掘にかゝるものではなく、その近き時代であるゝ前後の事情に依り判明するのである。

【128 頁】

〇〇〇〇〇〇〇《*個人名》氏を訪ふ。娘二人あり 主人不在 隣家の老翁来りてこの人〇〇〇〇〇〇〇〇《*個人名》氏と共に発掘に従事せる人 同氏よりの聞書

天王塚は以前はかく名づけたるに非ず。他の数多の古墳あるに依りて之と区別するために天王塚と発掘當時に名づけたるものにして、郡長の掘りたるものを郡長塚といふ 知ゝの掘りたるものを知ゝさん塚《*現在の知事塚古墳》となづけたるとは同様也。

〇植木屋の掘りたるものは密告するものありて警察の調べを受け一荷も土器を搬出する

天王塚はその扉をたゞき割り入つたゝは〇〇氏の話と一致する。當時 入場料5銭をとりて観覧に供し又 案内料として池附近にて5銭をとつて相当の収入ありたるものなり 明治 45 年頃といふゝ

中は長い羨道（正面）の中に石室あり石梁八本 奥壁の棚まで九ツハシゴをかけ □漸やくとゞき 銅色の石である敷石川原石である。百メ《*目》ローソク二本つけて天井を見せたもの 同氏 17 才で案内人をつとめた

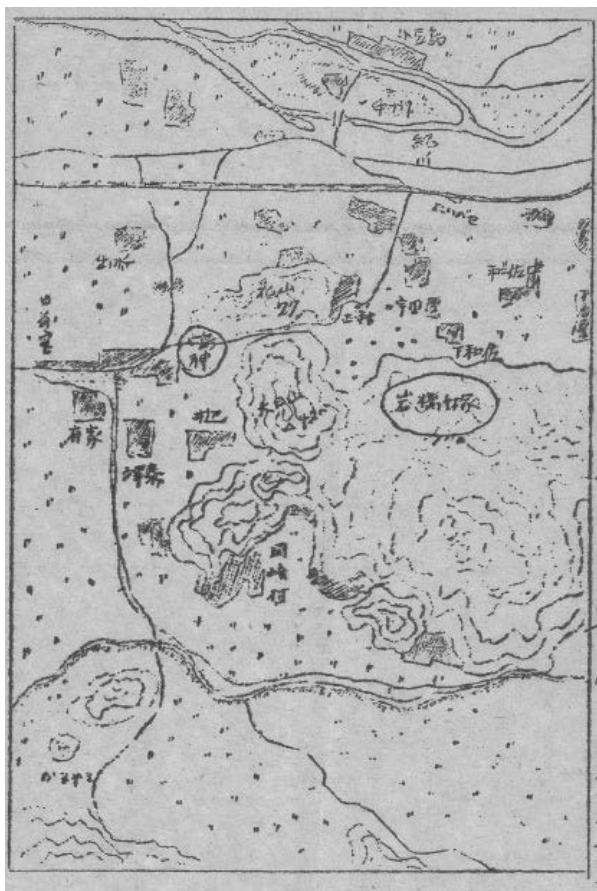
【130 頁】

西和佐小字学校 □□所良《*長？》桑畑中から金環《*金環》2個を掘り出したゝがある 30 年程前のゝである。

〇大阪阿倍野より二三停留場を▲▲氏に西和佐古墳出土器を持つ

【143 頁】

鳴神貝塚 西和佐古墳 和歌山考古学会 昭和廿五
《* 25》. 十一. 十九見學



附近略図

西和佐古墳 《* 以下内容は岩橋千塚古墳群内のことを記載しており、特定の古墳に紐づくものでない。当該古墳群をかつて西和佐古墳と呼んだか》

一、中河内郡高井田古墳群と共に古墳群存在として著名

二、文化九年紀伊國名所図絵 天保十年紀伊續風土記に簡単な記述あれども誰の墳墓なるやを知らず とか行基焼云々の記事あるにとどまる

三、旧藩則 黒田翠山 《* 畔田翠山か》 治寶卿の命に依り発掘せしことあり

四、明治四年前山一帯村有となる

五、明治三十三年頃より盗掘頻り 東大坪居正五郎 大野雲外氏等に依り調査 人類學雜誌に紹介

六、明治四十年横浜在住の医師マンロー氏に依り注意され 先史日本誌上に掲載 海外に紹る

七、大正五年喜多貞吉氏に依り調査 全 《* 同》
七年東大と□□ 《* 聯絡?》 黒板勝美氏に依る調査第一輯成る

八、大正十一年 聖□ 《* 土?》 (摂政宮) 西和佐實 (業學校行幸の砌 出土品を天覧

九、昭和六、七、史蹟指定 前山廿五 《* 25》町歩

十、昭和廿三 《* 23》 年全 《* 同》 地開墾問題起るや史蹟委員田中敬忠氏等に依り保存運動起り今日に至る

3. まとめと考察

以上のように、本稿では宮田啓二氏が昭和 24・25・27 年1月5日、29 年に前山 A・B 地区並びに和佐地区において実施した現地踏査や聞き取り調査成果の記録について、書き起こしを行った。このうち、特に重要な記載である前山大池組合石棺並びに 46 号墳や上組合石棺について検討を行う。

前山大池組合石棺 当資料の記載内容によるとこの箱式石棺は、前山大池の東南土取場で発見されたものとされる。現在の岩橋千塚古墳群の分布をみると、位置の候補となるのは、前山 A134 の南で前山 A191 号墳の北付近か候補となるとみられる (図2)。

前山大池組合石棺の各要素については、法量は長辺約 121.2cm、短辺約 106.1 cm、深さ約 30 cm、長側石・小口ともに一枚石で描かれ、棺床に径 5 cm 程度の川原石があったとされる。また、石棺北東には、長さ約 60.6 cm、幅約 0.15 m で断面三角形形状を呈する、内部に小礫を充填した排水溝とみられる施設が取り付く。石棺内には南側に子供の頭骨が、足元側とみられる石棺北東隅に土器が配置されていたようである。これらの情報のうち、法量と被葬者が小児であることは、畿内周辺における箱式石棺を検討した清家章氏の研究 (清家 2001) と矛盾がない (2)。一方、長側石が1枚であることや小口石と長側石の接続形態 (小口構造) がⅡ字状を呈すること、棺床に小礫を敷くこと、排水溝が附属することは、岩橋千塚古墳群における箱式石棺を検討した瀬谷氏の研究成果 (瀬谷 2017) によると、岩橋千塚古墳群では客体的、もしくはこれまでに確認され

ていない要素である。瀬谷氏の検討によると、岩橋千塚古墳群の箱式石棺は結晶片岩製で、長側石は複数枚、小口構造はH字状を呈し、棺床に板石（板割石含む）を敷くものが主体的である。排水溝をもつ石棺は、確認されていない。ただし、前山大池組合石棺でみられる長側石が1枚で構成される箱式石棺は、7世紀前半の寺内35号墳でみられ、いずれか一方が1枚であるものに範囲を広げればMT15型式期の大谷山28号墳、時期不明の前山A50号墳がある。これらはいずれも石棺内法長140cm未満の未成年用棺とされるものである。岩橋千塚古墳群では箱式石棺が16基確認されているが、未成年用の箱式石棺はそのうち4例で、この4例中3例の未成年用の箱式石棺で、いずれか一方の長側石が1枚であることから、未成年用の箱式石棺に限ってみれば、長側石が1枚であることは珍しいことではなく、むしろ主体的といえそうである。一方、小口構造においては、Ⅱ字状を呈する確実なものは現在ではどの古墳であるか不明なもの1基⁽³⁾のみであり、また棺床に板石ではなく小礫を敷くものは、5世紀末頃とみられる寺内22号墳のみで、ともに事例がないわけではないが、客体的な要素といえる⁽⁴⁾。また、この箱式石棺における棺内への土器の持ち込みや小口への配置は、MT15型式期の大谷山28号墳でみられるものである（萩野谷ほか編2018）。岩橋千塚古墳群で箱式石棺の土器配置が判明する事例は少ないが、こうした土器の石棺内への持ち込みは、MT15型式期以前に確認されないことから、横穴式石室における石室内への土器の持ち込みに影響を受け生じたものと解される。横穴式石室内への土器の持ち込みは、MT15型式期の花山33号墳や大谷山6・28・27号墳などで行われた可能性が高いことから、この箱式石棺の構築時期はMT15型式期以降の可能性が考えられる。

以上列記した前山大池組合石棺の情報は、あくまで宮田氏が個人から聞き取ったものであり、現在消滅した古墳についての記載であることから、どれほど正確な情報であるか確認することは難しい。そのため、取り扱いには十分注意が必要であるが、前山A地区の尾根筋北側に、6世紀代の箱式石棺が存在

した可能性については留意しておく必要がある。

46号墳やや上組合石棺 当資料によると、この箱式石棺は、前山A46号墳の少し上に所在し、未盗掘であった。箱式石棺の蓋石をとると、あばら骨が残存しており、被葬者は伸展葬にて埋葬されたとされている。頭とみられる位置には、床に厚さ約3cm朱を敷き、その上に鏡を置き、さらに小口側には高杯が配置され、また、被葬者の（左か）側には直刀、棺内からはその直刀に伴うとみられる金製（金銅装か）金具が出土したようである。このように、当資料において、この箱式石棺は比較的詳細に情報が記載されているが、現在把握されている古墳でこれらの情報に完全に当てはまるものは確認できない。位置関係に特に焦点をあてれば、すでに埋葬施設が箱式石棺と判明している前山A179号墳が最有力候補としてあがる（図3、墳形を黒塗りしたものは箱式石棺を埋葬施設としてもつ古墳）。

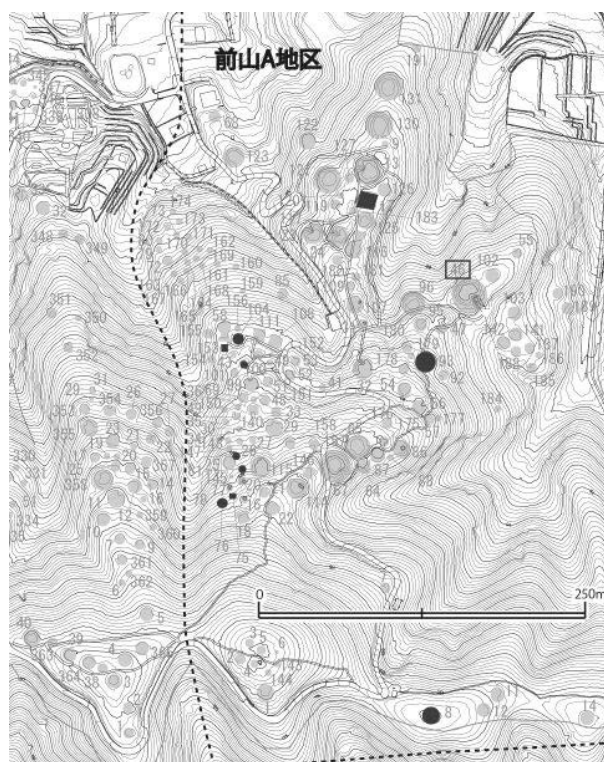


図3 前山A地区で箱式石棺を埋葬施設とする古墳（和歌山県教育委員会 2019）

※番号は古墳番号を、また墳形に黒塗りしたものは、前山A地区で箱式石棺を埋葬施設としてもつ古墳を示す。

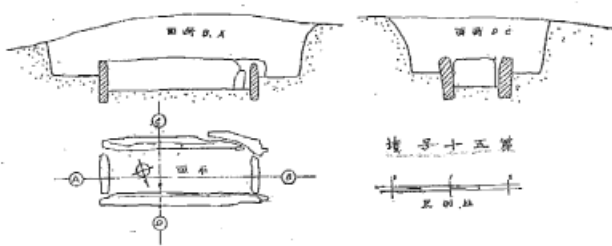


図4 前山 A179 号墳の箱式石棺（和歌山県 1921）

ただし、前山 A179 号墳の箱式石棺は、内寸最大長約 0.76 m、最大幅約 0.25 m、深さ約 0.15 m で、長側石の一方は1枚、もう一方は2枚を使用、小口形態は口字形を呈し（和歌山県 1921）、副葬品としては昭和 22 年に刀子が1点出土するものであり、特に長側石の使用枚数や小口形態について当該資料記載内容と完全に一致するとは言い難い（図4）。そのため、前山 A179 号墳は有力な候補であるものの、決定打に欠けることから、次点候補も挙げておくとすれば、前山 A46 号墳より高い位置にあり、埋葬施設が判明していない前山 A54・93・95・178・180 号墳あたりが候補となるかもしれない。

他方、当資料におけるこの箱式石棺の最も特質すべき点は、棺内からの鏡の出土である。岩橋千塚古墳群では、これまでに箱式石棺から鏡が出土した事例や記録、伝聞は知られていない⁽⁵⁾。鏡の法量や形態、文様など、詳しい事柄が不明確であるため、詳細な検討を加えることは難しい。そのため、ここではこれまで書き起こした宮田資料において、鏡が出土したと記載された古墳とその鏡の特徴についてまとめ、この箱式石棺出土事例について若干の検討を行いたい。表2にまとめたとおり、当資料において岩

橋千塚古墳で鏡が出土したとされる古墳は3もしくは4基であり、時期は4世紀末と6世紀前半に分かれる。花山8号墳の神像鏡とみられる鏡をのぞくと、文様の詳細は不明確である。46 号墳やや上組合石棺においては、すでに前山大池組合石棺で述べたように、棺内に土器を配置することから、築造時期は MT15 型式期以降である可能性がある。とすれば、後者、つまり6世紀前半、もしくはそれらよりも新しい事例となる。6世紀前半の事例である花山6号墳（墳長 49 m の前方後円墳）、2号墳（墳長 67 m の前方後円墳）はともに主体埋葬施設である岩橋型横穴式石室の玄室内から鏡が出土したとみられ、墳形、規模、埋葬施設、多様な形象埴輪の出土からみて、6世紀前半において比較的階層が高い古墳であるといえる。したがって、当資料におけるこの箱式石棺の記載が事実とすれば、既往の研究では MT15 型式期以降、出土する副葬品から箱式石棺の階層性が低下するとされる（瀬谷 2017）なかで、なおも比較的階層性の高い箱式石棺が存在したことになり、岩橋千塚古墳群の実態に迫るうえで、極めて重要な情報であるといえる。

【註】

- 1 旧字やくずし字などで特に難しいものについては、現代の日本語との対応を示す。「ㄗ」は事、「后」は後、「ㄣ」「ㄤ」はひらがなを繰り返すときに用いる記号「々」、「當」は「当」に対応する。
- 2 清家章氏は、畿内周辺における箱式石棺を研究するなかで、石棺内法の長さ、幅の法量分布の在り方とおおよその年齢が判明する人骨の実例から石棺の内法長がおおよそ 140 cm 未満のものは未成年の棺としている。

表2 当資料における鏡出土古墳一覧

古墳名※1	墳形※2 規模(m)	時期	出土 位置※3	出土鏡の概要	備考
花山8号墳	方円 52	4世紀 末	後円部 粘土槨内	直径約25cmの鏡二面、約18cmの鏡二面、計4面出土。後者のうち一面は神像鏡。	粘土槨その他出土：玉類、滑石製刀子。 伝花山出土三角縁神獸鏡出土古墳か。
不明	—	—	粘土槨内?	黒小?水?銀色を呈する鏡一面出土。	花山8号墳前方部粘土槨か。 粘土槨その他出土：玉類。
花山6号墳	方円 49	6世紀 初頭	横穴玄室?	直径約18cmの鏡一面出土。	大阪商人へ売却。
花山2号墳	方円 67	6世紀 前半	横穴玄室	直径約18cmの黒小?水?銀色を呈する鏡一面出土。	玄室その他出土：人骨、土器、剣。 大阪商人へ売却。
46号墳やや上 組合石棺	—	6世紀 初頭以降?	石棺内	石棺内頭部付近で出土。	棺内その他：直刀、土器

※1 古墳名は現在の名称を用いている。 ※2 方円は前方後円墳であることを示す。 ※3 横穴は横穴式石室であることを示す。

- 3 不明箱式石棺は瀬谷氏の一覧表によると、結晶片岩製の箱式石棺で、内法長 1.8m、幅 0.44 m、長側板の継ぎ方は平継ぎタイプ、副室をもつ構造とされる（瀬谷 2017）。
- 4 棺床は、清家氏の検討によると集団を示す要素とみられ、小口構造も棺床ほど明瞭でないが、同様に集団差を示すものとされている（清家 2001）。岩橋千塚古墳群で客体的な棺床・小口構造であることは、被葬者は他集団からの移入であることも想定される。
- 5 直刀の出土事例は、5世紀中葉から後葉頃とみられる前山 A17 号墳の箱式石棺から出土が確認されている（和歌山県 1921）。

【参考文献】

- 石丸彩・金澤舞・瀬谷今日子・富永里菜・仲原知之
2021「宮田啓二著『昭和二七年秋冬岩橋千塚古墳群調』一花山地区編一」『紀伊風土記の丘 研究紀要』第9号 和歌山県立紀伊風土記の丘
- 石丸彩・金澤舞・瀬谷今日子・富永里菜・中西瑠花・仲原知之・馬場彩加 2022「宮田啓二著『昭和二七年秋冬岩橋千塚古墳群 調』一大谷山地区編一」『紀伊風土記の丘 研究紀要』第 10 号 和歌山県立紀伊風土記の丘
- 石丸彩・金澤舞・瀬谷今日子・富永里菜・中西瑠花・仲原知之・馬場彩加 2023「宮田啓二著『昭和二七年秋冬岩橋千塚古墳群 調』一大日山地区編①一」『紀伊風土記の丘 研究紀要』第 11 号 和歌山県立紀伊風土記の丘
- 石丸彩・上村緑・金澤舞・瀬谷今日子・富永里菜・中西瑠花・仲原知之・馬場彩加 2024「宮田啓二著『昭和二七年秋冬 岩橋千塚古墳群 調』一大日山地区編②一」『紀伊風土記の丘 研究紀要』第 12 号 和歌山県立紀伊風土記の丘
- 清家章 2001「畿内周辺における箱式石棺の型式と集団」『古代学研究』第 152 号 古代学研究会
- 瀬谷今日子 2017「岩橋千塚古墳群における箱式石棺」『岩橋千塚古墳群一大谷山4・5・6・39号墳 発掘調査報告書一』和歌山県教育委員会
- 萩野谷正宏・山本光俊・佐々木宏治編 2018『岩橋千塚古墳群一大谷山 27 号墳・28 号墳発掘調査報告書一』

- 和歌山県教育委員会
和歌山県 1921『岩橋千塚第一期調査 和歌山県史蹟調査報告書1』（『和歌山県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第1輯所収）
和歌山県教育委員会 2019『特別史跡 岩橋千塚古墳群 保存活用計画』

<活動記録>

ボランティア育成事業講演記録 「博物館、現代社会、ボランティア、地域力」

小山田 宏一

はじめに

本稿は、令和6年1月14日に開催した「紀伊風土記の丘ボランティア育成事業」において実施した講演記録である。当館では、平成23年度より紀伊風土記の丘ボランティアの会を組織している。本事業は、同会に所属する会員がボランティア設置要綱に掲げる活動に必要な技能向上及び知識習得を図ることを目的として実施した。講演は、大阪府立狭山池博物館の小山田宏一館長に依頼し、同博物館開館時におけるボランティア制度導入の経緯や、開館から現在に至るまでのボランティアが実施する多彩な活動内容、博物館運営におけるボランティアの位置づけなどについて、ご講演いただいた。

大阪府立狭山池博物館の小山田宏一です。

博物館ボランティアについて講演を頂戴致しました。これに関しては、私も博物館経験が多少ありますので、本日はその中で皆様の参考になればと、経験したことや考えたことをお伝えします。あくまでも考え方の一つです。

私は30代後半に弥生文化博物館にいました。34歳で博物館準備室、35歳から5年半ほど学芸員として勤務をしました。その後40代前半で狭山池博物館開設の仕事につきました。こちらの方も5年間準備室、開館後2年間、学芸員の仕事をしました。その後、40代後半に弥生文化博物館に戻りました。ちょうど弥生博物館の体制は私の後に、指定管理制度に変わりました。その後、大阪府教育委員会で埋蔵文化財の発掘調査の仕事をして、50代後半で狭山池博物館へまた帰ったわけですね。

正直に申し上げますと弥生文化博物館と狭山池博物館に在籍した40代は「博物館とは何か」「ボランティアとは何か」「どういう体制を作ったら



写真1 講演状況



写真2 大阪府狭山池博物館 堤体断面

良いか」それほど現実味を持って考えたことはありませんでした。言い訳ですが日常の業務に追われてしまって、そこまで考える余裕はありませんでした。

ところが、50代前半に大学の博物館概論と博物館経営論の講義をすることになりました。そこで、改めて自分がやってきた博物館のことを振り

今、博物館は、何の花を咲かすのか



図1 博物館の目的

返って、問題はないかと整理しました。50代後半で実践しようと思いましたが、それまでは中々難しかったということです。やはり、一番大事なことは博物館とはどういうものを、本質論に立ち返り考えなければいけないのかなと思います。こちらの方は、博物館概論とかに登場する博物館の基本形です。今更、説明することはありませんが「博物館資料があって、中に職員がいて、職員が調査研究して、それを収集とか展示に活かす」あるいは「学校教育生涯学習に活かしていく」「博物館資料をベースに事業の花を咲かす」これが基本形でした。

しかし現在、博物館をめぐる環境が非常に厳しいといえます。

—そもそも博物館は誰のために、どういう理由で存続するのか、どんな貢献ができるのか—を考えなければ、社会の中から置いてきぼりになると思ったわけです。

そこで考えたのが、非常に抽象的ですが「人の花を咲かす」。①信頼関係・協働関係を構築する、②地域に貢献する、③地域のためになる、の3点です。

地域の方が「博物館があって良かった」「博物館に行ってこんなことがあった」と感じてもらえる博物館にしなければならないのかなあと思いました。そういうことは、博物館の職員だけでは到底なりえません。そこで、出てくるのはボランティア

社会の変化と博物館

- 1期 富国強兵・殖産興業・天皇権強化
- 2期 平和憲法・教育基本法・社会教育法・博物館法・地方行政団体（教育委員会）の役割
- 3期 公共施設の見直し
財政難、施設の位置づけ・目的が不十分、入館者減
世間の厳しい目 大牟田市見直し指針（2004）
博物館の収益率（産経2004）

指定管理者制度の導入

地方自治法の一部改正（平成15(2003)年9月2日施行）
多様化する住民ニーズに効果的・効率的に対応
公の施設の管理に民間能力を活力
住民サービスの向上、経費削減を目指す

- 4期 博物館の役割の見直し、学芸員の意識改革

図2 博物館の歴史

アや市民の方々です。博物館は行政だけが作っているものではなくて、市民が参画して知恵を出し合って、博物館を創っていくことが肝要です。そのためには、ボランティアや市民の方々と連携することが重要であると、今日はそういう話です。

現代の博物館を考えるときに、やはり博物館の歴史を紐解くことも大事です。そうすることによって、どこが問題点かはっきり見えてきます。教科書的な説明になりますけれども“社会の変化と博物館”を一頁にまとめました。

日本の博物館は当然、明治に登場します。それが、日本を代表するナショナルミュージアム、東京国立博物館です。最初の博物館は、現代のように文化・芸術そういうものを前面に押し出した博物館ではありませんでした。歴史を紐解きますと国内の博覧会あるいは、外国の博覧会、万博に出品するためのものを集めたのが始まりです。

そこでは日本の伝統的な産業とか、日本の産出する自然物・鉱物を一堂に集めたわけです。出発点は文部省ですが。そういう性格がありますので内務省・農務省に主管が移っていきます。これは、当たり前前の成り行きです。その背景には富国強兵・殖産興業の政策があって、博物館が経営されていたという歴史があります。それから、東京国立博物館は明治19年に宮内省所管に変わります。そして、帝国博物館から帝室博物館に変わります。

帝室とは皇室です。これは皇室財産の強化ということで、博物館が利用された歴史があります。

それからもう一つ、国立科学博物館は、少し性格が違って通俗教育となっています。科学知識の普及、生活改善等を目的としています。例えばコレラの予防とか、牛乳は健康に良いとか、あるいは計測は大事とかを個別のテーマでやっていました。今風に考えれば社会教育そのものという印象を受けますが、国力増強を維持する国民の育成、国民のレベルをあげていくという背景があったわけです。

そういったものが、大きく変わるのが戦後です。

戦前の経験を踏まえ、民主的で平和な国家を作っていくことが国となり、この中で法律が色々整備されます。最初は憲法。教育関係ではその下に教育基本法。その下に社会教育法。その下に博物館法及び図書館法があります。法律に則って博物館を整備していこうと。社会教育法の中で、特に博物館に関しては、地方公共団体の教育委員会が所管し運営するということになりました。ですから、当時、〇〇立博物館、〇〇立美術館、その多くは教育委員会が所管していました。そして、博物館に対しては「国民の教育学術文化の発展に寄与する」という非常に抽象的な表現だったのですが、こうした目的で日本の新しい博物館、新生博物館が動き出したという歴史があります。

しかしながらその後、第3期の博物館は次のように展開していきます。高度成長時代を受けて世間が安定するのですが、その中で行政が推進したのがハコモノ行政です。しかし、今度は財政難です。少子高齢化で税収も減ってきます。結果、このハコモノ行政に関して、これまでの国の位置づけあるいは目的では博物館の性格が不十分であるという結論が出ました。言い換えれば、市民・県民から支持を得られていなかった表れかもしれません。

そこで、博物館への指定管理者の導入という新しい制度が出来ました。これは「多様化する住民ニーズに効果的、効率的に対応し、公の施設の管理に民間活力を導入する」という目的で行われま

した。行政が運営すれば、仕事は硬直化していますが、それに比べて民間は多彩な運営を行います。そういうノウハウを活かして博物館を運営してもらい、住民サービスの向上、経費削減を目指していくという風潮になったわけです。

そして、現在を第4期とすれば令和5年4月に新しい博物館法が改正され施行されました。そこでは従来の社会教育法だけでなく文化芸術基本法に基づき、次のように改正されました。①他の博物館と連携すること、②地域の多様な主体との連携・協力すること、③文化観光その他の活動を図り地域の活力の向上に取り組むことの3点かと思います。戦後の博物館の目的に比べ、より博物館の目的が具体的に明確になった点は、非常に評価できるのではないかと思います。ただ、個人的には文化財を観光資源として多くの人に来てもらって、喜んでもらって地元をPRするのは大事なことです。観光資源と捉えるときに少し問題があります。

指定管理者が導入される時の記事として、私が印象に残っているのが産経新聞の記事です。記事では、全国56都道府県立美術館の収益率を集計しています。収益率というのは、支出と収入の比率です。美術館・博物館の収入はありません。主に入館料・グッズの類です。しかし、出る方は事業として財政が認めているわけですから、当然展示とか教育普及費とか維持管理とかそういうものです。この中では、人件費は除かれています。収益率を見ますと平均が18.57%。数字というのは、非常に恐ろしいです。評価をするときは、数字で評価をする定量評価と中身で評価をする定性評価と2種類あります。我々が問題にしなければならないのが定性評価です。

しかし、定性評価を中々客観的なデータとして説得するのは難しいです。それに比べて定量評価ですと数字で儲かっている・儲かっていない・人が少ないが単純に議論できるわけです。ここでは定量で18.57%。こういう数字を見ますと地方公共団体は出す一方で収入がありません。それが、自治体の財政を圧迫しているということです。

そこで、一層の経費削減・経営的視点・効率的な運営という点で、指定管理が登場したわけです。最近、指定管理が行き詰っている施設も存在します。これからもう一度、指定管理はどうかと皆様と一緒に考えていく時機かなと思います。これは一応、博物館だけです。先程、言いましたが箱物行政にもそういう機運が高まっています。私も博物館だけでなくハコモノ行政はどうか、とHPで公開されている「日本各地の施設の見直し」というのを見てみました。中でも一番印象に残ったのが大牟田市でした。

大牟田市では 博物館・美術館・体育館・グラウンド等の区別はせずに、基本的に住民の福祉を増強する公の施設という考え方から出発しているわけです。大牟田市は炭鉱炭業が有名でしたが衰退して、それに伴って赤字が増えていきました。その上、少子化・税収も少ないという大変な悪循環に陥る中で、どうしたらいいのかという議論が出てきました。「施設は誰に何を提供するのか」の「施設」を「博物館」に置き換えたら理解しやすいかと思えます。

①博物館は誰に何を提供するのか、②博物館は市民にとって重要な施設か、③博物館は時代の変化で役割が薄れていないか、④博物館の支出に市民が納得しているのか、⑤最適な運営なのか、⑥コスト削減はないか、こういう風な見直しというのは、博物館業界の私達も正面からきちっと受け止めて考えなければいけないということです。

次に私が様々なペーパーとか新聞を見て日々考えていることを現実リンクさせて更に考えます。

それが、ソウルでの出来事です。2009年に土木部や文化財に関心を持っている人たちが韓国土木遺産の調査を致しました。土木の専門家ですから、対象は河川改修でした。ソウル市の中央には漢江が流れており、漢江の北側と南側に分かれます。南側は有名な江南・新興住宅地、北側は盆地となり旧市街地が広がっています。このエリアに朝鮮時代は景福宮とか当時の中心施設があり、周



写真3 2003～2005年
清溪川（청계천）の再生事業

辺に建物とかあります。しかし、盆地なので排水が問題になります。そこで排水に利用されたのが清溪川です。実は、この清溪川は再生され、日本でも韓国でも非常に話題になりました。これは1950～1960年ぐらいの清溪川です。周りから汚水が流れ込み溝川になってしまうのを解決するために、景観を維持するために暗渠化しました。その上に高速道路を造ってしまったわけです。掘割りとか水路の上に高速道路を造るというのは、日本の大阪なんかもそうです。ところが、高速道路で埋められた清溪川をやはり昔の歴史的な景観に復元しなければいけないということで、再生事業が始まりました。①清溪川の自然河川の復元する、②景観を活用していく、③文化環境都市を目指す、というのが、ソウルの目標となったわけです。その結果、①高速道路を撤去する、②埋蔵文化財の発掘調査する、③人工の川を造っていく。そして、これが、現在の清溪川です。

清溪川の水は、自然の水ではなく上流の所にポンプあり、そこから流しています。非常にたくさんの人が集まっている憩いの場です。清溪川を調べるために行ったのですが、ソウルで専門家から「清溪川のモデルになった場所がある。そこも見に行ったらどうか」と提案を受けました。漢江に炭川が流れていて、その支流の良才川という川です。こちら行政による汚染河川の改修でした。これは改修される前の川で、直線河道です。良才川の歴史で古い地図を見ていきますと谷間を川が

蛇行して流れています。川が蛇行するということは、川の勾配があまりありません。洪水が発生すると水があふれ、洪水が発生します。洪水の発生を抑えるには、水をいち早く下流へ流し出す事です。下流に流し出すには、河道を直線にするという理屈で直線化が来ています。

しかしながら、こちらでも川を直線化したけれども周辺から色んな汚水とかが流れ込み、汚染河川となりました。そこで、汚染をなんとか変えていこうという機運が出てきました。実は、これを実施したのは当然ソウル市が中心ですが、民間も協力しました。良才川の流域にサムスンの本社があり、サムスンも「その事業に協力しましょう」ということでお金を寄付しました。①行政と民間がタッグを組んで河川改修を行った、②環境が改善された、③所どころ湿地や水遊び場ができた。大事なのは、環境改善すると「我々はこういう良い所に住んでいる。嬉しいなあ」と地域の満足度が向上したと言います。それが、新たな地域資産を生んだという歴史があると聞きました。

私達は、良才川を見学しているときに橋の下でお揃いのユニフォームを着た私たちと同世代のグループにお会いしました。「何をしていますのか」と声を掛けると「掃除をしています」と言うので地域清掃のボランティアかなと思いました。韓国の人を通じて詳しい話を聞いた時に「良才川がこれだけ綺麗になったので、我々はそこに愛着を持っている」「愛着を持っている環境を今後もきちっと後世に伝えていきたい」という気持ちで参加していると言うのです。すなわち、地域への愛着が誕生です。地域住民の気持ちは、地域力向上の源になってくるわけです。

良才川の出来事を日本へ帰って少し考え、ソーシャルキャピタルという概念で整理できると思いました。これは別に新しい考え方ではなく、1990年代ぐらいから各地方公共団体で取り組まれているテーマの一つです。場を設定して、人間関係が生まれ各種ネットワークの交流が進むとその信頼関係のもとに、①豊かな社会をつくる、②コミュニティの機能を向上させる、③地域力を向上させ

行政・民間による汚染河川の環境整備

- 1 環境の改善(湿地、水遊び場)
- 2 新たな地域資産の創出
- 3 地域満足度の向上
- 4 住民参加の清掃・地域への愛着の誕生
- 5 地域力の向上



写真4 良才川の環境整備

る、さらには、④社会的・経済的効果を生む、という理論です。全てがそのように単純に進むかどうかは、ケースバイケースで地域の特色によって変わるのとは当たり前ですが…。

先程の良才川を見ると、行政とサムスンと地域住民が協力し合う→地域力が向上する。多分この考え方は、博物館とか文化財にも当然適合できるであろうと考えられます。そこでのキーワードは、行政じゃなくて、民間じゃなくて、実際そちらに住んでいる方の気持ち、が、問題になってくると考えたわけですね。ここに地域力、抽象的な表現ですけども、①住民や組織が地域の諸問題に気付く、②各主体が自立的、協働しながら地域課題を解決、③地域の価値を創出する力、ですから、当然地域力は絶対これだという規定は無く、地域を豊かにするというところに一步でも近づこうとする働き・気持ちになってくるわけです。良才川は、住民と信頼関係を持った場なのです。ソーシャルキャピタルは、活動の場が必要になってくるのです。これが、良才川で経験したことです。

それから、実際に博物館で経験をしたことです。

博物館の中にある江戸時代の灌漑範囲という模型です。ここに狭山池がありまして、こちらにボタンがあります。例えば、江戸時代の初めとか中

頃とか後半とかボタンを押しますと狭山池から水がどういう風に流れていくのかLEDが点滅してルートを示します。最後に、面的に光って水を送っている範囲、灌漑範囲が出てきます。当初は、東西が8km・南北が15km・4200ha・80箇村、非常に大規模な灌漑範囲です。狭山池の水の出口が標高70mで一番北側の大阪の平野が標高5mですから、その自然勾配を利用して水を配っていきます。ある時、来館者に私が説明したことがありました。その時、つい勢い余って「この灌漑範囲を作った慶長の改修はこうですよ」とか「ここではこんな技術ですよ」とか説明したわけです。来館者の反応は、そうじゃなくて「LEDが点滅した範囲を見てびっくりした。こんなため池が地元にあるということ誇りに思う」とおっしゃった。別に、片桐勝元がどう、近世の改修工事がどう、近世のインフラ整備がどう、そんなことは関係なく狭山池の「すごさ」に感激されたわけです。

その方は、元々大阪狭山市在住じゃなくて大阪狭山市南側狭山ニュータウンの新興住宅地に新しく引っ越ししてきた方でした。引っ越ししてきた当時は、狭山池の改修工事で池が全部鉄板で囲われていて、中が全然見えなかったのです。狭山池の存在を知らなかったのです。ところが、狭山池が改修されて、博物館が開館して、パネルを見て「凄い。こんな狭山池がある所に住んでいるのだ」とおっしゃった。ちょっと難しい表現を使えば、地域のアイデンティティを醸成する働きがあると感じたということです。私達は、こういう水利模型を作るのに結構時間がかかりました。水割符帳という文書があり分析して、どの村にいつ水を送っているというデータを積み重ねてLEDで水の流れを復元したものです。その時は、近世の水利開発の研究に貢献するという自負を持ってやっていたのです。ところがそれを見た市民の反応は、少し違うということでした。

博物館で行う調査研究は学術の発展に貢献する目的があるのですが、その情報は市民とか府民の思いを支えるものでもあります。ですから、調査・情報の先にいる市民・府民との関係性を考えなが

ら、仕事をしていくことです。昔、博物館の学芸員は自分の好きなテーマで好きなことをやっていると批判がありました。しかし、そうではなくてきちっと研究する説明責任を果たしていく姿勢が必要です。

それともう一つ経験したことです。韓国の真ん中ぐらいいある義林池（忠清北道）という溜池があります。こんな美しい溜池です。谷の出口を堤で塞いで水を溜めていく、ダム式溜池です。狭山池と構造は一緒です。韓国でも溜池を教育資源・観光資源と活用していこうと動きが出ておりました。多分それは、狭山池の動きを睨んでという話を聞きました。2009年、それまでの調査成果をもとに韓国の歴史・考古・地質・行政の人たちが集まって国際会議が行われました。そこで私も日本のことを話したのです。

その時、印象に残った会話があります。実は、義林池はその後の調査で4世紀ぐらいに誕生した百済の最初の溜池だとわかってきました。この段階の調査ではそうじゃなくて年代は新羅の7～8世紀頃としかわかりませんでした。ところが地元の方が「義林池はめっちゃめっちゃ古い溜池」と。百済・新羅・高句麗あるいは、伽耶の三国・四国時代の前は、馬韓・辰韓・弁韓という三韓時代です。地元の方は、三国時代の前の三韓時代に義林池は誕生したと考えていたわけです。そして、そのことを誇りに思っていたといえます。

調査したら新羅の誕生だったことを言いますと、会場から手を挙げて「しっかり研究しろよ。そんなデータを知るために税金を払っているのではない」とおっしゃったのです。これに対して当時の文化財庁の担当は返答に困っていました。そこから言えるのは、研究というものは人の思いを支えるもの。先程の水利模型もそうです。私は研究とは人の思いを支えるものだ気が付いたのです。

そういった経験などを踏まえて現代社会と博物館のことを少し整理してみました。

博物館は、あくまでも社会教育施設とか云々で

すが、やはり公の施設であって社会の中で生きています。その社会の中で博物館をどう考えるのか、この問題は地域政策が大きく関わってきます。

例えば、①人口が減少する、②中心地がシャッター通りになる、③地域経済が地盤沈下し空洞化になる、④その中で新たな地域振興策・自立を促す事業が必要であると言われていたわけです。この中で地域力ということに限って見るとやはり、コミュニティの再生が一つのテーマになっています。人間関係が希薄し、独居老人が増え、こどもの安全とか災害とかを適切に対処できるようにコミュニティを再生していかなければならないということです。

これは、住民自治の確立ということになります。住民自治の確立は、地域住民だけでは当然無理な話で民間・住民・行政の関わりが絶対に必要です。地域、地域の特色において色々決定できる地域主権型が求められます。

現代の行政サービスは限界にきています。「人がいない」「お金がない」だから、多様な主体による新しい公共を作っていけないといけません。多分これが、協業にリンクする話になっていきます。先程の大牟田市の話ではありませんが、公共施設の見直しに関しても公共施設は、博物館は、誰に何を提供するのかを皆様にわかるよう情報公開し、理解を得ていくことが必要かと。現代社会に切り離して博物館は考えられません。そこで、先程のソーシャルキャピタルに戻ります。

博物館とか文化遺産とかをソーシャルキャピタルの場として中々関係性のなかった孤立したコミュニティの地域社会に対して、それらが互いに協業し、諸問題を共有し、対処する地域社会を創る、コミュニティの結合を促す。そういう風な役割が博物館にはあります。勿論、博物館に限ったことではなく公共施設はどこでも担うべき課題になってきます。博物館の場合、例えば特別展とかワークショップとか色んな名称がありました。

その名称をちょっと置き換えます。①人が集まる場：これは色んな人が博物館にやってきてワークショップをしたり講演会を聞いたりするので

す。②場を機能させる仕組：これは地域住民がやって来るので住民参加を促すプログラムです。当然、こういうものを博物館・博物館のスタッフだけでは実現できません。博物館は、人員が減らされていきます。ですから、人づくり、意識の醸成と持続。博物館経営に参画をする地域住民とかボランティアが多分一番得意とする分野であろうと思います。

ここで、反省を込めて紹介しますと大阪府立狭山池博物館の開館の時に博物館の目標とかを作りました。これは、最初のパフレットに載っている文章です。私が作ったのですが今から見れば恥ずかしいです。何でこんなことを意気揚々と書いたのか、非常に恥ずかしいです。

- ・狭山池の堤や文化財を中心に最も基本的な営みの水と大地との関係性を追求する専門博物館。

- ・東アジア的視野で土地開発を考える。

- ・府民に対する知的サービス。生涯学習や学校教育の場を充実、文化創造。

極めて抽象的で何が実態なのか全然判らない表現でした。

ここに残念ながら、皆様と一緒に作る博物館とか、どんどん参画してもらおうとか、集まってもらおうとか、そういう文言は一言も入ってないのです。私は自分を振り返る中で、このことについてとても恥ずかしく思っています。

今までの話と重複しますが、①博物館を現代社会の中で考える、②博物館は地域資源、文化資源を保存・活用・継承すること、はとても大事なことです。

それと同時にこれまでの経験を踏まえると、博物館は地域の発展に貢献する存在、役に立つという機能が問われてきます。それを実現する一つのプランとしてソーシャルキャピタルがあります。

それは、博物館とか文化遺産を場として市民・地域と連携し新しい公共を創って行く、その結果、地域力が高まる。そうしますと博物館には、住民の公共施設・新しい公共空間という性格をより明瞭に与えることができます。

そういう活動の中で、ボランティアさん参画のセッションはとても大事な存在になってきます。

ボランティア・地域住民とつくる博物館ということで少し整理をしますと従来と今後に分けています。特にボランティアは本来、自発、自己学習、自己実現、社会に貢献する存在として参加をされる方に規定されています。博物館は社会教育の一環として場を提供します。当初は、学芸員の補助、来館者の接遇だったわけです。大阪府立弥生文化博物館の最初の頃、ボランティアはいませんでした。大阪府立狭山池博物館も最初は、ボランティアはいないことで計画しました。

ところが、財政の方から「少しでも金儲けせんかい」という話で「学芸員も少ないやろ。ボランティアさんを活用せんかい」という横槍が入り「じゃあ、しましょうか」と出発しました。その時、ボランティアについては真剣に考えていなかったわけです。ボランティアは博物館事業の補完的な存在とみなしておったわけです。大変失礼な表現ですが、展示とか発送とかのお手伝いと。誤解を招くような表現ですが、便利な労働力と考えていたのも事実です。

しかし、①開かれた博物館、②参画できる博物館、③地域の活きる博物館にしようと思えば、博物館だけではなくボランティアの力を借りなくてはならないわけです。だから、ボランティアは博物館と利用者をつなぐ役割が期待されます。すなわち、博物館の活性化になっています。なおかつ、今まで行政だけでやっていたものでなく、地域を含めて新しい公共で創っていく担い手にもなっています。

ここで問題なのは、ボランティアに「これもやって。あれもやって」とお願いしたら、ボランティアにも色んな事情がありますので、とても駄目な話です。その辺の塩梅は、言ってみれば責任や強制力は博物館マネジメントにかかってきます。博物館側の問題になってくるわけです。私は、ボランティアを「ミュージアム・パートナー」という名前にしたらどうかと提案しましたが、少し恥ずかしいということでまだ「ボランティアさん」と

ボランティア・地域住民とつくる博物館

従来

本来は、自発性・自己学習と自己実現、社会に貢献する存在

・博物館は社会教育の一環として場を提供

・おもな活動内容は、学芸業務補助、来館者接遇

・ボランティアは単なる手伝い

・博物館事業の補完的存在

・便利な労働力

今後

・博物館と利用者をつなぐ役割が期待される

・博物館の活性化

・新しい公共の創出の担い手

・ボランティア活動の責任や強制力は、博物館マネジメントの問題



博物館にあつまるボランティア・市民は、ミュージアム・パートナー
博物館の新たな活動スタイルを創出する原動力

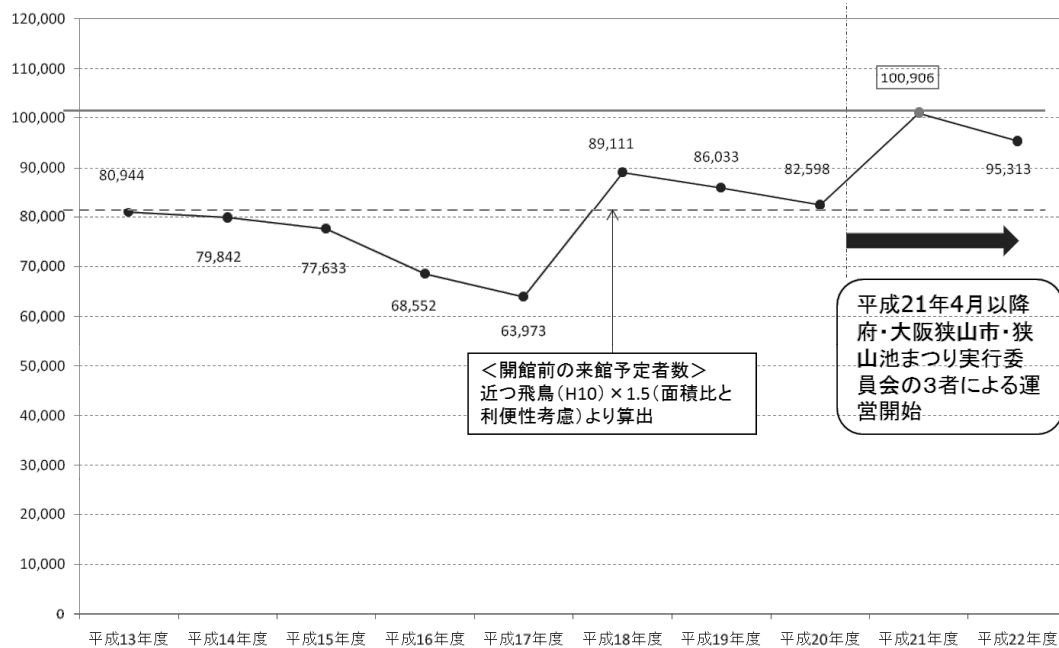
図3 ボランティアの役割の変化

呼んでいます。しかしボランティアの皆様が博物館の運営に参画することによって、新たな活動スタイルが生まれていくものと思います。

これから、ボランティアに関連して狭山池博物館の話をしていきます。これは、博物館の入館者の推移です。平成13年、赤線が10万人のラインです。緑の点線は8万人。狭山池博物館を開館するときにどれだけの入館者が見込めるのかという宿題があり、それを出そうと思ったら身近な博物館で同じような規模を持っている博物館を参考に算出するわけです。その時に大阪府立近つ飛鳥博物館を参照して大体8万人ぐらいだろうと。近つ飛鳥博物館より狭山池博物館の方が面積も広く、近つ飛鳥博物館の入館者に、プラスαとした数字でした。当初は、近つ飛鳥博物館並みか、少し落ちる、少し上がるという風な感じでした。

丁度この辺で指定管理が問題になりました。狭山池も全然入館者が増えないので、ちゃんとやっているのかという話がありました。大阪府には弥生文化博物館・近つ飛鳥博物館・狭山池博物館の府立博物館が3つあります。その頃、当時の橋下知事は「3つもいらんやろ1つでええやん。1つで3つの博物館のテーマを順繰りに展示したらえ

図4 大阪府立狭山池博物館の入館者の推移



えやん。そうすれば他の2館は閉めれんで」「経費も3分の1になる」と仰ったわけです。理屈でいえば、理解できる話であるかもしれません。

博物館のややこしい時代があった後、狭山でも抜本的に解決しなければいけません。行政が、考えるのは「予算」でした。「博物館への支出を如何に減らしていくのか」財布を預かる財政にすれば当たり前の話です。

その時、今まで大阪府土木部の直営であった狭山池博物館は、大阪府・大阪狭山市・狭山池祭実行委員会の三者で運営されるようになりました。狭山池祭実行委員会は、狭山池祭の開催や狭山池の美化運動の中心的な存在であり、ボランティアさんはこの狭山池実行委員会を主体にしたボランティア事務局のもと、主体的に市民目線でさまざまな博物館活動をしていただく仕組みにかわりしました。

ボランティアは、来館者が来たら石棺は古墳時代～、ここにはこんな文書があつて～、文書にはこんな人の顔が付いています～と。そんな情報もお伝えしたいとおっしゃるのですが、大事なのは皆様が来館者に接して博物館のイメージ・印象を少しでも伝えること。それが、積もり積もれば博

物館の評価にもなってきます。肩の力を抜いてやってくださいと。

ボランティアは色んな活動しています。例えば企画展。ボランティアの方から「私達もやってみたいわ」という話があったんで「どうぞ、どうぞやってください」と。

平成27年には、「片桐且元という摂河泉の国奉行を扱いたい」と提案がありました。片桐且元は狭山池を改修した慶長の中心人物です。これらのポスターとかチラシとかを全てご自分で考えたわけなんです。これがその時の学芸会議です。ここに座っているのは、私です。

学芸員も参加して「ここは、ちょっとおかしい」とか「資料があるで」とか、助言をする程度ですが参加しました。展示の実物は、中々借りられません。実物が無いので「ちょっと、貧弱な展覧会だなあ」と言うのですが、実物もレプリカも写真パネルもキャプション全部博物館資料です。博物館資料に優劣はありません。

少し整理しますと、博物館は、①人の暮らしに役立つ、②地域への思いや誇りを支える地域力の形成に貢献、だからこそ博物館は、現代社会に向き合うのです。そのために博物館は、市民とかボランティアとか地域住民と連携していくのです。

狭山池博物館ボランティア企画展(平成27年)

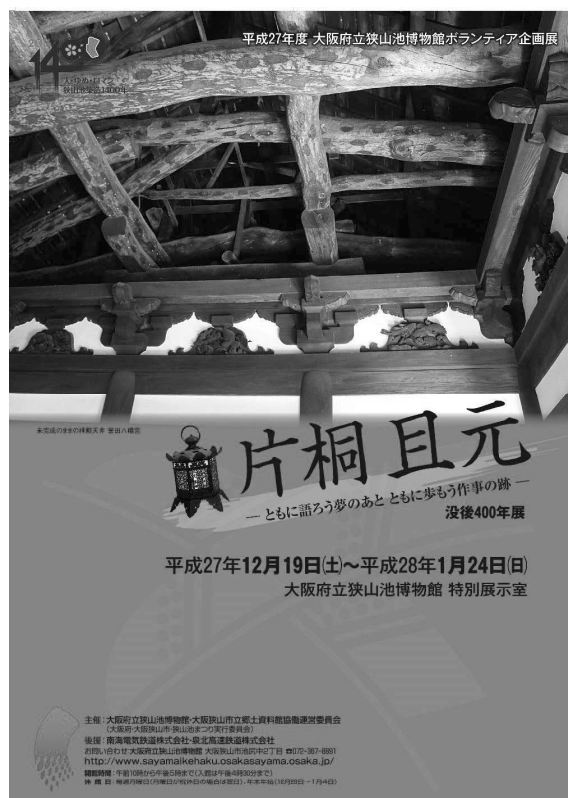


写真5 ボランティア企画展のチラシ

そして、連携していくことによって、思い誇り云々が実現するという考えです。

手前味噌ですがけれどもここに写っているのは、50代の森浩一先生です。森先生は「考古学は地域に勇気を与える」とおっしゃるのです。当初は、この意味が全然分かりませんでした。

私は、50代前半に博物館現場を離れ、考えるときに森浩一先生の言葉を思い出しました。考古学を博物館にかえれば「博物館は地域に勇気を与える」。そんなキャッチフレーズになってくると気付きました。今では座右の銘にしたいと考えています。

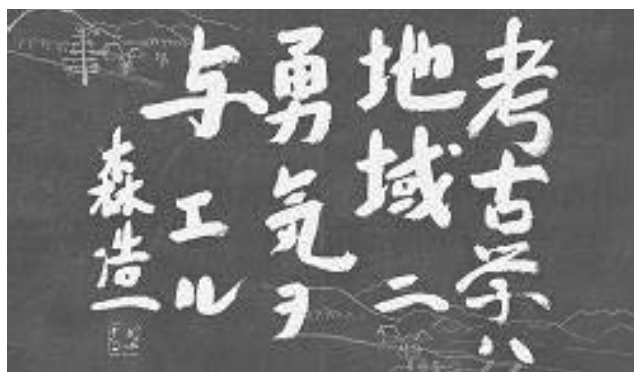
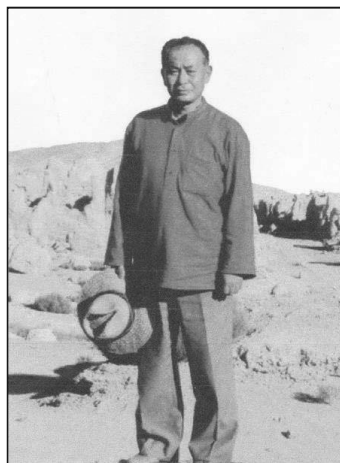


写真6 ボランティア企画展での学芸会議

ここから、直近の大阪府立狭山池博物館の話です。博物館も三者協働が始まってしばらくたって、やはり「博物館は支出が多い」とか「博物館は自前で稼がれへんのか」とかいう話が出てくるわけです。大阪府立狭山池博物館は、会議室、ホール、展示室、博物館周辺の安藤忠雄建築。そういう場所をロケとかに貸し出して、ちょっとでも儲けるという話が出たのです。博物館も福利活用が進むのであれば、展示とか文化財の保存に関係ない範囲ならいいのではないですか。

冒頭に開館時に作った博物館の活動方針とか目標がありましたが、それでは全然対処ができないので新しい三本柱を作りました。①土木の歴史的価値の継承、②土木事業・土木技術の歴史「知」の交流・発信拠点、③魅力の創造。これらの中にランチがあって、1) 特別展、2) 企画展、3) 土木遺産展、4) 講演会があり、地域魅力創造のランチが広がっています。



「考古学は地域に
勇気ヲ与エル」



博物館は地域に
勇気を与える

写真7

50歳の森浩一と言葉

表 1 大阪府立狭山池博物館の中長期に向けた取組み方針

	取組の柱		
	土木の歴史的価値の継承	土木事業・土木技術の歴史「知」の交流・発信拠点	地域魅力創造
短期的取組み	○ 展示改善・収蔵品活用による魅力向上と発信強化	○ 土木の役割・魅力 P R ○ 防災教育の拡充	○ 地域魅力発信 ○ 多様な利活用推進
中期的取組みの方向性	○ 展示改善・収蔵品活用による魅力向上と発信強化 ・狭山池における研究・調査により得られた知識・情報を取り入れた展示・解説の提供 ・狭山池への興味の有無に関係なく、誰もがわかる展示・解説の提供 ・狭山池の必要性、重要性をより広く伝えるための情報発信 ○ 魅力的な展示充実（デジタル技術導入等） ・展示のデジタル技術の導入 ・展示と現物（狭山池）の一体化（狭山池現地の説明板改良等） ・残存する池守田中家文書の解説・発信	○ 土木の役割・魅力 P R ○ 防災教育の拡充 ・土木・建築などの関係団体との連携体制を構築し、情報発信、イベントの実施 ・集積した情報の適切な公開・発信 ・「日本最古のダム式ため池」「安藤建築」という特性を活かしたイベント実施 ○ 調査・研究の拠点機能強化（土木技術等アーカイブ整備・教育研修等メニュー充実） ・常設の防災教育拠点施設の設置 ・資料・情報等のデジタルアーカイブ作成	○ 地域魅力発信 ○ 多様な利活用推進 ・広報活動を通じた魅力の発信 ・ボランティア主導による地域に根差したイベントの実施 ・市のまちづくり基本構想との一体的な博物館運営の実施 ○ 狭山池との一体的魅力創造（狭山池の価値を高める環境整備） ・歴史資産の活用 ・狭山池に集える水と緑の歩行空間ネットワークづくり ・パークマネジメント（狭山池公園）との相乗効果発現（地域活動や日常利用の場の創出） ・民間による狭山池公園・狭山池博物館の運営サポート
長期的取組みの方向性	○ 常設展示の全面的リニューアル	○ 日本で唯一の土木主体博物館としてのプレゼンス確立	○ 狭山池を核としたまちづくり ・歴史資産の発信拠点形成 ・みどりの中心核としての賑わいづくり ・水と緑のアメニティ軸整備

令和 3 年 12 月に大阪府立狭山池博物館運営審議会が答申を出したものです。その頃、私は大阪府立狭山池博物館におらず大学にいて、運営審議会の一員として参加したのです。実は、この地域魅力創造は博物館の事業として行っている所もあります。博物館の事業として位置づけるということは、博物館が予算要求し予算が認められていて、項目は博物館事業です。しかし、到底それだけでは皆様に満足を与えることができないので、ボランティアに頑張ってもらっているわけです。これが、大阪府立狭山池博物館のボランティアです。博物館ではいろいろあったのですが、最初から導入していきました。最初の導入は、学芸員の学芸事務補助とかの意味合いを持っていました。ところが 2009 年から三者協働が始まり、にぎわいづくり・魅力づくりの中で活躍してもらっています。言ってみれば、地域と共に歩む博物館として、ボランティアは市民と博物館、来館者と博物館をつなぐ役割を担う重要な博物館パートナーです。絶対に無理は押し付けません。

現在、登録者は 132 名、活動者 50 名、60 ～ 80 代が中心。どういう活動をしているかというと、

狭山池博物館の HP を開けばボランティア活動というところがあります。

- ・ボランティアが提案し、企画、実施する
- ・博物館の魅力づくりに貢献する

という目的があるわけです。これらは、我々がボランティアにこういうことをして欲しいと言っているわけではありません。ボランティアと話し、歩む中で共有した言葉になります。

そこでは、これだけ部会があります。

- ①企画展を担当する部会→ボランティア企画展で重源とか重源に係る石棺とかです。
- ②水辺のイベントを検討する部会→水辺のイベントでワークショップ。
- ③歴史ウォーキングを実施する部会→歴史ワークショップの講師や準備、会場の設。
- ④来館者サービス向上を図る部会→サービス向上部会は、皆様に展示解説するんですが、特に解かりやすいような冊子を作って配っています。
- ⑤古文書を読む会→狭山池はどうしても中世・近世の資料が多いので文書が問題で、ボランティアの方々が文書が読みたいというので、高校の歴史の先生をお呼びして教室を開きました。



写真8 大阪府立狭山池博物館におけるボランティア活動

これらは、全部ボランティアによる自主事業です。それからまだ、学芸事業への参画、勉強会・交流会の開催があります。これは、不定期にボランティア活動のスキルアップ・情報交換が、あります。ボランティアから要請があれば、博物館の歴史と市民学芸員、博物館展示論等をお話しています。それから、狭山池のクリーンアクション。こちらの方の三者協働委員会は、基本的には無給です。狭山池祭実行委員会の三役とボランティア事務局は、狭山池祭実行委員会から有給でお仕事をお願いしています。

最後に、当たり前の話ですが、博物館は利用されてこそ値打ちがあります。利用されなければ、意味がありません。その考え方の1つとして、皆が集まる場として運用する。ソーシャルキャピタルです。そこでは、地域とか市民とか各コミュニティが連携する時の接着剤、中心的な人物はボランティアであります。ボランティアは地域力を高

めるエンジンです。

今の博物館はどんな花を咲かせることができるのでしょうか。私はコミュニケーション・コラボレーションコミュニティの3Cと信頼関係・協働・地域社会の花を咲かすことがいると思っています。そのために、ボランティアの参画がとても必要だということです。これは、あくまでも私の経験と博物館の今の有り様を見た感想ですので、経験談として聴いて頂ければ助かります。

*本稿は、当日の講演内容をもとに、学芸課西孝樹・谷祐輝が書き起こしを行い、田中元浩が編集・補訂した。

<活動記録>

シンポジウム

「畿内と紀伊の群集墳からよむ古墳時代社会」討論記録

太田宏明・絹畠 歩・仲辻慧大・萩野谷正宏

はじめに

本稿は、和歌山県立紀伊風土記の丘令和6年度秋期特別展「数多の古墳を築く―群集墳からよむ古墳時代―」の関連事業として実施したシンポジウムのうち、討論の記録である。シンポジウムは、「畿内と紀伊の群集墳からよむ古墳時代社会」と題し、岩橋千塚古墳群をはじめとする紀伊の群集墳と畿内地域の大規模群集墳の比較から、大規模群集墳の出現と盛行、終焉に至る要因について議論することで、紀伊地域の群集墳の特色を再認識するとともに、特別史跡岩橋千塚古墳群の価値を広く周知する目的で開催した。内容は、古墳時代を専門分野とする2名の講師による講演と、当館職員による特別展関連の報告、コーディネーターを迎えた討論より構成され、次のプログラムにより実施した。

日時：令和6年11月21日（日）

13：00 あいさつ 増渕 徹（当館館長）

13：05～14：00 講演「群集墳と古墳時代社会」太田宏明（河内長野市教育委員会）

14：00～14：55 講演「副葬品からみた群集墳の被葬者像―畿内地域を中心に―」絹畠歩（奈良県立橿原考古学研究所）

15：05～15：40 報告「紀伊地域における6・7世紀の群集墳の展開」萩野谷正宏（当館）

15：40～16：50 討論 討論司会 仲辻慧大（和歌山県教育庁）

16：50 閉会あいさつ 西口治伸（当館副館長）

上記シンポジウムの講演、報告並びに仲辻慧大による論考「群集墳と土器使用儀礼」については、シンポジウム予稿集（和歌山県立紀伊風土記の丘2024『シンポジウム「畿内と紀伊の群集墳からよむ古墳時代社会」予稿集』）に掲載しているため、そちらを参照いただきたい。本稿は、萩野谷が当日の音声記録を基に文章化し、各講師が加筆修正

をおこなった。

シンポジウム討論

仲辻 本日シンポジウムの司会を務めます和歌山県教育庁の仲辻です。よろしくお願いします。

今回、時間の都合により、私の発表は紙上発表というかたちで予稿集へ掲載することとなり、かわって司会を務めることとなりました。私の発表内容は、今回の討論ともかかわりますので、あとで少しだけ触れさせていただきます。

さて、この討論では、これまでの研究とはやや異なる視点から議論したいと考えております。まずは、本シンポジウムの趣旨について、萩野谷さんからその趣旨について説明をお願いしたいと思います。

萩野谷 当館では、岩橋千塚古墳群の保存と活用と調査研究を進めておりますが、古墳群の価値を考えるうえで、首長墓である大型前方後円墳などの調査研究は進んでいますが、群集墳としての特色は必ずしも明らかになっていません。そのなかで、「数多の古墳を築く」というテーマで展覧会を企画しました。これに関連して本シンポジウムは、近畿地方で100基から1000基の古墳からなる群集墳が形成され、さらに紀伊地域の岩橋千塚古墳群では900基以上、まさに1000基に近い古墳から構成されますが、こうした大規模群集墳がなぜ形成されるに至ったのかということを議論したいと考えました。群集墳はそれぞれ個性があり、その出現と終焉までの経過や副葬品、儀礼に使用した土器の特色などのさまざまな視点から研究がすすめられ、考古学的事象からいろいろな解釈が示されています。群集墳の形成については、古墳時代後半期の家父長的家族の台頭や、ヤマト王権による地域支配の強化など政治的要因に求める研究が主流となっています。一方で、本日の太田さ

んのご講演にもありましたように、群集墳の造営期間の短さや開始年代がまちまちであることの理由から、その出現の要因を、ヤマト王権との関係性だけではなく、古墳時代の集団組織にこそ求めるべきという見解も示されています。こうした諸研究を踏まえ、紀伊地域と畿内地域の群集墳を題材にして、地域ごとの特色を見極めたうえで、出現、盛行、終焉について議論を行えば、新しい視点が見えてくるのではないかと。そのような観点で、本シンポジウムを開催したいと考えました。

仲辻 ありがとうございます。以上のような趣旨に基づいて、先ほどの太田さんのご講演では、これまでの群集墳の研究を整理いただいたうえで、古墳時代の集団とは、前後一世代を含む程度の同世代の原理で小家族が結びついたものであり、世代を跨いで集団を維持していく力に乏しいというお話がありました。また、絹島さんのご講演でも、畿内地域の群集墳の副葬品を対象にして、階層と職掌の観点から検討され、階層的上位を示す副葬品を有する被葬者が支群形成の契機となっていること、そして、こうした階層構造は継続しないというお話がありました。さらに、萩野谷さんには岩橋千塚古墳群や紀伊の群集墳の様相について整理していただきました。

ここで、本シンポジウムの議論に関連して、予稿集に掲載しております仲辻の紙上発表の内容について少しだけお話しします。本日ご発表いただい

たまみなさんのお話は群集墳の発生や継続、そして終焉の議論がメインでしたが、私は各古墳群でおこなわれた土器を用いた儀礼について検討をおこないました。その結果、紀伊では、古墳群の間でつながりがありそうだとしたことや、また、古墳で使用される場所で土器の種類が異なるということ、特に被葬者の近くと墳丘上では異なることがわかってきました。私はこれらをひとまず「土器使用儀礼」という言葉を使用して、古墳築造に伴っておこなわれた葬送儀礼で用いられた土器について説明しています。またこれまでの研究では、後期になると埋葬施設のなかに須恵器や土師器を持ち込むことが主流となり、そこに時代の画期が想定されてきましたが、最近のさまざまな研究では、前期・中期からも同じような儀礼は行われていて、単にその場所がかわっただけだという見解も示されています。また、岩橋千塚古墳群では、土器を用いる儀礼に厳密な階層性や器種の選択の違いがあります。具体的には有蓋高坏や装飾付須恵器は大きな前方後円墳で用いられ、より上位の階層に副葬されていますが、周辺の古墳群をみますと、そこまで大きな古墳ではないのに装飾付須恵器を伴っている。これは、両者が異なる集団であるということを示しており、そのため周辺の古墳群で岩橋型石室という同じ型式の埋葬施設を採用していても、土器を用いた儀礼は異なるルールに基づいたものであると考えられます。このように、私の発表では同時代における集団の違いがどのようにみえるかという研究を進めています。つまり、地域ごとの展開を土器の副葬から検討してみると、それぞれの地域の展開の違いや、土器使用儀礼の違いがあるということです。

さて、ここからは、次の三つの視点で議論をおこなっていきたいと思います。一つ目は、巨大群集墳がなぜ生まれるのかということ。二つ目は、それぞれの地域で群集墳は、どのように展開していくのかということ。最後に、群集墳の終焉から、集団をどうとらえるのかということ、以上の視点で議論をすすめたいと思います。

それでは、本題に入ります。まず、巨大群集墳



写真1 仲辻 慧大 氏

がなぜ生まれるのかについて。太田さんには同世代の小家族が集まったものが群集墳であるというお話をいただきましたが、それでは、古墳時代の後期だけではなく前期や中期はどうだったのか。古墳時代の家族は、時代を通してどのような形態であったのか、教えていただけますでしょうか。

太田 はい。先ほどは研究史を紹介するなかで、古墳時代後期に小さな古墳が爆発的に造られるという見解があることを説明しましたが、当然これは古い考え方で、現在は修正を求められています。群集墳、小規模な古墳の群れは、古墳時代中期、前期からあり、そして弥生時代にも小規模な墓は造られており、その伝統は長期間続いています。岩橋千塚古墳群のような巨大な群集墳についても、中期にも古墳は造られており、後期だけの特色とは言い難い。畿内の政治的中枢の場所だけではなく地方にもある。岐阜県の船木山古墳群や、北部九州の宗像古墳群などです。巨大群集墳は地方にもあるし、古墳時代中期にもある。もちろん、中期には武器・武具が副葬されるものが多く、後期に横穴式石室が造られるなど、時代ごとに異なる特色があります。しかしすべての時期に通じてみられる特色がひとつある。それは、始まりの時期と終わり時期があるということ。限られた時期にしか墓をつくらず、前期から後期まで通じて造り続ける群集墳は、ほとんど存在しません。岩橋千塚古墳群ですらそうです。従来の研究では、これを集団の栄枯盛衰に絡めて、政治的理由により群集墳が消滅するなど繰り返していくと伝統的に解釈されてきました。私は、そうではなく、集団自体が生まれたり消えたりするというように解釈しています。

仲辻 そう考えますと、日本全国 16 万基の古墳の大部分が 6 世紀、後期古墳であるという事実がありますので、この時期にたくさんの集団が出現するということになりますが、それはなぜなのでしょう。これまでの群集墳の解釈では、成長した中間層の集団が出現し、彼らをヤマト政権が取り込んだとされています。太田さんは、こうした現象については、どのように捉えられますか。



写真2 太田 宏明 氏

太田 実際には、全国で 20 万基くらいあっただろうといわれている古墳は、時期不明のものも相当数含まれます。確かに後期古墳は横穴式石室を埋葬施設としており認識しやすい。しかし、時期不明の古墳は後期とは限りません。特に平野部に築造される小規模古墳は発掘調査しないと認識できず、中期以前のものが多くを占めます。これらを含めると、必ずしも後期が大部分と言い切れないのではないかと考えられます。しかし、後期には古墳が増えるのは事実として認めます。後期は、鉄器がより下位の階層に普及する時代で、社会が豊かになり、経済的余力をもつ集団が増えていくということが背景にあると思います。爆発的というよりは、徐々に増えるというのが実態なのではないでしょうか。

仲辻 では次に、絹島さんは、副葬品の階層的上位にある被葬者の存在が、支群が形成される契機となったと解釈されていますが、群集墳は支群の集まりですね。その群集墳が形成された契機は、どういうところに認められるとお考えですか。岩橋千塚古墳群では、集団のトップとして大きな前方後円墳が認められますが、大和では最上位にある中央豪族と個々の群集墳の関係性はどのようなもので、何が築造契機としてみられるのかについて伺います。

絹島 はい。先ほどの講演では、副葬品の内容から、階層的上位の古墳の築造に契機を認めることができる指摘しましたが、では、それぞれの群集墳のはじまりはどの被葬者であったのか、群集

墳を構成する数十基を超える古墳のなかで、どれが該当するのか、ということを明らかにすることは、すべての古墳を発掘調査し、なおかつ副葬品の遺存状況が良い例がほとんどないことから難しいのが現状です。

また、中央豪族との関係では、例えば、巨勢山古墳群と5世紀の前方後円墳である室宮山古墳や6世紀の前方後円墳と考えられる條ウル神古墳との立地関係が、巨大群集墳が形成、発展する契機となっている可能性があり、それらを考えるうえでのヒントになるのではないかと思います。

なお、やや話はそれますが、さきほどの副葬品のお話との関係で補足しますと、大和では後期の大型群集墳の立地は丘陵部に多いという特徴があります。丘陵部にはたくさんの古墳を造る余地があり、かつ埋葬施設を作るための石材を入手できる余地があった。このため、積極的に丘陵部に群集墳が形成された、と考えています。

仲辻 はい。一方で、萩野谷さんは、小規模群集墳について、岩橋千塚古墳群では、小規模群集墳の被葬者が勢力を伸ばしたという説明をされていました。後期には、地域の代表である岩橋千塚古墳群の被葬者がいて、その勢力下にいた集団からたくさんの古墳が形成されたというご説明でしたが、その場合、中期からの連続性はとらえるのかという点についてご説明いただけますか。

萩野谷 岩橋千塚古墳群における勢力の伸長については、従来の研究で指摘されてきたように、中期、5世紀代の紀ノ川北岸の大型前方後円墳にみる勢力が、衰退するのに代わって紀ノ川南岸にある岩橋千塚古墳群で大型前方後円墳が築造されたということが、事象としてとらえられると思います。また、なぜ伸長したのかという点については、紀ノ川南岸における耕地開発が進んで、その生産力が向上したという経済的理由がベースになったと考えられています。また、埴輪製作技術からみると、王陵である大阪府の今城塚古墳との関係性などから、中期から後期におけるヤマト王権との関係の変化が、大型前方後円墳の出現の背景としてとらえられます。

しかし、岩橋千塚古墳群において中期の古墳は限られた地区にあり数も少ないことから、その連続性を事象としてどのように捉えるのかについては、説明が非常に難しい部分があります。中期の堅穴系埋葬施設が、後期にも副次的な埋葬施設として連続するという事象は認められますが。その後、岩橋型石室という九州の影響を受けた石室が導入され、これを採用する階層が大型の前方後円墳から、地域の支配力の拡大に伴って、より下位の集団に拡大し古墳数も拡大した、というように考えています。

仲辻 それでは、その他の群集墳も含め、前期・中期の群集墳と、後期群集墳との連続性、または断絶性について、太田さんはどのように考えておられますか。

太田 前期・中期、特に中期の群集墳と後期の群集墳とは断絶が確かにあります。中期の群集墳には、甲冑を副葬する特色をもつ群集墳がたくさんあります。これらは、横穴式石室を造る古墳を主体とする後期の群集墳には直接つながらない傾向があります。そうした背景には、政治的な再編成があり、政権交代に巻き込まれた人たちと、そうでない人たちがいたことが背景にあったと考えても良いように考えております。

仲辻 はい。ここまでの議論のように、巨大群集墳がどのようににはじまったのか、という問題については、さまざまな解釈があり、現時点では一つの答えを導き出すことは難しいということをお分かりいただけたかと思います。

つぎに、二つ目の視点である、それぞれの地域で形成された群集墳が、どのように展開していくのかについて議論を進めていきます。特に、紀伊と畿内ではどのような違いがあるのか、また紀伊の中での中心と周辺の間関係があると思います。土器の儀礼からは、紀伊の中でも岩橋千塚古墳群と周辺の古墳群は異なっていますし、畿内と、紀伊などの周辺でも異なっているといえそうです。こうした現象は、畿内の儀礼が正しく伝わっていない、距離が離れているので情報が欠落しているという解釈もできますし、アイデンティティの相違

という捉え方もできます。太田さんは日本列島の広い視野で横穴式石室を研究されていますが、こうした相互の影響関係についてご解説いただけますか。

太田 はい。岩橋丘陵にはたくさんの横穴式石室があります。この資料館のピロティに展示されている石室もそうで、岩橋型石室と呼ばれているものですね。岩橋型石室は、天井が高く、板石を小口積や平積みにより構築する。言わゆる紀伊北部のご当地の横穴式石室とっていい存在です。奈良県や大阪府、京都府にも少し分布しますが、非常に例外的な存在です。一方で奈良・大阪では畿内型石室が多く分布していて、岩橋型石室のように薄い石材を積み上げるものはごく初期だけで、大型の石材を積み上げて石室を造るのが畿内型石室の特色です。畿内型石室が分布するエリアは、奈良や大阪、摂津あたりまでになります。岩橋型石室のようなご当地型の石室は全国的にみた場合、いくつかあり、例えば徳島では段ノ塚穴型石室、山陰では大念寺型石室や出雲型石棺式石室、東伯耆型石室などいろいろなタイプがあります。このようにご当地の横穴式石室がある地域もありますが、これがない地域もあります。静岡や愛媛などでは、他所の地域から伝わった様々な石室が一つの地域に混在しています。一つのエリアに、一つのタイプの横穴式石室が充満しているというのも逆に珍しい。例えば岩橋丘陵には岩橋型石室が分布し、その東側の明楽山山麓には、寺山古墳群で畿内系石室など大和・河内で造られるものと同じ石室が分布しています。背景には、地域を超えた人と人のネットワークが強固であったといえます。先ほどの萩野谷さんの報告では石棚の分布の説明がありましたが、このような地域を超えたネットワークは、もっと時代が降った例えば江戸時代などと比べると、古墳時代の方がより活発だったのではないかと。そういったことが地域を超えた横穴式石室が伝わった背景にあると考えています。

仲辻 シンポジウムのテーマである集団をとらえるにあたり、古墳を造る時に、どのタイプの石室



写真3 綿島 歩氏

を採用するのかということ、そして、その結果、地域色のある地域と、あまりオリジナリティのない地域が生じるということについて考えてみたいと思います。古墳を造る際には色々と情報を集めるとは思いますが、太田さんは、こういった行動の結果そのような地域色が生まれると考えておりますか。

太田 非常に大きな力をもった有力者がいるとご当地石室がしやすい傾向があります。例えば岩橋丘陵では岩橋型石室があるだけではなく、全長が100 m近い前方後円墳が立地しています。これは、後期古墳ではかなり大きな部類に入ります。そういう場所にはオリジナルの石室の発信元になる場合が、非常に多い。逆に、ご当地石室がない場所は、大きな後期古墳が分布していないエリアと重なります。自分のところに求心力がないから、他所の地域のボスの真似をするというのか。さらに必ずしも真似する地域の対象が決まっているわけではないから、さまざまな地域の情報を少しずつ手に入れながら古墳を造る。そういうエリアもあるということです。その意味では、和歌山市域では強力なボスがいて、強力な個性を発揮できる地域ということが出来ます。

仲辻 地域間の関係という話題になりますが、絹島さん、大和における地域間関係については、副葬品からはどのようにとらえられますか。

絹島 階層構成の上位に関わる武器や馬具などの

副葬品を有する古墳は、どの群集墳にも存在していると考えられます。過去に盗掘を受けている場合には、そうした副葬品の状況が見えにくいという課題はありますが。また、地域間関係については、特徴的な副葬品として、奈良盆地南西部の葛城山東麓の群集墳では、ミニチュア鉄製農工具が出土し、広く分布しています。他の地域ではないわけではないが、広く副葬されるという点は葛城山東麓の特色です。他は、大和の与楽古墳群や河内の一須賀古墳群などでミニチュア炊飯具の副葬が多く認められるなど、特徴的な副葬品がみられます。こうした特色は、地域内及び地域間の集団関係を反映していると考えられます。

仲辻 なるほど。紀伊では、岩橋型石室の分布の周辺に、異なるタイプの石室が分布するという指摘が太田さんからありました。萩野谷さんは、岩橋千塚古墳群の岩橋型石室が、周辺の古墳群に大きな影響を与えたというお考えですが、岩橋型石室の特徴は結晶片岩を石材に用いることで、ちょうどその分布域は、和歌山県北部の中央構造線沿いに広がる三波川変成帯という結晶片岩の産出地域と重なっていて、地域的には作りやすい場所であったともいえます。岩橋型石室の分布は、技術的、または地理的な制約があったためなのか、あるいは、やはり発信元があり周辺との影響関係があったと考えるべきなのか、いかがでしょうか。

萩野谷 おそらく後者であると考えます。三波川変成帯からはずれた紀ノ川北岸に分布する鳴滝1号墳や晒山10号墳では、紀ノ川南岸から結晶片岩を運んで岩橋型石室を構築しています。技術的な支援というよりは、集団間の強い紐帯を反映していると考えています。また、和歌山県中部の日高平野の横穴式石室では、岩橋型石室ではありませんが、扉石や屍床仕切石などに結晶片岩を石材として選び取り入れるなど影響を受けている。さきほど太田さんがおっしゃられた、他地域の石室を真似するような現象に近く、岩橋千塚古墳群とその周辺とは違った次元でとらえられると考えてよいと思います。

仲辻 たしかに、和歌山県中部以南では、九州系



写真4 シンポジウム討論風景

石室が多いという特徴があります。実はこの九州系石室は和歌山だけにみられるものではありません。その広がりについて太田さんから説明をお願いできればと思います。

太田 九州系石室は、日本列島で一番影響力のある石室類型です。北は関東から東海、畿内、和歌山、そして西日本各地で認められます。近畿地方南部では、和歌山市を中心に岩橋型石室が幅を利かせていますが、その分布を取り囲むようにリング状に九州系石室が分布しています。和歌山県の中部以南や北部の一部、さらに奈良盆地南部や大阪府南部など、岩橋型石室の周辺を薄く皮で包むように分布する特色があります。西日本、東日本の至る所でも九州系石室が分布し、いろいろなタイプがありますが、一番幅を利かせているのは肥前・佐賀県の石室で、この類型は韓半島にも分布しています。なぜ肥前系の石室が幅を利かせているのかについては、いまだ誰も答えを出せていません。

仲辻 では、和歌山県中部・南部の勢力が交流関係があって、その情報を入手したのか、あるいは肥前系石室を造る集団が広い範囲で動き回っていて、彼地に住み着いた可能性は考えられるのでしょうか。

太田 後者であると考えます。古墳時代は非常に流動的な社会で、人びとはさまざまな場所に移り住んでいると考えています。和歌山県の九州系石室は、単に、九州のものを真似たというレベルではなく、そのものであるから、移り住んだ人々によって築かれたと考えています。

仲辻 大和ではどうでしょうか。

太田 大和では宇陀のほうでは少しある。少ないが、確かに分布しているという状況です。

仲辻 はい。このように集団を考えるうえで、さまざまなパターンが考えられ、我々の想像する以上に古墳時代の人々は動き回っている可能性があるようです。一方で、地域の核となる発信力のある集団もいたということがわかってきました。

さて、時間も無くなってしまったので、最後の論点に移りたいと思います。群集墳の終焉について、集団をどのようにとらえるのかについてです。太田さんは、前後一世代、同世代の小家族が結びついたもので群集墳をとらえられ、その終焉に関しては、そうした集団は永続性がなかったという解釈をされていました。これは、集団を維持する必要がそもそもなかったからなのでしょう。現代の家族の形態からはなかなか想像しづらいところですが。このあたりについていかがでしょうか。

太田 現代社会では、集団が長く続かないことがイメージしにくいことだと思いますが、最近のニュースをみると逆にイメージしやすいこともあります。最近も老舗電機メーカーが倒産したというニュースがありましたが、このように集団とは解体するものなのです。「消滅可能性自治体」という言葉もありますし、限界集落といわれるように村がなくなってしまう、誰も住んでない村が生じる可能性もある時代です。集団がなくなること、現在の我々は目の当たりしていると思っています。ただ、通常そういう考え方を歴史学者はしない。それは江戸時代の影響が非常に強くあるのだと思います。江戸時代の藩は、基本的には、不祥事を起こさない限り続きますよね。江戸時代で藩がなくなるというのは一大事件です。赤穂浪士の世界ですね。それは政治的な理由でなくなるのであって、江戸時代に藩が無くなることと、現代社会において村がなくなるというのは全く意味の異なる話です。江戸時代の村も同様、基本はずっと家を誰かが継いでいきますから村は残る。なくなるのは、天災で火山の噴火などで村が埋もれて

しまふとか、そういうことがない限りは、村は継続するのが原則です。そういう江戸時代の様子を、前近代社会すべてに拡大して考えがちなのが歴史学者の特徴だと思います。そういう目で古墳時代を見てしまうと、古墳時代は社会が続くというのをベースに考えてしまいがちなのですけれども、実は、中世以前の社会と言うのは、集団は必ずしも安定してはいないようです。そういう目で古墳時代をみると、また違った目で見ることができると思いますね。

あと、もうひとつだけ。最初にお話しさせていただいたように、古墳時代の社会の研究は知らず知らずのうちに、江戸時代社会のイメージの影響を受けていますし、マルクス・エンゲルスの考え方を非常に強く受けています。マルクス・エンゲルスの理論は、北米インディアンとかアフリカの民族事例をもとに組み立てられている側面が非常に強い。アフリカや北米は、集団が存続するタイプの社会が非常に多いわけですね。強い結びつきをもった共同体というのがたまたまアフリカとか北米にはあって、それがずっと集団として続いていくということがよくあるらしいですね。ところが、東アジアをみると、そういう集団がそもそもないと言われる地域が多いです。集団がなくて、その代わりに人のネットワークがある。このネットワークを通じて自由自在に必要な時だけ臨機に人の集まりを造り出すというシステムが、東・東南アジアでは認められる事例が非常に多い。そういう状況なども古墳時代を考えるうえで参考になるのではないかと思います。決まった集団がずっと何百年もいるのではなくて、そのときどきで利害が一致した連中で集団をつくるのだけれども、中心的なボスがいなくなったらその集団はなくなってしまうと。そのような社会を私は古墳時代にもイメージしています。

仲辻 それでは、古墳時代のある集団の次の世代、子どもの世代については、また別の集団を形成していたということでしょうか。

太田 まさにそうだと思いますし、それが古墳時代の流動性の高さの源だと思います。先ほど述べた

ような移住が頻繁に起こっていて、子供は子供で家を継ぐという習慣がそもそもないので、他所へ移住するなど、そういったことではないかと思います。

仲辻 次に絹畠さんにお伺いしますが、階層構造が継続しないというところに、支群が短期間で終わっていく原因があるのではないかという考え方をされていましたが、それではなぜ、階層構造が継続しないのか。私も継続するものだというこれまでの考えに染まってしまっているのかもしれませんが、現代のように継続したとしても人間の活動としてはおかしくないと思うのですが、資料からみたらそうではないのだということでした。そのあたりについてもう一度お聞かせください。

絹畠 はい。支群のなかではそういうものがみえないと。太田さんの言葉を借りれば、形成された集団がそもそも泡沫的性格を抱えており、それゆえ時間経過とともに終焉していく。そもそも有力者がいなくなってしまう。だから古墳群も終焉していくという可能性があると思うのですが、それでまた別の集団が形成されてその有力者になるものが新たに出てきて、その人は同じ群集墳の別の支群に古墳を造る場合もあれば、違う地域の新しい群集墳に古墳を造る場合もないとはいえない。このように、さまざまな可能性があると思います。そのような、さまざまな集団の終焉について、副葬品から一端が見て取れるのではないかと思います。

仲辻 一方で、和歌山県、紀伊の状況について、群集墳の終焉については、萩野谷さんの発表ではあまり触れられていなかったと思いますが、どのように捉えられているかというところと、また、岩橋千塚古墳群は時期を通じて一つに見えるんですよね。少なくとも6世紀から7世紀の100年以上は継続しているようにみえるのですが、それは、先ほどの集団についてのお二人の説明と重なるのか、または違うのか、いかがでしょうか。

萩野谷 少し違うのかな、という印象をもっています。といいますのは、資料集50頁の表をみていただければと思いますが、岩橋千塚古墳群は

900基以上、1000基近くの古墳があり、発掘調査が実施された古墳は1割にも満たない断片的な情報のなかでの推測という前提ですが、大日山地区や前山B地区では6世紀前半や6世紀中葉に集中的に古墳が造られ、その後衰退していくという様相がみられる一方で、大谷山地区では6世紀初頭から前半に古墳が造られて、大谷山22号墳が造られた後、首長墓が別の地区に移動する。そのあとに、この地区の古墳築造が急速に衰退するかというそうではなくて、7世紀代まで細々と古墳を造っている。6世紀中頃の大谷山5号墳と6世紀後半の4号墳は25年くらいの時期差がありますが、石室の構造が細部までよく似る点で、構築技術的に継承されていることがわかる。もちろん地区イコール支群ではないが、急速に1世代、2世代で消えるエリアだけでなく、だらだら長期的に続くエリアも確かにあるようですから、複数の集団が並存していたと考えられる。このように複雑な状況が認められると思います。

また、岩橋型石室は7世紀までつづくというお話をしましたが、この頃の石室の形態は幅狭の長方形の小型石室とか、単葬であることを示す木棺の釘が出土するなどの特徴があります。それは、井辺1号墳のように石室に対し横方向に人を埋葬する形態から、縦方向に埋葬する石室の構造へと大きく変化し、最後に古墳が造られなくなり消滅する。そのような変化は、畿内の群集墳と比較した場合に、石室のかたちは異なるが、原理としては似ているのかなと考えています。そして、やがて古墳の社会的機能を失ったうえで、消滅するのだろうと。石室の大きな変化があり最後に消滅していく過程は、畿内の群集墳の原理と似るのではないかと、そのように考えています。

仲辻 では、畿内からみた場合に、太田さんと絹畠さん、岩橋千塚古墳群はどのような解釈できるのでしょうか。

太田 そうですね。岩橋千塚古墳群の大日山地区、前山B地区などは古墳が集中的に造られる時期がありますよね。奈良、大阪ではこういうタイプの群集墳が多い。逆に大谷山地区のように100年以

上続くタイプは、畿内 摂津、大和、河内、和泉には少ないのかなと思います。でも、200 年くらい継続する群集墳は全国ではまれにみることができます。岐阜の船木山古墳群がそうです。大部分は一世代で集中的に造られるのですが、ときどき、かなり長い期間に群集墳が継続する例があるというのも事実で、それをどのように考えるのか。その集団に属し続けるメリットは何かあるのでしょうか、そういったところは考えなければならないと思います。

また、群集墳の終焉の時期ですが、畿内よりも和歌山のほうが少し早いのかなと思っており面白いと考えています。古墳時代が終わるから群集墳が終わるのではなく、その終焉の時期はまちまちで、古い群集墳から寿命は尽きていくというように考えています。

絹畠 副葬品については、岩橋千塚古墳群では副葬品の状況をつかめる遺存状況のよい古墳は非常に限られるので、比較は難しいですが、天王塚古墳の調査研究から明らかになっている副葬品の様相をみますと、明らかに他地域と同様の階層制の副葬品が認められます。ですから、岩橋千塚古墳群も、畿内の群集墳や首長墓の副葬品構成をある程度反映しているのかなと思います。また、群集墳が長期間継続するという点については、畿内の他の多くの群集墳とは異なる特徴であるということと、また大型前方後円墳が包含されている点は、非常に特徴的であるといえますね。

仲辻 ありがとうございます。土器の研究からみますと、土器使用儀礼の盛衰からは、古墳時代が終焉するとそれまでの古墳時代的な器種、例えば器台や装飾付須恵器が消滅する状況が認められます。ただし、古墳時代的な儀礼は終わってしまうのですが、死者に対して土器や食べ物を供える行為は継続していきます。それは現在にも通ずるところだと思います。

さて、時間も超過しましたので、そろそろ討論を終了したいと思います。今回の展覧会を担当された萩野谷さんに、最後に一言、今回の展示やシンポジウムを通して、一番伝えたかったことなど

をお願いします。

萩野谷 はい。岩橋千塚古墳群という全国でも稀有な数多の古墳を擁する群集墳が和歌山に築かれたこと、そして周辺地域の古墳群と同じところ、違うところが何か、その歴史的な背景は何かということをお明らかにできれば、より古墳群の価値や魅力が高まります。それをみなさんと共有したいと考えていました。今回のお二人のご講演と討論から、新しい研究の視点からの議論により群集墳に対する理解が非常に深まりましたが、一方で、残された課題もたくさんあることがわかりました。岩橋千塚古墳群では、当館と、仲辻さんの職場を含めた和歌山県教育委員会で、分布調査や発掘調査などの調査・研究を日々進めていますが、古墳時代研究の最新の成果や、今回のシンポジウムで得られた知見をもとに、今後も調査・研究を続けていきたいと思っています。

仲辻 ありがとうございます。岩橋千塚古墳群の調査研究は、これからも続いていきます。今回のシンポジウムと討論では、これまでとは違う新しい視点からの古墳時代における集団の在り方がみえてきたかと思います。また、当県では、研究だけではなく、古墳群を次の世代に残すために、特別史跡の追加指定や保存と活用のための整備に取り組んでいます。みなさんには、整備された園内の古墳群を見学いただき、あらためて古墳の数の多さを体感しながら、古墳を築いた集団について想像していただければと思います。どうぞ、引き続き本県の活動を応援していただければと思います。それでは、これで討論を終了したいと思います。どうもありがとうございました。



写真5 シンポジウム風景

令和5年度 紀伊風土記の丘 年報 第51号
紀伊風土記の丘 研究紀要 第13号

発行日	令和7年3月31日
編集発行	和歌山県立紀伊風土記の丘 和歌山市岩橋1411 TEL 073-471-6123 / FAX 073-471-6120
印刷	株式会社おかだプリント